ホームスチール～SUMMER Baseball Miracle～

ネモティッシモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ホームスチール～ＳＵＭＭＥＲ　Ｂａｓｅｂａｌｌ　Ｍｉｒａｃｌｅ～

【Ｎコード】
Ｎ１２４９Ｔ

【作者名】
ネモティッシモ

【あらすじ】
ここは愛知県立邦南高校。
県内屈指の進学校だ。
２年生左腕ながら最速１４６?をほこる大場が１人でエースを務める。彼は中３のとき硬式野球日本代表に選ばれたほどの実力者だが、親の教育方針で野球より勉強をとった結果、一般入試で狭き門をくぐってきた。
このチームは他の部員のレベルが低すぎ、負けが去年の夏から続い

ている。

全国の強豪校にＳ・６（エス・シックス：至高の６人組）と呼ばれる選手がおりそいつらを倒すことを目標にする大場。
Ｓ・６にも様々な過去があり、全員が同じ大阪の私立南阪中学校軟式野球部出身。
小学校の頃…私立南阪小学校のときにも…
まあ読んでいけばわかります。
そんななか去年中学硬式野球の準優勝経験者が２人入部。
この部員１２人（１人幽霊部員のため実質１１人）の弱小校が甲子園をめざすお話です。

※もし甲子園初出場が出来れば甲子園の試合も書きます。

Ｎｏ．１：部員達

『ゲームセット！！』

試合が終わった。

もちろん我が愛知県立邦南高校の負けだ。これで春の大会も終わり。

３年生はあとは最後の夏の大会しか残っていない。

県内屈指の進学校。

公立推薦入試でも入ることは相当困難であり、当然野球の上手いヤツなどそうそう入ってこない。

エースで１番を任している２年生左腕の大場（おおば）　翔真（しょうま）は中学３年生のとき硬式野球日本代表に選ばれるほどの実力者で、県外の高校から何十校も誘いが来るほどの実力者だったが、非常に賢く、親の指導方針のお陰で野球より勉強をとった結果、一般入試で狭き門をくぐってきた。

が、このチームは当分の間勝っていない。

なぜか。そう。

他の部員のレベルが低すぎるからだ。

大場を含めても部員はたったの１０人。

新１年生がいなければ部員は７人でもはや試合どころではない。

だからこのチームになってから公式戦は今日がはじめて。練習試合さえもまだやっていなかった。そんなチームが勝てるはずがない。

一応、背番号順に軽く選手の説明をしておこう。

背番号１：大場（おおば）　翔真（しょうま）
チームの１番を勤めている。２年生。左投げ左打ち。このチームの得点は全て彼が絡んでいると思っていい。できれば３番か４番を任せたいのだが…１番打席の回ってくる１番に…。

背番号２：副島（そえじま）　充（みつる）
キャプテン。３番バッター。３年生。右投げ左打ち。大場以外で唯一真剣に野球に取り組んでいる。

背番号３：藤武（ふじたけ）　将希（まさき）
１年生。右投げ右打ち。９番バッター。中学校時代はバスケ部に所属してたらしい。小学校のころ、地域のソフトボールで不動の八番ライトだったと自慢している。足はそこそこ早く５０メートル走は６・５だ。

背番号４：島谷（しまたに）　涼太（りょうた）
１年生。右投げ右打ち。８番バッター。身長１５９センチのちっちゃな少年。高校になって野球を始めた。

背番号５：松坂（まつざか）　健祐（けんすけ）
３年生。右投げ右打ち。４番バッター。基本的にお調子者だ。筋肉バカで当たればスタンドいんもあり得るが、極端にミートがない。守備もガサツだ。感動する…。逆の意味で。

背番号６：島谷（しまたに）　倫暁（ともあき）
３年生。右投げ右打ち。５番バッター。
島谷涼太は弟。守備はわりとできるが打力がイマイチ。

背番号７：木村（きむら）　太郎（たろう）
３年生。右投げ右打ち。６番バッター。

チーム内でのあだ名は『キムタロ』
キムタクのパクリだろうか…。たしかにイケメンだ。元気一杯だが野球はいっこうにうまくならない。

背番号８：慶野（けいの）　文哉（ふみや）
２年生。右投げ右打ち。２番バッター。
バンド等の小技がうまく、俊足で、ある程度頼りになる。守備範囲が広い。

背番号９：氷室（ひむろ）　佑介（ゆうすけ）
１年生。右投げ右打ち。７番バッター。
チーム１のやる気のなさをほこる。いい迷惑だ。

背番号１０：鬼頭（きとう）　博行（ひろゆき）
３年生。右投げ左打ち…らしい。１年の頃入部してから一度も野球部の練習に来たことがない。俗に言う幽霊部員だ。噂によると中３のとき肘を故障して野球ができなくなったらしい。一ヶ月ほど前に大場が誰かと人通りの少ない公園でキャッチボールをしていて、それが鬼頭だったとキムタロが言っていた。しかしキムタロは嘘つきだ。すぐ話を誇張してしまう癖がある。もうこりごりだ。

そして時は過ぎ、遂に７月になろうとしている。抽選会の日。
私はキャプテンの副島と抽選会会場に行った。
副島『愛知県立邦南高校、３４番です！』

その瞬間私は表情を変えた。

Ｎｏ．２：念願の天才

場内がざわついた。
相手は…長久手大谷高校。
高校自体はあまり有名ではないが、今年から四年前にセンバツ４強入りした清関高校の監督を務めていたことがある森安監督を監督としている今話題の高校だ。

特に４番のアメリカ人の血をもつハーフの中村アーネストは高校通算４４本塁打を誇る強打者だ。チームも森安監督のもと非常に隙のない野球をするようだ。

そして、時はあっという間に過ぎていき、開会式も終わり、遂に初戦前日。
今年の目標は３回戦出場をおいている。

そんななか授業後の練習が終わり、試合前最後の練習に取りかかろうとしたところ、見知らぬ高校生が３人訪ねてきた。

『野球部はここですか？』

『そうだが…どうしたのだね？』
私は問い返した。目の前には黒めの筋肉質の男と非常に締まったからだをしている男、それに非常に美人な女が立っている。

『あした、試合っすよね？』
筋肉質の男が話しかけてきた。

『そうだが？どうかしたのかね？』

『オレ、西口（にしぐち）　拓磨（たくま）って言います。今日から野球部おねがいっす。ポジションはキャッチャー。明日の試合も出してくださいね。』

『そんなことはいいのだが、既にメンバー表は抽選会のときに提出してしまったし、試合にはでれるまい。』

『あーダイジョブですよ。先生が出す前にこっそりベンチ入りメンバーに西口と小宮って書いておきましたから。ちなみに僕は小宮（こみや）哲都（てつと）って言います。ポジションはピッチャーですが、ここのエースは大場先輩なんでショートでもいいです。』

『大場先輩だって？しってんのか？翔真のこと。』

小宮『当然ですよ！同じチームだったんですから。』

西口『オレもちなみに小宮と同じ名古屋東ブラックシャークのにいたっす。』

（ほんとか…これはとんでもないやつらだな。）

『君はどうしたんだ？』

横で黙っている女の子に尋ねた。

『私…マネージャー希望の赤崎（あかさき）　明日翔（あすか）って言います。よろしくお願いします。』

小宮『ちなみに僕の彼女なんで。』

そして、試合当日、
１番ピッチャー、大場
２番センター、慶野
３番ショート、小宮
４番キャッチャー、西口
５番ライト、副島
６番サード、松坂
７番セカンド、島谷倫
８番レフト、木村
９番ファースト、藤武

試合が始まる。

『プレイボール！！』

Ｎｏ．３：先制パンチ（前書き）

テスト期間中で更新できませんでした？
すみません？？？

今日は初の試合の描写です？

Ｎｏ．３：先制パンチ

長久手大谷高校の先発は背番号１１の反町（そりまち）　佳人（よしと）

情報だと春の大会はエースの平田（ひらた）　忠春（ただはる）が怪我で登板できずにいた

穴を見事に埋めた２年生左腕。

基本的には打たせてとるピッチングを主体としている。

『１番、ピッチャー、大場君。』

大場が打席にはいる。大場は基本的には穏やかで物静かな性格だが、

打席にはいると人が変わる。

大場『相手は同じ２年生左腕。俺のが格上だってことを思い知らし

てやる。』

ここの野球部は、

≪練習のときは自分が１番下手だと思ってやる。試合の時は自分が

スーパースターになったつもりになってやる。≫

それを基本としている。

（カキーン！！）

響きのよい金属音がなった。

そして打球のは、
スタンドに届いた。

邦南高校の先頭バッター大場の本塁打。

2番の慶野は三振に倒れたものの、次のバッターは…

『3番、ショート、小宮君』

ここで天才が打席にはいる。

Ｎｏ．３：先制パンチ（後書き）

感想待ってます？

Ｎｏ．４：小宮と西口の裏

ゲームセット！！

試合はそのまま邦南が４回に相手のエラー絡みで二点を追加、そして９回にツーアウト満塁から２番慶野の二点タイムリーツーベース、そして二死二三塁から３番の小宮の今日初ヒットとなるタイムリーで二点を追加。
この当たりで二塁を狙った小宮が二塁でタッチアウトになるも７－０で大場がそのまま完封し、完勝した。
実に６年ぶりの初戦突破だ。

そして試合後…

副島『みんな今日はよくやった。これからも頼むぞ！』

≪おう！！！≫

監督としても気分がいい。１番の大場は４打数３安打１四球２打点の活躍。４番の西口も４打数４安打２打点の活躍をした。
チームの安打合計も監督になってから断トツで最多の１０安打だ。
大場だけのチームが、小宮と西口の加入によって自信を持ったようだ。
次の相手は１回戦はシードだった栄華高校。
みんなには頑張ってもらいたい。

その頃…小宮と西口は試合後なのになぜか野球部の部室の中にいた。

（ガツッ！！）
（ボコッ！！）

（バタッ！）
小宮『やめてください…』
小宮が何者かに殴られている。
殴られている相手は…

（ガツッ！）

小宮『痛い。頼むからやめて…。拓磨くん…。』

西口『拓磨くんだぁ？お前いつから俺のこと下の名前で呼べる立場になったんだ？西口くんにしろ。じゃねぇと二度と野球できなくするぞ。』

（ボコッ！ボコッ！ガン！！）

小宮『すみません西口くん。ごめんなさい。』
西口『なんで最後の攻撃、二塁狙ったんだよ。おい！なぁ！！』
（ボコッ！）

既に小宮の顔は真っ赤に腫れている。

小宮『あれは…』

西口『てめぇ次のバッター今日４打数４安打なんだぞ?そんなに俺が信用できねぇか?』
小宮『違います…。』
西口『お前、誰のお陰でいま野球できてると思ってんだ?おい。』
小宮『西口くんのお陰です…。』
西口『だよなぁ?俺がいなきゃお前はずっとぱっとしねぇ男だったんだぞ?まあいまでも十分ぱっとしねぇクソ弱虫な野郎だけどな。ハハハ。』
（ガツッ！）
ついにまぶたから血が出てきた。

（ドンドン！）
『おーい！誰か中にいるのか～?もうすぐ完全下校の時間だぞ！早く着替えて下校しろよ！』
西口『はい！すぐにいきます！』

『おーう！』

西口『邪魔が入ったか。まあ次の試合で俺の機嫌を損ねるようなことしたら二度と動けないようにするだけだ。あとこのことチクったりしたら容赦しねぇからな。わかったか?顔の怪我も風呂場で転んだことにでもしとけ。間違っても俺の名前出すんじゃねえぞ。』
小宮『はい…。』

西口『じゃあな。クソ人間。』

（バタッ！）
（カチャッ）

西口は部室の鍵まで閉めていった。
部室は基本密室なので出ることはできない。

小宮『ちくしょう…。昔は…あんなに優しい…拓磨だったのに…。
なんで…。』

Ｎｏ．４：小宮と西口の裏（後書き）

感想待ってます？

No．5：小宮　絵梨

翌朝、朝練の時間…

小宮は疲れはてて眠っていた。
すると外から声がする。

氷室『キャプテ～ン！部室からボール持ってきますか～？』

副島『当たり前だろ。お前はボールを使わずにダッシュ１００本でもするつもりか？昨日いっただろ。朝練は打撃だ。ついでにバットも五本くらい持ってこい。木のやつな。』
氷室『は～い。』

小宮はこのまま自分が血だらけで倒れてたらあまりにも不自然なため、とっさに横の壁にかけてあった１０本くらいのバットをわざと自分の顔にむかって倒した。

（ガチャガチャ…ガチャッ！）

氷室『やっとあいた～ってえぇ！テッチャン！どうしたん！？』

小宮『あー昨日ね、部室の掃除しようと思ってここにいたらバットが突然倒れてきて、痛すぎて気絶してたんだ～。さっき眼が覚めたところ。』

氷室『なんかそれにしても随分と顔がボコボコだよ～。なんか誰かに殴られたあとみたいだねー。』

小宮は一瞬ドキッとした。しかしどうやら氷室はバットが突然倒れたと言う設定を理解してくれたらしい。さすが、何をやるにしてもやる気のない佑介だ。疑うことを知らない。

そして野球部は栄華高校との試合。
初回に一挙8点をあげ、4回の裏にも打者一巡の猛攻で11点。結局24－0の5回コールドで勝利した。

試合後、小宮は急いで家に帰った。
『おかえりー！』
小宮『ただいま！今すぐ飯作るからちょっと待ってろ！』

小宮に現在、親はいない。10年前、小宮が5歳の頃、父親が釣り好きの父親が、大型台風接近中にも関わらず、海で釣りをしていた。その結果荒波に飲まれてそのまま帰らぬ人になった。
そして2年前、小宮が中学二年生だった頃、お母さんが交通事故に遇い、死んでしまった。
それっきり小宮は3つ年下の妹の絵梨（えり）と二人で生活してきた。
小宮は絶対にプロ野球選手になって大きな家を建てて妹と暮らすと

いう夢がある。

絵梨『お兄ちゃんはなんで昨日帰ってこなかったの？うち、心配したよ。』

小宮『昨日は野球部でミニ合宿みたいなのがあってさ。なにも言わないでいて悪かったね。』

絵梨はふーんという顔をしながらこういった。

絵梨『お兄ちゃん、最近元気ないけど…しかもその顔…誰かとうまくいってないの？』

小宮『なに言ってんだよ！兄貴はいつも元気だぜ。』

絵梨『ならいいけど…。あっ！いつかお兄ちゃんの野球部の練習見に行っていい？』

小宮『ダメダメ！お前は勉強して、テニスも練習しないと！プロテニスプレイヤーになるんだろ？』

絵梨『ケチー！』

（まぁどっちにしろこっそり見に行っちゃえばいいや♪）

そして…

『三回戦の相手は、春の大会準優勝の高校、愛農大名林だ。』

大場『今の俺たちなら、絶対いい勝負ができる。自信持とうぜ！』

《《おう！！！》》

赤崎『ねぇ！哲都はまだ大会でヒット1本しか打ってないから明日は猛打賞を前提に打ちまくって守りまくってね！！』

小宮『任せろ！明日翔！』

この二人は付き合ってもう一年がたとうとしている。

『フフフ…。許さねぇぞ…ぜってぇにな。』

この二人のほほえましい会話の背後で不気味な笑いをしている者が、一人いた。

Ｎｏ．５：小宮　絵梨（後書き）

感想待ってます？？

Ｎｏ．６：本物のフォークボール

先攻：邦南高校
１：Ｐ：大場
２：ＣＦ：慶野
３：ＳＳ：小宮
４：Ｃ：西口
５：ＲＦ：副島
６：３Ｂ：松坂
７：ＬＦ：木村
８：２Ｂ：島谷倫
９：１Ｂ：藤武

後攻：愛知農業大名林高校
１：ＣＦ：眞野
２：３Ｂ：矢野崎
３：ＳＳ：長岡
４：Ｐ：下村健
５：１Ｂ：江澤
６：ＬＦ：天宮
７：ＲＦ：成田
８：２Ｂ：南
９：Ｃ：下村誠

《《《　プレイボール！！！　》》》

『１番、ピッチャー、大場君。』

木村『あのピッチャーチャラいなぁ。』
松坂『だな。』

名林のエースの下村（しもむら）　健太（けんた）と一年生ながら正捕手の座についた下村（しもむら）　誠（まこと）は兄弟だ。
二人とも中学の頃から停学処分を食らうほどの問題児だ。
とくに兄の健太は坊主なのに金髪、そしてアゴヒゲまでも金色に染めている。
弟の誠は見た目こそまともだが、内心は廃れていて非常にずる賢い。
矢野（やの）　舞（まい）『健太！今日も相手をやっつけちゃえ！！』
健太『ったく。バックネット裏にいたら投げにくいじゃねえかよ。彼女なんだから少しは俺のことも考えろよ。』

初球…
（カクッ！）
大場『…！！』
（バシン！）
『ストライーク！！』

大場『初球からインコースのスライダー？なるほど…。厄介だな。変化球には自信があるってか…。』

2球目…
大場『甘い！もらった！！』
（カクッ！）
（スカッ！！）

翔真のバットが空を切る。

『ストライク、ツー!!』

（今のはフォークか…このフォークはそう簡単には打てないな。）

第3球…

大場『ストレートか!』

（カクッ!）

（またフォーク!!ボールだ!）

大場『くっ!あぶね～』

大場はとさっさにバットを止めた。

しかし…

『ストライーク!バッターアウト!』

健太『ザーコ。』

大場『さっきと変化量が…違う。今のは低め一杯のストライク…!』

誠『兄貴のフォークは力の入れ具合、ボールの抜き具合で変化量を自在に変えることができる。おぼえとけ。』

大場『…!?』

誠『あんたの決め球もフォークなんだろ?そんなことできるわけないって?当たり前さ。兄貴はこの辺じゃ敵なしのバリバリの現役ヤンキーだからな。握力は並じゃない。そして…』

審判『君たち!私語は慎みたまえ!!』

大場『すいません。』

誠『まあ話は兄貴が打席にたったときに教えてもらえや。』

大場『あのピッチャー…。手強い。なめてかかったら…。』

その後、2番の慶野も三振。3番の小宮も三振に倒れこの回は無得点。

『1番、センター、眞野(まの)君。』

（コン！）

西口『セーフティーバントだ！！』

松坂『足が速い！！ムリか！？』

大場『俺のフィールディングをなめんな！！』

（パシヒュッ！）

（パン！！）

『アウト！！』

眞野『チクショー！』

健太『やるね～。まぁ、エースってのはフィールディングで魅せるんじゃないんだよ。ピッチングで魅せるんだよ。本物のエースならね。そんなにドタバタしてたら見苦しいよ。クスクス。』

『2番、サード、矢野崎君。』

（カキン！）
西口『ショート！』

小宮『一致ょ上がり～』

大場『よし！ツーアウトだ！』

『3番、ショート、長岡君。』
（バシン！）
（バシン！）

西口『よし！2球で追い込んだ！』
大場『フォークだ。』

（カクッ！）

長岡（さあ、演技でもしとくか。）

西口（よし！バッターの体勢が崩れた！打ち取った。）

（カーン！）

長岡『我ながら天才だなぁ。』

（ポン！）
大場『ポテンヒットか。打ち取ったと思ったのにな。』

藤武『大丈夫大丈夫！今のはピッチャーの勝ちだよ！！切り替えて

！』

長岡（ククク…。ピッチャーの勝ちだって？俺は狙い済ましてあそこにポテンヒットをしたんだっての。）

健太『ナイスだ長岡。これで相手はフォークに自信を持ったな。隙だらけだ。』

そして…

西口『よし！カウントツーツー！次で決まりだ！』

大場『フォークだな。よし。』

大場がボールを放つ。

健太『このボールを待ってたんだよ！！』

（カクッ！）

西口『よし決まった！ストライクからボールになる！空振り三振だ！』

誠『決まったな。』

健太『こんな偽物フォークでこの俺は…』

（カキーン！！！！！）

低めのボール球を強引に打った。

西口『え…。』

健太『撃ち取れねえよ。凡人。』

長岡『くっくっく。』

（ゴーン！！）

打球はバックスクリーンに突き刺さった。
まず愛農大名林が二点を先制した。

健太『お前は天才じゃない。俺が天才だ。』

Ｎｏ．７：誠の実力

決め球のフォークを打たれた翔真はリズムが狂い、３連打のあとにフォアボールを与えてしまい３点目を献上。なおツーアウトフルベースでバッターは…

『９番、キャッチャー、下村誠君。』

健太『誠は俺のフォークをガキん頃から何千球と受けてきてる。というよりアイツは１年生キャッチャーだから上位打線は荷が重いと思って９番にしているだけだ。打力なら俺に匹敵するくらいの実力だ。』

《《　かっ飛ばせー誠！！　》》

名林は名門高なだけあって応援にも力を入れている。

西口『タイムお願いします。』

『タイム！！』

西口『まだ３点取られただけであせるような場面じゃない。ここは自分のペースで楽にいきましょう！！あの９番は平気で人を殴るよ

うなクソ野郎ですから!!思いきっていきましょう!!』

大場『…お前が言えることか?』

翔真が拓磨に聞こえないような声でボソッと言った。

西口『何か言いました?』

大場『別に。』

誠『きみ。知ってるよ。名古屋東ブラックシャークの4番の西口くんやら?』

西口『…。どーも。』

誠『一回やったことあるよね。』

西口『知るか。覚えてねえな。』

誠『本当かい?俺は全国大会の準決勝でお前らに負けた…』

西口『…!!まさか!!あの!?』

大場が誠に第1球を投げる。

渾身のストレート。

(カキーン!!!)

誠『9番バッターだと思って油断してた?フフっ。』

西口『札幌ライオンズJr.の4番キャッチャー…下村誠…なぜ愛知に…?』

誠『おせぇんだよ。気づくのが。ちょっと誘われちゃってさ。名林にね。』

（ゴーンッ！！）

大場『兄弟揃って…俺のボールをバックスクリーンに…。』

小宮『満塁…ホームラン…』

長岡『これでいきなり7－0か。きまったな。5回コールドってとこか?』

健太『当然だろ。』

Ｎｏ．８：絶体絶命（前書き）

今回は長いです？？

No．8：絶体絶命

試合はその後、大場はランナーを出しながらも何とか踏ん張るが一方の名林のエースの下村健太はまだフォアボールのランナー一人だけしか塁に出さないノーヒットピッチング。
得点は未だに7－0で名林が7点のリード。
そして遂に5回の裏へ突入する。

『5回の裏、愛知農業大名林高校の攻撃は、6番、レフト、天宮君。』

天宮『このピッチャー、2回以降は0に抑えてるが、もう100を越えている。そろそろ本格的にバテてくるだろう。』

天宮はこのチームのキャプテンで最も頭が回っている。

天宮『コールド。狙うか。とりあえずあと3点。先頭の俺の役割は何がなんでも塁に出ることだ。デカイのは要らないな。』

（カーン！）
『ファールボール！！』
（カーン！）
『ファールボール！！』
（カスッ！）
『ファールボール！！』

…

そして…

（バン！！）

大場『ちくしょう！高めに浮いちまった！』

『ボール！フォア！』

長岡『今、天宮何球くらい粘った？』

江澤『１５球目をフォアボールだ。まああいつなら当然だろ。もう見慣れた光景だ。』

『７番、ライト、成田君。』

成田『そろそろ終わりにしようや。ヘボＰさんよ。』

大場『言って…くれるねぇ！！！』

成田『高いよ。もっと楽しませてくれなきゃ。』

（カキーン！！）

木村『ちくしょう。つえー…。』

健太『よし。これでノーアウトランナー一二塁だ。』

『８番、セカンド、南君。』

天宮『さぁーて。仕掛けるか。』

大場がセットポジションから投球モーションに入る。

小宮『ランナー走ったぞ！！！！』

西口『そう来るかっ！！』

（ビュッ！！）

西口は三塁へ送球する。

『セーフ！セーフ！』

南『そろそろ秘伝の技を使うか…。』

大場が南へ2球目を投げる。

松坂『スクイズだ！！』

西口『ちくしょう！！いきなり来るか！！』

（コン！）

南『見よ！この芸術的なバント！』

大場『俺のフィールディングのが…』

大場が倒れ込みながら一塁へ送球する。

大場『芸術的なんだよ！！』

（パシッ！！）

『アウト！！』

矢野崎『ったくあいつは。普通に打ったほうがヒットになるんだってての。』

健太『南の打撃も一級品なんだがな。バントへの執着心が半端じゃねぇからな。』

長岡『この前もバントこそが人類最高の芸術である。とか言ってた

しな。どんだけだよ。』

『9番、キャッチャー、下村誠君。』

健太『まあ何はともあれ一点追加した。あと2点で家に帰れるぜ。』

『ボール！フォア！』

誠『なんだよ。フォアボールかよ。つまんねえな。逃げ腰雑魚バッテリーが。』

『1番、センター、眞野君。』

眞野『ワンナウト一三塁か。つまり一塁ランナーの誠が帰ればコールドゲームか。』

誠『決めちゃいますか。先輩。』

眞野『行くぞ！！！エンドランだ！！！！』

藤武『走ったぞ！！』

西口『単独スチール！？いや！！』

小宮『エンドランだ！！』

（カキーンッ！！！）

痛烈な当たりが三遊間を襲った。

普通のショートなら捕れないが…

大場『小宮!!!』
小宮『よっこらしょっと。』
小宮が素早く打球に追い付き、二塁へ送球。
『アウト!!!』

島谷倫『ナイス!!小宮!』

しかし名林はこの間に一点を追加し９－０。
尚ツーアウト一塁でバッターは…

『２番、サード、矢野崎君。』

大場『ハァ…ハァ…ハァ…ハァハァ…』

矢野崎『そろそろきてるみたいだねぇ。早く終わらせてあげるよ。』

大場『負けて…たまるか。』

（カキーン!!!）

副島『またヒットか!』

『３番、ショート、長岡君。』

長岡『あと一点とれば１０点差だ。５回の裏で１０点差ってことはどういうことだかわかるよね?』
西口『大場さんをなめない方がいいよ。』
長岡『そうか?たいしたピッチャーでもないと思うけどね。まあツーアウト一二塁。さっさと打って家に帰りたいねぇ。まったく。』

（バン！）
『ボール！ワン！』
（バン！）
『ボール！ツー！』

西口（このバッターを歩かせても次は強打者の下村健太。塁に出すわけにはいかない…。）
長岡（そろそろストライクだろ。今日のバッテリーのデータ的には次のボールは外角低めのストレートってとこか？）
西口（ここしかない！アウトローのストレート！！）

大場がセットポジションから投げる。

ビュッ！！！！

西口『まずい！！！！！これじゃ！！！！！』

長岡『いただきぃ～！』

西口『シュート回転して中に…入ってくる！！』

（カキーン！！！）

江澤『いったか？』

『ファールボール！！！ファールボール！！！』

氷室『っぶねぇ…』

西口『一瞬死ぬかと思ったぜ。』

長岡『随分とおせえ真っ直ぐだな。もうバテてきたのか？』

西口（それもそうだ…。大場さんは初回からずっと全力投球で５回裏で既に１４５球も投げてる…。もう限界だ…。）

（バン！）

『ボール！カウントワンスリー！！』

（カキーン！！！！）

松坂『まずい！！』

『ファール！ファール！』

長岡『ふー。遅すぎてタイミング合わないや。』

ここで大場がキャッチャーの西口を呼んだ。

西口『タイムお願いします。』

西口『どうしたんすか？』

大場『…歩かせよう。』

西口『…！？』

大場『ダメだ。今の俺じゃ悔しいがコイツは抑えらんねぇ…。』

西口『ダメですよ！！次の下村健太はこのバッターよりもいいバッターなんです！！この長岡と勝負しなきゃ負けます！！』

大場『俺がマウンドを降りる。幸いなことにウチにはまだ小宮っていういいピッチャーがいる。あいつに賭けよう。今はツーストライクだからピッチャー交代は出来ない。』

西口『…。…。』

大場『仲間を信じれないのか？ここは手段を選んでる場じゃないんだ。負けたら先輩たちの夏が終わる。だから負けは許されないんだ。』

西口『小宮…か。』

大場『わかったらさっさと戻れ。』

西口『わかりました…。』

健太『いい度胸じゃねえか。わざわざ俺と勝負とはな。』

長岡『やっぱり逃げたか。チキンキャッチャー。』

『ボール！フォアボール！！』

西口『監督！ピッチャー交代です！』

ポジションの変更←←
大場：1→3
小宮：6→1
藤武：3→9
副島：9→4
島谷倫：4→6

『4番、ピッチャー、下村健太君。』
天宮『あと一点で5回コールドゲームだ。』

健太『粉砕してやる。かかってこい。』

小宮『望むところだ。』

ついに小宮がベールを脱いだ。

Ｎｏ．８：絶体絶命（後書き）

感想待ってます？？

Ｎｏ．９：新球の進化した変化（前書き）

今回も長めです？
今回のメインは
小宮ＶＳ下村健太です？？？

Ｎｏ．９：新球の進化した変化

（ザーッ！ザーッ！）
この回の途中から雨が降り始めている。

小宮『ツーアウト満塁…。』

明日翔（あすか）『哲都！落ち着いて！いつもの哲都のピッチングをすれば大丈夫！！今１番いけないのは逃げのピッチングをすること！！攻めるのよ！！いける！！勝とうよ！！この試合！！』

記録員の明日翔がマウンドの小宮に向かって大声で叫んだ。

小宮（ありがとう。明日翔。気持ちがずっと軽くなったよ。）

西口『…。ちっ。』

小宮『彼女にこんなこと言われて燃えねぇ男は…』
小宮が投げる。
小宮『野球をやる資格はねぇ！！』

（ズバーン！！！！！！！！）

『ストライーク！！』

健太『割とはえーな。やるじゃんか。』

第2球目…

健太『だが…』

（ブン！！！！！）

（ズバーンッッ！！！！！！）

小宮『どや！！』

健太のバットが空を切る。

健太（コイツ…。確かに速い…。まだ変化球も見せてきてねぇしな…。次は何でくる？このままストレートで押してくるか。いや、なにか決め球の変化球を持ってるのか？…とにかくこのままじゃ圧倒的に分が悪い…。必要なのはあと一点。ワンヒットでコールドゲームだ。ここはバットを短く持って…。……。いや…。短く持って打つなんて俺のプライドが許さねぇ…。）

小宮『あれ？あんなに振り遅れたのにバット短く持たないんだね。まったく。意地っ張りなやつだ。それじゃ簡単に料理させてもらうよ。』

明日翔『いっけぇー！！哲都！！』

西口『…。』

ビュッ！

健太『ストレート！！』
（カクッ！）
健太『クソッ！シュートかよ！！』
（コン！）

打球は完全に詰まってキャッチャーファールグラウンドへ。

しかし。

小宮『西口君！！上！！』

西口『…っ！！』

『ファール！』

西口は反応がかなり遅れ捕球することができなかった。

大場（なるほどな。大体わかってきた。小宮と西口の間の亀裂はあの女が原因か。）

翔真は哲都と拓磨の関係に既に気づいている。

健太（助かった。シュートを持ってんのか。）
南『あれれ？珍しく健太のやつ随分とテンパってんじゃない？』

小宮『この雨のお陰で手が少し濡れてボールが滑りにくくなってる…。』

西口がストレートのサインを出した。
小宮は首を振った。
西口（小宮が中学ん頃得意球だったこれか？）
西口はチェンジアップのサインを出したが小宮はまた首を振った。
西口（じゃあ…これか？）
カーブのサイン。小宮はこれも首を振った。
西口（まさかとは思うが…これか？）
小宮は頷いてワインドアップから投球モーションに入る。
西口（このボールは…アイツが中学の頃猛練習しても習得できなかったばかりか…これの投げ込みのしすぎで肘をぶっ壊した。そんなボールを…自信があるのか…？）

小宮『いつもならうまく曲がる確率は２０％もないところだが…。この今の指先の感覚なら…きっといけるはず。』

下村（もうストレートは捨てる。シュート系のボールと緩いボールだけに狙いを絞って…）

小宮が注目の１球を投げる。

ビュッ！！！

健太『高い！？いや！もらった！カーブ！！』

（ギュギュギュッ！！）

健太『な、なんだこの変化は！！！！』

西口『…！！！！』

（バン！！）

眞野『あーあ。』

長岡『それはないぜ。』

『ストライク！バッターアウト！チェンジ！！』

氷室『すげぇ。ベンチから見てても並の曲がりじゃなかった。』

藤武『今のカーブスゴいですね！』

大場『いや。今のは恐らくドロップだ。ただし並のドロップじゃなかったがな。』

西口『今のは確かにドロップですが、ドロップではないんです。小宮のドロップは、三段ドロップなんです。中学の頃よく練習してたけど結局習得できなかった。』

小宮『まさかこんなにうまくいくとはいかなかったけど、今のボール、三段ドロップじゃないんだ。』

西口『…？』

小宮『三段ドロップを越えた変化を見せる…【【四段ドロップ】】これがこのボールの名前なんだ。』

舞『くぅーっ！今の場面健太に決めてほしかったなーっ！！』

健太『なんなんだ…？今の変化は。』

誠『ったく。早く帰りたいんだから打ってよ。もう。』

健太『…。』

長岡『帰宅が遅れちまったぜ。』

江澤『ホントホント。』

（ザーザーッ！！）

慶野『雨がさらに強くなってきた…。』

Ｎｏ．９：新球の進化した変化（後書き）

感想待ってます？？？？

Ｎｏ．１０：キャプテンＶＳ下村兄弟

（ザァザァ！！ザァザァ！！）

六回の攻防も終わり、試合は七回の表、９－０で愛農大名林が９点のリード。この回で３点以上とらなければ七回コールドが成立する。

健太『結局七回コールドか。まああのピッチャーやな４連続で三振にとられてちゃしょうがねぇ。』

名林のエース下村健太はここまで６イニングを投げ被安打０、四死球２のノーヒットピッチング。

『３番、ピッチャー、小宮君。』

（ザァザァ！）

健太『雨がつぇーな。こりゃ投げにくいな…。』

健太が小宮へ第一球を投げる。

小宮（高い！もらった！）

（カキン！！）

大場『しゃあ！やっとヒットが出たぜ！ナイス小宮！！』

小宮は実に８打席ぶりのヒットだった。

『4番、キャッチャー、西口君。』

西口『コイツは確実に試合を早く終わらせようと焦ってる。ノーゲームになったら勝ちゲームを捨てるようなもんだ。だから…』

小宮（初球はストライクを取りにくる…）

健太『だぁっ！』

西口『このカーブでカウントを取りにくると思ったぜ！！』

（カキーン！！！！）

健太『ちくしょう！雑魚があがきやがって…。』

打球は右中間を破って好スタートを切っていた小宮は一気にホームイン。打った西口も三塁へ。

これで9－1。

『5番、セカンド、副島君。』

…

…

そして…

『ボール！カウントスリーボール！』
健太『ちくしょう…ボールが滑る。』

南『あーぁ。ノースリーかよ。さっさと終わらせてほしいねー。』
長岡『まったくだ。』

副島（俺はこのチームのキャプテン…だけどまだチームのための最低限の仕事もやってない。）
大場『副島さん！打てぇ！！』

副島（この兄弟バッテリー…。案外リードは単調だ。カウントを取りにくるときは外角の変化球か低めの直球だ。でも西口に打たれた外の変化球は使いづらいだろう。）

誠（これ以上ランナーをためるとまずい…兄貴は少しだとはいえ球威が序盤よりも落ちている。とにかく低めだ。アウトローから真ん中低めってところかな。）
誠はアウトロー直球のサインを出した。
健太はそれに頷いた。

副島（直球だろう。さらにこのカウントだ。インコースはない。このピッチャーもこのイニングが7イニング目だ。いくら好投しているとはいえ、たまが浮く可能性は十分にある。だから、真ん中低めもない。となると…外角低め。これで決まりだな。）

心理戦は完全に副島が勝った。
そして健太が投げた。

副島（アウトロー直球！！完全に予想通り！！！）
（ガッ！！！）

誠（コイツ！！こんなに踏み込めなんて！クソッ！配給が読まれていたのか！！！！！！）

（カッキィーーッッン！！！）

（ゴン！！！）

木村『ツーラン…ホームラン…！！』

副島『しゃあぁぁぁぁ！！！！！』

下村兄弟ＶＳキャプテン副島
の対決は副島に軍配があがった。

これで点差は９－３。
ここから、邦南の逆襲が始まる…。

Ｎｏ．１０：キャプテンＶＳ下村兄弟（後書き）

感想待ってます？

Ｎｏ．１１：代打氷室！（前書き）

今日はあんまり内容がないです？

すみませんがたまには許してくださいｍ（．＿．）ｍ

Ｎｏ．１１：代打氷室！

木村『ナイスキャプテン！』
松坂『グッジョブ！！グッジョブ！！』

一方…名林ベンチでは

山崎（控え選手）『まったく…コールドにしたかったな。』
江澤『相手の小宮ってやつも相当いいピッチングをしてるしな…。あと一点はおろかランナーすら出ないんじゃ…』
天宮『これで９回まで戦う羽目になるな。』
名林ナインはリリーフした小宮を打つのは難しいとし、皆がコールドは無理だと悟った。

そしてその後後続が続かず七回の表は終了。
小宮は七回の裏もドロップを駆使し全員奪三振をし、これで７連続。

そして回はついに八回の表、９－３で愛農大名林が６点のリード。

『８回の表、邦南高校の攻撃は、９番、ファースト、藤武君に代わりまして、代打、氷室君。』

氷室『何でかな…。いつもだったら６点差で８回だったら諦めるのにな…。不思議だな。なんか俺…逆転できる気がする。』

眞野『だっりーな。今日は無名のガリ勉高校って聞いたからすぐに

ゴールドにできると思って瑞江（みずえ）とデートの約束したのに…。あと２０分で家に帰んないと間に合わねぇよ。これ以上長引かせたら承知しねえぞ。健太。』

矢野崎『ふわぁー。あーぁ。眠いな。アクビがでちまうぜ。昨日テレビゲームで夜更かしして一睡もしてねぇんだよ。いいから早く帰って寝させてくれよ。』

名林のムードは最悪だ。

これから邦南高校野球部の怒濤の攻撃が始まる…。

Ｎｏ．１２：名門崩壊（前書き）

今回は結構長いです？？？

Ｎｏ．１２：名門崩壊

（ザァザァ！！）

５回の裏の途中から降っている雨はやむ気配はない。

健太『この俺から3点もとりやがって。ガリ勉高校のくせに…気に入らねぇ。』

しかし…

（バン！！）

『ボールスリー！！』

氷室（制球が荒れてる。この雨だ、ボールが滑ってカーブは投げずらいだろう。となるとあとはあの厄介なフォークとストレートの区別。ノースリーのこの場面。フォークはない…。ストレートだ！！）

誠（このバッター…前の試合を見る限り基本的にはストレート狙いだな。このカウントだ。もうストレート以外眼中にないって感じか。じゃあこのボールを心おきなく試させてもらうか。）

誠はカットボールのサインを出した。

健太が投球モーションに入る。

シュッ！

氷室（きた！狙い通り！…じゃない！！）

カットボールは曲がるのが早すぎて氷室はかろうじてバットに当てた。

（カスッ！！）

（ボテッボテッボテッ！）

誠『サード！前！！』

矢野崎『めんどくせぇな。』

（ピタッ！）

矢野崎『なにっ！？』

グラウンドはこの雨でぬかるんでおり、ボテボテのサードゴロの勢いが殺され、途中で止まってしまった。

サードの矢野崎が急いでボールを取るも、バッターランナーの氷室は既に一塁ベースを駆け抜けていた。

これでノーアウト一塁。

矢野崎『ちっ。』

健太『ヘタクソ。もっと一歩目を速くすればまだわかんねぇ当たりだっただろ。』

矢野崎『あ？なんかいったか？おいヘボピッチャー。』

健太『てめぇ深く守りすぎなんだよ。あの1年坊がそんな強い打球飛ばすと思ってんのか？あ？わかった。速い打球来んのが恐いのか。

チキン野郎。』

矢野崎『なんだテメェ？誰のせいで8回にもなって守備やってんだと思ってんだ？』

南『お前が一打コールドのあの5回裏の場面でででかい振りして三振したり、抑えればコールド勝ちっていう7回表の場面でことごとく失敗してんだろ。何様のつもりで矢野崎のこと責めてんだ？』

長岡『それにさっき矢野崎のことチキン呼ばわりしたが、テメェのピッチングじゃコイツらすら抑えられねぇと思って深めに守ってんだよ。』

南『そうそう。調子に乗らないでほしいね。まったく。』

眞野（センター）『なにゴチャゴチャやってんだよ…。瑞江とのデートに遅れるのは決まったな。瑞江に何て言おうか…。』

（カキーン！！）

天宮（レフト）『センターバック！！』

眞野『え！？え！？』

成田（ライト）『どこ見てんだ！上だ！！上だ！！』

眞野『打球が…！』

（ポテン！！）

大場『しゃあ！！！』

慶野『翔真！ナイスバッティング！！』
藤武『回れ回れ！！』

眞野『ヤバい！！！』
天宮『三塁打はしょうがない！！ランニングホームランだけは防げ！！』
江澤『何やってんだ！やる気あんのか！』

遂に眞野は打球に追い付いたが既に大場は三塁を回ろうとしている。

島谷倫『回れ回れ！いけるぞ！！』

眞野の精一杯の送球も及ばず大場のランニングホームランで二点を追加し、これで９－５。一気に４点差となり試合の行方はまだわからなくなった。

『２番、センター、慶野君。』

大場『いいぞ！！続け文哉（ふみや）！！』

誠『タイムお願いします。』

誠はこの空気を変えるために内野手を呼んで勝利への執念を改めて忠告しようとした。誠はこういったところは案外真面目なやつだ。

しかし…

健太『困っちゃうね。ヘタクソがバックにいたら撃ち取った当たり

もことごとくヒットにされちゃうから。』

長岡『おいテメェ。あんま調子乗ってんじゃねぇぞ。大したことしてねぇのに人のせいかよ。こっちのが困っちゃうね。』

健太『調子乗ってるだって?誰が?そもそも5回の裏の攻撃でお前が相手のエースを打っとけばよかった話じゃねえか。モタモタしてるから結局相手ピッチャー代わっちまったじゃねぇかよ。自分のこと棚にあげんのも大概にしとけよ。雑魚が。』

長岡『言葉には気を付けろよ。結局人のせいにしてんのはどっちだよ。いい加減にしやがれ。雑魚はテメーの方だろ。』

健太『いい加減にしろ…。』
(ガッ!!)
健太が長岡の胸ぐらをつかんだ。

長岡『あ?やんのか?強いぞ~。俺は。』

誠『…。』

誠は下級生だけあって先輩の喧嘩には口を挟めないでいる。

南『つかお前さー。こんな無名校のやつらに5点もとられてエラそーにしてるって頭どうかしてんじゃないの?』

矢野崎『謝れ。今すぐ頭下げたら許してやる。』
江澤『クックック。早くしろよ。』

健太『ざけてんじゃねぇっつってんだろ!!』

（ボコッ！！）

健太が江澤を殴った。江澤はうずくまっている。

審判『コラ！君たち何やってんだ！！』

誠『すみません！今終わらせます！！』

審判『君！大丈夫かね！？』

江澤『別に。なんともないっすよ。こんなヒョロヒョロゴボウやろうのパンチなんて蚊に刺されたのと同じっすよ。』

審判『大丈夫みたいだが、次暴力ふるったらこの試合は没収試合となり、没収試合を招いてしまったチームは自動的に敗北するぞ！いいか！？これは最終警告だ！わかったね？』

誠『はい…わかりました。』

健太『誰がヒョロヒョロゴボウやろうだって？このゴキブリ人間が。』

江澤『はいはい。俺らはみんなゴキブリですよ。まあゴキブリは守備なんざできねぇからお前一人でこの試合終わらせるんだな。』

健太『…。』

長岡『おいおい。そんなデケー口叩いてまさかできないなんて言うはずないよな？』

誠『もうやめましょ！こういうの！！みんな一生懸命野球しようよ！！全国制覇するために今まで頑張ってきたじゃないですか！！』

健太『誠…。』

南『わかりましたぁー。弟がかわいそうだから守備はしてあげるよ。弟に感謝しな。お兄ちゃん？』

矢野崎『守備する代わりにこの試合負けたら全責任をお前に背負わせるから。そこんとこよろしく。』

健太『おう。当然だ。』

誠（兄貴…。無理しやがって…。みんなは気づいてないかもしんないけど、俺は気付いてるぜ…。）

健太（ちょっと、いや、相当ヤバいかもしんねぇ…。）

誠（兄貴はもう全力投球できる状態じゃない…。）

Ｎｏ．１２：名門崩壊（後書き）

感想お願いしますｍ（．＿．）ｍ

Ｎｏ．１３：三日前の出来事（前書き）

今日は少し残酷かもしれません？

Ｎｏ．１３：三日前の出来事

誠（兄貴はもう全力投球できる状態じゃない…。）

それは三日前のことだ。
名林の猛練習が終わったあと、健太と誠は帰り道にあるゲームセンターに寄り道した。
カラオケ屋の地下に建てられた古くからヤンキーがたむろしている世間では評判のよくないゲームセンターだ。

そんなところでも二人は構わずスロットで遊んでいた。
そして健太がトイレに行くといって誠１人になった。
すると一人になった誠にヤンキー５人が絡んできた。

←←回想シーン←←

『おい。こんなガキがこんなところで何やってんだ?』
『俺たちと一緒に遊ぼうぜ。』

誠『なに?あんたらと遊ぶなんて嫌だし。』
『まあそんなこと言うなって。ちょっと金がほしいと思っててね。』
『金さえくれれば他のところに行くけどさ。とりあえず金よこせ。』

誠『なめてんじゃねえぞ。お前らみたいな暇人にくれてやる金なんざこれっぽっちも持ってねぇんだよ。バーカ。』

『ほぉー。言ってくれるねぇ。それはつまりぶっとばされても良いってことだよな?』
(ガッ!!)
ヤンキーの一人が誠の胸ぐらをつかんだ。
『今なら許してやる。最後の警告だ。金よこせ。』
誠『寝言は寝て言えや。てめーらシバかれてぇんか?』

『交渉決裂だね。じゃあ俺らの餌食になってもらうか。』
(ボコッ!!)
ヤンキーが誠の腹にパンチを一発入れた。
誠『やめろ!!』

(ボコッ!バン!ドコッ!!)
ヤンキーが四人がかりで誠に襲いかかった。
誠『ぐっ…。』

『金。渡す気になったか?おい。ザコ。』
誠『渡すもんか…。俺はそこらの腰抜けとは違う…。』

『ほぉー。しゃべれなくなっても知らねぇぞ?』
(カツッ。カツッ。)
ヤンキーの恐らくリーダーであろう、一番ガタイのいい奴が金属バットを持ってきた。
誠『それは…!?』

『自業自得だ。さっさとよこせばよかったものを。バーカ。』
ヤンキーのリーダーが誠に金属バットを向けた。

『あばよ。』

Ｎｏ．１３：三日前の出来事（後書き）

続きます？
感想お願いしますｍ（．＿．）ｍ

Ｎｏ．１４：満身創痍の健太（前書き）

※注意（念のため）

無死→ノーアウト
一死→ワンナウト
二死→ツーアウト

Ｎｏ．１４：満身創痍の健太

『あばよ。』
誠『うわぁっ！！！！』
ビュー！！！
（ガツッ！！）
『イテっ！！！』
（カランカラン！！）
突然何かが横から飛んできてヤンキーの右腕に直撃してヤンキーはバットで誠を叩くことができなかった。
誠『野球…ボール…！』
『なんじゃ！！テメー！！』
健太『よくも俺の弟をここまでいじめてくれたな。覚悟しろ。』
『おめぇもシバかれてぇんか！？なあ！？』
『まて薮谷（やぶたに）！！この人はひょっとして…。』
薮谷『びびってんじゃねぇ！！』
ヤンキーの増田（ますだ）が薮谷を止めようとしたがリーダーの薮谷は健太に襲いかかった。

しかし…健太は薮谷を返り討ちにした。

増田『もしかしてあの…下村健太か…？』

健太『なんで俺の名前を知っている？』

増田『この辺じゃあんたを知らないヤンキーの方が少ないさ。アンタは裏じゃ【　愛知の猛魂　】って呼ばれるくらい強いんだろ。噂には聞いてるが…』

ヤンキーが四人同時に襲いかかってきた。誠は痛みで動けない。

小熊『あんたさえ倒せば俺らが有名になれるんだよ！！』

健太は四人のうち一人は倒したが残る三人に集中攻撃を受けた。

そして１０分後、健太は多少のダメージを負いながらも、全員を倒した。

健太『ぐっ…。』

誠『兄貴！！大丈夫か！！』

健太『大丈夫だ。心配すんな。』

（ズキズキ！！）

健太（コイツはちっとヤバいかもな…。）

健太はヤンキー四人を相手にしたとき脇腹を痛めた。おそらく肋骨が折れたかヒビが入っているのだろう。

→→回想シーン終わり→→

（ザァザァ！！）
雨はいっこうに弱くならない。

慶野『ストレート！！』
（カキーン！！）

誠『ショート！』
長岡『あいよ。』

しかし。

（ツルッ！）

江澤『まじかよ！！』
長岡『ヤベッ！滑った！』

大場『シャー！！回れ回れ！！』

名林のショート長岡の一塁への悪送球で打った慶野は一気に二塁へ達しこれでノーアウト二塁。

健太『ヘタクソが。』
長岡『けっ。』

『3番、ピッチャー、小宮君。』

小宮（二塁ランナーは足の速い慶野。バッテリーも三盗には警戒し

てる。サードも俺は三番打者だし、三盗を警戒して二塁ランナーが見やすいように深めの守備。）

健太が投げる。

ビュッ！！

小宮『セーフティーバントして欲しいとしか思えないポジショニングだね！！』

（コン！！）

健太『サード！』

矢野崎『またかよ！』

矢野崎が一塁へ送球をするもセーフ。

これで無死一三塁。

健太『同じ失敗を二回もされちゃあ困っちゃうね。まったく。』

矢野崎『簡単にバントされてんのはどこのどいつだ？いいわけが似合う男だな。』

健太『自分の仕事してからそういうことは言おうね。おバカさん。』

矢野崎『…。』

『４番、キャッチャー、西口君。』

…

……

『ボール!!フォアボール!!』

矢野崎『おい!ストレートのフォアボールはねぇだろ!!ビビッてんのはどっちだ!!』

『5番、ライト、副島君。』

松坂『よっしゃー!ノーアウト満塁だ!繋げよ!キャプテン!!』

健太（ノーアウト満塁…。にげらんねぇ。脇腹も死ぬほど痛ぇし…。）

しかし副島が打ち損じて2球で追い込み、

健太『これでもくらえ!!』

（ビュッ!シュー!ガクッ!!）

副島（ストレート!!…いや!フォークだ!）

（バン!!）

『ストライク!!バッターアウト!!』

健太『あとアウト5つだ…。』

『6番、サード、松坂君。』

……

（バン！！！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

長岡『2連続か。』

南『はじめからそれをやれっての。』

『7番、レフト、木村君。』

大場『ノーアウト満塁で一点もとれないとなるとマズイ…。ここはなんとか打ってください！！』

キムタロのこれまでの打席結果

長久手大谷戦

1：見逃し三振

2：空振り三振

3：見逃し三振

栄華戦

1：セカントゴロ

2：四球

3：空振り三振

4：空振り三振

5：ショートゴロエラー

愛農大名林戦（本日）

1：空振り三振

２：ファーストフライ
３：見逃し三振

合計　１０打数０安打
打率．０００

木村（小さい頃の夢は親父と同じプロ野球選手…。今日もきっと親父、見に来てくれてるんだろうな。でも打てそうにないや。）

キムタロは普段こそお調子者だが、昔から試合になると縮こまってしまう。
そしてキムタロの父親はもとプロ野球選手で投手として通算２１５勝をしてプロ野球名球会にも入っている木村（きむら）　豊己（とよみ）だ。

木村（多分高校生活最後の打席なんだろうな…。）

豊己（太郎…。思い出せ…。ガキの頃からの猛練習を。）

Ｎｏ．１４：満身創痍の健太（後書き）

感想もらえたらうれしいです？？

Ｎｏ．１５：プロ野球選手の息子（前書き）

今回はキムタロ（木村太郎）がメインです？

Ｎｏ．１５：プロ野球選手の息子

島谷倫『キムタロ…。ここで一本頼む…。』
氷室『先輩…。』

邦南ナインは必死にキムタロのバットが目を冷ますことを願っている。

木村（…無理だ。俺は武器なんてないし…。）
豊己（太郎…。）

木村（小さい頃から野球をやってきて、ずっと一生懸命やってきて…。）

木村『だけど…。だけど…。』
（ズバーン！！）

『ストライク！！ワン！！』

木村（いくら練習を一生懸命やっても…。試合で打ったことなんて数えられるくらい…）
（スカッ！！）

『ストライク！！ツー！！』

大場『明らかなボール球だろ…。』

木村（だめだ。俺なんかにこんな名門のエースの球なんて打てるわけねえ…。みんな…ごめん。）

誠（このバッター…。ここ最近まったく当たってないしこの打席も狙い球を絞れてない…。見せ球は不要だな。3球で片付けるよ。兄貴。）

誠がサインを出す。

健太（わかった。）

健太がうなずく。

（バン！！）

木村（やばっ！！）

ストレートがアウトローに決まった。

『ボール！！カウントワンボールツーストライク！！』

誠『ちっ。わずかに低かったか。でも次で終わりだ。』

木村（助かった～。見逃し三振じゃかっこつかないよ。でも次でどうせ三振だな…。）

『キムタロ！！』

一塁コーチャーボックスから声がした。

松坂『キムタロ！！お前！！今までなにやってきたんだ！？思い出せよ！！俺らが一年生だった頃を！！』

木村（…！！1年の…とき。あの頃は部員もいなくて上の学年も大学受験とかいってみんなやめてったなぁ。結局夏の大会も1年の頃は人数不足で出られなかったなぁ…。）

松坂『どんなに部員が少なくても、夏にいろんなチームと戦いたくて…少しでも多く勝ちたくて…！！一生懸命やってきたじゃんか！！』

副島『そうだろ！！あのキツい練習で何度も何度も倒れたりしたじゃんか！！』

島谷倫『お前だって！何万本とバットを振ってきただろ！！その手を見てみろよ！！』

木村（みんな…。）

松坂『お前なら打てる！！あとはその1球にかけろ！！』

大場『先輩！！』

慶野『打ってください！！』

木村（…！）

健太がセットポジションに入る。

健太（バッターの目が変わったな。気を抜くわけにはいけないかもな。）

木村（絶対打つ！！満塁にしてくれたみんなの努力を無駄にはできねぇ！！）

木村（あのフォークは狙っててもなかなか打てるもんじゃない。ここはストレートに絞って…！！）

健太が投げる。

ビュッ！！

（カクッ！！！）

誠（コイツがフォークを狙う可能性は０％！！兄貴のストライクをとるフォークで…見逃し三振だ！！）

木村（１・２の…３！！）

（カキーン！！）

健太『えっ…？』

誠『えっ…？』

木村『えっ…！？』

ビュー！！ポンッポン！！

大場『よっしゃぁ！！！！！！』

打球は右中間をまっぷたつに破った。

ツーアウトだったのでランナーのスタートがよく、一塁ランナーも一気にホームインした。

これで一気に３点を返し、９－８。

点差はわずかに一点差となった。

健太『今のアイツ…フォークを狙ってたか？』
誠『いや。確実にストレート狙いだったはずだ。』
健太『ならなんで俺のフォークを？』
誠『わかんねぇ。兄貴のフォークを狙わずにいきなりヒットにできるなんて亨神高校の桜沢以来じゃねぇか？』
健太『アイツは別格だ。俺でもアイツには敵わねぇからな。』
誠『ずいぶんと弱気だな。８点もとられて気が狂っちまったのか？』

健太『んなわけねーだろ。まあ亨神とは決勝にいかなきゃ当たらねぇんだから今考えることじゃねぇ。ツーアウト二塁だ。次は８番だし落ち着いていくぞ。』

誠『だな！まだ一点差だ！よろしく頼むぜ！兄貴！！』

長岡『おいおい…。今のフォークをツーベースだぜ！？』
南『案外やるね。ガリ勉高校のくせに。』

豊己『今のヒット…今の打席、太郎は明らかに直球狙いだった。だがとっさの反応でヒットにした。成長したな。太郎。それでこそ俺の息子だ。』

Ｎｏ．１５：プロ野球選手の息子（後書き）

感想お願いしますｍ（．＿．）ｍ

Ｎｏ．１６：魔球！四段ドロップ（前書き）

今回は主に守備です？

Ｎｏ．１６：魔球！四段ドロップ

（ザァザァザァ！！）

さっきまでの雨がさらに強くなってきた。

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！』

二死二塁の一打同点の場面だったが８番の島谷倫は三振に打ち取られスリーアウト。

しかし邦南は９－３で迎えた８回の表に打者９人の猛攻で一挙５点を返しこれで９－８。

序盤に大量９点のリードしていた愛農大名林がわずか１点のリードとなった。

８回の裏、名林の攻撃は３番の長岡から。

長岡『やれやれ。困っちゃうね。こんな試合になるなんて思ってもみなかったよ。まあ名門の俺たちにも意地ってもんがあるからね。そこら辺考えて配球してよ。』

西口『…。』

小宮は５回途中からリリーフし、今まですべてのアウト（７個）を三振でとる好投。出したランナーはフォアボールのランナーの一人だけというピッチング。

小宮『このバッターがこのチームで一番怖いバッターかな。要警戒

だね。』

（ザァザァザァ！！）

西口（クソっ…。こんな雨じゃボールが滑ってストレートでカウント稼がないとすぐフォアボールでランナー溜めるぞ…。）

西口はストレートのサインを出した。

しかし小宮は首を振った。

西口がサインを出す。
四段ドロップのサイン。

小宮は首を縦に振った。

西口（おいおい…。まだ未完成なのに大丈夫なのか…？）

小宮『この程度の雨で揺らいでちゃ…』
小宮が投球モーションに入る。

小宮『名東黒シャー（名古屋東ブラックシャークの世間での略称）でエースなんか務められないよ！！』

（ググッッ！！！！）

長岡『な…なんだ！？この変化！！』

（パン！！）

『ストライク！！ワン！！』

小宮『へっ！』

明日翔『ナイスボール！！』

西口『…。』

小宮（次も四段ドロップだ…。）

小宮は四段ドロップのサインに頷いた。

小宮が投げる。

（ギュギュググギュ！！）

長岡『またこのボールか！』

（カン！）

『ファールボール！！』

副島『よし！2球で追い込んだぞ！』

小宮（当てられたか…さすがだ。この3番はそう簡単には三振してくれない…。）

西口（次はこれだ。）

西口がチェンジアップのサインを出した。小宮はこのボールが中学のときまでは決め球だった。

小宮（チェンジアップ？いや、ここは1球高めにストレートを見せてからまた四段ドロップで…）
小宮は首を振った。
しかし西口のサインは変わらない。
小宮はもう一度首を振ったがサインはチェンジアップのまま。
さらにもう一度首を振ったがチェンジアップのサインは変わらない。

長岡『タイム！！』

あまりのサイン交換の長さにしびれを切らした長岡が打席をはずす。
そして小宮が西口をマウンドに呼ぶ。

小宮『どうしたの？ボーッとしてた？』

西口『んなわけねーだろ。俺はお前の四段ドロップも確かにいい球だと思うがチェンジアップのサインのが安心して出せる。』
小宮『なんで？』

西口『名東黒シャーはお前のチェンジアップで全国の頂上の一つ下まで行けたんだぜ。』
小宮『そうか？正捕手の西口くんはもちろんショートで1番だった多賀谷（たかや）とか4番の勾城（こうじょう）とかのお陰だと思うけどね。まあそれにしてもあの戦力で全国制覇できなかったのはエースの俺の責任かな。』

西口『おっと、話がそれたか。とにかくチェンジアップで頼むぜ。』
小宮『おう。』

ちなみに今、小宮と西口が普通に会話しているのはマウンドに大場もいたからである。

ちなみに大場が二人の関係を知っているとは二人は知らない。

『カウントツーナッシング！！プレイ！！』

小宮『これでもくらいな！！！』

ビュッ！！！！

長岡『これは…！？』

（ブン！！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

長岡『クソ野郎…。まだあんないいボール持ってたのか…。』

大場『よっしゃー！！ワンナウトワンナウト！！』

『４番、ピッチャー、下村健太君。』

Ｎｏ．１６：魔球！四段ドロップ（後書き）

感想お願いしますｍ（．＿．）ｍ

No．17：失投

『4番、ピッチャー、下村健太君。』

（ズキズキ！）

健太（脇腹痛すぎ…。）

健太は前に述べた通り脇腹に小さくはないだろう怪我をしている。

（ザァザァ！！）

健太（ホントなら当然雨でコールドゲームってところだが1点差で8回の裏だし審判もコールドにはしずらい…。）

小宮（なんだこのマウンド…。ぐちゅぐちゅしてて投げずらい。こりゃ雨でボールが滑りやすいのはもちろん、足を踏み込むのさえ気を付けないとすぐ滑るぞ…）

小宮が投げる。

ヒュー！！

小宮『あっ！！！』

西口『どこ投げてんだ！？』

雨でボールが完全に抜け、ボールはキャッチャーのはるか上に飛んでいき、バックネットに当たった。

小宮（投げずらいなぁ…こりゃ早くしないともっとびしょびしょになるぞ。）

西口がチェンジアップのサインを出した。小宮『オッケー。』

小宮が投げる。
ビュッ！！

しかし…

西口（ヤバイぞ！！！コイツは！！！！！）
健太『完全な失投ど真ん中変化球！！！』
小宮『ちっくしょー！！！打つな！！！』

（カッキーン！！！）

江澤『いったな。』
天宮『どこまで飛んでいくんだ！？』

（ボサッ！）

南『うっひょー。場外かよ。飛ばすねー。』

健太『これで１０－８。二点あれば十分だ。』
名林のエースで４番が復活した。

No. 17：失投（後書き）

感想もらえるとうれしいです？？

Ｎｏ．１８：格の違い

『５番、ファースト、江澤君に代わりまして、西本（にしもと）君。』

西本『この弱小チームでよくも俺らをここまで苦しめてくれたじゃん。お前らは十分よくやったよ。でもね…』

（カキーン！）

小宮『クソっ！！アウトローにきっちり決まったストレートをうまく打ちやがって！！』
打球はレフト前ヒット。
これで一死一塁。

『６番、レフト、天宮君。』

天宮『このピッチャーも１年生。やっぱ俺たちとはいろんな面で…』

西本『格が違うんだよ。』

小宮が天宮へ第一球を投げる。
（サッ！！バーン！！）

西本『ほー。クイックは案外練習してるんだ。いい精度だと思うよ。でもね…』

小宮がセットポジションにつく。
一塁ランナーの西本のリードの大きさもしっかりと確認した。
サインの交換が終わった。
そして…
西本（ここだ!!!）
西本は小宮のクイックを完全に盗んだつもりだった。
が…
小宮（甘いんだよ!!）
ビュッ!!
小宮が素早く牽制をした。
小宮『こっちこそあんたたちとは格が違うんだよ!!!』
西本『なにっ!?!?』
西本は右足に体重が乗っていて一塁へ戻るのが遅れた。
（パン!!）
『アウト!!!!!』
大場『よっしゃ!!ナイス牽制だ!!』
氷室『よし。これでツーアウトだ。』

南『ふーん。わかっちゃった。相手の弱点。』

南が不適な笑みを浮かべていた。

Ｎｏ．１９：見抜かれた弱点（前書き）

今回は名林の８番バッターの南がキーマンです？

Ｎｏ．１９：見抜かれた弱点

南『天宮！！タイムだ！！』
天宮『タイムお願いします。』

『タイム！！』

小宮『なんだ？この場面でなんか仕掛けてくる気か？』

南『わかったか？』
天宮『おう。お前の言う通りにしてやる。』
南『さっすが♪キャプテンは話がわかるなぁ。』

『プレイ！！』

成田『おい南。なに話してたんだ？』
南『まっ。見てりゃあ分かるって。』

（カキーン！！）
打球はライト線際へ。
ライトには藤武に代わって代打に出た氷室がそのまま守備についている。

氷室『うわっ！！きたっ！！』

『ファールボール！！』

氷室（よかったー…。）

副島『おい氷室！！もっとラインによれ！！右中間に守りすぎだ！！違う！！今度は行きすぎだ！！もっと左！！左！！そこ！！オッケー！！』

成田『なーるほど。俺もわかった。』

（カキーン！！）

南『よし！！これはヒットだ。』

大場『氷室！！突っ込め！！とれるぞ！！』

（ポテン！！ポテン！！）

打球はライト前ポテンヒット。

ツーアウトからまたランナーが出た。

副島『積極的にな！！今のも一歩目が遅かったぞ！！』

『7番、ライト、成田君。』

（カキーン！！）
氷室（うわぁ。また来たよ…。）
打球はまたライト前。今度はクリーンヒットだ。
（バスっ！）
氷室（あらら…）
氷室が打球を弾いたが、大きく弾いたわけではないのでランナーは一二塁のまま。
『8番、セカンド、南君。』
（カキーン！！）
『ファール！！』
西口『またライト方向のファールか…。左打ちのコイツは無理に引っ張ってきたな。つまりはライト方向を狙っている。今までの打席では逆らわずに打っていたのに…怪しい。』
小宮（なにかたくらんでるよ。）
西口（ここは外角のカーブで様子を見よう。）
小宮（オッケー。）
ビュッ！！カクッ！！
南（ライトへ狙って…！！）
（ブン！！）

『ストライク！！ツー！！』

西口（やっぱりライト方向狙いか。このアベレージタイプのバッターがあの球をあそこまで引っ張ろうとするのはおかしい…。）

慶野『おい氷室！！アイツらお前の方狙い撃ちしてるぞ！！俺が右中間はカバーするからお前はもっとラインによれ！！』

眞野『見てみろよ。あのライトまた指示されて守備位置変えたぜ。』

矢野崎『いや。違う。指示されなければ守備位置を変えることもしない。ってのが正しいようだな。』

長岡『そーいえば、さっきもあのセカンドのやつに大声で指示されてたよな。』

健太『つまりだ。あのライトは初心者レベルだ。だからさっきそれに気づいた南は天宮にその事を伝えたんだろう。さすがだな。』

江澤『さすが。全国模試で上位3位に常に入るようなやつは頭の回転とか分析力とかが違うね。』

南（よし。バッテリーもそろそろ気づくと予想してたよ。だからあんなあからさまにライト狙ってる演技したんだよ。そんでもってセンターのポジショニングの指示も想定通り。まさかここまでうまくいくとは思ってもみなかったけど。）

ビュッ！！

南『そんなんじゃ左中間がら空きだよ！！』

（カキーン！！）

慶野『なにっ！！』

南『よしっ。完璧。』
天宮『スゲーな南は。さっきタイムとって話した内容を完全に再現したよ。』

長岡『よっしゃぁ！！ナイバッチ！！』
南『我ながら、天才。』

南のスリーベースで名林がさらに二点を追加し、これで１２－８。
邦南はこれ以上点をとられたくないところだ。

『９番、キャッチャー、下村誠君。』

西口（ここでこいつか…。）
小宮（もう一点もやれない。絶対にこいつを抑えてやる。）

Ｎｏ．１９：見抜かれた弱点（後書き）

感想もらえるとうれしいです？

Ｎｏ．２０：翔真の男気（前書き）

今回は大場翔真がメインです？

Ｎｏ．２０：翔真の男気

『９番、キャッチャー、下村誠君。』

８番南の二点タイムリースリーベースで１２－８とした愛農大名林は尚二死三塁で強打者の誠を迎える。

小宮（ライト方向を完全に狙われてた…）

西口（内角中心に攻めてできれば左方向に撃ち取るか三振が理想だが…）

ちなみに誠は右打ちだ。

小宮（下村誠には一打席目で内角のボールをバックスクリーンまで運ばれてる…。）

西口（これまでの打席からして内角は得意コースのようだな。こりゃ仕方ないが外角中心で攻めるしかない。慶野…氷室のアシスト頼むぞ。）

誠（流し打ちは苦手なんだよなぁ。）

小宮が投げる。

ビュッ！！

誠（外角ストレート！！もらった！！）

（カキーン！！）

西口（ちくしょう！！もう一点もやれないのに！！）
小宮（またライト前か…）
大場『おーしゃぁーっ！！オーライオーライ！！』
副島『翔真！！』
（バシッ！！！）
翔真がダイビングキャッチした。
一塁ベースカバーの小宮とバッターランナーの誠の競争。

誠『なにっ！？あの打球を！？』
健太『ファーストが処理するだと！？！？』
眞野『なんて守備範囲してやがる…。』

小宮『大場さん！！』
大場『おうよ！！』
誠『セーフになってやる！！』

（バン！！）

『アウト！！！！！！！』

小宮『よし！！ここを４点差で防いだのは大きいぞ！！』

９回の表、１２－８の４点ビハインドで迎えた邦南の攻撃は９番の

氷室から。

（ブン！！）

『ストライク！！バッターアウト！』

健太『監督！！』

浜津（愛農大名林高校監督）『交代だな。』

大場『なに！？』

慶野『ピッチャー交代だと…？』

『愛知農業大名林高校、ピッチャー下村健太君がショート。ショートの長岡君がピッチャー。以上に代わります。』

ポジション変更

下村健：1→6

長岡　：6→1

健太『頼んだぜ。』

長岡『まさかこの俺まで出す羽目になるなんてな。ずいぶんと炎上してくれたな。脇腹が痛いとか言い訳すんじゃねぇぞ。』

健太『お前！俺の怪我のこと知ってんのか？』

長岡『当たり前だ。７回くらいからずっと一人で痛そうにしてたじゃねえか。気づいてないとでも思ったか。ばーか。最初は同情したが試合に出てんだから関係ねえ。全力でやれよ。エース。』

健太『ありがとな。長岡。とにかくあとアウト二つだ。思いきっていけ。お前のストレートならこいつらなんか楽勝だ。』

長岡『おう。』

大場『どんな球投げるんだ…？』

長岡がセットポジションから投げる。

（ドバンッ！！！！）

慶野『これって…』

大場『たぶん出てるな。１５０ｋｍ／ｈ。』

慶野『こんな球…。』

大場『はぁ？何言ってんだ？楽勝だろ。』

慶野『…だといいな。』

大場『じゃあ、もし俺が打ったら、この点差だし当然バントはしなくていい。だから、お前も続け。小宮と西口なら希望をつないでくれる。頼んだぞ。』

慶野『翔真…。』

『１番、ファースト、大場君。』

Ｎｏ．２０：翔真の男気（後書き）

感想お願いしますｍ（．＿．）ｍ

Ｎｏ．２１：気合いの一撃（前書き）

なんか今日も打者一人分しか進まないです？

最近話の進みが遅いですがお許し下さい＞（＿＿）＜

Ｎｏ．２１：気合いの一撃

『１番、ファースト、大場君。』

『翔真！！打ってくれ！！！』

大場『３年生は負けたらこれが最後…。』
（ズバーン！！）
『ストライク！！』

木村『うっ…。』
島谷倫『くそ…速い…４点差か…』

大場『端から見たら相当速いように思えるがボールの伸びはそこまでだ…。決して打てない球じゃない。』
長岡『こいつを撃ち取ればゲームセットと同じだ！！』

長岡が投球モーションに入る。

ビュッ！！ゴウ！！！

大場『あの人たちともっと野球をやってたい！！あの人たちともっともっと上まで勝ち進みたい！！！』
（カキーン！！！！）

打球は痛烈なセンター返し。
ピッチャーの長岡は思わず尻餅をついた。

長岡『びびったー。死ぬかと思ったぜ。』

これで一死一塁。

大場『俺は打ったぜ。文哉も続く約束だろ。』

慶野『オラ！！こいよ！！！』

慶野がピッチャーに向かって吠えた。

Ｎｏ．２２：野球が好きだから（前書き）

また一人しか進みません…
いったいいつになったら試合が終わるのでしょう（笑

辛抱強くよろしくお願いしますｍ（．＿．）ｍ

No．22：野球が好きだから

続くバッターは2番の慶野。

昔、慶野は大場と同じ中学だった。
といっても大場は硬式のクラブチーム名古屋東ブラックシャークに入っていたため中学時代は帰宅部だが…
慶野は中2のときにテニス部から野球部に移籍した。

慶野『アイツがあのとき野球に誘ってくれなかったら今ごろここに俺は立ってない…。』

3年前…
場所は名古屋市立若葉八前（わかばはちまえ）中学校。

（パコン！！）
（パコン！！）

『よっしゃー！！また勝った！！』
慶野『また負けたよ…。』

慶野は昔から運動神経はよかったがよりによってテニスができなかった。
それを時々大場が下校するときにチラ見していた。
そして大場と慶野がはじめて顔を会わせた日になった。

二人は1年生のころも2年生になってからもクラスが離れていたので話すことはなかった。ただし大場はすでに野球がかなりうまかったので学校では有名だったが。
慶野は運動神経は割りといい方のごく普通の中学生。

（パコン！）
今日は慶野は普通に練習をしている。

慶野『なかなかうまくいかないなぁ…。』
慶野は中学生になってからテニスを始めた。
それまでは特にこれといったスポーツはやってこなかったが、中学生になってテニスをやろうと決めたのだ。
しかしなかなか上達しない。こんな思いは初めてだった。

そのとき…
『キミ？野球やってた？』

突然肌の黒い男の子が話しかけてきた。
後に親友となる、そう。大場翔真だ。

慶野『え？俺が？』
大場『オレ大場翔真ってんだ。野球大好きな中学二年生だよ。野球やってなかった？』

慶野『ううん。やったことないよ。』

大場『ホント！？ならやろうよ！！そのテニスのスイング見る限り絶対いいバッターになれると思うよ！』

慶野『俺の？へたっぴなテニスのスイングを見ていってるの？』
大場『おう。テニスのスイングにしては力みすぎですごいダメなフォームだと思うけど野球やってみたら絶対うまく行くと思うよ！』

慶野『なんで？』
大場『だってキミのスイング、野球のスイングだもん。』

それから慶野は野球部に体験しにいき本入部することになる。
そして3年の市総体では若葉八前中学の3番センターに定着し、ベスト8進出に貢献する。
慶野は俊足をいかすために左打ちだ。

回想シーン終わり→→

慶野『アイツが居なきゃオレはここに立ってない。野球っていう大好きなものができたからオレは今まで楽しかった。アイツが野球を誘ってくれたからオレは…！！』

（カキーン！！！）

『ファール！！』
慶野『当たった…！！』
大場『ナイススイング！！当たるぞ！！いけ！！』

慶野『オレは打つ！！大場と約束したからじゃない。先輩のため、そして何よりチームのために絶対打つ！！だってオレは…』

ビュッ！！

慶野『俺は野球が好きだから。』

（カキーン！）

打球は左中間へ。

眞野『天宮！！カバー頼む！！』
天宮『おう！！』
眞野『どらっ！！！』

センターの眞野が飛びついた。
慶野『クソっ！！捕るな！！！』

（バスっ！！！）

（コロコロ）

大場『よし！落ちた！！』
打球は一瞬眞野のグラブにはいったが、眞野のグラブがそれを弾いてしまった。

副島『ボールが転がってるぞ！！！』
小宮『まわれ！まわれ！』

ハーフウェイの体勢だった大場は打球が落ちた瞬間にスタートを切ってボールが転々としてる間に一気に三塁へ。そして打った慶野は…

健太『セカンドだ!!間に合うぞ!!』
天宮がようやく捕球し二塁へ送球する。

南『よし!!タイミングは完全にアウトだ!!』

小宮『まずい!!これじゃ…タッチアウト…』

（ギュギュッ!!）

西口『え…』
誰もがこのままいけばアウトだと思ったが…

（バシッ!!）
南が捕球してタッチしようとしたが…
南『あれ?ランナーは?』
健太『ファーストだ!!』

慶野は一二塁間の真ん中辺りまでいったがそこから驚異の切り返しで一塁に戻った。

整理するとこれで一死一三塁になった。

小宮『すげ…』
西口『全力疾走から瞬間的に切り返した…並みの人間じゃ…いや、全国にもあんな切り返しができるやつはほとんどいないだろう…。』

大場『さすが…スポーツテストの反復横跳びで８０回オーバーしたやつは違うね。』

ちなみに慶野は反復横跳び（２０秒）で最高８３を記録したことがある。

これがどんなに難しいことかわかるだろう。（ちなみに高２の反復横跳びの１０点評価の回数は６４回以上なはず。）

長岡『魅せてくれるねぇ。まあこんくらいのやつらが相手じゃねえとやりがいがないよな。』

一死一三塁でここからクリーンナップ。

ここから邦南野球部の真価が問われる…。

Ｎｏ．２２：野球が好きだから（後書き）

感想お願いしますｍ（．＿．）ｍ

Ｎｏ．２３：未来を拓く！（前書き）

三年生頑張れ？

って思ってます？

No．23：未来を拓く！

大場『クリーンナップがしっかり働かないと、この試合の勝ち目はほぼ無に等しい。』

慶野『頼んだぞ。お前ら。』

9回の表、一死一三塁。4点ビハインドの邦南高校の攻撃。

『3番、ピッチャー、小宮君。』

（ザァザァ！！！！！）

雨はピーク時ほど降ってはいないが、やはりかなり降っている。両軍ナインも全員が服から雨水を垂らしている。

小宮『この天気では圧倒的に攻撃側が有利だ。逃せない。』

長岡はセットポジションについた。

そして一呼吸おいて投球モーションに入る。

ビュッ！！

長岡『しまっ…！！！』

小宮『うわっ！！！』

（ガツ！！！）

長岡の投球は小宮の足首に当たった。

雨の影響で完全に制球が狂った。
長岡『クソっ！うぜぇな。この雨。』
副島『小宮！！大丈夫か！？』
小宮『いてて…。まあたぶん大丈夫です…。』
これで一死満塁の大チャンス。
バッターは…
『４番、キャッチャー、西口君。』
長岡『１点くらいなら別にくれてやっても大丈夫だ。アウトをひとつとることを最優先する。』
西口（満塁でカウントは悪くしたくないはずだ。初球は必ずストライクをいれてくる。アウトコースのストレートしかない！！）
ビュッ！！
ゴウ！！！
西口『インコースのストレート！？このカウントで！？』
西口（ちくしょう…バットが止まらねえ…！！）
（ボン！！）
大場『あ…』
打球は一塁ファールグラウンドへ。
代打の西本に代わって一塁の守備についている高林（たかばやし）が両手をあげる。

（パシッ！）

『アウト！！！！』

西口『ちくしょー！！！！！』

（バン！）

西口が地面にバットを叩きつけた。

これでツーアウトになってしまった。

あとワンナウトで名林の勝利だ。

しかもここから邦南のもっとも脆いところ…そう。下位打線に向かっていく。

『5番、セカンド、副島君。』

副島『俺たち3年生が天命を握ってる。』

松坂『自分達が打たなきゃ高校野球が終わる。』

木村『でもオレらが打てばまだ野球を続けられる。』

島谷倫『野球の神様は俺たちを試してるんだな。』

副島『だな。まあ野球の神様は乗り越えられない試練なんか与えないんだよ。乗り越えられる試練を打開するのは自分自身だ。他の人に頼ってちゃいずれ負ける。自信持とうぜ。みんな。』

松坂『当たり前だろ。むしろ打てる自信しかねえよ。』

木村『っていうかお前が打たなきゃオレらにはチャンスすら与えられないんだからな。』
島谷倫『そうだぞ。頼んだぜキャプテン。俺たちにつないでくれ。そしたらあとはオレ達に任せろ。』
副島『オッケー。じゃ、みんな行くぜ！！！』
３年全員『おう！！！！！！！』

Ｎｏ．２３：未来を拓く！（後書き）

感想お願いします？

Ｎｏ．２４：絶対的守護神（前書き）

今回は享神高校の桜沢が話に出てきます？

後の話のキーマンとなる人物です？

こいつ誰だよ～とか思ってもそのときはスルーしちゃっていいです？

No．24：絶対的守護神

南『今日の長岡、ピリッとしないなぁ。』
健太『だな。まあこの雨でベストピッチできりゃあ苦労しないぜ。』

（ザァザァ！）
雨はまだ降っている。

長岡『お前らみたいな弱小高校相手にそう何点も取られてたまるか…。』

中学の頃長岡は奈良にいた。
奈良の私立中学の鵬明（ほうみん）中学だ。
長岡は当時県内最強だった鵬明中学の軟式野球部のエースで４番、かつキャプテンを務めていた。

そして全日本軟式野球大会でぶっちぎりで優勝。しかし長岡は全国大会初戦で負傷し（軽傷）、思うようなピッチング、打撃ができずに２回戦で愛知県の優勝チームの陰奨（いんしょう）中学に負けた。

長岡は愛知のチームに負けた。だから愛知にきて頂点に立とうと決心した。兵（つわもの）どもと自分を磨こうと。

そして愛農大名林に入学する。
長岡は当然ピッチャー志望だ。

1年生からエースの座を奪おうとさえ考えていた。それほど自分に自信があったのだろう。

しかし皆がものが違った。

来た1年生のほとんどが他の1年生や先輩をみて驚いた。

当時ピッチャー志望だったのは長岡だけではない。セカンドの南も最初はピッチャー志望だった。他にはライトの成田、ファーストの江澤、ざっと30人はいただろう。

今スタンド組になっているやつでさえほとんどが中学時代の実績は十分なやつらだった。

そんな中、1人飛び抜けた怪物がいた。

上級生組と混ざって練習してもなんの遜色もない1年生がいた。

そう。下村健太だ。

健太は1年生から名門愛農大名林の5番レフトとして活躍。新チームになってからは4番エースとして秋の神宮大会制覇、春のセンバツ高校野球大会準優勝に大きく貢献。特にセンバツでは1年生ながらセンバツ記録（当時）に並ぶ3本塁打を記録。

ちなみに現在のセンバツ本塁打記録は今から約4か月前のセンバツで4本塁打を記録した愛知県の享神（きょうじん）高校の4番桜沢（さくらざわ）が記録。ちなみに桜沢は2年夏の甲子園でも2年生ながら当時TL学園の清原の5本塁打を抜く6本塁打をを記録し既にドラフト一位が確定的なスラッガー。現時点で高校通算96本塁打を記録。

…話は戻るが長岡は入学した瞬間、下村健太と出会い、ピッチャーを諦めることになる。

（バン！！）

『ストライク！！ツー！』

副島『く…速い…。』

二死満塁。４点ビハインド。バッターはさっきツーランホームランを放っているキャプテンの副島。

長岡『俺は２番手ピッチャーなんじゃねぇ。俺は名林の…』

副島『絶対打つ！！！』

長岡『絶対的守護神だ！！！！！』

長岡が渾身のストレートを誠のミットめがけて投げこむ。

（カキーン！！！！！）

Ｎｏ．２４：絶対的守護神（後書き）

感想お願いします？

Ｎｏ．２５：筋肉バカ（前書き）

また一人しか進みません…？
申し訳ないです。。。

No．25：筋肉バカ

（カキーン！）

誠『セカンド！！』

打球は二遊間へ。セカンドの南が追い付く。
一塁ランナーの小宮はスタートを切っていたので二塁フォースアウトは無理。
南は一塁へ精一杯送球する。

南『これで…ゲームセットだぁ！！』

健太『よし！』

松坂『ヤバイ！！！！』
副島『ちくしょー！！』

（ズリッ！！）

南『！？』

ビュッ！！

木村『えっ！？』
健太『うわっ！』
高林『バカ野郎！！どこ投げてんだ！！』

南は泥沼のようなグラウンドに足を滑らせてしまい、送球が高めに浮いた。

高林『おりゃ！』
ファーストの高林がジャンプする。
（パシッ！！）
そしてなんとか捕球。

高林が着地してベースを踏めばゲームセット。
副島の足が少しでも早ければ試合は続く。

（ドン！！）

二人が同時にベースを踏んだ。

判定は…

『セーフ！セーフ！』
高林『なにぃ！？』
副島『助かった～。』

『バックホームだ！！』

高林『え…？』

高林がホームベースの方に振り返った。

二塁ランナーの俊足慶野がホームに向かっている。

高林『間に合えっ！！！』

ビュッ！！

（ザザーッ！！）

『セーフ！！』

慶野がキャッチャーのタッチをうまくかわしながらホームイン。

これで2点を返し１２－１０。点差は2点差となり尚二死二三塁の一打同点の場面。

バッターは6番の松坂。

松坂『キャプテンは危なっかしーね。まあ一応俺たちに回すって約束は守ったし、オレも続くしかないな。』

松坂は小宮と西口が来る前までは4番バッターだった。

『6番、サード、松坂君。』

木村『絶対打てよ！お前で決めちまえ！』松坂『言われなくても決めるつもりだぜ！』
島谷倫『任せたぞ！！』

チーム１の筋肉バカに邦南ナイン全員が託した。

Ｎｏ．２５：筋肉バカ（後書き）

感想待ってます？

Ｎｏ．２６：元４番（前書き）

今日はまぁまぁ長いです？
読んでくださった方は感想もらえると嬉しいです。。。

No．26：元4番

木村『打てよ!!健祐(けんすけ)!!』

誠『タイムお願いします。』

『タイム!!』

誠がピッチャーの長岡の元へ向かう。

誠『どうしますか?』

長岡『なにが?』

誠『いや、このバッターと勝負するより、次の7番と勝負した方がいい気がします。何となくですが。』

長岡『はぁ?俺が6番バッターを敬遠だって?』

誠『はい。このバッターは見る限りスタンドにまで運ぶ力も持ってます。他のバッターとはスイングスピードも違いますし。』

長岡『ここは強気に押していくしかねぇだろ。そんなに俺が打たれるとおもうのか?』

誠『…はい。正直今日の長岡先輩は持ち味のストレートも走ってない上に、制球も甘い。だから割りと力のある邦南の上位打線にはことごとく打たれました。』

長岡『下がれ。勝負だ。』

誠『…でも！』
長岡『敬遠なんてする気はねえ。さっさと帰れ。』
誠『…、…はい。』
『プレイ！！』
誠（2点差のツーアウト二三塁、一打同点の場面。長打はもちろんヒットすら打たせてはいけない。まずはストレートです。）
（ズバン！！）
『ボール！！』
誠（明らかに要求したところよりも高い…。長岡さんはスタミナは問題ないくらいあるし全然オッケーだ。でもこれだけ球が浮くってことは…）
誠はまたストレートのサインを出した。
ビュッ！！
（ズバン！！）
『ボール！！』

長岡『クソ…』

誠（間違いなく投球に集中できていない。いつもの長岡さんならこんなにボール球が続くわけがない。今のも明らかにボール球だと分かる球だ。きっと雨がどーたらこーたらで投球に集中できていないんだろう。リリースポイントが完全に速い。だからバッターも球の伸びは感じない。だからストレートに押し負けずにバッターも打ち返す。）

誠がスライダーのサインを出した。

長岡『スライダー？こんな雨で変化球でストライクが取れるかよ。特にスライダーなんてボールを切るようにして投げるんだからな…。』

長岡は首を振った。

誠（絶対にストレートはダメだ。このカウントで今の長岡さんにストレートを投げさせちゃいけない…。）

誠はカーブのサインを出した。

ちなみに長岡は速球中心のピッチャー。

大体の球種の割合は、

ストレート…８０％

スライダー…１８％

カーブ　　…２％

このデータから分かるようにカーブは基本的に投げない。

長岡『カーブだぁ？そんな球じゃダメに決まってんだろ。ここはストレート…』

長岡はまた首を振った。
しかし誠はまたスライダーのサインを出した。
長岡は断固としてストレートしか投げないつもりだ。
一方の誠はストレートは絶対に投げさせないつもりだ。

打者の松坂はこの長い間に対して集中力を切らすことなど考えられないほど集中している。

一方バッテリーは既に見えない喧嘩状態だ。

長岡『わかったよ…。投げればいいんだろ。投げれば。』

誠（よし…。）

長岡がやっとボールを投げる。

ビュッ！！

（カクッ！！）

（パン！！）

『ボール！カウントノーストライクスリーボール！！』

長岡『ちっくしょー。ノースリーかよ。』

誠（これでいい。次も変化球だ。）

誠はまたスライダーのサインを出した。

しかし長岡は…

長岡『何がしてぇんだよ。おい…。またスライダーって…歩かせる気か…？』

松坂（ノースリーだ。セオリーならここは1球見るべきだが…。甘く入ってきたら思いっきり叩くぞ。）

…

……

長岡は5回も首を振ったがサインはカーブかスライダーの変化球。この雨で細かい制球の利かない長岡に変化球でカウントを稼げるハズがない。

誠は歩かせる気だ。

誠（このバッター。明らかに他のバッターとは狙いが違う。コイツは本能で打ってくるタイプだ。甘い球が来たら確実にやられる。次のバッターはさっきやっとヒットを打ったようだがさほど打撃のセンスがあるとは思えない。この6番を歩かせて次の7番と勝負した

方が確実に撃ち取れる可能性が高い。）

誠の考え通り、松坂は野性の勘でボールにしがみついてくるタイプだ。

その野性の勘はほとんど外れるが、こういうしびれるビハインドの場面ではその野性の勘の的中率は大幅にアップする。

つまり、松坂は逆境に強い男だ。

誠はそれを何となくだが感づいていた。

誠はいぜんとして変化球のサイン。

長岡『こうなったら…。』

なんと長岡はスライダーのサインに頷いた。

その長岡の狙いは…

長岡（いくらキャッチャーがサインを出そうとも、ボールを投げるのはピッチャーだ。）

長岡はスライダーのサインに頷きながらもストレートを投げようとしている。つまり、サイン無視だ。

長岡がセットポジションから投球モーションに入る。

（ゴゴゴゴゴ…）

長岡が足をあげる。

誠（まさかとは思うが…。ない…とは言えない。）

長岡『オレのストレートが…』

（ガッ！！）

長岡が投げ込む。

長岡『そう簡単に打たれてたまるか！！！』

ビュッ！！

誠（ストレート！？サイン無視か！！）

松坂『甘い！！これを打たなきゃ何を打つ！！』

誠（だからストレートはダメだって…）

誠は目を閉じた。

打たれることを確信したからだ。

（カッキィーッン！！！！）

長岡『え…』

打球はレフトへ。

レフトの天宮が追う。

キャッチャーの誠は打球を目で追うこともしなかった。

（バサッ！！）

邦南ナイン『…！！！』
名林ナイン『…。』

『よっしゃー！！！！！！！！』
『入ったー！！！！！！』
『ナイスバッティン！！！！』

打球はレフトスタンドへ飛び込む、逆転のスリーランホームラン。
９回ツーアウトから邦南が遂にこの試合初めてリードを奪った。

これで１３－１２。
邦南が愛農大名林を一点リードした。

誠は打たれた投手長岡に声をかけるつもりもなかった。
打たれたのはサイン無視をしてストレートを投げた長岡に責任があるのは当然だ。

誠『ふざけんな…。』
誠はマスク越しに泣いていた。

誠（長岡さんがストレートを投げれば無意識のうちに置きにいくのなんか容易に想像ができた…。だからこのバッターを歩かせて次のバッターでゲームセットにしようと思ったのに…。）

長岡はピッチャー不利の苦しいカウントに立たされて無意識のうちにボールを置きにいった。

それを松坂は逃さなかった。
それを誠は事前に防ごうとした。
それを投げたのは長岡だ。

バックネット裏の下村健太の投球を見に来たプロ野球のスカウト達はついでに長岡の球の球速をスピートガンで測っていた。
そのスピードガンには…

《《　１３２ｋｍ／ｈ　》》

と表示されていた。

『さっきまでは１４０?終盤のいいボールを放ってたのになぁ。』

スカウト達も話している。

長岡が逃げのピッチングをして打たれたという事実はそこにいた人なら誰もがわかっただろう。

Ｎｏ．２６：元４番（後書き）

次回からは遂に
最終９回の裏の名林の攻撃です？

この回で決着がつくのか…
どちらが勝つのか…
はたまた延長戦突入なのか…

楽しみにしておいてください？

あ…でも次回だけじゃ試合は終わらないです？

Ｎｏ．２７：暴踪者（ぼうそうしゃ）（前書き）

今日からテスト準備のため少しの間お休みとさせていただきますｍ（．＿．）ｍ

これからもよろしくお願いします？

Ｎｏ．２７：暴踪者（ぼうそうしゃ）

その後の三年生軍も続いてさらに二死一二塁としたが９番の氷室がサードライナーに倒れスリーアウト。
しかし邦南が逆転し遂に９回の裏を迎える。

『１番、センター、眞野君。』
一点ビハインドで９回の裏の名林の攻撃はトップバッターの眞野から始まる。

眞野『俺たちが９回の裏で一点ビハインドだと…。せっかく１２点も取ってやったのにピッチャーは何やってんだか。今ごろ瑞江はカンカンに怒ってるだろうな。』

小宮（さっきの回の僕の打席でのデッドボール…。正直今でもかなりヤバイ。歩くだけでじんじんするよ…。）

小宮は９回の表の逆転劇の際にコントロールを乱していた投手の長岡から足首にデッドボールを食らっている。

小宮（こりゃ打撃ってやつかな。）

眞野（俺は名門の１番バッターだ…。さすがにそろそろ本気出さね

ぇとマジで負けそうだぜ。）

名門の名林にも焦りが出ている。

西口（さすがにこいつらでもこの回ばかりは本気で一点を掴み取ろうとしてくるハズだ。バッター一人一人の隙が少ないこの回が最大の山場だ。）

小宮が眞野に第1球を投げる。

（ガッ！！）
（ズキッ！！）

小宮『うぐっ！』

ビュッ！！

ヒュー！！

（カシャン！）
ボールはキャッチャーの遥か頭上を越えていき、バックネットに当たった。

小宮（雨はもう大分小降りになってきた…。天は僕らの味方だ。でもこの状況…）

ビュッ！！

『ボール！！』

今のも完全にボール球だと分かるボール。
眞野は打率こそ3割前半から2割後半だが、持ち前の選球眼と粘り強さで出塁率は5割を越える。

小宮（既に大場さんは１５０球近く投げた。もう一度マウンドに立ってもたぶん上位打線に捕まるだろう。だからここは僕が踏ん張らないと！）

ビュッ！！

（パン！！）

『ボール！！スリー！！』

小宮（くそ…。ノースリーかっ…）

眞野（さっきの対戦の時より明らかにボールの勢いが違うな。何があった…。）

ビュッ！！

（パン！！）

小宮（くそっ…うまく投げれねえ…）

『ボール！フォア！』

眞野『よっしゃ。』

『2番、サード、矢野崎君。』

矢野崎『どうしちゃったの？先頭バッターをフォアボールだなんて負けたいの？』

西口『そんなわけねーだろ。少しは頭使え。』

矢野崎『相変わらず強気な性格だねぇ。一年坊のくせに。』

ビュッ！！

（スッ…）

西口（なに！？）

小宮『バントだって！？』

松坂『セーフティーか！！』

（コン！！）

矢野崎は名門名林の2番打者なだけあってバントはかなりうまい。

（コロコロ…）
西口『サード!!ファーストだ!!間に合うぞ!!』
西口がサードの松坂に叫ぶ。
松坂も猛ダッシュでボールに追い付く。

（パシッ!!ヒュッ!!）
松坂が一塁へ送球する。

タイミングは微妙。しかし、

大場『どこ投げてるっ!!』

（パシッ!!）

松坂の送球は大きく横に逸れ、大場はベースから離れてなんとか捕球する。これで無死一二塁。

松坂『わりぃ…小宮。』

小宮『何がですか?あんないいバントされちゃいくら送球がよくてもセーフでしたよ。悪いのはあのバントを決めさせてしまった僕です。』

『3番、ピッチャー、長岡君。』

（ズクッズクッ!）
小宮（さすがにこれは…投球に集中できないレベルの痛みだ…投げ

る度にどんどん痛くなってく…。）

長岡『お前ら。もう絶対許さねえ。覚悟しろ。名林の守護神の俺から1イニングに5点だと?ふざけんな…。ふざけんな…。……。ふざけてんじゃねーぞ!!!!!!!!!』

西口『!?!?!?』

小宮『なんだ!?』

副島『おいおい…。アイツ…狂っちまったんじゃねえか?』

長岡が叫び出した。

長岡『エースで4番が怪我を隠してことごとく足を引っ張る。キャプテンもいっこうにチームをまとめようとしない。センターのやつも女の事考えててボールを後逸する。キャッチャーのやつは逃げ腰リードしやがる。セカンドのやつはまともに送球もできない。そんでもってしまいにはこんな雑魚高校が俺から5点を奪って逆転しやがる。』

西口（殺気を…感じる…。）

小宮（こわっ…。）

長岡『こんなに野球やってて気分が悪くなったのは久方ぶりだぁぁっ!!!!!!!!!ぶっ殺す!!俺がテメーらみたいなクソチー

ムの夢とやらをぶっ壊してやるよ！！！！！！！！もうこりごりなんだよ！！！！！！！』

大場（…。）

南『長岡があーなるのはいつ以来だっけ？』

健太『最後に見たのは…たしか一年秋の県大会決勝のとき以来じゃねえか？これが3回目だな。』

南『あーなると誰も止められないよね。』

成田『アイツは1年半もあーならなかったんだからその間心のダムでせき止めてあった怒りが今流出してるね。ありゃ相当ヤバイと見た。』

江澤『あーなるとやたらと人の悪口言うからね。俺は言われてないみたいだけど。』

南『アイツはいままで守護神として名林を支えてきた。それなのに俺らが守備で足引っ張っちまったから…結果逆転されて…。』

誠『どこが？逆転されたのは全部あの人の責任でしょ？俺のリードを信じないからサイン無視して結果逆転ホームランだからな。ほんと身勝手な人は困るわぁ。』

西口（狂気して力んでるかと思えば打法は今までよりも力が抜けていて自然体だ…。こりゃ何の球狙ってるか想像もつかないな…。）

天宮『おい。よく聞け。お前らの考えは、間違ってるぞ。』

誠『なんすか？キャプテン。』

南『俺らにも言ってんの？』

天宮『当たり前だ。俺はお前ら全員の考えが間違っているとしか思えない。いずれ、こうなる運命だったのだろう。それがたまたま今日だったってわけだ。』

名林ナイン『…？？』

長岡『おら！！！さっさと投げろや！！！！！！』

天宮『俺たちの弱点は、俺たちの中にある。それは俺たち自身で気がつかなきゃいけない。』

Ｎｏ．２７：暴踪者（ぼうそうしゃ）（後書き）

何度も言って申し訳ないですが、今日からテスト準備のためお休みとさせていただきますｍ（．＿．）ｍ

読んでくださったかたはありがとうございます？

これからもホームスチールをよろしくお願い致します？

Ｎｏ．２８：新魔球の更なる進化

天宮『一つ問うが、なんで俺らが今になってまだこんなに一つになれてないと思う？』
南『そんなの、知らないね。』
高林『突然どうした？』
天宮『言っておくがこのままじゃ、負けるぞ。絶対に。』

『ボール！！』
長岡『オラ！どうした！？かかってこいよ！！ボッコボコにしてやるからよ！！』

西口（これでノーツーか…このままフォアボールなんかにしちまったらノーアウト満塁で４番の下村健太を迎えることになる…）
小宮（痛いなんていってられない…何がなんでもこのバッターを抑えなければいけない！！）

南『つまりキャプテンは何が言いたいの？そんなネガティブ発言しちゃってさ。つか、バッターは怒った長岡だぜ？負けるどころかサ

ヨナラの可能性のが十分高いじゃん。』

天宮『そこを言ってるんだ。今この事に気づいてるのは俺と健太くらいだな。』

南『??』

江澤『何が言いたいの…?』

『ボール!!スリー!!』

小宮『ちくしょう…ストライクがはいんねぇ…。こんなんじゃ…。』

長岡『びびってんじゃねえぞ!!もっと勝負してこいよ!!』

『長岡!!落ち着け!!』

長岡『うるせえ…。』

ビュッ!!

『カキーン!!!』

南『デカイ!!!』

『ファール！！』

成田『おっしーい！！』

長岡『殺り損ねちまったぜ。まあ次で終わりだ。』

西口『タイムお願いします。』

『タイム！！』

西口『あれ。試してみるか。』

小宮『僕もちょうど考えてたところ。』

西口『もうあのときの怪我は完治したか？』

小宮『うん。一週間前に投球オッケーもらったときに。』

西口『お前の右腕はもう大きな故障しすぎた。また怪我をしたらどうなるかわかってるか？』

小宮『当然承知だよ。』

西口『俺のお陰でここまでこれたことを忘れんなよ。』

小宮『わかってる。』

明日翔『哲都！！頑張れぇー！！！！』

小宮『ったくあいつは…。恥ずかしいなぁ…っ。』

西口『…。……。試合中アイツを黙らせろ。うるさくて集中できやしない。』

小宮『どうして？突然そんなに顔強張らせちゃって…。』

西口『お前さえ居なけりゃ…今ごろ俺は…。』

西口が小声で言った。

小宮には聞こえなかった。

小宮『まあ僕の彼女の話はおいといて、このバッターを仕留めなくちゃね。』

西口（こいつ…あとでぶっ殺してやる。）

西口はなぜか小宮にキレている。

小宮『このフォームで投げるのは久々だなぁ。』

西口『…とりあえず、怪我だけには気を付けろ。それと今カウントはワンスリーだ。次のボールはお前の四段ドロップで追い込む。うちの守備力じゃ打たせてたらこの緊迫した場面なら必ずと言っていいほどボロが出る。全部三振のつもりで行け。』

小宮『足も痛いしね。早く終わらせちゃおう。』

西口『やっぱりな。さっきのデッドボールだろ。投げ方ですぐわかった。』

小宮『テヘヘ…。追い込んでからのあの戦法でいくよ。』

西口『二つとも実践使用は初だな。』

長岡『長いな。早くしてほしいな。』

小宮『ちゃんと捕ってよね。特にあの戦法は。』

西口『おう。ただし失投はジエンドだ。それだけは頭に入れておけ。お前の投球結果で夏の長さが変わるからな。』

小宮『あいよ。』

『プレイ!!』

小宮（僕なりの研究結果だと、四段ドロップを2球続けるとき、2球目の方は必ずと言っていいほどキレ、変化量が落ちる。）

小宮『だからこの球は…』

小宮が投げる。

ビュッ!!

長岡『これがアイツらのいっていたボール！！！！！』
（キュキュッ！！）
長岡『見える！！見える！！』
西口『切れが悪い！！』
（カキーン！）
『ファール！！！』
長岡『なんだ。思ってたより当たるじゃん。みんなこんなボールも当てられなかったのか。』
小宮『今のくらい君なら当てるってわかってたよ。』
西口（今の四段ドロップは明らかに精度が低かった。もうバテてきたのか…？）
小宮『大丈夫。スタミナには自信あるし。』
小宮（実は今のはわざと加減して投げたんだ。）
小宮『このボールの精度を維持するためにね。』
西口（何はともあれ追い込んだ。この戦法で三振だ。）
小宮がセットポジションから投げる。
（ガッ！！）
地に足をしっかりとつく。
長岡『！？！？』
大場『なにっ！？』

健太『マジかよ！』

副島『サイド…スロー！？』

長岡『突然サイドに変えたって俺を抑えられるかよ！！なめんじゃねぇ！！』

西口（変わったのは腕の位置だけじゃない。サイドから四段ドロップの握りで投げることによって…）

小宮『くらえ！ライジングスライダー！！！！』

ビュッ！！！！！

ゴウッ！！

長岡『高い！？』

カクッ！！！

長岡『ストライクになる！！！』

長岡はとっさにカットしようとした。

しかし、

ギュルギュルガッ！！！

西口（なんじゃこりゃぁ！？）

（スカッ！！）

長岡のバットが空を切る。

しかし、
（バスッ！）
キャッチャーの西口があまりの変化量にボールを捕球することができなかった。
『長岡！！走れ！！』
長岡は嫌々一塁へ駆け抜けた。
記録は振り逃げ。これで無死満塁。

西口『わりぃ…。まさかあんなボールに進化するなんて思ってなかったからさ。』
小宮『でしょ！？しかも四段ドロップと違ってコントロールもつきやすいし！でも肘と肩の両方にすごい負担がかかるんだ。』
西口『一瞬浮き上がったと思ったらいきなり莫大なスライダーの変化…。こんな球プロでも余裕で通用する！！』
小宮『まあサイドからじゃないと投げられないんだけどね…。』

西口『でもこのボールは使える。まだサイドで行けるか？』
小宮『ここでライジングスライダーを使いすぎると、１０日位はピッチャー出来なくなるよ？』
西口『後のことなんか考えてられっかよ！』
小宮『だね！！今しかできないことを今やらなきゃ損だもんね！』
西口『ノーアウト満塁。こっちが一点勝ってるからと言って楽な場面じゃない。長引けばお前の体力も尽きる。思いきれよ！！』
小宮『うん！』

『４番、ショート、下村健太くん。』

小宮『行くよ！！！』
西口『こい！！』
大場『アイツら…。』

小宮の新球、ライジングスライダーが名林への最後の抵抗となるか！？

Ｎｏ．２８：新魔球の更なる進化（後書き）

今日は家の鍵を忘れて家に入れなくてその暇潰しのために更新しました♪

小宮くんはもはやプロレベルのピッチャーと化しましたね。
まあいくら最強とうたわれても弱点はありますしね。
それに小宮は昔から怪我の多い選手だったので…

感想待ってます？

Ｎｏ．２９：意地の再登板（前書き）

やっとテスト終わりました♪

期末だけあって全部で１３教科…
ほとんど死にましたね？

これからもよろしくお願いしますｍ（．＿．）ｍ

Ｎｏ．２９：意地の再登板

？？『ノーアウト満塁で４番の下村兄か。あの新星サウスポー…またあの球でいくのか…？』

小宮『こんなピンチ…乗り越えられなきゃ勝ち進む権利はねぇ…』

西口『こい！！小宮！！』

小宮がサイドから投げる。
ビュッ！！
ゴウッ！！

健太『高い！ボールだ！！』

ギュギュッ！！

（スパーン！！）

『ストライク！！ワン！！』

健太『くそ…。またあのボールか…。今のボール…サイドスローに変えた途端に投げ始めた…。恐らくサイド独特の軌道だろう。この

ボールは早々当たるもんじゃねえ…』

ビュッ！！
ギュギュッ！！

健太『く…。』

（ブン！）
（パン！）

健太は豪快に空振りした。
『ストライク！！ツー！！』

西口（ふーっ。捕るのも相当気合いいれなきゃパスボールで同点だ…。こりゃこっちも大変だな。）

健太（3球勝負か…？次あのボールが来ても確実に対応することはできない…。ごめんな。みんな。）

『打てるぞ！まだまだ！ここで一本頼む！』

ベンチから大声が聞こえた。

天宮『お前が決めろ！絶対に打て！』

健太『天宮…。』

舞『健太!!打て!!諦めちゃだめ!』

健太『舞…。』

ビュッ!!

小宮『うぐっ!!足が!!』

ギュキュッ!!

西口（まずい!!）

小宮『曲がらない!?失投だ!』

健太『絶対に打つ!!』

（カキーン!!）

『ヤバイ！！』

大場『小宮！！前だ！！』

小宮は痛めている左足首をかばっていたので打球に反応するのが遅れた。

つまり言うと、ボールに集中していなかった。

小宮『まえ！？』

ビュン！！

小宮『うわっ！』

（ガツッ！！！！！！！！！！！！）

痛烈なピッチャー返しが小宮を襲った。

打球は小宮に当たりちょうどキャッチャーの西口のところに来て西

口はそのままホームベースを踏んでワンナウト。一塁は間に合わなかった。
これで一死満塁。

『小宮!!大丈夫か!?』
『立てるか!?』
『どこ当たった!?』

小宮『イテテ…。さっき食らったとこです…。』
大場『さっきデッドボールで当たったところか!?』

小宮『はい…。痛くて動けないっす…。』

副島『ちょっと足見せてみろ。』

…

……

……

大場『うお…。』
松坂『これって…やべーんじゃねえ?』
島谷倫『すっげー腫れてんな…。』

大場『これじゃ交代しかないな…。あとベンチに残ってんのは背番号４の島谷涼太（島谷倫暁の弟）と背番号１０の鬼頭…。』

西口『前からずっと思ってたんすけど、背番号１０って誰ですか？背番号９までは前からいた人たち、背番号１１はオレ、背番号１２は小宮…』

大場『…。』

副島『背番号１０はオレと同じＥ組の鬼頭博行って言うんだよ。ま、アイツは１年の頃から一回も来たことない筋金入りの幽霊部員だけどね。』

大場『…。……。』

西口『へー。じゃあ意味ないですね。』

小宮『みんな話進めてるけど、オレはまだ下がるなんて一言も…』

大場『うるさい。お前は引っ込んでろ。この試合勝って次以降の試合に出るためにもここは一旦引け。そっちのが賢明だ。』

小宮『でもピッチャーは！？！？』

大場『オレがやる。今度こそ抑えてやる。』

小宮『でも…』

大場『オレはこのチームのエースだ。セカンドピッチャーのお前に頼りきってちゃだめだろ。』

副島『小宮。お前にはもっともっと戦ってもらわなきゃいかない。

そのためにもここはエースに任せてみよう。』

小宮『わかりました。だけどその代わり約束をしてください。』

大場『なんだ?』

小宮『この試合、絶対に勝ってください。』

小宮は泣いている。

大場『おう!!』

大場（アイツがなくなんてな。こりゃ勝つしかないか。当然だけど。）

小宮はだっこされてベンチに引いた。

守備位置の変更←←

小宮→島谷涼：1→4

大場：3→1

副島：4→3

大場『小宮が抜けても、オレは揺らがねえ。絶対に勝つ。』

『5番、ファースト、高林くんに代わりまして、代打、棚辺（たなべ）くん。』

??『翔真…。勝ってくれ。この試合に勝てば…。俺は…。』

このとき、邦南高校側のスタンドで密かに邦南の応援をしている男がいた。

一度ノックアウトされたエースが再びマウンドに上がる。

No．30：S．6（エス・シックス）の2人（前書き）

今回から新設定登場します？
その名も…
S．6（エス・シックス）
SはSupreme（スプリーム）です。。。
意味は…至高の6人組
です？

これからも是非楽しみにしてください？

あとこの試合終わったら急展開になります？

あらかじめご了承下さいm（．＿．）m

No．30：S．6（エス・シックス）の2人

？？『一死満塁…。アウト一つ取ったからといって油断できる場面じゃない。しかもバッターは代打…。翔真、どう攻める…？お前は一度K．Oされても立ち直れると信じたいが…。ピッチャーがリズムを取り戻すのはそう簡単じゃないぞ…。』

大場『来てるか…。』
西口『誰がですか？』

大場『享神だ。』

西口『え！？』

大場『ホラな。あそこだ。見る限りマネージャー1人を含めて5人しか来てないけどな。』
西口『アイツら…。』
大場『多分こっちの山の優勝候補の名林を偵察しに来たんだろうがな。この試合展開にさぞかしビックリしてることだろう。』

西口『あれって…』
大場『桜沢だな。あと1年生エースの堂金（どうがね）も来てるな。』

西口『堂金…。アイツか…。去年中学硬式野球大会で全試合完封（地方大会から数えて10試合連続。尚中学硬式ルールの三連投禁止等のルールあり。）それに全国大会でも1回戦と準決勝と決勝で3

度のノーヒットノーラン（うち2回完全試合）達成してるしな。相当頭よかったのに名林に享神に進学したのか。』

大場『お前らが決勝で負けた時のピッチャーもアイツだったんだろう？』

西口『はい。ただしアイツは…本気では投げてませんでした…。確実に…。』

大場『なんでわかる？』

西口『アイツ…あの試合…いや、あの大会で一度も決め球の高速シンカー、縦カッター（縦のカットボール）を使わなかったんです。』

その頃、享神の観覧者たちは…

桜沢『なんだよ。名林もこんな公立高校に負けちゃってよ。これじゃ俺たちの甲子園出場もフリーパスだな。』

余語（よご）『正直名林とは試合になると思っていただけ残念だね。』

桜沢『名林と？そんなん20点差つけて勝てるぜ。名林なんか俺の敵じゃねえ。』

余語『じゃあ誰が敵なの？』

桜沢『全国にオレと渡り合えるピッチャーなんて二人しかいねえよ。しかもそのうちの1人が同じチームだしな。な？堂金？』

堂金『知りませんよ。そんなの。ただ、高校野球のレベルの低さに驚いているのは事実ですけど。』

余語『言うねえ。じゃあさっきまで投げてた途中からサイドスローに替えたやつに関しては？』

堂金『アイツとは中学ん時一回だけやったことあります。が…』

余語『どうした？』

堂金『なにも感じなかったです。普通の野球やってる人間ってだけで、特別良い球だって訳でもなかったです。』

神郷（かんごう）『ふわぁ…。よく寝た。試合終わった？』

藤野（ふじの：マネージャー）『まだよ。しかも1点差で邦南がリードしてる。…って！！』

（ぐーぐー…。）

神郷はまた寝てしまった。

藤野『…はぁ…。』

神郷『サヨナラ…ホームラン…。…。』

神郷は寝言を言っている。

そのとき…

『よぉ！サク！（桜沢のあだ名）』

桜沢『お！久しぶりだな！水仙（すいせん）！』

水仙（すいせん）　知哉（ともや）

『こんなところで名林の見学？負けてるみたいだけど。』

藤野『え！？水仙ってあの！？』

堂金『間違いないですね。日本中で騒がれてるＳ．６（Ｓｕｐｒｅｍｅ　６：スプリームシックス：至高の６人組）の１人、静岡の晟（せい）西高（さい）校の１番ショートの人ですね。今春のセンバツでは準々決勝で姿を消しましたが、甲子園３試合合計で１５打数１１安打、打率．７３３、１１盗塁を記録した俊足の持ち主です。』

神郷『ふわぁ…。よく寝た。ところでなんでＳ．６（エスシックス）って呼ばれてんの？』

余語（コイツ…起きてたのか。笑）

藤野『今S．６って呼ばれてる人は中学時代元々同じ中学でね。みんな軟式野球部に入ってたの。』

神郷『へーっ。強かったの？』

藤野『そりゃそうでしょ！！そのときの中学校は大阪の南阪中学って言うんだけど聞いたこと無い？』

神郷『知らないなぁ。』

藤野『もう！！なんで知らないのよ！！あんたのそのでっかな頭には何がはいってんの！？超有名中学でしょ！！』

神郷『そうなんだぁ。よくわかんないや。』

藤野『…。……。まあいいわ。話は戻すけど、南阪中学は他を寄せ付けない強さで、全国大会で圧倒的な強さで勝ち進んでいったわ。コールドゲームの無い決勝戦以外では全試合３回コールド。（３回１０点差、５回７点差）』

神郷『すごいねえ。』

藤野『そのときの４番が桜沢さん。あの水仙って人が１番セカンドだった人。』

神郷『S．６って言うくらいなんだから他にもあと４人いるの？』

藤野『そうよ。彼らは全国各地の名門高校に散らばって進学していったから甲子園にいけば何人かとは対戦することになるわ。』

神郷『なんで６人なの？野球は９人ポジションにつくんだよ？残り

の三人は？』

藤野『その三人のうちの二人はそこまで高レベルじゃないから騒がれていないだけ。残りの１人は高校野球から手を引いたらしいわ。確か…鬼頭っていったっけ？よく覚えてないわ。その鬼頭っていう人は実力ならＳ．６に全くひけをとらないくらいの実力があったらしいけど…なんで野球やめちゃったんだろう。その鬼頭っていう人を併せて昔はＳ．７（エス・セブン）って言われてた。大体Ｓ．６の説明はこんなところよ。わかった？』

（ぐーぐー…。）

神郷『サヨナラ…ボーク…。』

藤野『はぁ…。……。ホントよく寝るわねぇ。』

水仙『あはは！！あっ！そろそろ静岡に帰らねえと行けねえ時間だ！！わりぃな！じゃあそろそろ帰るわ！じゃあまた甲子園でな！』

桜沢『じゃあね～！！水仙！！また会おう！』

（バン！）

『ストライーク!!バッターアウト!!』

大場『しゃあ!!』

余語『このピッチャー、さっきよりも球が違うね。』

堂金『まあどっちでも良いですよ。どっちが勝とうと甲子園にいくのは俺らですから。邪魔をする奴は俺が蹴散らしますよ。軽ーくね。』

余語『たいした自信だな。』

堂金『そりゃ。チビの頃から野球やってきて今まで1度も敗戦投手になったこと無いですから。』

『6番、レフト、天宮くん。』

大場『俺がみんなを救う。絶対に打たせねえ!!』

??『翔真…。その意気だ。』

南『なあみんな、オレ、分かったかもしんねえ。』

江澤『なにが?』

南『さっき天宮が言ってたことの意味。』

江澤『だよな。あのエースにあんな顔されちゃ嫌でも気づかされる。』

話は戻すけど、南阪中学は他を寄せ付けない強さで、全国大会で圧倒的な強さで勝ち進んでいったわ。コールドゲームの無い決勝戦以外では全試合3回コールド。（3回10点差、5回7点差）』

神郷『すごいねえ。』

藤野『そのときの4番が桜沢さん。あの水仙って人が1番セカンドだった人。』

神郷『S．6って言うくらいなんだから他にもあと4人いるの？』

藤野『そうよ。彼らは全国各地の名門高校に散らばって進学していったから甲子園にいけば何人かとは対戦することになるわ。』

神郷『なんで6人なの？野球は9人ポジションにつくんだよ？残りの三人は？』

藤野『その三人のうちの二人はそこまで高レベルじゃないから騒がれていないだけ。残りの1人は高校野球から手を引いたらしいわ。確か…鬼頭っていったっけ？よく覚えてないわ。その鬼頭っていう人は実力ならS．6に全くひけをとらないくらいの実力があったらしいけど…なんで野球やめちゃったんだろう。その鬼頭っていう人

を併せて昔はS．7（エス・セブン）って言われてた。大体S．6の説明はこんなところよ。わかった?』

（ぐーぐー…。）

神郷『サヨナラ…ボーク…。』

藤野『はぁ…。……。ホントよく寝るわねぇ。』

水仙『あはは!!あっ!そろそろ静岡に帰らねえと行けねえ時間だ!!わりぃな!じゃあそろそろ帰るわ!じゃあまた甲子園でな!』

桜沢『じゃあね~!!水仙!!また会おう!』

（バン!）

『ストライーク!!バッターアウト!!』

大場『しゃあ!!』

余語『このピッチャー、さっきよりも球が違うね。』

堂金『まあどっちでも良いですよ。どっちが勝とうと甲子園にいくのは俺らですから。邪魔をする奴は俺が蹴散らしますよ。輕ーくね。』

余語『たいした自信だな。』

堂金『そりゃ。チビの頃から野球やってきて今まで1度も敗戦投手になったこと無いですから。』

『6番、レフト、天宮くん。』

大場『俺がみんなを救う。絶対に打たせねえ!!』

??『翔真…。その意気だ。』

南『なあみんな、オレ、分かったかもしんねえ。』

江澤『なにが?』

南『さっき天宮が言ってたことの意味。』

江澤『だよな。あのエースにあんな顔されちゃ嫌でも気づかされる。』

No．30：S．6（エス・シックス）の2人（後書き）

S．6は今のところ
享神の桜沢と
晟西の水仙です？

あと邦南の幽霊部員の鬼頭は実は…

残りの4人も話が進むにつれて登場していくので楽しみにしていてください？

感想とか貰えたら嬉しいです？？

Ｎｏ．３１：勝負師としての道標（前書き）

前回の話の最後らへんはすみませんでしたｍ（．＿．）ｍ

原因は自分でも全くわかりません…
投稿したあとに気づきました？

申し訳ございません…＞（＿＿）＜

Ｎｏ．３１：勝負師としての道標

『６番、レフト、天宮くん。』

天宮『俺がお前らを勝利へと導いてやる！』

南『…。頼んだぞ。』

江澤『俺らに足りなかったもの…。それはきっと…。』
南『頼れるのは己の力のみって感じかな。』
高林『そうだよな。』
江澤『俺ら、頼ってる意識はなくても、みんな長岡と健太に頼ってたんだよ。』
南『自分で蹴りをつけるって気持ち…。確かに欠けてたかな。』
高林『キャプテンはずっと感じてたのかな。』

（ブン！）
（スパーン！！）

『ストライク！！ツー！！』

天宮『何だコイツ…。序盤よりも球威が格段にましてやがる…。』

大場『あんたらとの試合、楽しかったよ。だけど勝つのは俺らだ。次で決めるよ。』
翔真はにっこりとした。

天宮『ふっ。よくこの場面でそんな笑顔見せられる余裕があるよね。』
西口『あなたたちのお陰ですよ。あなたたち野球名門校と互角にやりあえたことで試合中に僕らは何段もステップアップできた。感謝してますよ。』
天宮『感謝されたってちっとも嬉しくねえな。ははは…。』

大場『これは…。』

（ピカーッ！！）

副島『雨が…！！』
島谷涼『止んだ！！』

大場『眩しいな。太陽は。』
天宮『天もそろそろ勝者を決めようってか。』

大場『蹴散らす！！俺の力で！！』
天宮『オラ！こい！！』

大場が振りかぶる。

健太『勝負だな。』

大場『勝って次に進む権利があんのは…』

ガッ！！！！！！！！

大場『俺たちだぁっ！！』

ビュッ！！

（ズバーンッ！！！！！！！！！！！！！！）

『ストライク！！バッターアウト！！ゲームセット！！』

観客『わぁぁぁっ！！！！！！！！』

邦南	0	0	0	3
名林	7	0	2	0

0	0	5
0	3	0

1
2

希に見る壮絶な打撃戦を無名の邦南高校が愛知の名門、愛農大名林を下した。

これで邦南高校史上初の四回戦進出。

Ｎｏ．３１：勝負師としての道標（後書き）

次回からは試合後です？

やっと長かった名林戦が終わりました。。。

これからもよろしくお願いしますｍ（．＿．）ｍ

Ｎｏ．３２：託された力

試合後…

更衣室から外に出ると…

『来たぞ来たぞ！！』
『お前らつえーな！！』
『よく名林に勝ったな！』

邦南対名林戦を見ていた観客たちが邦南をたたえる。

そのとき…

『おい！大場！！』

遠くから声が聞こえた。

大場『お前は…。』

健太『よっ。』

天宮『完敗だよ。』

大場『どうしたんすか?』

天宮『これ。お前らに渡したくてよ。』

そう言って天宮が取り出したのは…

健太『千羽鶴だ。俺らの夢だった全国制覇はお前らに負けて夢になっちまったけどさ。』

天宮『これで少しでも思いを託したくてよ。お前らに。』

健太『ホントはこんなことするようなキャラじゃねえんだけどな。なんでかな、たぶんお前らと試合やって感化されちまったんかな。』

大場『お前ら…。』

天宮『貰ってくれる?』

大場『もちろんだぜ。お前らの気持ち…俺らが引き継いだ。絶対勝ち進んでやるよ。』

天宮『ありがとう。はい。』

名林の千羽鶴が邦南へ渡った。

天宮『じゃあな。お前らなら、甲子園、狙えるぞ。だってあんないいチームなんだからな。』

そう言って天宮は戻っていった。
『おい！健太！！行くぞ！』

健太『ちょっと先行ってて。オレはまだコイツに話したいことがある。』

『早くしろよ！』

大場『ど、どうしたんですか？話したいことって…？』

健太『オレのウィニングショットのフォークボール…お前もたしか決め球だったな？』
大場『あんたのには到底かなわねえけどな。』
健太『いや。お前ならオレのフォークを完全にものにできるはずだ。ちょっと今から付き合ってくれねえか？』

大場『いいっすけど…。どうせこのあと柔軟とかなんで。』

健太『俺からの気持ちだ。行くぞ。』

No．33：目撃者

その日の夕方…
小宮宅前…

西口『なあ小宮。赤崎とどうなんだよ?』
小宮『どうって…。特に進展はないよ。』

西口『正直に言えよ。』
（ガッ！）

西口が小宮の胸ぐらをつかんだ。

小宮絵梨『お…お兄ちゃん…。またあの人に…。』

小宮の妹の絵梨が家の影から二人を見ている。

小宮『な…なんなんだよ!』

西口『おめえがいなけりゃ俺とアイツは今ごろなあ…!』

（ガツッ！!）

小宮『いてて…。いったいなんなんだよ…。』

絵梨『お兄ちゃん!』

西口『！！！！！！！』
小宮『？？？？？？？』

絵梨『お兄ちゃん！』

小宮『お前…見たのか？』
絵梨『…。』

小宮『見たのか？どうなんだ？』

絵梨『…。』

小宮『見たのか！！！？！？』
絵梨『見た。お兄ちゃんがその人に殴られてるの。もう何回も見た。ねえ。何があったの…？』

小宮『…。』
西口『行くぞ。小宮。』

小宮『う…うん。』

（スタスタ…。）
小宮と西口は学校の方へ歩いていった。

『お兄ちゃん！お兄ちゃん！』

小宮（ごめんな…。絵梨。兄貴はこの人がいる限り、従うしかないんだ。）

（ガチャガチャ！！）

（バタンッ！）

その日、小宮はまた部室に閉じ込められた。

夜１０時…

絵梨『お兄ちゃん…。やっぱりおかしい！！探さなきゃ！！』

絵梨は邦南高校に向かった。

学校の回りは柵で入ることができないが、一ヶ所だけその柵が破れているところがある。普通の人なら入れる大きさではないが、中学生の女の子で、比較的からだの小さい絵梨は入れてしまう。探検好きの絵梨はこのルートを知っていた。

そして誰もいない暗い学校の野球部の部室の前にたどり着いた。
部室の鍵はしまっていたが、絵梨は探検セットの中にある細い鉄の棒を取り出した。

（ガチャガチャ！！ガッチャ！！）

鍵が開いた。
『お兄ちゃん！』

絵梨は小さな部室のなかで大声で叫ぶ。

『お兄ちゃん！』

しかし、返事がない。
慌てて部室の電気をつける。

『お…お兄ちゃん？』
部屋には誰もいなかった。
絵梨は不思議に思いつつも、家に帰っていった。

Ｎｏ．３４：来るべき時（前書き）

今日も野球の話はあんま出てこないです…

Ｎｏ．３４：来るべき時

絵梨が家に帰ると小宮はすでに帰っていた。

絵梨は兄である哲都にたくさん言いたいことがあった。なぜなら心配だったから。

お母さんもお父さんもいない。そんな中でも自分を毎日育ててくれていた。

だから兄の存在は偉大だった。

しかし絵梨は帰宅しても兄と話さなかった。

自分では兄の気持ちを感じとるだけで恐らくこの問題は解決しないだろうと思った。

自分では…

次の日…地元の新聞紙…

『邦南、名林との雨中の激戦制し４回戦へ！！』

邦南は地元の名門、名林を破ったことによって有名になった。
その勢いのまま4回戦の志同館(しどうかん)高校を破り5回戦進出。これでベスト16。

小宮は怪我が明らかに悪化しており試合にはでなかったが、8－0の7回コールドで勝利した。

その日夕方、場所はまた野球部の部室。

絵梨『また入ってった…。お兄ちゃん…。』

そのとき…

『お前は下がってろ。俺がかたをつける。』

絵梨の後ろから声が聞こえた。
その声の主は…

絵梨『翔真くん!!』

大場『兄貴にお前の存在がバレたらだめだろう。さっさとここから離れろ。お前も思うようにこれはかなり大きな問題だ。上級生の俺が行くしかない。この事を知ってるのも当事者のアイツらと俺とお前だ。事がでかくなる前に片付けなけりゃいけない。』

絵梨は嬉しかった。自分1人ではどうにもならないことは分かっていた。

『お願いします。お兄ちゃんを助けてください…。』

大場『おう。じゃあ俺、行ってくるわ。』

そう言って大場は野球部の部室へと向かった。

（ガチャっ！！）

『観念しやがれぇっ！！！！！！！！！！！』

大場の怒号と化した声がグラウンド中に響きわたった。

Ｎｏ．３４：来るべき時（後書き）

翔真と絵梨が知り合いというのは昔からよく遊んでいたなかだからです？

次回で遂に事件発覚する予定です！！

Ｎｏ．３５：憎しみの矛先（前書き）

サブタイトルがなんとも思い付かなくて…

Ｎｏ．３５：憎しみの矛先

『観念しろ。お前の行動はすべて把握している。』

小宮『うぐ…。翔真…くん…。』

大場『小宮…おとなしく座ってろ。お前らの関係は大体把握しているぞ。一応聞く。何があった?』

西口『別に。ただの気晴らしですよ。』

小宮『…。』

西口『聞きたいことがそれだけだったら俺帰るんで。気分わりぃし。』

そう言って西口は大場を横切って部室を出ようとした。

（ガシッ！！）

筋肉質の大場が西口の太い腕をつかんだ。

西口『なんすか?離してくださいよ。先輩。』

（グイッ!!バシンッ!!）

大場が西口をそのままなぎ倒した。

西口『…!!ってえな!!なにしやがんだ!!あぁ!?』

大場『正直に言え。なにが原因だ?まあ大体予想はつくがな。』

小宮『…。』

西口『あんたに予想なんかつくかよ。まあいい。言ってみなよ。』

大場『ホントにいいのか?』

西口『あぁ。イイッスよ。俺の気持ちがわかるならね。』

大場『赤崎明日翔。』

西口『あ?』

小宮『明日翔がどうしたんですか…?』

大場『おまえ…自分で気づいてねえのか?俺でもしってんのに。』

西口『黙れ!!!!!!!その女の名を出すな!!!!!!!!』

小宮『!?』

大場『黙らねえよ。なにがあったんだ?』

小宮『え…?西口くんが俺のことをいじめてたのは明日翔が関係してるの?』

西口『おまえ。知っててていってるんだよな?殺すぞ。マジで。』

大場『小宮…。理由…わからないのか…?』

小宮『当たり前です!いつの日からか西口くんが俺のことを…。』

西口『誰がおまえのことをいじめるかよ。』

大場『とぼけるなよ?俺は知ってんだぞ。おい小宮、言ってやれ。』

小宮『…。』

西口が小宮を凝視している。

大場『小宮、どうなんだ。答えろよ。』

西口『…。』

小宮『…。……。なにもされてないです…。西口くんは大切なともだち…』

『違うよお兄ちゃん!!!!こんな人のいいなりになっちゃダメだよ!!!!!』

西口『!?』

大場『まったく。結局出てきちゃうのかよ。』

小宮『絵梨!!なんでここにいるんだ!?』

絵梨『お兄ちゃん!!もうやめよ!!ここでこの人と蹴りをつけようよ!!!!』

西口『おまえ…。もしかして小宮の妹か…?いつの間に退院してたんだ?』

絵梨『なんでうちのこと…。』

西口『この俺を忘れたか?まあしょうがねえよな。もう8年たったもんな。あの頃から。』

絵梨『…!まさか…!!』

西口『昔お前の病気が発覚する前、毎日のように遊んでた。あの頃はまだ俺も8歳だったから大分顔も変わっちまったけどな。』

絵梨『タク…?』

西口『そうだ。いつ治ったんだ?心臓病。』

絵梨『幼稚園の年長組から入院して中学1年の最初に退院したの。』

西口『そうか。大きくなったな。』

絵梨『なんで？なんでお兄ちゃんのことそんなにいじめるの？昔っから三人でよく遊んだじゃん！お兄ちゃんとタクは親友だったじゃん！こんなの絶対におかしいよ！』

西口『…。俺は小宮をいじめてなんかいない。』

絵梨『答えてよ！！！！！！！！！！！！！！！ウチが聞きたいのはそんな嘘なんかじゃない！！！！！！！！！！！！！タクとお兄ちゃんにまた仲良くなってもらいたいの！！お兄ちゃんにはもっと元気でいてほしいの！！！！！！！だから…だから答えてよ！！！！！！』

西口『俺は言えない。この場に小宮がいる限りこの事を言うことはダメだ。悪いな。俺には約束がある。まあ強制的に嫌々結ばされたんだけどな。』

絵梨『何よ！？そんなのただの言い訳じゃん！！！！！』

大場『落ち着け！絵梨！』

絵梨『翔真くんは黙っててよ！！！ウチ、知ってるんだもん！昔の純粋だったタクのこと！！！！お兄ちゃんと楽しそうに野球やってたタクのこと、知ってるんだもん！！！！！』

西口『俺は変わっちまった。あの女に惚れたせいで俺は…俺は…もう俺じゃないんだよ。あの女が憎くて、たまらなくて…小宮自身には何の恨みもない…。なぜならさっきのやり取りで分かった…。』

大場『何をだ？』

小宮『？』

西口『お前は…赤崎の裏を知らねえ…。アイツは俺らの人生もてあそんでるだけなんだ…。』

小宮『…明日翔が？』
大場『やっぱりあの女が絡んでたか。』
絵梨『なにが言いたいの…？』

西口『…。お前らにだけ真実を話してやる。ただし小宮…これは聞いておいた方がいい情報だが、彼氏のお前は相当のショックをうけるぞ。それでもいいのか？』

小宮『…。……。うん…。』
小宮は数秒間考えたが、首を縦に振った。好奇心が小宮の決断を下した。

西口『俺は小宮が赤崎と付き合う前、アイツと付き合ってた。しかし赤崎は…』

『それ以上喋んないで！！』

美声が聞こえた。

その場に立っていたのは…

大場『！！！！！！』

西口『お前は…。』

小宮『明日翔…。』

赤崎『拓磨。あんた、言わなかったっけ？あたしたちの過去を他人にばらすなって。』

普段は美人なはずの赤崎の顔は相当苛立っていて崩壊しかけている。

西口『…。言った。』

赤崎『まあいいわ。アンタじゃいずれ言うって分かってたから。』

小宮『明日翔？西口くんとどういう関係なの？』

赤崎『別に今はたいした関係じゃないわよ。ただ、アタシはこいつの元カレ。まあ別に愛してなかったし、今の彼氏も正直なところ遊んでただけだし。』

小宮『は…？』

絵梨『誰なの？この人？』

大場『おまえの兄貴の彼女さんだ。』

赤崎『はあ。物分かりの遅いやつね。つまりアタシは別にあんたなんか好きでもなんでもなかったってことよ！』

小宮『え…。』

Ｎｏ．３５：憎しみの矛先（後書き）

感想等もらえると嬉しいです？

Ｎｏ．３６：赤崎明日翔という女（前書き）

一応…
ＲＲ…右投げ右打ち
ＲＬ…右投げ左打ち
ＲＢ…右投げ両打ち
ＬＲ…左投げ右打ち
ＬＬ…左投げ左打ち
ＬＢ…左投げ両打ち

Ｎｏ．３６：赤崎明日翔という女

赤崎『あなたを愛したことなんて一度もなかった。それが真実よ。』

小宮『明日翔？突然なに言ってんの？』

赤崎『だから…アタシはあんたなんか好きになった覚えは無いって言ってんのよ！』

小宮『…！？嘘だ。』

赤崎『嘘なんかじゃない。これがあなたの彼女の真実なのよ。』

西口『俺もこいつと付き合ってた頃…突然フラれた。そのとき理由はよくわからなかった。だけどそのあと気付いた。こいつが俺を振った理由は、小宮のことが好きだから。ってね。だからこそ小宮が憎かった。赤崎は好きだったから到底憎めなかった。小宮が俺らが付き合ってたことを知らなかったなんて思わなかった。知ってた上でオッケーしたのかと思ってた。けど違った。この女の真実を知ったのもちょっと前さ。ごめんな小宮。殴ったのも、全部勘違いから始まった。悪いのは全部赤崎…。さっき小宮が理由を知らないと分かったとき…素直にそう思えた。謝っても許されない事をしたのは分かってる。だからこそ小宮…いや、哲都にはこれからの人生…思いっきり生きてほしいと思う。それが今の俺の願いだ。だからこの野球部…いや、学校は辞める。大会期間中はメンバー変更ができな

いから休部するだけだけど…。今までありがとう。そしてすみませんでした。全て僕の勘違い。それがわかりました。さようなら。』

そう言って西口は去っていった。
その目は微かにだが光っていた。

赤崎『アンタとは別れるしかないようね。じゃあね。おバカさん。じゃあアタシもあの子を見習ってこの野球部からは手を引くわ。じゃあね～。』

赤崎も不気味な笑顔のまま去っていった。

小宮『う、う…。』
小宮は泣いている。

大場『小宮。歩けるか?』

小宮『う…。』

大場『よし。じゃあ俺の背中に乗れ。良かったじゃないか。いずれわかることが、今わかってさ。お前は憎いのか?あの二人のこと。』

小宮『…。憎いです…。』

二人と絵梨は帰っていった。
次の日は5回戦、大峰明館高校。今年で創立4年目を迎えた新設校だ。
ここまで、くじ運が非常によく普通の公立高校と接戦の試合をものにしてきた高校だ。正直なところあまり強いとは言えない。
しかしこちらは4番捕手の西口が抜けた。まだどう転ぶかは分からない。

そして次の日…

『おい小宮!どうしたんだ!?その松葉杖…。』
『ははは…。3回戦で怪我したところちょっとドジっちゃって…。』
ちなみに松葉杖になったのは西口の暴行のせいである。
というか、いい遅れたが、小宮が怪我のため離脱しました。

『はあああああ!?!?!?』

先攻・大峰明館高校
1：P：谷　：LL
2：1B：園田　：LL
3：RF：宮池　：RL
4：3B：高橋　：RR
5：SS：太田　：RL
6：C：土佐　：RR
7：2B：筧　：RR
8：LF：仲沢　：LL

9：CF：佐々木：RL

後攻・邦南高校
1：C：副島　：RL
2：CF：慶野　：RL
3：P：大場　：LL
4：3B：松坂　：RR
5：SS：島谷倫：RR
6：RF：氷室　：RR
7：LF：木村　：RR
8：1B：藤武　：RR
9：2B：島谷涼：RR

『プレイボール！！！！！』

Ｎｏ．３７：必至の投手戦

副島『相手のピッチャー、背番号２０か。どうやら主戦格らしいね。』

大場『ああ。アイツは去年まではエースだった谷だ。それまではオーバースローだったのに投球練習を見る限りサイドスローにしたみたいだな。』

松坂『たのむぜ。新一番。』

松坂が副島の肩に手をかける。

副島『そーいえば小宮と西口抜きで戦うのも初めてなんだな。』

大場『だな。まああいつらが来る前に戻ったって考えればやりやすいじゃん。とにかく勝つぞ。まずは表を抑えていこう！』

『１回の表、大峰明館高校の攻撃は、１番、ピッチャー、谷くん。』

『さあ始まりました！！創立４年目で初の５回戦進出の大峰明館高校　対　邦南高校の注目の対決。邦南高校も創立以来初の５回戦進出と勢いに乗っています！！』

大会も５回戦ということもあって遂に実況がついている。テレビでも放映されているようだ。

谷『さあ、お手並み拝見と行きますか。この前までの試合で４番打ってた西口くんは欠席か…。対戦を唯一楽しみにしてただけに残念だな。』

副島（キャッチャー）『そうですか。でも今のウチを侮らない方がいいですよ。今までの試合でみんな自信をつけてきましたから。』

『さあピッチャーの大場、振りかぶって第１球投げる！！』

（スパン！！）

『ストライーク！！！！』

谷『いいボールだね。アウトローいっぱい。』

副島『黙ってもらっててていいですか？真剣勝負に私語は必要ない。』

谷『よくいうね。じゃあバットで語るとするか。』

谷が独特のオープンスタンスで構える。

２球目…

ビュッ！！

谷（さっきと同じ軌道！今度は打たせてもらう！！）

（ブン！ズバーン！！！！！）

『ストライク！！ツー！』

谷（空振った！？タイミングは完璧だったはず…。）

副島（ふっ。今日の翔真のボールを打つのは相当厳しいぞ。なんたって翔真は…。）

ビュッ！！

（ズバーンっ！！！！！！）

『ストライク！！バッターアウト！！！！』

副島（今日は小宮も西口もいない。だからこそ自分がこの試合自分がどうにかしなければいけないという思いが強い。そのときのアイツを打つのは困難だ。この前の名林戦の９回ノーアウト満塁からのリリーフのときのようにな。）

谷（くそっ…。この試合、俺が抑えるしかない…。）

（ドバンッ！！！！！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

（ドバンッ！！！！！！）

『ストライク!!バッターアウト!!』

大場『しゃあああああ!!!!!!!』

『三振!!!3番の宮池(みやいけ)も三振で1番の谷(たに)、2番園田(そのだ)、3番の宮池と三者連続三振に撃ち取らりました!!愛知県屈指の進学校、邦南高校のエース、大場翔真!!!!!!』

『1回の裏、邦南高校の攻撃は、1番、キャッチャー、副島くん。』

副島（左のサイドハンドか…。今大会初登板のやつだしこっちもお手並み拝見ってところだな。）

初球…

セットから谷が投げる。

ビュッ!!

副島『ぐっ！！』

（ズバン！）

『ストライク！！』

副島（初球からインコースのまっすぐ？球の出どころが見えにくい変則的なフォームから制球力にも長けてるか。この打席は粘って相手の手の内を読ませてもらうか。）

２球目…

ビュッ！！

（ズバン！）

『ストライク！！ツー！！』

副島『２球続けてインコースのまっすぐ…。ちくしょう。もう追い込まれちまった。』

３球目…

ビュッ！！

副島（またストレート！！カットで逃げるしかないっ！！）

（ブン！ズバーン！！！！！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

副島『今のもストレート。今までとは球の威力が違かった…。』

副島が場内球速表示を見る。（ちなみに5回戦から球場がかわってスピードガン導入。）

そこに表示されていたのは…

≪　１４８ｋｍ／ｈ　≫

副島『１４８ｋｍ／ｈ…！？左のサイドハンドでこの球速…』

続く2番の慶野も三振。

『3番、ピッチャー、大場くん。』

初球…

（ククッ！！！！）

（スパーん！！！！）

『ストライク！！』

大場（今までは思いっきり直球で押してきたのに俺には初球から緩いスライダーか。）

2球目…

（スパン！！！！）

『ストライク！！ツー！！』

大場（インコースか。しかしよくも左打者のインコースにその角度からバシバシストライク入れてくるよな…。）

3球目…

ビュッ！！

（ククッ！！）

大場（スライダー！見逃せばギリギリボールだ！！！！）

（スパンっ！！）

大場（これでツーワンか…。）

『ストライク!!バッターアウト!!チェンジ!!』

大場（えっ!?今のが!?）

谷『よくボール見ておけばわかると思うけど、ベースの端っこかすってんだよね。うはっ。』

大場（制球力…球威…共に抜群か…。これは厄介な相手だ…。長期戦は覚悟しておかないとな…。）

両チームエース共に初回を三者連続３球三振に抑え、二回の攻防へ…!!!!!

Ｎｏ．３８：酷い守備力（前書き）

今回は長いです??
あと新キャラとか出てきます?

Ｎｏ．３８：酷い守備力

試合は両投手共に三振の山を築き、３回裏が終了。両チームとも未だヒットは０。

邦南の大場は３イニング打者９人を投げ被安打０、奪三振８、無四球の好投。

対する大峰明館の背番号２０、左のサイドハンドの谷は３イニング全打者奪三振（９個）の投球。

バックネット裏…

『いやぁ。楽しみな対決だなあ。推定偏差値７４の進学校の邦南がここまで来るなんて。俺んち邦南高校のすぐそばだから応援したくなるねえ。地元だし。』

こんなところで独り言を呟くおじさんの名前は、野中（のなか）　栄嗣（えいじ）。

邦南高校の近くにすんでいるおじちゃんだ。

毎年夏は邦南の試合を見に来ている。

今年はまさかの１６強ということもあって非常にテンションが上がっている。

野中『でもいまのところすごい投手戦だよね。ケイさん。』

今日は仕事場で知り合った高校野球ファンの友達、川越（かわごえ）　啓造（けいぞう）とこの試合を見に来ている。

ちなみに川越の出身高校は享神だ。

もちろん野球部に入っていて、享神が３０年前に甲子園初出場で優勝したときエースで４番だった。

『４回の表、大峰明館高校の攻撃は、１番、ピッチャー、谷くん。』

川越『これはなにか企んどるよ。長年の勘だがね。』

野中『だろうか。』

初球…

（スッ…）

大場『！！！！』

川越『やっぱりね。』

（コン！！）

副島『くそっ！！セーフティーか！！サード！！！』

松坂『あいよ！！！！』

（パシッ！！ヒュッ！！）

藤武『んあっ！！！！』

松坂『やべっ！』

松坂の送球はショートバウンドになった。

一塁守備が上手くない藤武はそれを後逸した。

川越『あーあーあー！！！！やっちゃったよ…。焦ってあんな送球するから。ファーストの子もあれくらいとってあげなよ。』

野中『去年もあのピッチャーの子が1年生エースでね。だけど内野の守備の乱れで４－３で敗北したよ。去年と同じ感じだな。今のは。相変わらず守備の安定しないチームだ。』

川越『去年は何失策したんだ？』

野中『たしか…8個かな？』

川越『ははは。それでよく4失点で抑えたな。あのピッチャーくんは。』

野中『邦南が取った3点は全て大場くんの打点だしな。』

川越『しかしあの大場ってピッチャー、昔の俺に似てる気がするな。』

野中『知らんよ。そんなの。』

『2番、ファースト、園田くん。』

大場（無死二塁か。先制点を渡すわけにもいかねえし、結構ピンチだな。ウチの守備力の低さはこれまでの試合の失策数で証明済みだしな。（ちなみにこれまでの4試合…28イニングで12個の失策）

（コン！！）

『さあ2番の園田、いいバントだ。今度も三塁手に捕らせるうまいバント！三塁手の松坂、今度は丁寧にさばいていきま…！？』

『あーぁっと！！一塁ベースカバーの二塁手が遅れた！！サードの松坂、一度ためて投げる！！しかし間に合わない！！！セーフ！！邦南高校、二塁手のベースカバーミスでこれで無死一三塁のピンチです！！！！！』

川越『ったく…。見てて酷い守備だね。今のも頭使って守備してれ

ばバントの予想だって簡単につくだろうに。』

野中『投手力はほぼ互角。打力は邦南の方が若干上だが、守備力は天地の差で大峰明館が上手いな。』

大場（去年の二の舞になってたまるか。去年も味方の守備に足引っ張られた。だけど俺が気持ち切れなければ勝てたはずだった。今年は小宮や西口がいたから守備力も向上したし、なんといっても打線が増した。だけど今日は違う。俺がこいつらを勝利へと導くんだ！）

川越『ふーん。おれこのピッチャー気に入った。』

野中『なぜだ？』

川越『この大場ってピッチャー、昔の俺に似てるってのもあるんだけど、どんなに味方に足引っ張られても動じない心。俺がどうにかしてやるんだ！！って気持ちがここまで熱く伝わってくるからな。』

野中『やっぱお前連れてきて正解だったな。大場のいいところにもうきづいちまうんだからな。』

川越『当たり前だろ。俺を誰だと思ってる？ははは っ。』

大場（まだ点をとられた訳じゃない。三振とってワンナウト一三塁になればこっちのもんだ。）

（ズバン！！！）

『ストライク！！ワン！！！』

《１４４ｋｍ／ｈ》

吉松（大峰明館監督）（外すつもりは無さそうだな。次でスクイズ行くか。）

大場（スクイズの可能性もある。ここは１球様子を見た方がいい。）
大場は首を振ってウエストのサインが来るのを待つ。

副島（ん…。そうか。スクイズもあるのか。ここは１球はずすか。）

大場がセットポジションにつく。
そして足をあげた。

大場は左投手なのでランナーは大場が足をあげた瞬間にスタートを切る。

しかし…
副島（やっぱりスクイズだったか！！よしこれで三塁ランナーは！）

バッターはバットに当てることはできなかった。
大場（よし！！）

しかし…。

（バスッ！！）

副島『うわっ！！！』

キャッチャーの副島はボールを完全に捕球する前に三塁ランナーの方へ目がいってしまったので大場のボールを弾いてしまった。

『ランナー突っ込め！！！！！』

ホームは悠々セーフ。
まずは大峰明館が副島のパスボールで先制。

『サード行ったぞ！！！！！』

スクイズの際、スタートを切っていた一塁ランナーはパスボールの際に一気に三塁を伺おうとする。

副島『暴走だ！！！』

副島が三塁へ送球。
ランナーは二三塁間で挟まれた。

だがなかなかアウトにできない。
そう、当然ながら挟殺の練習などしていないからだ。

川越『あらららららら…。小学生の球遊びじゃないんだから。』

そして…
二塁手の島谷涼が挟殺プレーで偽投を入れてしまった。三塁手の松坂もボールが来ると思ったのに来ない。少しひるんだ。そのとき島谷涼が三塁へ送球。
一瞬ひるんだ松坂はコレを捕球できずに後逸。
三塁手のカバーもいないなんとも間抜けな邦南はこのランナーもホームに還してしまった。

大場（…。先制点だけはやっちゃいけなかったのに…。しかも2点かよ…。あのピッチャーから2点は相当厳しいよ…。）

大場はスクイズのサインも読んでいただけに呆然としている。

川越『かわいそうにね。彼ならもっと強豪校でやってれば甲子園も夢じゃなかったはずだろうに。』

大場（くそっ…。）
（ビュッ！！）

大場（やば！ど真ん中！！）

（カキーン！！！）

打球はセンターの慶野へ。
慶野はこちらむきだ。
大場（ふう。文哉なら安心だ。）
大場はマウンドを降りようとした。

しかし

慶野『あれっ…ボールは！？』

センターの慶野は眩しく照りつける太陽を背景にボールを見失った。

大場も慶野の異変に気づく。

そして…

（ポトン！！）

『センターまでもが後逸した！！！！バッターランナーの宮池はもう二塁を蹴る！！！早いぞ！！！レフトの木村くんがようやくカバーするがどうだ！？バッターランナーは三塁を回った回った！！！！木村から内野にボールが返ってくるもホームはセーフ！！宮池がダイヤモンドを一周してきた！！これでこの回３点目！！』

大場『文哉…。お前もか…。』

川越『これで決まったね。3点目を献上しちゃったし。この試合、邦南が勝つ可能性は限りなく無に等しいね。』

邦南!!早くも大ピンチ!!どうなる!?5回戦!!!

Ｎｏ．３８：酷い守備力（後書き）

感想もらえると嬉しいです（＾ｏ＾）

Ｎｏ．３９：エラーの連鎖（前書き）

今日も長めです？

Ｎｏ．３９：エラーの連鎖

結局４回の表は邦南のエース大場が４、５、６番を三者連続三振に討ち取りスリーアウト。
これで４回までで１１奪三振。
しかし味方のエラーで３点をこの回失った。
大場は完全に孤立無援だ。

『４回の裏、邦南高校の攻撃は、１番、キャッチャー、副島くん。』
打席には先制のパスボールを献上してしまったキャプテンの副島。
副島『くそ…。』

副島は去年の敗戦を思い出していた。
副島達（今の三年生）が１年生だった頃は部員不足で夏の大会には出場できなかった。
そして去年、大場と慶野が入って部員がちょうど９人になり、夏の大会を経験した。

副島が２年生だったときは、キャッチャーはひとつ上の先輩がやっていたので、副島は捕手ではなく二塁手だった。

回想シーン←←

『1回の裏、港西(こうせい)高校の攻撃は、1番、ショート、高橋くん。』

（カキーン！！）

打球はセカンドの副島へ。

しかし…

『あぁーっ！！！！！』

副島は初回の先頭打者の打球をトンネルしてしまう。

その後も失策や四球が絡み、この回ノーヒットで2点を先制される。

しかし大場の二打席連続のホームランで同点にする。

その後、港西はまたもエラー絡みで1点を追加。対する邦南も二死一塁から大場のタイムリースリーベースでまた同点にする。

が、9回の裏…

一死一二塁。

ゲッツーがでればチェンジの場面。

（カキーン！！）

打球はサードの島谷へ（島谷倫）。

注文通りのダブルプレイコース。

しかし

（バスッ！！）

サードの島谷は弾いてしまってアウト捕れず。これで一死満塁。

バッターは3番の川口。

港西高校で1番の好打者を迎えるが、大場はなんとか三振に撃ち取る。

『4番、キャッチャー、安藤くん。』

（カキーン！！カキーン！！カキーン！！）

追い込んでからもファールで粘る安藤。

絶対に勝つ！！という強い気持ちでいたが…

（カキーン！！）

打球はファーストファールフライ。

安藤が打ち損じてしまった。

ファーストの松坂が手をあげる。
だれもがスリーアウトだと思った。
だがあなたが思う通り…

『うわっ！！』

松坂は落下地点にうまく入れずばんざいしてしまいチェンジならず。
このプレイで大場の集中力が切れてしまった。
無理もない。この試合、自分がずっとマウンドを守ってきて何個アウトを損したことか。今のも疲労感たっぷりの自分に対し元気一杯の４番バッターにかなり手こずっていた。しかし打ち損じてくれた。ラッキーだった。だがアウトを野手がとってくれない。
普通のピッチャーならこれまでに何度崩れてもおかしくなかったはずだ。
それを我慢して未だ３失点の投球。

しかしこの一年坊には限界だった。
顔には出さなくとも、これじゃあ勝つチームの試合じゃないと思った。
負けてもいいと思った。

そして次の１球…

（バン！！！！）

『ボール！！フォアボール！！』

投げた瞬間明らかにわかるボール球だった。

三塁ランナーがホームベースを踏む。

『ゲームセット！！！！！！』

邦南はこの試合、打たれたヒットはわずかに2。
一方の邦南は大場の４本。
大場は４打数４安打２本塁打３打点。
ちなみに邦南の失策は８。

回想シーン終わり→→

（バン！！）

『ストライク！！バッターアウト！！！』

『見逃し三振！！！！！これで大峰明館の谷くん！！！１０者連続！！！！！』

『2番、センター、慶野くん。』

…

（バン！！）

『ストライク！！バッターアウト！！』

『空振り三振だ！！これで１１者連続！！』

『3番、ピッチャー、大場くん。』

大場『まだ４回だ…。負けるわけねえ！！』

（カキーン！！）

『打ったぁ！！！痛烈な打球は右中間へ！！！打った大場は三塁へ向かう！！！！余裕のスリーベース！！！！！このヒットが邦南の初ヒット！！』

しかし…

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！！！』

『４番の松坂くんも三振でスリーアウト！！！邦南！！！一点もとれず！！！』

大場『まだ…まだ…。…。』

…試合は両投手の好投でテンポよく進み、七回の表、大峰明館の攻撃。
点数は未だ３－０で大峰明館がリード。

『７回の表、大峰明館高校の攻撃は、４番、サード、高橋くん。』

カキーン！！

『抜けた！！！大峰明館の４番高橋、三遊間を抜けるレフト前ヒット！！これで無死一塁！！』

『５番、ショート、太田くん。』

（コン！！）

『打球をうまく殺した！！いいバントだ！！ピッチャーの大場が丁寧に処理してこれで一死二塁！！』

『６番、キャッチャー、土佐くん。』

カン！！！！

『打ち上げたー！！！しかしこれはライトの氷室手をあげる。アウ

ト！！！おっとしかし二塁ランナーの高橋はこの際にタッチアップしてこれで二死三塁！！！！！』

『7番、セカンド、筧（かけい）くん。』

大場（このピンチを抑えればまだまだ十分勝てる。3点差ならまだまだワンチャンスで勝てる。今やっちゃいけないのは…）

『三塁ランナーをホームへ還すこと。』

初球…

ビュッ！！

（ズバン！！！！！！！！）

『ストライク！！！！！！！』

≪　147km／h　≫

筧（速いな…。こりゃバット短くシャープに打っていかなきゃあたんねえな。）

筧がバットを拳一つ分短く持った。

野中『ここにきて今日最速…。しかも自己ベスト更新か。やっぱこの子はすごいよ。』

川越『間違いねえな。俺の知り合いにスカウトがいる。そいつにコイツをマークしとくように言っておくかな。俺のお気に入りってことでな。』

野中『へー。ケイさんの知り合いにスカウトがおるんやな。ちなみにどこのチームの？』

川越『難波ライオンズや。ちょっと遠いけどな。』

『ストライク！！ツー！！』

≪　１４６ｋｍ／ｈ　≫

川越『くーっ、いい球だな！こんなチームにこのピッチャーはもったいねえな！！』

大場『よし…。追い込んだ。次はこのボール。』
大場がフォークの握りを試す。
この試合では旧フォークは使ったがまだ下村健太直伝の新球・下村フォークは使っていない。
なぜならまだ握力が下村健太レベルではないので多投は終盤に影響するからである。

大場『出し惜しみしてる場合じゃねえ。ここは一気に3球勝負で片付ける。』

大場が投球モーションにはいる。

ビュッ!!
シュルシュル!

大場『なっ!!なんで!?』

筧『絶好球!!』

（カキーン!!!!!!）

痛烈な打球だが打球は三塁松坂の正面。

しかし

『トンネルだぁ！！！！！！！大峰明館に追加点が入った！！！！！！
これで４点差！！大きな大きな一点が入りました！！！！！！』

松坂『…わりぃ…。翔真。』

大場『お…おう…。気に…すんなよ…。』

≪　１２１ｋｍ／ｈ　≫

野中『今のは変化球かい？あまり曲がっているようには見えなかったけど。』

川越『今のは抜け球だろうね。まったくこんな場面で。大場くんがあんな精度の悪いボールを投げるわけないし。』

野中『だが４点目を取られちゃったね。』

川越『かわいそうだがこの大会でこの子を見るのは最後になりそうだ。』

野中『意義なしだが…このイニングで終わるのは勘弁だな。』

川越『考えてることは同じだな。栄嗣。俺もコールドにならないか心配してたところだ。』

野中『またエラーでの失策。ピッチャーの気分も最悪だろう。しかも今の投球、俺は確実に何か試しているように見えた。この場面で

試すくらいだ。きっと賭けたんだろう。だがそれは失敗に終わった。』

川越『ピッチャー心理的にもう限界だ。とっくに集中力は切れているだろう。この回、まだまだ終わらないだろうな。』

（ズッバーッン！！！！！！）

≪　１４９ｋｍ／ｈ　≫

川越『怪物か…！？なんなんだこの精神力は…！？もはや高校レベルじゃない！！この場面でこの日出した自己最速を２？も更新するだと！？』

野中『去年から成長したね。俺はわかる。』

（ズッバーッン！！！！！！！！！）

『ストライク！！ツー！！！』

≪　１４９ｋｍ／ｈ　≫

（ズッバーッン！！！！！！！！！）

《１４９ｋｍ／ｈ》

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！』

『大場が3球連続の１４９ｋｍ／ｈで8番仲沢を三振にきってとりました！！しかしこの回大峰明館は邦南のエラーでさらに一点を追加しこれで４－０！！』

『7回の裏、邦南高校の攻撃は、2番、センター、慶野くん。』

慶野『ごめんな。翔真。またおれらが足引っ張っちまって。』

大場『謝ってもとられた点は返ってこない。まだまだ４点差。決して諦める点差じゃない。とりあえず塁に出てくれ。あとは俺がどうにかする。』

慶野『相変わらず。強いやつだ。』

大場『良いからでろよ！！』

慶野『任せろって。』

『大峰明館の先発、谷は今までと6回をなげて被安打1無四球の１６奪三振の好投を見せています！！』

初球…
（バン！！）

『ストライク！！』
慶野（くそっ…。俺の打力じゃとても対応できるボールの速さ、キレじゃねえ。）

2球目

慶野『俺の打力の話だけどな！』

（ポン！！）

『プッシュバントだ！！ピッチャーとファーストの間を狙ってきた！！！！』
谷『くそっ！！取れねえ！！』

『抜けた！！これで2番慶野の内野安打でノーアウトランナー一塁です！！邦南高校、ここにきて今日初めて先頭打者が塁に出ました！！』

『3番、ピッチャー、大場くん。』

ビュッ！！ゴウッ！！

（カッキーンッッ！！！！！）

谷『あの高めの、クソボールを…』

（ボサッ！！！）

『入ったーっ！！！！！3番の大場のツーランホームラン！！！これで2点を返して4－2！！邦南高校が反撃ののろしをあげた！！！』

？？『勝てるぞ…。頑張れよ。お前ら。』

邦南高校の制服を来た青年が、ランニングを始めた。

Ｎｏ．３９：エラーの連鎖（後書き）

感想くださいｍ（．＿．）ｍ
読んでくださった方、お願いします？

Ｎｏ．４０：やっちまった…

７回の裏に大場の２ランホームランで２点を返した邦南は後続がまた抑えられスリーアウト。

『８回の表、大峰明館高校の攻撃は、７番、セカンド、筧（かけい）くん。』

大場『はあ…。はあ…。はあ…。…。』

副島（翔真はもう１３０球を越えてきてる。そろそろ疲れも表に出てくるはずだ…。だからこの回は変化球中心の攻めで体力温存するぞ。）

筧（今まで相当飛ばしてきたからさすがにまだまだ直球中心はキツいだろ。じきに変化球の割合が増えてくるはずだ。）

初球…

ビュッ！！ガクッ！！

筧（フォークだ！！曲がりがはやい！！！！！打てる！！！！！）

副島（うがっ！！！）

（カキーンっ！！！！！）

『先頭打者の筧が捕らえた打球はセンターへ！！！！二点リードの大峰明館、先頭バッターが出塁です！！！！！』

副島（今のフォーク、明らかにキレが悪かった。これも疲れからか…？）

大場（…いける。さっきはダメだったけど、今の手の感覚ならいける気がする。まだまだ疲れてなんかいねえ。）

『8番、レフト、仲沢くん。』

仲沢がバントの構えをする。

川越『手堅いな…。』

野中『まあ当然っちゃ当然だろ。守備の安定しない邦南から一点をとるより堅守の大峰明館から一点をとる方が遥かに難しい。』

川越『大峰明館も打撃があまりよくない分取れるところでとらなきゃ苦しくなる可能性だってあるしな。』

野中『ただ。一つだけ懸念がある。』

川越『……。いつバテるかだな。残念だが。』

野中『球数なら十分根性でなんとかなる状況だが…』

川越『球数以外での消耗量が半端無さすぎる。』
野中『味方の大量失策。それだけじゃないな。』
川越『打撃の時も休んでないしな。』
野中『普通ピッチャーは自分の打席以外の時は座って体力回復に当てるんだが、あいつはこの試合ベンチの最前列に立ってずっと大声で味方に声援送ってるからな。』

川越『ったく。見ててこっちが心配しちまうよ。』

大場『バントなんかやらせてたまるか。ここはぜってえさせねえ！』

初球…
ズバン！！！！

アウトローに見事に決まった直球。

2球目…

大場『ここで使う。副島先輩、頼みました。』
副島（おう。）

副島が下村フォークのサインを出す。

セットポジションから大場が投げる。

大場（身体脱力（リラックス）、決して力まずに、しなやかな腕の振りで、最後の最後…）

『指先（ここ）だ！！！！！！！！！！！！！』

ビュウッン！！！！！！！

仲沢（ストライク！！送らせてもらう！！！！！）

カクッッッアッ！！！！！！！

仲沢（なっ！！）

副島（よしっ！！！！！！！）

バン！！！！！

ボールがワンバンする。

仲沢はバントを空振りした。

そしてボールはホームベースの1番後ろのとんがったところに当たった。

バウンドが変わった。
ゴロバウンドになった。

キャッチング技術が未熟な副島は
腰が浮いていた。

体で止めようとした捕手副島の股の間をボールが抜ける。

これで無死二塁。

副島（やっちまった…。）
キャプテンの副島は下を向いている。

川越『負けたな。この場面でパスボールやってちゃダメダメ。股抜けなんて完全にキャッチャーの責任だよ。』

そう言って川越は席を立つ。

野中『どこ行くんだ?』
川越『ちょっと外いってくる。次の試合やるやつらがアップしてると思うからな。』

大場（ちくしょう…。負けられるかよ…。…。……。こんなところで。まだバント継続だな…。しかし。この試合、もう下村フォークは使えない。またワンバンになって暴投になっちゃったらもう終了だ。）

大場はここまで体力的、精神的に追い込まれているのにも関わらず未だ最善の手を尽くしている。

（コン!!!）

『うまい送りバントだ!!サードにうまく転がした!!これでワンナウトランナー三塁!!!!!』

『9番、センター、佐々木くんに代わりまして、代打、美濃島（みのしま）くん。』

大場（ここで代打か。代打には変化球中心の攻めが鉄則だな。）

谷『美濃島は俺らの代打の切り札だ。美濃島の異名は…』

『変化球キラー』

（カキーン！！！！！！）

『痛烈な打球はセンターへ！！！！！犠牲フライには十分だ！！！！！！』

これ以上点をとられることは敗北を意味する邦南、どうなる！？！？ベスト８争い！！！！！

Ｎｏ．４１：謎の男（前書き）

今回の話はかなり重要ポイントです？？？

読んでくださった方はぜひ感想お願いします？

Ｎｏ．４１：謎の男

『打球はセンターへ！！！犠牲フライには十分だ！！センター慶野！！こちら向き！！うまく落下点に入った！！！！！！』

副島『４つ！！！！！！！！バックホーム！！！！！！！！！』

慶野（俺のエラーさえなけりゃもっと逆転の可能性は高かった。これであのプレーを帳消しにできるとは思わねえけど！！！！見てろ翔真！！！！！俺はいつまでもお前に引っ張られるつもりはねえぇぇっっ！！！！！！！！！）

『今バックホーム！！！！！！三塁ランナーの筧もタッチアップの体勢からスタートを切った！！！！！！！』

慶野『アウトになれ！！！！！！！！！！！』

『おっと！！！！これはかなりの好返球だ！！！！！！！！タイミングはどうだ！？！？』

副島（微妙だ！！！でも俺が体を張って！！！！！！このランナーを

アウトにする！！！！！）

（がっ！！！！！ズバーンッ！！！！！！ダン！！！！！バッ！！！！！）

『三塁ランナーも壮絶なスライディング！！！！！！！！しかしキャッチャーの副島も怯まずにブロック！！！！！！！タイミングは微妙！！！！！タッチは！？！？』

『アウトォーッッッッッ！！！！！！！！！』

『バックホームはアウトだ！！！！！！！！！飛距離は十分の打球、センターの慶野のバックホーム、そしてキャッチャーの副島の見事なブロックで追加点を防いだ！！！！！！！邦南高校、見事な守備を見せましたっ！！！！！！！！！』

しかし

副島『くっ……。…。…。』

副島が座ったまま膝に手をおいて苦しそうにしている。

大場『副島先輩！』

大場も副島の異変に気づく。

『キミ！！！大丈夫か！？！？』

主審も心配する。

松坂『翔真！？立てるか！？』

副島『く…。む、むり…。』

副島がおぶられて退場する。

今のプレーでスリーアウトチェンジだが副島が負傷した。

ベンチ前で残った選手全員の９人が集まる。

木村『充（みつる）が次の回からもし出られないなんてなったら…。』

大場『この試合は没収試合ですね。まだ９人いるってなっても小宮は松葉杖ですし。』

小宮『こんなときに…。すみません。試合前に一応聞いたら松葉杖でも代打ならオッケーらしいですけど守備は許可はもらえなかったんで…。』

慶野『副島先輩に復帰してもらうしか…。この試合は続けられない…。西口もいないし。』

『８回の裏、邦南高校の攻撃は、７番、レフト、木村くん。』

木村『充…。絶対復活しろ。それまでみんな待ってるから。』

『副島くんの状況はまだ情報が入っていないので情報が入り次第お伝えします。』

…

（カキーン！）

『ファール！！！！』

（ばん！！！！！）

『さあ粘る７番の木村くん！！次が１１球目！！』

『ボール！！！フォア！！！！！』

木村『よしっ！！！』

『さあここにきて今日初めてのフォアボール！！！！！！これでノーアウト一塁！！！！！』

『８番、ファースト、藤武くん。』

『ランナースタート！！！！！これは…！？』

カキーン！

『ヒットエンドランだ！！！！！！サードがとって一塁送球！！アウト！！ワンナウトランナー二塁に変わりました！！！』

『９番、セカンド、島谷涼太くん。』

（カキーン！）

『打球はファーストへ！！！！！二塁ランナーは三塁へ！！！！！！これで二死三塁！！！！』

大場『次の打順は…。』

慶野『キャプテン…。』

大場（こんなとき…あの人がいたら…あの人がいたら…。今日はまだ来るかわからないって言ってたけど…。期待は薄い…。）むしろ

しない方がいい…。

そのとき医務室では…

副島『うぐ…くっ…。また俺のせいで負けちまう…。絶対に勝ちたい…。でも…膝が…うぐぐ…。』

??『試合、出られるか?今ツーアウト三塁。お前の打席だ。』

副島『おまえ!!!!なんでここに!?』

??『まあ一応俺も野球部員だからな。3年は同学年だし知ってるやつもいるだろうが1・2年は俺のことは知らないだろうがな。こんなおれでも今までずっとリハビリしてた。』

副島『え…?なんの?』

??『肘だよ。オレ、中学の頃まで野球やってたんだ。それまではけっこう有名だったんだ。とりあえず出れそうか?』

副島『じゃ、じゃあおまえ…』

??『お前が出られないようなら試合出るしな。西口もいなくて小宮も怪我してんだろ?』

ガチャっ!!!!!!

扉の開く音がした。

大場『副島先輩!?大丈夫で…!?』

大場と謎の男が視線を合わせる。

謎の男は邦南のユニホームを着ている。

大場『え…。今日は来るかわかんないんじゃ…』

??『俺が復帰する前にチームが終わってたら意味ないだろう。正直名林戦から復帰しようと思ったんだけどなんともしずらくてな。』

副島『お前ら…知り合いなのか…?』

??『知り合いもなにも、俺が頼み込んで翔真には邦南に来てもらった。ついでに言うと小宮と西口が邦南に来たのも俺が熱心に誘ったからなんだけどな。』

副島は痛みを忘れて口を開けて唖然としている。

大場『この人の実力は僕が保証します。』

副島『おまえ…。そんなすげえやつだったのか…。』

??『同じクラスでも知らないことはたくさんあるもんだろ?ごめんな。今まで黙ってて。いままでずっと幽霊部員だったのは中途半端だった訳じゃない。すべて…この夏に復活するためだったんだ。だから3年に及ぶ肘のリハビリから耐えてきたってわけ。』

副島『…。わかった。今のオレじゃ試合に出れない…。まず立つこともできないし…。俺の分まで打ってくれ。そんでもって次の試合

…オレはおまえと一緒に野球をやりたい。』

??『ありがとう。まかせろ。』

ガチャっ!!!

大場が扉を開けてベンチに戻る。

慶野『翔真!!どうだった!?』

大場『代打だ。』

慶野『え…?』

ガチャっ

謎の男もベンチに入る。

かなり体格もできている。

そしてヘルメットをかぶり、バッティンググローブを両手に着け、

最後にバットをバット置きから抜いた。

松坂『あいつってE組の…』

島谷倫『ああ。ずっと幽霊部員だった。野球の格好してるの初めて見た。』

氷室『だれ…？』

慶野『背番号１０…。』

『邦南高校、選手の交代をお知らせします。１番、キャッチャー、副島くんに代わりまして、代打、鬼頭くん。』

謎に満ちた男がついに初登場！！

Ｎｏ．４１：謎の男（後書き）

鬼頭初登場？

実はこの話の主人公的存在です（笑

登場遅い？

Ｎｏ．４２：快打炸裂！（前書き）

今回は鬼頭の打席中心です？

Ｎｏ．４２：快打炸裂！

島谷涼『あの人、試合に出ていいんですか？』

鬼頭の存在を知らない一年生部員が率直な疑問を述べた。

慶野『たしかに背番号１０はいままでいなかったけど…。まさかあの人が？』

大場『ああ。あの人は３年生だが今日初めて邦南の野球部に顔を出した。鬼頭（きとう）博行（ひろゆき）って言う人だ。』

慶野『翔真はあの人と知り合いみたいだけどあの人にこの場面任せて大丈夫なの？野球初心者じゃないの？』

大場『その心配は要らない。あの人はここにいる誰よりも中学校までの実績なら勝っている。』

氷室『大場先輩はあの人とどういう関係なの？』

大場『詳しくはいずれ話すときが来るだろう。そのときに話す。ま、言ってみれば俺の師匠ってポジションかな。』

島谷涼『でも大場先輩よりもすごい実績って…。』

大場『あの人は中学の頃…あのＳ．６と一緒に野球をやってて、当

時は鬼頭さんを含めてＳ．７って言われてたんだよ。そんでもってＳ．７は中学軟式出身にも関わらず硬式野球の世界大会に出場してな、Ｓ．７を中心にした中学硬式野球日本代表は世界一になった。しかもあの鬼頭さんは背番号１。俺も中学硬式野球日本代表のエースだったが、世界大会では一回戦負け。実績でオレよりも上ってのはそういう意味なんだよ。』

そこにいる皆が驚いた。

だが…

『翔真は嘘をつかない。』

ということを知っていたのですぐに飲み込んだ。

鬼頭（さっきスタンドから見る限り持ち球は速いスライダーと遅めのスライダー、あとカウント球にカーブも持っているな。打たせてとりたい場面では速いシュートを多投。緩急自在なうえ制球力も抜群。ストレートも左のサイドハンドのくせして常時１４０ｋｍ／ｈ前半から中盤。勝負どころでは１４０後半を出してくる。かなりいいピッチャーだ。まず初球、何で来る？久々の打席でおそらくさすがのオレでもストレートには目がついていかないだろう…。代打への初球は変化球でいくのが鉄則だ…。なぜなら代打は初球ストレートを狙っているやつがほとんどだからな。ってことで初球は変化球がいいな…。）

鬼頭は今の自分のコンディションから直球はまず捨て、変化球狙いにした。

初球…

（ビュッ！！ズバーンッ！！）

『ストライク！！』

≪　１４３ｋｍ／ｈ　≫

鬼頭（初球はストレートか…。今の１４３ｋｍ／ｈか。やっぱストレートには目がついていかねえ…。）

２球目…

（ズバーンッ！！）

『ストライク！！ツー！！！』

≪　１４０ｋｍ／ｈ　≫

鬼頭（今のもストレート？たしかに球速はさっきよりも少し遅いがさっきほど球のノビは感じられなかった。）

鬼頭がピッチャーの谷の方をチラッと見る。

谷（さすがに序盤に飛ばしすぎたかな…。このバッター…ストレートの反応が悪い。このままストレートで押す方が安全だと思うが…まだ8回の裏…。9回にバテるわけにはいかない…。）

谷は顔には出さなくとも内心バテ始めていた。

鬼頭（しめた。次のボール、確実に変化球だ。）

鬼頭は谷のほんのわずかな表情の変化を感じ取った。

（バテてきたな。）

鬼頭（最終回のためにスタミナ温存しておきたいわけだろう。まあ無理もない。今まで7回2／3を18奪三振。序盤に比べて三振のペースが落ちてきた時点で少しバテてきていたのはわかっていたがな。次の1球…仕留めるしかない。）

ピッチャーの谷がセットポジションから投球モーションにはいる。

ゴウ！！！！！

カクククッッ！！！！！

鬼頭（いいスライダーだ。左バッターのオレに当たる軌道から入れ

てくるつもりだったんだろうけどね。今のオレに変化球を投げた時点でキミの負けさ。）

（カッキーーッッンッッ！！）

『打球は大きいぞ！！！！！！大峰明館、外野の守備位置が浅い！！！！！！』

（ボンッボンッ！！！！！！）

『破ったーっ！！！！！！！！打球は右中間！！！！！！！！！！！！前進守備の外野を真っ二つ！！！！！！！！！！バッターランナー鬼頭、足が速い！！！！！！もう二塁を蹴る！！！！！！！！素晴らしいベースランニング！！！！！！！！無駄のない走塁だ！！！！！！三塁は……回った！！！！！！回った！！！！！！一気にホームを狙う！！！！！！大峰明館も素早い連携でボールを繋ぐ！！！！！！！！ホームはどうだ！？鬼頭はまもなくホームイン！！』

筧『うがっ！！！！』

『セカンドの中継に入った筧も渾身のバックホーム！！！！！！！判定はー！？！？』

『セーフ！！！セーフ！！！』

『セーフだ！！タイミングは微妙でしたがバッターランナーの鬼頭くん、キャッチャーのタッチをうまくかわして見事なホームイン！！8回の裏、ここにきて邦南高校が代打鬼頭くんのランニングホームランで2点を返し５－４！！！ついに一点差まで詰めてきた！！！！！！』

鬼頭『よっしゃあ！！』

島谷倫『すげ…。』

松坂『こんなやつがまだいたのか…。』

大場『それは向こうのチームも同じ気持ちだと思いますよ。あのベースランニングなんかなかなか真似できるものじゃないですしね。』

鬼頭『よし！！あと一点だ！！』

大場『みんな。この人のことはまた違うときに話してもらう。だからこの試合はとりあえず勝つぞ！！！一点差なら絶対に追い付ける！！！』

『『『　おう！！！！！！！！！！！』』』

邦南の選手は鬼頭の登場にまだ唖然としているが序盤から味わっていなかった感覚が戻ってきた。

『勝てる。まだまだ諦める場面じゃない。』

その後次の打者慶野、大場が連続四球、４番の松坂も死球で出塁し、二死満塁となるもここで大峰明館はここまで好投していた背番号２０の谷をレフト代えてエースの飯尾（いいお）を投入し、この飯尾が５番の島谷倫を打ち取りスリーアウト。

そして一点差のまま、９回を迎える…。

Ｎｏ．４３：以心伝心？

松坂『あ！！！！！』

木村『ど、どどーしたの！？』

松坂『キャッチャー…は…？』

木村『た、確かに…。』

鬼頭『俺がやればいいんだろ。』

木村『で、できんのか？キャッチャーなんて特殊なポジション。』

鬼頭『心配すんなって。オレ、本職はピッチャーだけど基本どこでもできるから。』

副島の代打の鬼頭がそのままキャッチャーをすることになった。

『9回の裏、大峰明館高校の攻撃は、1番、レフト、谷くん。』

大場（一応球種の確認はしたけども…）

鬼頭（オレのサインに首ふるなよ。ｐｌａｎが台無しだ。）

大場（ど真ん中って…。）

（カキーン！）

『打球はセンター前へ！！一点リードの大峰明館！9回の表まず先頭の1番、谷くんが出塁しました！！』

大場（いきなりど真ん中ストレートって…。もう5順目だっていうのに。）

鬼頭（次は外角のボール球。）

大場（この場面で初球ボールからはいるの！？！？！？）

鬼頭（シャラップ！！さっさと投げろ。）

大場（…ったく。はいはい…。）

（バン！！）

『ボール！！！』

大場（もう！！絶対無駄球だっただろ！！）

鬼頭（スキあり！！）

鬼頭が座ったまま一塁へボールを投げる。
一塁手の藤武は頑張って捕球しランナーにタッチする。

『アウト！！！！！！』

『アウトだ！！！！キャッチャーの鬼頭くん！！見事なスローインぐを見せました！！！！』

鬼頭（よし。完全にｐｌａｎ通りだ。）
大場（大胆だな…まさかこれを狙ってさっきのバッターの初球わざと打たせたのか…？いや。そうに決まってる。だってあの人だもん。）

鬼頭（とりあえず決め球のフォーク２球で追い込むぞ。）
大場（とりあえずって…もうけっこう疲れてるんですけど…。）

鬼頭（もう一度言う。シャラップ！！口応えすんな。）

大場（はーい。）

この二人は幼い頃から一緒に野球をやってきたため野球をしながら

なら無言で会話をすることができる。

（バン！バン！）
『ストライク！！ツー！！』

大場（師匠がいった通りとりあえず2球で追い込みましたよ。とりあえず1球外のへんか…）
鬼頭（仏の顔もｔｈｉｒｄまで。シャラップ！！次はこれだ。）

大場（えぇっ？下村フォーク？いくら師匠でも初見じゃとれないんじゃ…）

鬼頭（Ｗｈａｔ’ｓ？なめてんのか？オレにとれない球なんて存在しねーんだよ。）

大場（はいはい。）

大場が投球モーションにはいる。
大場（マジでパスボールだけは勘弁…。）

大場が投げる。

ビュッ！！

カクアッッアッ！！！！！！

（ブン！！バシッ！！）

鬼頭（ｇｏｏｄ　ｎｅｗｓ！ツーアウト！）

大場（うわぁ…。初見の人に下村フォーク捕られた…。けっこうショック。）

鬼頭（言ったろ？ｂａｂｙ？オレにとれない球はないって。）

『3番、ライト、宮池くん。』

大場（3番か…。これは慎重に攻めないと長打食らうぞ…。）

鬼頭（まずはここ。）

大場（ほんまですか！？絶対ヤバイですって！）

サインはど真ん中ストレート。

鬼頭（ここ以外に投げたら捕らねえからな。）

大場（はぁ…。）

ビュッ！！

（バスっ！！）

鬼頭（ｏｈ！）

ど真ん中のストレートを鬼頭が弾いた。

宮池（初球からこんな甘い球かよ！！チックショー！！）

大場（なんでさっきの下村フォークが捕れて今のど真ん中直球が捕れないの！？）

鬼頭（まあそう固いことｔｅｌｌするな。）

鬼頭がまたど真ん中直球のサインをだす。大場は既にあきれて反論もしなかった。

ビュッ！！

（カキーッン！）

大場『ぬぉっ！！』

（バシッ！！！！！）

『痛烈なピッチャーライナーでしたが見事にさばいて９回の裏の攻撃に移ります。』

大場（死ぬかと思った。）

鬼頭『さあ逆転すっぞ！！』

大場『なんか疲れたな…。今の回。キャッチャーがこの調子じゃ大変だよ。ははは。』

『９回の裏、邦南高校の攻撃は、６番、ライト、氷室くん。』

一点を追う邦南高校、遂に最終回を迎える！！！

Ｎｏ．４４：バッターは松葉杖

『９回の裏の、邦南高校の攻撃は、６番、ライト、氷室くん。』

『ベスト８をかけた夏の高校野球愛知県大会５回戦も遂に９回の裏、邦南高校の攻撃です！！点差はわずかに一点差！！』

野中『おい！ケイさん！帰ってこいよ！邦南もまだまだわかんねえぞ！』

野中が携帯電話で川越に電話をする。
川越は８回の表に邦南の捕手副島がパスボール（記録は暴投）してしまったときに呆れて次のチームの球場外でやっているアップを観に行っていた。

そのころ川越は…

川越『は！？なんだって！？１点差で９回の裏！？…わかった。すぐにいく。』

また視線を切り替えて今度は邦南高校ベンチ

慶野『氷室ってここ最近なんか違うよな。』

大場『だな。昔はあんなやる気なかったのに最近じゃ練習への取り

組み方も変わったしな。』
慶野『４回戦も４打数４安打だったしね。』
大場『なんやかんやいってあいつが１番ここ最近成長したよな。』

氷室『副島さんのためにも…絶対にこの試合勝ちたい！！』

そのころベンチ裏医務室では…

副島『入ってこい。そこにいるんだろ。』
副島が医務室の空いている扉に向かって言った。（ちなみに医務室には副島一人しかいない。）

（コツ…コツ…コツ…）
足音が響く。

『ハハハ…。気づかれてましたか…。』

副島『どうした？そんな格好して。』

副島の目の前には邦南高校の制服を着た男が立っていた。その男は…
副島『西口…。いてもたってもいられなくなったか。』
この試合は地元のテレビに生放送されているので今の展開も副島は知っている。

西口『…はい。自分のしたことはわかっているはずなんですけど…。なんかダメなんです…。スタンドから応援するだけじゃ…。オレがベンチにはいったらみんなに迷惑かけるってわかってる。でも…』

副島『そんなことないぞ。』

西口『え…』

（カキーン！！！！）

『打球は三遊間を抜けてヒットになった！！同点、そして逆転を狙う邦南高校！！先頭の１年生氷室くんが今日初ヒットを放ち出塁しました！！』

『７番、レフト、木村くん。』

西口『そんなことないって…どういうことですか？』

（コン！）

『送りバントはきっちりと決まった！！いいバントだ！！これで一打同点の場面になりました！！ワンナウト二塁！！！！』

副島『小宮が被害者でおまえが加害者。だけど小宮は気にしてなかったんだなって、小宮の行動を見て思った。』

西口『え？』

『８番の藤武は三振！！！！！！これでツーアウト！！！！！大峰明館高校、あとアウトひとつでベスト８進出！！！！』

『ここは…絶対に打つしかない…。』

邦南ナインが必死に願っている。

次の打者は9番、1年生の島谷涼太だ。

副島『今はその意味がわからなくてもあいつらと野球やってれば気づくよ。お前は大切なチームメイトの一人だってね。気にすんなよ。いってこい。オレからも監督にお前の起用を進言する。』

西口『オレの起用?代打ですか?』

副島『違う。代走だ。小宮が出塁するまでに着替えてまってろ。代打小宮だ。』

そう言って副島は足を引きずりながらベンチに行き…

副島『監督。代打小宮です。代走の準備もできました。西口が今着替えています。』

小宮『拓磨くん!』

『西口か。早くしろ。小宮!松葉杖でも代打なら可能だよな?ルール的にも。』

小宮『はい!!』

『邦南高校、選手の変更をお知らせします。9番、セカンド、島谷涼くんに代わりまして、代打、小宮くん。』

『おっとここで邦南高校の代打は小宮くん!!松葉杖を使いながら打席にたちます!!場面はツーアウト二塁!一打同点です!!!』

大峰明館サイドもタイムをとり松葉杖を使いながらの登場がオッケーだということを確認した。

『プレイ!!!!』

小宮『拓磨くん…。今のキミなら僕の気持ち、きっと届くよね。』

9回裏ツーアウト!一打同点の場面で打席に松葉杖の小宮が入る!!

Ｎｏ．４４：バッターは松葉杖（後書き）

松葉杖で出場できるかは実際よくわからないですがご了承ください？
（現実じゃたぶん無理だろう。）

感想待ってます？

Ｎｏ．４５：走れ！小宮哲都！（前書き）

感動系？になったら嬉しいです？

Ｎｏ．４５：走れ！小宮哲都！

代打に出た小宮は松葉杖だ。
前日の練習後に3回戦（愛農大名林戦）で死球をくらい痛めていた右足首を西口に暴行された際にさらに痛めてしまい（ヒビが入った）松葉杖になった。

打席での格好は、
バットを両手で持ち、左脇に片方の松葉杖、もう一方の松葉杖は打席のすぐ横に置いてある。
絶妙なバランス感覚。
ちなみに痛めている右足は浮かせている。

小宮（拓磨くん…。）
小宮は、あの時のことを思い出していた。

回想シーン←←

『ねえ！キミ！僕とキャッチボールしない！？』

家の近くの公園のブランコで一人で遊んでいた小宮（当時６才）に西口が話しかけてきた。

小宮『……。』
西口『ねぇ！聞こえてる！？』

小宮はハッと顔をあげた。

小宮『ぼ…僕のこと…？』

西口『うん！もし暇なら一緒にキャッチボールしようよ！』

小宮『…キャッツボール？』

西口『キャッツ？なにそれ？キャッチボールだよ！』

小宮『…。なにそれ？なんで僕なの…？』

西口『いつもなら一緒にキャッチボールやってる男の子が今日はいないみたいなんだぁ。だから今日は相手がいなくて暇なの！はい。これグローブ。』

小宮がグローブをはめてみる。

小宮『なにこれ。臭い。』

西口『そんなこと言うなよぉ！そのグローブ昨日手入れしたばっかなんだから！』

小宮『ご、ごめん。』

西口『いくよー！それ！』

ビュッ！

小宮『うわぁ！！』

（バシッ！！）

小宮は完全に怖がりながらもまぐれで捕球した。

西口『わぁ！キミうまいね！名前なんて言うの！？』

小宮『こ、こみや…てつと…。』

小宮は少し照れながら言った。

なぜなら今まで幼稚園の先生以外に名前を聞かれたことなんてなかったからだ。

小宮は今まで一人も友達がいなく、性格も内気だった。

西口『コミヤ、テツト…。じゃあテツくんね！』

『全ては、あの時から始まった。親が死んで妹が病気になって…これまで幾度となく野球から手を離そうとした。だけど無理だった。それまでは野球をしてればどんなときにも西口拓磨がそばにいた。唯一の心の休め時が野球だった。』

“だけど一瞬にしてその充実の時が消え去った。”

『全てはあの女…赤崎明日翔の仕業だ。西口は真実を知らずに…ただただ小宮に暴力をふるった。』

今ンチ裏で着替えている西口も同じことを考えていた。

“なぜ、オレは小宮を殴ってしまったのだろう…。”

“もっと深く考えていれば赤崎明日翔にもだまされずに…昔と同じ最高のパートナーと最高の野球ができたかもしれないのに…。”

二人は野球の時ならほとんど考えることは同じだった。

プライベートですらお互いの考えていることはお見通しだった。
いつも二人の笑い声が近所の町に弾んでいた。

西口は思った。
“なぜ…最高のパートナーを傷つけてしまったのだろう…。なぜ…どうして…。”

そんな言葉が頭をよぎる。
（ガチャっ！）
考えながらもベンチに入る。

そのとき…

『僕は今まで拓磨を恨んだことなんか一度もない。拓磨、むしろ僕は感謝してる。』
『何をだ？』

『決まってんじゃんか。あの時…キャッチボールに誘ってくれたこと。』

『お前は…このオレが憎くないのか？この1年…今までと手のひらひっくり返したようにお前にさんざん暴力ふるってきたこのオレを…。』

『うん！拓磨にどんなに殴られても、わかってたから。』

『…？』

『拓磨の中に昔の拓磨が見えてた。普通の人じゃ絶対にわからない

よ。だけどね、僕にはわかるんだ。だって拓磨は…』

『うっ…。テツくん…。』

次の言葉が想像できた西口の目から汗が滴った。

『だって拓磨は、僕のことを親友だって言ってくれた、最初で最後の大好きな親友だから。』

（カァッッッキィーッッーーン！！）

西口『テツくん！走れ！！！！！！！！』

『痛烈な打球が右中間を襲う！！！！！！センターは今追い付いた！！！！二塁ランナーは悠々とホームイン！！だがバッターランナーの小宮くん！！まだ一塁に達していない！！！センターも一塁へ送球！！！！！！』

小宮『絶対にアウトになるもんか！！！！！！』

小宮は松葉杖を使って一塁へ全力で向かう。

送球も素早い。

タイミングは微妙。

（バッ！！）

あと3歩。

小宮は松葉杖を投げ捨てた。

『ヘッドスライディングだ！！！！！！』

（ズザザザザザァァァッッ！！）

小宮『ハァ…ハァ…。…。ハァ。ハァ…。』

『セーフ！！セーフ！！』

西口『よっしゃぁ！！！！！！！！！』

大場『西口！代走だ！』

西口『はい！！』

（パチン！！！！）

小宮と西口がハイタッチをして西口がベースの上に立つ。

『ナイスバッティン！！！！！！』

『あとは任せたよ！』

端から見ればただのハイタッチだが、二人の間では会話が展開され

ていた。
昔のように。

『ピンチランナー、西口くん。』

『見とけよ。テツくん。あとはオレがホームベースを踏んでやる！！』

西口が小宮の心に話しかけた。
小宮も応答する。

大場『あいつら…。』

それは誰の目にも明らかだった。
二人が最高のパートナーだということが。

『1番、キャッチャー、鬼頭くん。』

遂に同点に追い付いた邦南高校、二死一塁で打席に先ほどランニングホームランを放った鬼頭が向かう。

Ｎｏ．４５：走れ！小宮哲都！（後書き）

感想待ってまーす？

Ｎｏ．４６：共に上を目指す仲間

鬼頭『同点。そして逆転サヨナラ、ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅに進むのは俺達だ。』

飯尾『言ってくれるじゃん。このオレからそう易々と連打が打てるとでも？大峰明館のエースナンバーはこのオレだ。谷は控え投手だ。自分の実力をわきまえてから言いな。』

鬼頭『勘違いするなよ。』

飯尾『このヤロウ！！』

ビュッ！！

カッキーーッン！！

飯尾『え…。』

鬼頭『自惚れるなよ。オレのが格上だ。』

≪　１３６ｋｍ／ｈ　≫

『打球はライトへ！！！！！！』

（バン！）

鬼頭『くそっ！！ギリギリか！！』

『打球はライトフェンスダイレクト！！！！！！！！あと少し高ければホームランという当たり！！！！！！一塁ランナーはツーアウトなので好スタートを切っている！！』

飯尾『バ、バックホームだ！！』

西口『オレが…オレがホームベースを踏んで、この試合を終わらせてやる！！』

『ライトの宮池もボールまで素早く追い付いた！！一塁ランナーの西口は三塁も回る！！セカンド筧がボールを繋ぐ！！いい連携だ！！バックホームする！！』

西口『どりゃぁぁ！』

筧『間に合えっ！！』

『西口はヘッドスライディング！！！！！！！！』

大場『！！！！！！！！』

副島『頼む！！』

氷室『！？！？』

鬼頭『セーフか！？』

谷『…！！！！！』
宮池『アウトか！？』

『タイミングはほぼ同時！！どっちになってもおかしくないぞ！！
はたして主審吉村の判定はー！？』

『セーフ！！セーフ！！ゲームセット！！！！！！！！』

西口『よっしゃぁぁ！！！！！！』
小宮『ナイスラン！！拓磨！！』
西口『おう！！』

（パチン！！！！）
二人はちっちゃかった時のように、人前でハイタッチをした。

谷『クソ…。』
飯尾『ちくしょおおおおおおお！！』

『ゲーム！！！』
『『ありがとうございました！！』』

鬼頭『おい！』
鬼頭が大峰明館のエース飯尾に声をかけた。

飯尾『なんだよ。勝者が敗者に話しかけるなんて、マナー違反だろ。』
鬼頭『まあそう言うなよ。お前には、ここで野球を辞めてほしくなくてな。』
飯尾『突然どうした？』
鬼頭『最後の1球、オレは確実にスタンドに放り込んだつもりだった。だけど結果はフェンス直撃だ。』
飯尾『フェン直の時点でオレの負けだよ。』
鬼頭『お前のストレート…もっともっと磨けば、プロでも通用するはずだ。だから…』
飯尾『プロって…。そんな夢中坊の頃にとっくに捨てたよ。』
鬼頭『諦めんなよ。おれだって1度は諦めた。だけどまだ心のどこかでプロを目指している自分がいる。』
飯尾『お前…本気か？邦南だろ。』

鬼頭『ああ。本気だ。まあ高卒から行く気はねえけどな。大学からオレは行くつもりだ。』
飯尾『なんで俺なんだ？』

鬼頭『オレはお前に…可能性を感じた。俺とプロ目指さねえか？』
飯尾『ハハハ…。なんかな…お前がそんなこと言ってこなきゃ、明

日から実家の魚屋を継ごうと思ってたのに。』

鬼頭『ってことは！』

飯尾『いいよ！！俺ももう一回、自分の可能性に挑戦してみてえし。大学でまた会おう！』

鬼頭『おう！！』

愛知県公立Ｎｏ．１進学校の県立邦南高校、５回戦の大峰明館高校を破り、ベスト８進出！！！！！

大峰明館―０００　３００　１１０　―５

邦南高校―０００　０００　２２２　―６

Ｎｏ．４７：準々決勝へ向けて（前書き）

準々決勝が始まります？

Ｎｏ．４７：準々決勝へ向けて

大峰明館との熱戦の次の日、
鬼頭が初めて練習に現れた。

大場『今から鬼頭さんに自分の過去のことについて話してもらいます。実力なら他の誰にも劣っていない人ですが皆さんはこの人がこれからスタメンに名を連ねてもいいか判断してください。』

鬼頭『えー…知っている人もいるかもしれないですが、３年Ｅ組の鬼頭　博行（きとうひろゆき）です。出身中学は大阪の南阪中学ってとこです。』

副島『な…南阪中学って…あのＳ．６の出身校のか！？』
氷室『ほんとっすか！？』
松坂『マジだったのかよ…。』

鬼頭『あーはい…。３年前までは今のＳ．６にｍｅを加えてＳ．７って言われてました。だけど自分の進路については公表しなかったんでマスコミもｍｅが今どこにいるかはわからないはずです。ましてや愛知県にいるなんて。』

島谷涼『すげぇ…。次元が違う…。』

鬼頭『それで中学三年の時、みんなと一緒に中学硬式野球日本代表に選出されて…』
大場『先輩。そこまで話す必要があるんですか？そこから先は言わ

ないほうが…。』

鬼頭『シャラップ。俺のｔａｌｋの邪魔をするな。』

大場『…。』

鬼頭『そこから慣れない硬式ボールで連戦連投。お陰で俺の肘はボロボロ。あの頃は俺もまだガキだった。その時はまだ世界大会には連投禁止みたいな決まりはなかった。先のことなんて考えもしてなかった。そしてだ。遂に世界大会決勝。相手はアメリカ選抜。肘にかなりの痛みがあるなかでもオレは世界一になりたい一心で投げ続けた。野球の本場アメリカの高校生だ。当然日本人のやつらとは体格もめつきも全然違う。厳しく攻めていかなきゃ当然勝てやしない。球数も当然のごとく増えていく。そして世界一まであと1球。オレは投げきった。でもな。最後の1球を全力で投げた瞬間。』

そう言って鬼頭は右肘を見せてきた。

副島『それって…。』

鬼頭『手術の跡だ。』

大場『はあ…。』

鬼頭『手術って言ってもただの手術じゃあなかった。中3の夏から2年の冬まで、2年半で合計4回…肘にメスをいれた。』

木村『なんだって!?』

島谷倫『よ…4回…。』

鬼頭『そして今に至る。1ヶ月前にやっと投げ始められたところだ。まあキャッチボールだけだけどな。』

そして鬼頭はその後も話し続けた。

鬼頭『これで俺の話は終わりだ。』
大場『みんな、この人がスタメンでもいいか?』

するとみんなにっこりした。

副島『いいよ!お前が苦労人なのは分かったし、俺もそういうやつ嫌いじゃない!』

キャプテンの副島が真っ先に発言した。

木村『俺も。』
慶野『同感。』
島谷倫『もちろん。』
島谷涼『よろしく頼むよ。』
氷室『はいはい。』
松坂『了解だよ。』
藤武『オレだって同感さ!』
小宮『先輩の言うことなら従いますよ!』
西口『よろしくです!』

副島『だけどね、ヒロはまだスローイングが完全じゃない。できれ

ばファーストか外野を守らせたい。だけどファーストで使うのは勿体ない。ライトを守ってもらおうと思ってる。佑介（ゆうすけ）、ファーストの練習やっとけ。藤武は控えに回ってもらう。』

氷室『はいよ。』

藤武『わかってるって！！』

（ピリリリリリ！！）

副島の携帯が鳴る。

副島『はい。もしもし。…はい。はい。わかりました。伝えておきます。…はい。では。』

副島『みんな、いま片野監督（邦南高校監督．名前は初登場）から連絡があった。』

一同『！！！！！！』

副島『次の相手は…上社西（かみやしろにし）だ。』

大場『強打の上社西が来たか…。堅守の大峰明館に似たタイプの豊田学園（とよたがくえん）が来たほうが正直やり易かったな。』

副島『同感だな。上社西には韓国人の三つ子クリーンナップがいるだろ。』

大場『そいつら3人はかなりの驚異ですね。うちらもどちらかといったら打のチームなんで打ち勝つしかないか…。』

鬼頭『おい！アホか！！今から明日へ向けて守備の猛練習だ！！監督が来るまでオレがノックしてやる！！』

『ちょっと待て！！！！！』

横から声がした。

野中『オレが打ってやる。』

大場『野中のおっちゃん…。』

野球部では邦南高校野球部の熱烈なファンである野中の存在は有名だ。

野中『そんでもってコイツも。』

野中の横には…

川越『お前らとは初めましてだな。おれの名前は川越っていうんだ。大峰明館戦、見てたよ。まさか逆転するなんてな。感動しちまった。だからその礼としてバット振ってやる。』

野中『お前ら、この人はすごーい人なんだぞ。享神が甲子園初出場で初優勝したときのエースで４番の人だ。』

副島『しゃあす！！！！！！！』

その後、小宮を除く１２人が６人ずつに分かれ、ノックを受けた。

８時間後…

『もう９時だよ…』

『死ぬかと思った…』

『完全に殺人ノックだ…』
『てか明日準々決勝だよ…』

午後1時から9時まで8時間ノックを受けまくった。

そして次の日…

先攻・上社西高校

1：3B：正親（おうぎ）
2：RF：岩見
3：CF：朴昌龍（パクチャンヨン）
4：C：朴昌秀（パクチャンス）
5：P：朴昌圭（パクチャンキュ）
6：LF：野村
7：1B：岸
8：SS：榊原
9：2B：小山

後攻・邦南高校

1：RF：鬼頭
2：CF：慶野
3：P：大場
4：C：西口
5：1B：氷室

6：2B：副島
7：3B：松坂
8：LF：木村
9：SS：島谷倫

副島『よしっ！！痛み止も飲んで準備完了！！！！今日も勝って、準決勝に行くぞ！！！！！！！』

『おう！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

『礼！！！！！』
『『『お願いします！！！！！！！！！』』』

準々決勝が遂に始まる！！

Ｎｏ．４７：準々決勝へ向けて（後書き）

感想お願いしますｍ（．＿．）ｍ

Ｎｏ．４８：ちょっと計算外

『１回の表、上社西高校の攻撃は、１番、サード、正親（おうぎ）くん。』

西口（この打線…全員打力があるがそのなかでも特に要注意人物なのは…１番、３・４・５・６番…）

大場『ふーっ。要注意人物一人目か。』

西口（まずは初球…。絶対にストライクが欲しい。）

大場が振りかぶる。
そして投げる。

ビュッ！！

ズバーン！

『ボール！！！』

高めに浮いた投げた瞬間ボールと分かる球。

西口（この人は早めに撃ち取りたい…。前の試合を見る限りカット

の技術は並みじゃない。カウント悪くするとすぐ歩かれる。）

２球目
ズバーン！

『ボール！！』
外角に決まったストレート。
しかし判定はボール。

大場（今のがボールか…。）
西口（今日の主審は辛いな…。いまのコースをボールにされると困るぜ…。）

３球目…
ビュッ！！
大場『あ！！』

グッグッ！
バン！

大場の３球目はカーブ。
しかし左打者の正親の後ろに抜けてしまった。

これで初回の先頭打者正親に対しスリーボール。

西口（こいつを出すわけにはいかない…。しかも先頭バッター。初

回。何気にかなり大事な場面だ。）

四球目

ビュッ！！

バン！

今度はショートバウンドになってしまった。

『フォアボール！！先頭バッターの正親くんがストレートのフォアボールで出塁です。』

大場『くそっ。』

西口（今日の大場さんはあんまり球がキテないな。それに加えて審判もからいし…ちょっと想定外だ。）

Ｎｏ．４９：さらに計算外

パラ…パラ…パラ…

鬼頭『雨…？』

慶野『空はそこまで曇りって訳でもないし…。』

西口（通り雨だ。今日、朝？ズバーン！（朝のニュース番組）でお天気お姉さんの江本（えもと）　美緒（みお）ちゃんが今日は通り雨の可能性があるでしょうって言ってた。）

『２番、ライト、岩見くん。』

西口（コイツは強力上社西打線で唯一の繋ぎ役と考えていい。どうせバントか進塁打、こいつの打力じゃ長打は考えられない。）

岩見が右バッターボックスに立つ。
すでにバントの構えをしている。

岩見（いきなりやっちゃう？）
正親（しかけるか。）

ガッ！

一塁ランナーの正親（おうぎ）が大きなリードをとる。

大場（でかいな…。こりゃ刺せるぞ。）

大場はフィールディングや牽制などにはかなりのものを持っている。

ジー…

大場がランナーを焦らす。
ランナー正親の呼吸を変える。

そこから…
ビュッ！！

ザッバーン！

『セーフ！！』

正親（牽制上手いな…。いつもみたいに余裕ぶっこいてたらアウトになってたかも。てかいきなり速い牽制か。まずは遅い牽制で様子を見てくると思ってたんだがな。まあいきなり速い牽制だったから次は勝負だな。）

正親がリードをとる。

大場（よし。さっきより一歩くらい小さくなった。盗塁はない…。）
正親（とか勝手に思ってくれたらラッキー♪）

大場がセットポジションから足をあげる。

『ランナー走った！！』

大場（マジで！？）

間に合わず打者に投げてしまう。

岩見（先頭バッターをストレートのフォアボール。そしていまボクはバントの構え。そして正親がピッチャーを揺さぶる。）

回想シーン←←

金丸（かねまる：上社西高校監督）

『お前ら、いいか？邦南は俺らと同じ打のチームだ。守備は決して得意じゃない。だが、エースの子、それから背番号１２の今大会途中からサイドスローに変えた子、この二枚は非常にいいピッチャーだ。だがな…ここにきて背番号１２の子が５回戦で松葉杖だった。つまり相手はいま一枚しかピッチャーがいない。そう、エースの子は大場っていうんだけどな、そいつは中学のとき硬式野球日本代表に選出されている。しかもその時もエースとして。いいか？だがその大場くんも今大会の防御率はかなり悪い。なぜか。そう、彼は序盤に失点を重ねてしまう典型的なスロースターターだからだ。だから今日は特に序盤にとれるだけとっておきたい。』

そして…

金丸『おい！岩見！お前に話がある。今日はまずほぼ百パーセント正親が先頭打者で出る。そうなったらお前の仕事だ。お前はバントの構えをしろ。まあスロースターターの大場くんのことだ。バントは初球でやらせてくる。アウトが欲しいはずだからな。…でだ。ここからが本題だ。一塁ランナーの正親が揺さぶりをかける。牽制とかをはさんでくるだろう。そしたらもう序盤の大場くんはバッターに集中できてない。そしたらな…』

回想シーン終わり

『置きにきたストレート一本狙い！』

カッキーン！

『バスターエンドランだ！！打球はライト線に落ちる落ちる！フェアだ！一塁ランナーの正親はもう三塁到達！！そして三塁も回る回る！！打ったバッターの岩見は二塁へ！！先制しました！！１回の表上社西高校！！初回からいきなりバスターエンドランを仕掛けてきました！！！！』

西口（クソ…。ここでいきなりバスターエンドランか…。完全に頭になかった。でも…）

パラ…パラ…パラパラパラパラ

西口（…！？）
大場（雨が…）
鬼頭（強くなってきた…。）

西口（空が…黒くなってきた…。）
松坂（こりゃ本格的に降るんじゃねえか？）
西口（ここでの悪天候はさらに計算外だ…。江本美緒ちゃん…天気予報…しっかりしてよ…。）

名林戦の時のような雨が襲うか！？

Ｎｏ．５０：祝！５０回記念！～過去篇～（前書き）

今回は５０回記念ということで過去篇をやらせてもらいます？

是非読んでください？

ちなみに時は小宮たちが中学三年生のときの全国中学生硬式野球大会決勝です？（１年前）

Ｎｏ．５０：祝！５０回記念！～過去篇～

“堂金（どうがね）！堂金！”

『７回の裏、名古屋東ブラックシャークの攻撃は、１番、センター、多賀谷（たかや）くん。』

多賀谷『クソったれ…。』

（バン！）

『ストライク！ワン！』

（バン！ブン！）

『ストライク！ツー！』

（バン！）

『ストライク！バッターアウト！』

勾城（こうじょう）『だれか…コイツを打ってくれ…』

『２番、ショート、岩栗（いわくり）くん。』

堂金（はあ。つまんねえな。これで決勝かよ。）

ビュッ！！

ボコッ！！

『デッドボール！』

勾城『よし…』

堂金（最後にちょっとくらい遊んでやるよ。まあウイニングショットを封印してる時点で軽く遊んでるけど。）

『3番、ライト、亀丸（かめまる）くん。』

亀丸（コイツ…人間の投げる球のキレじゃねえ…。）

堂金（コイツが全国大会決勝の3番打者？やっぱ大したことねえ。中学野球なんて。完全に俺のボールに自信喪失してんじゃん。）

（ズバーン！）

『ストライク！ワン！』

《　１４３ｋｍ／ｈ　》

小宮『ここにきて１４０ｋｍ／ｈオーバーか…。』
西口『コイツは完全に次元が違う…。』

堂金（しょーがねーから塁に出してやるよ。）

…

……

（バン！！）
『フォアボール！！』

勾城『よっしゃあ！！ワンナウト一二塁！！』

『４番、サード、勾城（こうじょう）くん。』

小宮『勾城！！打てよ！！』

堂金（歩かせるか。相手がチャンスになってちょっと期待したところを俺の力で粉砕するのも面白いし。）

…

……

（ボール！！フォアボール！！）

小宮『点差は二点。絶対に打ってやる！』

『5番、ピッチャー、小宮くん。』

堂金（お前らがこの俺を打てるわけないだろ。人生で1度も負け投手になったことないのだからな。）

（バン！！ブン！！）

『ストライク！』

《　144km／h　》

小宮『速すぎる…。でも…打たなきゃ…打たなきゃ。』

（バシーン！）

『ストライク！ツー！』

（バコン！）

『ストライク！バッターアウト！』

《　145km／h　》

多賀谷『まだ…まだだ…。』

『6番、キャッチャー、西口くん。』

堂金（あーあ。二点リードの最終回。ツーアウト満塁。こんなしびれる場面なのにバッターが背番号12かよ。）

ちなみに西口は名古屋東ブラックシャークでは背番号１２だ。

（バン！！ブン！！）

『ストライク！ワン！』

（ボコン！）

『ストライク！ツー！』

西口（くそっ…くそっ…。）

西口は堂金の出す、打者を完全に威圧するオーラに圧倒されていた。

堂金（お前らはタイムリーでも希望してるのかもしれんがな…。）

ビュッ！！

西口『クソォーッ！！』

（バン！）

西口は空振りした。

≪　１４６ｋｍ／ｈ　≫

堂金『これがお前らの現実だ。』

『ストライク！バッターアウト！ゲームセット！』

名古屋東ブラックシャークは、全国中学生硬式野球大会決勝で堂金率いる静岡オーシャンズにノーヒットノーランで敗北を喫した。（堂金が最後に手を抜かなければ恐らく完全試合。）

名古屋東ブラックシャークのナインにこの敗北は深く心に刻まれている…。

Ｎｏ．５０：祝！５０回記念！～過去篇～（後書き）

堂金いくらなんでも球速すぎましたかね？

感想お願いしますｍ（．＿．）ｍ

Ｎｏ．５１：お前の不調は俺らがカバーする！

『３番、センター、朴昌龍（パクチャンヨン）くん。』

西口（まだ一点とられただけ、焦る場面じゃない。だけどここでこいつらクリーンナップトリオか…。上社西はノーシードだがこいつら韓国人の三つ子で５試合で５１打点だ…。）

大場（攻めよう。）

西口（しまだ初回だけど厳しいコースにいくぞ。）

大場（韓国人３人全員右打者。俺は左打者より右打者の方が得意だ。そのぶんラッキーだが…。…ひとつ問題がある。…。今日は明らかに調子が悪い…。構えたところにいく保証は全くない…。）

キャッチャーの西口が右打者の朴昌龍のインコースに構える。

ピッチャーの大場はふーっと息をはいた。

投球モーションに入る。

大場『思ったところに行きやがれ！！！！』

朴昌龍（！！！！！！！）

（スバン！）

西口（くそっ。初球でストライクがほしかった…。）

ボールは高めに浮いた。

『ボール！！』

西口（いつもの大場さんなら初球からこんなボールはまずない。小宮もまだ投げられない。今日も大場さんに頑張ってもらうしかないけど…。）

大場がまたセットポジションに入る。

大場『ふうっ。落ち着け。落ち着けよ。調子悪いからってなんだってんだ。』

大場（下半身を意識して、あと大事なのは…）

（腕を思いっきり。振りきることだ！）

『ランナー走った！！』

『おっとここで二塁ランナー岩見くん！スタートを切った！！！！！』

（バシーッン！）

大場のボールはインローにキマった。）

『ストライク！』

西口（ランナーのキミは意表をついたかもしれないけどね。）

西口が三塁へスローイングをする。

ビュッ！！

（パン！）

『タッチはどうだ！？』

『アウト！！！！！！！！！』

『アウトだ！！キャッチャー西口がこの場面では考えもしなかった三盗を刺しました！！』

西口『そんなこと想定内だよ。』

大場『ナイス西口！！』

西口『大場さんが調子悪いぶんは俺らでカバーします！！だから大場さんは一人で野球しないでくださいね！』

大場『おう！頼んだぜ！』

松坂『翔真！頼りないかもしれないけどさ、いざとなったら頼ってくれよ？』

副島『ああ！どんな打球きたって絶対体で止めてやるよ！』

島谷倫『そうだぞ！打たせてとらないと俺らもつまんねえだろ！もっと楽にいこうぜ！』

大場『ああ！ありがとう！お前ら！今日は甘いボールも多くなってお前らの仕事が増えるかもしれないけど、頼むぜ！』

『おう！そうじゃなきゃ楽しくねえよ！』

大場（このチーム…去年とは比べ物にならないな。去年だったらこ

の場面で俺に話しかけてくれるやつなんていないだろう。みんな進化してる。だけど俺がここで自己満足してたらダメだ。みんな…）

大場『絶対勝つぞ！！！！！！！』

『よっしゃぁ！』

Ｎｏ．５２：ドラゴンと呼ばれる男ー青龍寺翔冴ー（前書き）

正親（おうぎ）
や
青龍寺（せいりゅうじ）

という名前はいるみたい？

Ｎｏ．５２：ドラゴンと呼ばれる男ー青龍寺翔冴ー

（カキーン！）

『強い打球だがショートの島谷倫暁くん、うまくさばいてスリーアウトチェンジ！！１回の表上社西高校の攻撃は一点先制です。』

大場『ふぅ。やっぱあの韓国人のやつらはいい打球飛ばすな。』

西口『たしかに。内角の直球にもうまく対応されてますし。でも厄介なのはあの１番バッター…。正親（おうぎ）ってやつです。アイツがこの試合、色々と面倒な打者になりそうです。』

大場『まあアイツの得意コースなら知ってるよ。中学の頃結構対決したからさ。ただ、今日はあんま思ったところに球がいかねえから無駄な情報ってやつだ。』

『１回の裏、邦南高校の攻撃は、１番、ライト、鬼頭くん。』

鬼頭（先発右腕の朴（パク）　昌圭（チャンキュ）、覚えてるよ。世界大会１回戦で韓国をコールドで倒したときの韓国の先発だったやつだ。コイツの中学までの持ち球はストレートとスライダーのみ。それもスライダーはドラゴンには到底及ばない。）

その頃、バックネット裏で座っている享神の桜沢と余語。今日は二人で偵察に来ている。
ちなみに邦南ナイン以外は鬼頭が野球を再開したことは知らない。

桜沢『いやぁ。懐かしいな。』
余語『何がだ?』

桜沢『上社西のピッチャーの朴昌圭。世界大会でフルボッコにしてやったのにわざわざ日本に来て野球やってるとはな。』
余語『あのピッチャーも世界大会に出場してたのか。』

『おい!』

余語『…!?、え…え…』
桜沢『ド、ド、ド、ドラゴン!!』

余語『去年の夏、決勝で俺らを1安打17奪三振完封で全国制覇…春のセンバツは部員の不祥事で出場できなかったが…今年も全国制覇本命の大阪の名門、啓稜学院(けいりょうがくいん)のエースで4番の青龍寺(せいりゅうじ) 翔冴(しょうご)…。なんでこんなところに…!?』

青龍寺『あ?知らねーな。誰だオマエ。ザコが俺に口聞くんじゃねえよ。殺されてえのか。』
余語『くっ…。』
桜沢『おいおい…。相変わらずだな。ドラゴン。もうちょっと気使ってやれよ。かわいそうだろ。』

青龍寺『サク。オマエずいぶんと真面目なやつになっちまったじゃねえか。なあ！』

（ガンっ！）

青龍寺が椅子を蹴った。
回りの人も驚いている。

桜沢『おいおい…。どうしたんだよ…。』

青龍寺『帰る。じゃーな。』

そう言って青龍寺は帰ってしまった。

余語『あいつ…初めて間近で見たけど、あんなに荒れたやつなんだな。』
桜沢『最近は特にヤバイらしい。なんたってあいつ一人で春のセンバツをもぎ取ったのに仲間の不祥事で出場できなくて…その不祥事を起こしたやつはドラゴンにシバかれたらしい。まあ表には出てないがな。』

Ｎｏ．５３：厄介なタイプ（前書き）

今日は秋季リーグ一次予選で愛知の名門、中京大中京と試合をしました！

あっ、申し遅れましたが、自分は現役高校球児です？
ちなみに一年生です？

野球は小学校２年生から始めました？

中京大中京との試合…

中京	一	１	１	４	２	１	２	５	一	１６
自軍	一	０	１	２	０	０	０	０	一	３

見ての通り、七回コールドです？
いやぁ…

自分は２番キャッチャーでスタメンだったんですが、

飛ばしますね～中京打線…

てか俺らの先発ピッチャーは一年生左腕だったんですけど７イニングを一人で投げ抜いて四死球の数…まさかの、１６個？？

やばい。制球難過ぎる？？

特に今日はやばかった…
もはやピッチングじゃない〜

自分の高校は愛知の中ではわりと進学校？
ちなみに名古屋市立です？

中京大中京との試合
感想は、楽しかった？？？

てか、キャッチャーやってる人に質問？なんですけど、
左ピッチャーのインコース（右打者）を捕球するとき、クロスファイヤーになるじゃないですか。
そのとき球威を潰すように思いっきり捕球するんですけど、そのとき左手の親指が痛くなりませんか？
単に自分のキャッチングが下手なだけかもですが…

俺もなる？
とか
いや、俺はいたくなったことないよ？

とかある人がいたら、回答をお願いしますm（．＿．）m

あっ…
なんか大敗にイライラしてて長文になってしまいました…m（．＿．）m

ごめんなさい？

では、本文へ！

Ｎｏ．５３：厄介なタイプ

鬼頭（初球はほぼ１００％真っ直ぐ。コイツの制球難はそう簡単には改善されてないはず。）

初球、
ビュッ！！

鬼頭（予想通り！外角ストレート！）
ゴグッ！

鬼頭（！？）

（カン！）

『打球はセカンドへ！セカンドの小山が軽快にさばいてワンナウト！』

鬼頭『くそっ！！ツーシームか！なかなか厄介なボール持ってやがんな…。』

（カキン！）

『２番の慶野もショートゴロに打ち取られ、これでツーアウト！２球でツーアウトを取りました、上社西高校のエース朴昌圭。』

『3番、ピッチャー、大場くん。』

大場『2球でツーアウト…。少しばかり粘るようにしないと相手のリズムになっちまう。鬼頭さんが打ち損じたのはツーシームって言ってた。そして今の文哉が打ち取られたのも恐らくツーシーム。ツーシームが生命線…。だったらその生命線のツーシームが来る前に…』

『叩く!』

(パキーンッ!)

『大きいぞ!入るか!?入るか!?』

ボサッ!

『入ったーっ!3番エースの大場の今大会4本目となる本塁打が飛び出した!これで同点!邦南高校、取られたあとすぐに同点に追い付きました!!』

『4番、キャッチャー、西口くん。』

朴昌圭『今ノアイツ、狙ッテタノカ？』

朴昌秀『マチガイナイ。ショキュウカラアノスイングダカラナ。ヤマヲハッテタノハマチガイナイ。』

朴昌圭『アイツダケハ、次以降モ要注意シナキャナ。』

朴昌秀『アア。オマエノストレートヲハツミデウツンダカラタイシタモノダ。オマエノクセダマハソウカンタンニハジャストミートデキナイ。トニカクキリカエロ。』

朴昌圭『アア。心配スルナ。』

…

……

……

『ボール！！カウントツースリー！』

西口（俺にも早打ちさせてくると思ったら、結構緻密に攻めてくるな…。次はなんだ…？今まではオールストレートだ。そろそろ決め球を見せてきもいい頃だが。）

ビュッ！！

西口『ストレート！』

ギュ！

ゴン！！

西口『くそっ。手がしびれるぜ。』

鬼頭『なにも打たせて取る術はツーシームだけじゃないってか。』

西口『高速シュート…。それもかなり速球に近いスピードだ…。』

副島『こういうタイプが1番厄介かもね。この手のピッチャーは安定感抜群だ。』

鬼頭『3年前からだいぶ投球スタイルを変えてきたな。めんどくさ

いタイプのピッチャーになりやがって。』

慶野『打たせて取るタイプ…上社西の打線もリズムがいい。打撃がいいのは果たしてこのリズムがいいところにあるんじゃないか。』

大場『それもあるだろうな。守りから攻撃にリズムを作る。そういうチームだろう。』

パラ…パラパラ…パラパラパラ…

大場（まっ。雨の試合はもう経験済みだ。その点で若干有利なのは俺らだ。）

準決勝を懸けた対決、
邦南ＶＳ上社西

邦南は天気を味方につけることができるかー！？

Ｎｏ．５３：厄介なタイプ（後書き）

感想お願いします？

Ｎｏ．５４：大乱調…どうすりゃいいんだ！！

『2回の表、上社西高校の攻撃は、5番、ピッチャー、朴昌圭くん。』

『さあここで韓国三つ子クリーンナップの5番、朴昌圭が打席に入ります！このトリオの中で1番の長打力を誇る打者です！』

（バン！！）

『ボール！！ツー！』

野中『先頭バッターにボール先行か。球も走ってない上に、コントロールも定まらない。』

川越『しかも相手が強打の上社西だからな。ボール先行で自分を苦しめてそのあとストライク欲しさに球を置きにいって長打なんかくらう、ってのは避けたいが…。』

野中『こういうときにバックがピッチャーを助けられるといいんだが…邦南の守備力じゃなんともな…。』

川越『5回戦の大峰明館戦では大場がバックを引っ張ってなんとか勝った。今度はバックがピッチャーを助ける番だ。』

カキーン！

『大きい！打球はかなりあがった！レフトの木村くん、落下地点には入れるか！？』

『風が強い…！あぁ！！捕ることができない！！風に流された打球を捕球することが出来なかった！！打ったバッターは三塁へ！スリーベースヒット！！！！』

大場（…。）

川越『今のはなんとか捕ってピッチャーを助けたかったな…。』

野中『ああ…。この回、終わるのはまだまだ長そうだ。』

『6番、レフト、野村くん。』

『さあここで今大会のラッキーボーイ、４回戦と5回線で二試合連続でサヨナラタイムリーを放っているチャンスに強い野村がバッターボックスに入ります！』

西口（ノーアウト三塁。一点は仕方ない。四球でランナー溜めるの

は勘弁…。）

大場（正直今のは捕って欲しかった…。道のりはまだまだ険しいぜ…。）

野村（ピッチャーは前の試合と比べたら球威は大分ない。球速も前の試合より１０ｋｍ／ｈほど落ちている。つまり、苦しんでいる。だから…粘るべきだ。この回、まだまだ何点でもいける。）

（バン！！）

『ボール！！』

西口（落ち着いて…翔真くん。）

（バン！！）

『ボール！！ツー！』

西口（まずい。この流れは…）

ビュッ！！

野村（外角やや真ん中、ストレート！）

カキーッン！！

『打球は右中間を割る！！』

野村『よっしゃぁ！』

『三塁ランナーはもちろんホームイン！2回表、上社西高校、ノーアウト三塁から野村の右中間へのタイムリーツーベースで一点勝ち越し！！２－１、取られたあとすぐに突き放しました！！』

大場（くそ…。甘くなっちまった。）

西口（ここにきてさらに大場さんが若干自分を見失ってる…。さらにいつもよりリリースポイントが早くなって、球が高めに、そしてバッターに見切られやすくなった…。くそ…。他にピッチャーはいないか…？）

西口が邦南のベンチを見る。

小宮と目が合うが、小宮は左足首を故障している。

西口（いるわけねえか…。そもそも小宮をあーしたのはオレだ…。だったらせめて俺が今の大場さんをうまくリードするしかない…。悪いのはオレだ。だけど…どうやって…。今の大場さんをリードすればいいのか…。）

『7番、ファースト、岸くん。』

西口（ここから2番の岩見まで左打者が続く…。大場さんは左投手だが左打者のほうが被打率が高い…。くそ…。くそ…。とりあえず…アウトロー真っ直ぐ…。…。）

ビュッ！！

カキーン！

『打球はセンターへ！！7番岸も繋いでノーアウト一三塁！』

野中『今のも打球が痛烈すぎて三塁ランナーが還ってこれなかった。序盤だがこりゃ本格的にやばいね。』

川越『もはや下位打線にもいとも簡単に打たれてるし。』

西口（今のは注文通りのアウトロー真っ直ぐ…。それを7番バッターにあっさりセンター返しされる…。もうどうすりゃいいんだ！！！）

大場（西口…悪い…。）

『8番、ショート、榊原（さかきばら）くん。』

……

……

……

バン！！

『ボール！！フォアボール！』

『なんとストレートのフォアボール！ピッチャー大場くん、制球が定まりません！！』

川越『８番バッターにストレートのフォアボール…。』

野中『しかもまだノーアウト。さらには満塁だ。』

『９番、セカンド、小山（こやま）くん。』

ビュッ！！

『デッドボール！押し出しのデッドボール！これでさらに一点を追加して３－１。』

西口（８番、９番に連続四死球…。）

『１番、サード、正親くん。』

西口（ここでこの１番バッターか…。）

片野（邦南高校監督）

『伝令じゃ。』

『さあここで邦南高校、一回目の守備のタイムです。』

西口がマウンドへ向かう。

西口（どうすりゃいいんだ…。）

雨も降る、大場の調子も最悪。
邦南は準決勝にいけるのか…？

Ｎｏ．５５：ピッチャーは愉快なヤツ（前書き）

今回の話は結構自分的に面白いです？（笑

是非読んでください？

Ｎｏ．５５：ピッチャーは愉快なヤツ

『さあここで邦南高校、一回目の守備のタイムです。内野陣が集まります。』

大場『悪ぃ…。言い訳したくねえけど…今日、全然ボールが走ってくれねえ…。』

西口『ですね…。審判もいつもより判定が辛いですし…。結構厳しいですね…。』

副島『そんな弱気で良いのか！？審判なんか関係ねえ！自分を信じてしっかり腕振りゃ良いじゃんか！！』

島谷倫『そうだ！！ど真ん中でもいい！俺らが守ってやる！！』

『『『そんなこと、できたら今こんなに苦労してねえんだよ！！！！！！！！！！！！！！！自分を信じてしっかり腕振りゃ良い？簡単に言うんじゃねえよ！腕振るのなんかいつも意識してやってる！で

も今日はいくら振ったって球が思い通りにいかねえんだっつーの！！ど真ん中でもいい！？なめてんのか！？相手は上社西の打線だぞ！？甘い球いって長打食らってるからこうなってんだろ！？オマエら…勝手すぎるぜ…。自分達は大して守ってもくれねえくせして…いつも俺一人我慢して…踏ん張って…。』』』

大場が今の二人の言葉に対して、今までのものがすべて吹っ切れたように言った。

ポイッ！

大場が持っていたボールを遊撃手の島谷倫暁に渡した。

松坂『ど…どうした？』

大場『そこまで言うならお前が好きに投げてくれ。俺んとこに打たせてくれや。守ってやるから…。』

島谷倫『え、お…おい！』

『すみません。』

横から声が聞こえた。

氷室『ぼ、ぼく…前からずっとピッチャーがやりたかったんですけど、投げていいですか？』

松坂『…は?』
副島『フォ…?』
大場『……?』
島谷倫『な、な、なにぃ!?』

西口『クスッ。』

氷室『あの~、ダメですか…?』

松坂『ダ、ダメに決まってんだろ!俺らの高校野球生活が懸かってんだぞ!』
西口『良いんじゃないんですか?』

松坂『え…?』

西口『打たれると思いますが。』

副島『いや…まずストライク入んないだろ…。』

西口『その可能性は低いでしょう。コイツ、キャッチボールとか見る限り、案外コントロール良いんですよ。どうせ誰が投げたってストライクなら打たれるなら、氷室でオッケーっしょ。』
大場『賛成。』

島谷倫『ちょ…エースのお前がどうしたんだよ!』
副島『いいんじゃないですか?打球が飛んできたほうが試合を楽しめるし。』

大場（何が楽しめるだ。人の苦労も知らずに綺麗事ばっかいいやがって。）

西口『島谷さんもいいですよね？』

島谷倫『く…ああ。』

西口『松坂さんは？』

松坂『みんながそうなら…俺も…。』

西口『よし！満場一致でピッチャーは氷室に交代！！』

『邦南高校、シートの変更をお知らせします。』

――守備位置の変更―――

大場：1→3　―

氷室：3→1　―

――――――――――――――――

慶野『はぁ！？！？！？！？！？！？』
木村『氷室がピッチャー！？！？！？！？』
鬼頭『Ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ！！』

西口『変化球は持ってるか？』
氷室『うんっ！コレッ！』

そう言って握りを見せてきた。
カーブの握りだ。

西口『カーブか。とりあえず投球練習の７球中２球は試してみろ。それからカーブのサインを実際に出すか出さないか考える。まあ、基本的にストレートしか要求しない。』

氷室『ちょっとちょっとちょっと！！勝手に話進めないでよ！これ、カーブじゃないよ！』

西口『…は？どうみたってカーブだろ。その握りは。…じゃあなんの球種なんだ？』

氷室『フフフ…。コレはね、コレはね…。聞いてビックリしないでね。』
西口『さっさと喋れ。』

氷室『このボールの名前は、【　Ｙ・Ｈ　－ＬＯＶＥ　ＺＵＫＫＹ　ＵＮ－　ボール　】って言うんだよ！』

西口『ワイ・エイチ－ラブ　ズッキュン－ボール？』
氷室『そう。自作のオリジナル変化球さ。ちなみにＹ・Ｈってのは氷室（ひむろ）　佑介（ゆうすけ）のイニシャルを取ってるんだからね。』
西口は口を大きく開けてポッカーンとしている。
氷室『じゃ、投球練習しよっか。』
西口『もう。呆れてものが言えないぜ。まあそのなんとかボールは正直たぶんカーブだ。』
氷室『カーブじゃないもん！【Ｙ・Ｈ－ＬＯＶＥ　ＺＵＫＫＹＵＮ－ボール】だもん。』
西口『はいはい。Ｍ・Ｊ－ＬＯＶＥ　注入－ボールね。』
氷室『マイケルジャクソンじゃないし！！楽しんご（芸人）でもないわ！！！！！！
【Ｙ・Ｈ－ＬＯＶＥ　ＺＵＫＫＹＵＮ－ボール】だわ！！』
西口『わかったわかった！わかったから一つ言わせてくれ！』
氷室『もう！！なんだ～？』
西口『誰よりも元気にピッチャーやれよ！！それだけ！』
氷室『当たり前だろ！ピッチャーなんかやっちゃったら…二学期からのクラスで…女の子から…ラブレターが…。ウフフフ。二学期が楽しみでしょうがねえぜ！』
西口『そうだ！！二学期からオマエはモテモテだ！それをよく想像

してピッチャーやれ！あと、オマエの大好きな佳美(よしみ)ちゃんはフォアボール出す男が大の苦手らしいぞ！』

氷室『え！？佳美ちゃんが！？…こりゃ…死んでもフォアボールは出してはいけないようだな…。』

西口『ああ。頼むぜ。あとな、佳美ちゃんは、打たせて取るピッチングをするピッチャーがタイプらしいぞ！』

氷室『のあ！？マジでか！！貴重な情報ありがとう！！』

西口『佳美ちゃんにいい姿見せてやれよ！（※ちなみに佳美ちゃんは球場には来ていません。）』

氷室『任せろ！燃えるぜ！バーニング！』

西口が戻っていく。

そして座る。

西口（ったく。相変わらず、調子のいいやつだ。つか、アイツが佳美ちゃんのこと大好きって知っててよかった。ははは。）

氷室が投球練習に入る。

独特のヘンテコ投球モーションから…

ヒュッ！

スパン！

西口『ナイスボール！』
西口（遅っ！）

氷室『次！Ｙ・Ｈ－ＬＯＶＥ　ＺＵＫＫＹＵＮ－ボールね！』

ヒュッ！

カクッ！スパン！

西口『またまたナイスボール！！』
西口（思ったよりキレのいい縦のカーブか。案外使える、かも。）

…

…

『プレイっ！』

島谷倫『頑張れよ！氷室！』
氷室『おうっ！』

予想もしなかった氷室の登板は、どうなるのか！？

Ｎｏ．５５：ピッチャーは愉快なヤツ（後書き）

感想もらえると嬉しいです（＝（　ー（　＝）

No．56：Y・H－LOVE　ZUKKYUN－ボール

『さあ2回途中で上社西高校、邦南高校のエース大場をノックアウトしました！尚ノーアウトフルベースで好打者の1番バッター、正親くんが打席に入ります！代わった氷室くんは今大会初登板ですがこの悪い流れを断ち切ることができるか！？』

ドクッドクン…

氷室の心臓が高鳴る。

氷室（しっかり撃ち取って、いや…絶対に撃ち取って…）

氷室が独特のヘンテコ投球モーションから第一球を投げる。

氷室『佳美ちゃんを振り向かせるんだぁ！』

バーン！

正親『…む！？』

『ストライク！ワン！』

《　89km／h　》

西口『ナイスボール！！』

正親（こりゃ…球速以上に遅く感じるな。相当伸びてないボールだ…。）

正親がバッターボックスの1番前に立つ。

西口（まあ…。そうなるわな。打たれたら…しょうがねえか。）

2球目…

ヒュッ！

正親（思いっきり…フルスイング！！）

カキーン！

『遅いストレートを痛烈に引っ張ったぁーっ！打球は切れるか！？切れるか！？』

『ファール！ファール！』

『惜しくもファールです！いやぁ、しかしいい打球を飛ばします。上社西高校のリードオフマン、正親（おうぎ）　勝成（かつなり）』

正親（あの投げ方、そしてアバウトなコントロール、さらには遅いストレート。完全にピッチャー経験は浅い。たとえ変化球を持っていようとも、確実に俺なら仕留められる！さあこい！！）

西口（何がなんでも打たせてとりたい。見せ球は不要だ。三球で片付ける。）

西口が縦カーブのサインを出す。

（氷室曰く、【Ｙ・Ｈ－ＬＯＶＥ　ＺＵＫＫＹＵＮ－ボール】）

氷室『よっしゃあ。遂に禁断の魔球…Ｙ・Ｈ－ＬＯＶＥ　ＺＵＫＫＹＵＮ－ボールを解禁するぜ…。くっくっく。（※実際は縦のカーブです。）』

西口（よし！こい！お前のＭ・Ｊ－ＬＯＶＥ　注入－ボール！）

ヒュッ！

シュルシュル…ピュッ！

正親（なんだ！？）

西口（よし！引っ掛かったな！）

氷室（佳美ちゃん…佳美ちゃん…佳美ちゃん…！！！！佳美ちゃん

の為に撃ち取られてくれ！）

正親（案外キレがいい…！！くそ…。）

（バットが止まんねえ…。）

カスン！

『バッターの正親、変化球に対して泳いでしまった！ちょこんと当てただけの打球はサードへ！！サードの松坂くん、捕球してすぐサードベースを踏む！そしてセカンドへ送球！！！！セカンドの副島くんも流れるように一塁へ送球！！！！！一塁の判定はどうだ！？』

『アウトォォ！』

『なんとまさかの三重殺（トリプルプレー）成立！！！！！！！！！！邦南高校の２番手の氷室くん！ノーアウト満塁からの登板でしたが、なんとトリプルプレーでこのピンチを退けました！！』

氷室『どんなもんじゃぁーい！！！！！！！！！！！！ダァァァァァァァ！！！！！！！！！！！！！！！』

氷室がマウンドの上から空に向かって、拳を突き上げた。

『見てください！！この闘志溢れるガッツポーズ！これは2回の裏の攻撃も乗っていけそうです！！』

西口（まったく。やりやがって。）
小宮（なんか氷室くんがピッチャーってスリル満点で楽しいね。）
西口（ああ。これで流れが変わるといいな。）

『2回の裏、邦南高校の攻撃は、5番、ピッチャー、氷室くん。』

嫌な流れを断ち切った氷室のピッチング！
この男が今度は先頭打者としてバッターボックスに登場する！！

Ｎｏ．５７：暴走こそが氷室佑介クオリティ（前書き）

今日2話目です♪

Ｎｏ．５７：暴走こそが氷室佑介クオリティ

ポピィ！ポピィ！プブー！
ポピィ！ポピィ！プブー！
ポピィ！ポピィ！プブー！
ポピィ！ポピィ！プブー！
ポピィ！ポピィ！プブー！

氷室『ん？』

副島『この音は…？』
木村『ラッパ？』
慶野『あれ？なんで？』

藤武『僕が兄貴に頼んで来てもらうように言いました。』
小宮『あっ！そういうことね！』
西口『何がそういうことなんだ？』

藤武『僕の兄貴、吹奏楽部なんですよ。まあもう最後のコンクールは終わっちゃって引退してる身なんですけどね。３年生だけ最後の思い出作りのために来てくれたみたいで。最近猛練習してくれてたらしいです。』
松坂『へぇー。でもうちの吹奏楽部って超スゴいって事は期待していいのか？』
西口『何がスゴいんですか？』

小宮『拓磨知らんの!?邦南高校伝統の吹奏楽部のこと!』
西口『なんや。知るわけないやん。』
慶野『邦南の吹奏楽部はね、全国大会常連で全国制覇を通算で7回もしてるんだよ。今年は惜しくも準優勝だったらしいけど。』
鬼頭『だから当然部員も多かった。一学年で40人はいるはずだ。だから3年生だけでも迫力十分ってわけ。』
藤武『そういうことです。応援はあった方が燃えるでしょ!』

氷室『あれは吹奏楽部…。たしか…佳美ちゃん（1年生）も吹奏楽部だ!って事は来てくれてる…♪』

（※佳美ちゃんは1年生なので来ていません。）

『かっとばせー!佑介!』

島谷倫『あれ?いつもより声援が大きいような…大きくないような…。』
島谷涼『俺がサッカー部とラグビー部に招集かけておいたよ。』
副島『お前ら…。』

島谷涼『控え選手でもやれることはたくさんありますから。』
藤武『絶対勝ちましょう!』

大場（1年は呑気でいいもんだ…。次の回以降氷室が何点取られるか心配だな…。俺は…。）

氷室『燃えるぜ…。こんな声援の中、できる高校スポーツなんてまずないからね…。燃えるぜ！佳美ちゃんにいい格好見せるためにも、』

『初球！攻撃開始！！！！！！！！！！！』

『少し振り遅れたが真芯で捉えた！！！！！！打球はライト線際！フェアだ！打った氷室は二塁へ向かう！おーっと！ライトの岩見、クッションボールの処理に手こずっている！これを見て氷室は二塁も蹴る！一気に三塁へ向かう！ライトの岩見、ボールをセカンドの小山にわた…あっと！中継への送球が少し乱れた！！』

『ワァァッッァ！』

『あーっ！中継への送球が乱れた隙を狙って氷室が三塁を回っている！！一気にホームを狙うぞ！これは少し暴走気味だ！中継にはいったセカンドのカバーをしていたピッチャーが本塁へ送球！！！！クロスプレーは！？バッターランナー氷室はヘッドスライディング！！！！！！』

『ア、アウトォォ！』

『アウトだ！』

『セーフセーフ！』

『いや、セーフだ！！キャッチャーの朴（パク）昌秀（チャンス）、クロスプレーの際にボールを落球してしまった！！一点を返した！！これで３－２！１点差に詰めてきた！！』

副島『ナイスラン氷室！！』

大場『なにがナイスランだ…。キャッチャーがしっかり取ってたら完全にアウトだろ。暴走がたまたまセーフになっただけ。ノーアウトでやるプレイじゃない。』

『まっ。良いんじゃねえか？』

大場『鬼頭さん…。』

鬼頭『あいつ、一年坊のくせして、なかなか面白いヤツじゃん。俺次の塁を積極的に狙うの、嫌いじゃないぜ。』

大場『氷室佑介…か。』

氷室『大場先輩!!まだまだ諦める点差じゃないですよ!!いきましょう!甲子園!暴走こそが氷室佑介クオリティの真骨頂です!!』

大場『ポジティブなやつ。てか、諦めてねえし。』

鬼頭『なあ翔真?お前、昔のこと忘れてないか?お前がｂａｓｅｂａｌｌ始めた頃のこと。』

大場『どうしたんです?』

鬼頭『初心忘れべからず!そういうことだ!』

その後、邦南は打線が沈黙。
打たせて取るピッチングをする朴昌圭から得点圏にすらランナーを置けない。

鬼頭『くそぉ…。』
副島『ドンマイドンマイ!切り替えていこうぜ!』

鬼頭（速球派は得意なんだけど…。こういうパッとしない技巧派の小さくピュッと曲がるような変化球を何個も持ってるやつは中学の頃から苦手なんだよな…。）

…

『空振り三振！！！氷室、カーブで空振りの三振に切ってとりました！！』

氷室『シャァァァ！！！！！！！！！』

大場『氷室…やるな…。』

そして氷室がなんとも気味の悪いテンポで投球して、ピンチも多少ありながらなんと6回まで無失点。

持ち前の遅いボールで強打の上社西を見事に沈黙させる。

『6回の裏、邦南高校の攻撃は、1番、ライト、鬼頭くん。』

『いやあ。先程から少々雨が強くなってきました。7回が終了しない時点で降雨コールドゲームとなりますと、再試合となります。』

ザーザーザー！！！！！！

吹奏楽部『あ！今日天気予報見るの忘れてて傘持ってきてねえ！！』

『俺も！！』

『ウチもない！！』

『ヒャー！』

スタンドは少々混乱気味。

鬼頭（ここまで球数は５イニングを投げて４７球。一イニングにコイツは平均して１０球も投げていない計算だ。魅せてやるよ。過去に至高の７人組と言われたうちの１人、鬼頭博行の実力を！！）

『１番の鬼頭くんに朴（パク）　昌圭（チャンキュ）が投げるーーー』

次回、鬼頭が魅せる！！

Ｎｏ．５７：暴走こそが氷室佑介クオリティ（後書き）

すみません…
ちょっと夏休みの宿題に本気出したいので夏休み明けまで更新できません＞（＿＿）＜

ご了承ください？

Ｎｏ．５８：野球ってのはな。（前書き）

朴昌秀のセリフは読みづらいです？

Ｎｏ．５８：野球ってのはな。

カーン！

『ファールボール！！！！！』

『いやぁ～本当に良く粘ります！次が１６球目！カウントはフルカウント！！』

慶野（すげ…）

ネクストバッターサークルの慶野は鬼頭の芸術的とも言えるカットにすっかり見とれている。

朴昌秀（シツコイヤツダ。）

朴昌秀がカットボールのサインを出した。

鬼頭『この試合、スライダーは温存か？』

鬼頭が朴昌秀に話しかけた。

朴昌秀（コイツ…ナゼスライダーノソンザイヲシッテイル？コノタイカイノタメニイチネンイジョウ昌圭ニハオンゾンサセテキタノニ。）

鬼頭『もう一回聞くよ。中学のとき、よく使ってたスライダーは温

存かい？』

朴昌秀『オマエ、ナニモノダ？』

鬼頭『日本語喋れるようになったんだ。よく日本に来て野球やろうと思ったね。覚えてる？中学の世界大会１回戦でやりあったんだけどさ。』

朴昌秀『オマエ、アノトキノメンバーノイチインカ。ダジュンハナンバンダッタンダ？』

鬼頭『まあ６番だな。監督もエースのオレには打撃ではあんま無理してもらってほしくなかったみたいだし。まあその分、ピッチャーとしては随分と潰されたけどね。』

朴昌秀『アノトキノエースノヤツカ。ウチノ朴昌圭ハアノシアイデミゴトナピッチングヲシテイタオマエノトウキュウスタイルヲマネシテイタ。』

ビュッ！！

カーン！

（ファールボール！）

『１６球目もファールでカウントはフルカウントのまま！！粘ります！１番の鬼頭！！』

鬼頭『中学の頃のオレのピッチング？笑わせないの。俺はこんなバッターをかわしていくピッチングなんかやってた覚えはないね。俺はストレートと変化球のコンビネーションを軸に三振をとりまくるタイプだったと思うけど？』

朴昌秀『アイツモサイショハソレヲメザシテタ。シカシアイツハオ

マエトチガイ、ソノピッチングスタイルガマチガッテイルコトニキガツイタ。』

鬼頭『ハハハ。雑魚がオレの批判なんかしやがって。事実お前らは敗者、オレらが勝者だ。負け惜しみにしか聞こえねえな。』

カーン！

『ファールボール！！』

朴昌秀『ヒトリノエースニタヨリガチナコウコウヤキュウデハエースノデキガシアイヲオオキクサユウスル。ソンナナカデサンシンシカネラワナイヨウナトウキュウハイノチトリダ。モシフチョウダッタラドウスル？サンシンガウバエズレンダヤフォアボールガツヅイテシマッタラドウスル？ソレニキヅイタ朴昌圭ハミズカラコノピッチングスタイルニシンカシテイッタ。』

鬼頭『いくらでも言ってろ。』

カーン！

『ファールボール！！』

鬼頭『どう？決め球がないと辛いでしょ？アイツみたいに決め球がないと強い相手は試合終盤に慣れてきたらいつも通りの打撃ができるようになるもんなんだよ。別にヒット打てって言われたら打てるけどさ、こっちの方が嫌らしいでしょ？この雨だし、あんたら勝ってるんだからノーゲームにはなりたくないから早く七回の攻防を終わりたいとか思ってるんでしょ？』

朴昌秀『ソンナコトハベツニオモッテイナイ。オマエミタイニカットシテルイニデヨウナンテウチノメンバーハオモッテナイカラナ。』

鬼頭『あんたらわかってないね。野球ってやつを。』

バン！

『ボール！！フォアボール！！』

鬼頭『もっと野球について語り合いたかったのに残念だ。でもお前らが逆転されないうちに一つ言っておくよ。』

朴昌秀『ゴカッテニ。』

鬼頭『野球ってのは、相手にとって嫌なプレイを積極的にやっていくスポーツなんだよ。』

朴昌秀『オレハタダシイ。マチガッテイルノハオマエダ。』

『2番、センター、慶野くん。』

一塁ランナーの鬼頭がかなり大きなリードをとる。

鬼頭『ご理解してもらえなくて残念だなぁ。こういうやつには身をもって教えてあげなくちゃね。』

藤武『…。…！？』

藤武『鬼頭さん…目が…』

続く！！

Ｎｏ．５９：桁外れの洞察力

藤武『鬼頭さん…目が…』
一塁ランナーコーチの藤武は鬼頭の殺気に満ちた鋭い目に驚いている。

『いやぁ～大きなリードをとります。一塁ランナーの鬼頭くん。』
朴昌秀（バカメ…。昌圭ノ牽制ヤクイックノジツリョクハカナリアル。）

昌秀が牽制のサインをだす。

昌圭（狙ッテヤル。大事ナノハ焦ラスコト。）

ビュッ！！バン！

『セーフ！』

昌秀（ヨクセーフニナッタナ。ホメテヤル。）
もう一回昌秀が牽制のサインを出した。

牽制が来ても鬼頭のリードの大きさは変わらない。

ビュッ！！バン！

『セーフ！』

昌秀（ナニ！？サッキヨリモハヤクモドッタダト？）

鬼頭『牽制は上手いって評判だったのに、いざランナーとしてでると全然上手くないじゃん。こりゃ、あと2歩いけるな。』

昌圭（クソッ、更ニリードガデカクナッテヤガル。舐メヤガッテ…。）

昌秀（サシコロセ。）

ビュッ！！バン！

『セーフ！』

鬼頭『うんうん。まだ出れるね。』

ガッ！ガッ！

鬼頭がもう一歩リードを大きくした。

端から見れば、なぜあんなにリードしているのにピッチャーは牽制で刺せないのか？と思う状況だ。

副島『おい…さすがに出すぎじゃ…』

大場『大丈夫です。鬼頭さんはピッチャーの足を見てリードをとってるんじゃない。ピッチャーの上半身を見てリードをとっているんです。』

松坂『どういうことだ？』

小宮『並外れた観察力、洞察力でピッチャーの心理を読み取って、牽制が来る少し前にピッチャーの心の変化を読み取って塁に戻るんですよ。あの人は。だからあの人は盗塁を仕掛けるときも、完全にモーションを盗むし、ランナーとしてあの人に勝る人間は一人しか

いないんですよ。』
島谷倫『なんだ？一人って。』

小宮『S・6の1人、静岡の晟西高校の水仙です。鬼頭さんはあいつをランナーに出したら一点相手に渡すようなもんだっていってました。あいつだけがオレが認めたランナーだって言ってました。』

『ランナー走った！！』
小宮『ほら、完全に盗みました。』

カン！
『エンドランだ！！打球はセカンドへ！！二塁は無理、一塁へ送球ワンナウト！！あーっと一塁ランナーの鬼頭くん、サードまで向かうぞ！！セーフセーフ！なんとセカンドゴロでサードまで到達です！！これで一死三塁！』

副島『すげ…今ので三塁かよ…。』

『3番、ファースト、大場くん。』

カキーン！

『打球はセンターへ！！これはタッチアップには十分か！？』

邦南高校、同点なるか！？

Ｎｏ．６０：強肩センター

『これは犠牲フライには十分か！？センター朴昌龍（パクチャンヨン）、落下地点に入った！！』

慶野『よし！』

木村『同点や！！』

パシッ！！

『ゴーーッ！』

『センター2歩後ろから前に来てとってバックホーム！！！！』

鬼頭『…ん！？』

『これは…素晴らしい送球が返ってきた！！！！！！！！！！ストライク送球だ！！！！！！！！』

ズザザザーッーッ！

鬼頭『…クソッ！』

『アウトォォーッ！！』

『タッチはアウトだ！！センターの朴昌龍、素晴らしい送球でホー

ムをアウトにしました！！これでスリーアウトチェンジ！！！！！
点差は一点差のまま、七回の表、上社西の攻撃に移ります。』

鬼頭『わりぃ…。みんな…。帰ってこれなくて。』
氷室『いいっすよ～♪まだまだ試合は終わってませんから！！もっともっと楽しんで！！僕らの野球をしましょう！！うっほほーい！！』

西口『今日のあいつ、やたらとテンション高いな。まぁあーいうやつが1人いるだけで違うけど。』
小宮『みんな、試合に出られない僕の分まで頑張ってくださいよ！』
木村『おう！』
副島『ヒロ！切り替えろよ！オマエで帰ってこれなきゃだれも帰ってこれなかったって！』
鬼頭『おう！』

藤武『てかセンターのアイツ、すげー肩してるな…。』

氷室『ウェイ！ウェイ！イエーイ！』

小宮『氷室くん相当ピッチャーが楽しいみたいだね。』
西口『だな！よし！守るぞ！』

大場（…。…。…！！！！）

―――――――――――――――――――――――――――――――――

鬼頭『なあ翔真？お前、昔のこと忘れてないか？お前がｂａｓｅｂａｌｌ始めた頃のこと。』

大場『どうしたんです？』

鬼頭『初心忘れべからず！そういうことだ。』

――――――――――――――――――――――――――――――――――

大場『…！！』

大場がハッと顔をあげた。

大場『忘れてたよ。鬼頭先輩。』

大場が忘れていたこととは…！？

次回に続く！！

Ｎｏ．６１：大場翔真の過去（前書き）

なんか自分で書いてて泣けてきました？

Ｎｏ．６１：大場翔真の過去

『七回の表、上社西高校の攻撃は、３番、センター、朴昌龍（パクチャンヨン）くん。』

『さあ打席にはさっきセンターから好返球で同点を防いだ朴昌龍。今日は４打数３安打と当たっています！』

氷室『とぉっ！』

朴昌龍『しょきゅうをたたく！！』

カキーンっ！

『大きいっ！！！！これは伸びるぞ！越えた越えた！！バッターランナー朴昌龍は二塁ストップ！！七回の表、上社西高校の攻撃、この回先頭の３番朴昌龍のツーベースヒットでいきなりノーアウトランナー二塁です！！』

氷室『チックショー！！めっちゃくちゃいいボールだったのに！！』

西口（確かに、今のはいいボールだった。落ち込まなきゃいいが…）

氷室『みんなー！注目注目！！！！！！！』

副島『ん?』
島谷倫『どうしたんだ?』

氷室『いきなりツーベースヒットを打たれまして、申し訳ないが、これからも打たせてとりたいと思っています!!どうか守ってくだされ!!ハッハッハー!!』

邦南メンバー全員（※ただし氷室を除く）
『…、……、……は?』

大場『ったく、あいつのせいで、思い出しちまうじゃねえか。あのときの俺を…』

回想シーン←←

『ツーアウト!ツーアウト!』
『しっかり抑えろよ!』
『楽に楽に!』
『自信もって投げ込め!』
『まだ3点も余裕あるからな!』

安田（やすだ）　翔真（しょうま）『オッケー!!打たせてとるからな!!しっかり守ってくれよ!』

カキーン！

翔真『レフト！！！！！！！！』

坂田（レフト）『くそっ！』

打球はレフトの頭上を越えた。

『回れ！回れ！』

『カット！！カット！！』

結果はツーベース。満塁から二人のランナーが入って点差は一点差、翔真の所属するチームはわずか一点リードとなった。

そのときマウンドに立っていたのは、安田（やすだ）　翔真（しょうま）

今で言う、大場（おおば）　翔真（しょうま）

のことだ。

『タイムお願いします。』

『タイム！』

内野陣がマウンドに集まる。

山本(サード)『安田！まだまだ勝ってる！強気にいこうぜ！！』

杉山(ショート)『打たれるのはしょうがない！』

そして…

『おにぃ！次のバッターで仕留めるよ！』

この声の主は、

翔真『おう！わかってるって！慶大！』

安田(やすだ)　慶大(けいた)

翔真の一つ下の弟だ。

ちなみにポジションはキャッチャー。

そして…

『プレイ！！！』

カキーン！

慶大『ショート！！！』

杉山『あいよ！』

『アウト！！！』

翔真『よっしゃあ！公式戦初勝利！！！』

この安田兄弟は翔真が小学校４年生（慶大は小学校3年生）のときまで愛知ではなく、福岡にいた。
４人家族で、いつも明るく、とても仲の良い家族だった。
が、悲劇は突然起きた。

…
ブーブー！
悲劇の起きた日、慶大と慶大のお父さんは車でスポーツショップに向かっていた。

お父さん『慶大！新しいグローブの色は何色がいいんだ？』
慶大『んーと、今までは黒だったから、黄色がいいなぁ。』

お父さん『そうか、キャッチャーミットは高いんだから、大事にしろよ！』
慶大『うん！大事にする！』

そして…

お父さん『よし！帰るぞ！』
慶大『やったぁ！ありがとうお父さん！』

ブーブーブー！
二人が車に乗って家に帰るとき、遂に悲劇の時がやって来た。

お父さん『最近楽しいか？』
慶大『なにがぁ？』
お父さん『野球だよ！野球！！』

ブブー！ブブー！

慶大『うん！楽しい！！』
お父さん『よし！これからも…』

お父さんは一瞬固くなった。
そして…

ガラガラガッシャーン！

『救急車だ！！！！』
『早くしろ！！！！』
『お、おい！まさかこの軽自動車が大型トラックと正面衝突したのか！？！？』
『中の人は大丈夫なのか！？』

ピーポーピーポー！
二人は、病院に搬送された。

ドクターの懸命な努力も実らず…
『残念ですが…お二人ともに…もう二度と息を吹き返すことはありません…。二人とも…即死のようです…。』

お母さん『……。翔慶(しょうけい)…慶大…。』
翔真『お母さん…お父さんと慶大…どうしちゃったの…？』

お母さん『翔真、これからは二人で生きていかなくちゃならないの…。』

翔真『え…。それって…。』
お母さん『二人とも…死んじゃったのよ…。』

そのとき、翔真は何も考えられなかった。

Ｎｏ．６１：大場翔真の過去（後書き）

感想よろしくお願いします？？

Ｎｏ．６２：出逢いは運命

翔真の父と慶大が亡くなったとき、福岡にいたのは翔真たちだけじゃなかった。

当時福岡には、小宮哲都、それに西口拓磨の二人もいたのである。

小宮を野球に誘ったのは西口。
その西口を野球に誘ったのは翔真の弟、安田慶大。
そして慶太を野球に誘ったのは翔真である。

――――――――――――――――――――――――――――――
西口『もし暇なら一緒にキャッチボールしようよ！』
小宮『キャッツボール？』

西口『キャッツ？なにそれ？キャッチボールだよ！』

小宮『…。なにそれ？なんで僕なの…？』
西口『いつも一緒にキャッチボールやってる男の子が今日はいないの。はい！これグローブ！』
――――――――――――――――――――――――――――――
――
そして…

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

小宮『も、もう帰らなきゃ…。』

『おーい！！』

西口『あ、来た来た！！』

『遅れてごめん！』

小宮『え…あ…』
西口『遅いよ慶大くん！』
安田慶大『ごめん！ちょっとカブトムシの観察してて…。』
小宮『な、なんで慶大？』
安田慶大『あ！哲都！なんでここにいるの！？絵梨が寂しそうにしてたよ！』

小宮『はぁ。さみしがりやなんだから。じゃあ先に帰ってるね。』
安田慶大『うん！晩御飯の時までに帰るってお母さんに言っておいて！！』

小宮『わかったよ。』

テクテク…

西口『今の子、知り合い？』
安田慶大『うん。いとこだよ。今日は夏休みだしウチに泊まりに来

てるんだ。』

西口『へぇ…あの子、他になんかスポーツやってるの？』

安田慶大『たぶんなにもやってないよ。』

西口『そうなんだ！じゃああの子も野球誘おうよ！』

安田慶大『え…ホント？哲都、性格があんまり野球向きじゃないと思うよ。』

西口『まあ僕も野球始めてからお喋りになったし、あの子もきっと一皮むけると思うよ。』

安田慶大『わかった。じゃあ誘ってみる。』

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

そして…時は四年後、あの悲劇の時、

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

翔真の母『翔真、これから引っ越すの。場所はおじいちゃんたちのいる愛知にしようかと思ったんだけど…大阪に決まったわ。あと、これから翔真は【安田翔真】から【大場翔真】って名前になったのよ。ごめんね…。さあ行きましょう。』

翔真『う…うん。』

そして二人が車に乗ろうとしたとき…

『待ってよぉ!』
『そうだそうだ!待ちやがれ!』

そこにいたのは…
翔真『小宮…、西口…。』

小宮『相変わらず、よそっぽい言い方だね。』
翔真『まあいとこだからって特別扱いする必要もねえよ。』
西口『うぐ…うぐ…。』

西口は泣いていた。
翔真『どうして泣いてるんだ?元気出せよ。』

西口『…ゅ…。……な……。』

翔真『ごめん何て言った?聞こえなかったわ。』

西口『野球!絶対にやめるんじゃねえぞ!もしやめたら、もしやめたら…お前が慶大の兄貴だってことも帳消しだからな!!』

ダッダッダ…

西口は走ってどこかへ行ってしまった。
四年たって二人とも大分性格が変わった。

小宮『僕からもお願いです。慶大が野球をできない分…翔真が慶大

の分まで背負ってやってください！！お願いします！！』

翔真『バーカ。』

小宮『え…？』

翔真『お前らに言われなくたって背負っていくっての。まあ、野球はやんねえかも知れねえけど。』

小宮『…。』

翔真『でも…約束する！！　いつかまた、一緒に野球をしよう！その時は、敵か味方かわかんねえけど、いつか、いつか絶対、野球やろうな！！じゃあな！元気でいろよ！』

小宮『チッ。』

ブーン！

大場の二人は、空港に向かった。

小宮絵梨『もう福岡には帰ってこれないんだってね。翔真と翔真のママ。絵梨は慶大とももっとしゃべっていたかったな。』

小宮『ああ。また、野球…できるかな…。』

小宮絵梨『当たり前じゃん！だって拓磨、哲都、翔真の三人の出逢いは運命でしょ。運命ならまた必ず会えるときが来る。その時を待とうね。』

小宮『ああ。また、できるよな。』

小宮『よし！家にかえって素振りでもするか！！絵梨は病院だから

な！』

小宮絵梨『はーい。』

――――――――――――――――――――――――――――――

――――

続きます（笑

Ｎｏ．６３：照丘小ｖｓ南阪小

――――――――――――――――――――――――――――――

大阪に引っ越した大場の二人は、照丘（てるおか）小学校に転校してきた。

そこは大阪の軟式野球の名門中学、南阪中学の附属の南阪小学校があるところだ。

もちろん、後のＳ・６（中学まではＳ．７）と呼ばれるようになる面子がもろもろ揃っていて、さらにその至高の７人組に、さらに当時、【　悪童コンビ　】と呼ばれた双子の相当野球の上手い悪童までそろって、南阪の完成形だった。

が、南阪中学の時、悪童コンビが事情があり、南阪中学を退学し地元の中学へ転校してしまったので、南阪は７人組となった。

悪童コンビが退学しなければ、いまではきっとＳ．９と呼ばれていただろう。

話を戻して、照丘小学校。

翔真は野球をやるかやらないかで揺れていた。

入るなら小学校の部活に入ろうと思っていた。

そして、小学校の野球部を見たとき、ものすごいタラタラだった。

その時気持ちの低かった翔真は、厳しい世界に入るつもりはなかっ

たし、この野球部に入ることに決めた。
小学校の部活なのでやるのは水曜日、金曜日、日曜日だけだ。

その時の翔真は、野球がうまくなりたいというより、野球を楽しみたいという気持ちだった。

『ハッハッハ！！なんやそれ！！』
『アホやんけ！』
『うっさいわ！』
『ハハハハ！』
練習中は笑いが絶えず、公園でやってる野球と同じだった。
もちろん、この照丘小学校は弱かったし、翔真もこの頃の自分の野球に関しても、いまになっても後悔はしていないという。

そして小5の夏の小学生軟式野球阪神大会。
1回戦の相手は、なんとあの南阪小学校。
翔真はエースで4番だ。

南阪小はすでに地元では有名だったのでギャラリーもたくさんいた。
それまで練習試合では、楽しむことだけを第一に翔真は考えていたので、皆のために打たせていた。
が、今日は違った。
1番から9番まで隙のない究極の打線。
打たれて当然という妙な安心感。

そしてこの超強豪に自分のピッチングがどれだけ通用するか、試してみたかった。

このとき、翔真は小学校5年生。
練習でも当分ピッチング練習を本格的にはしていなかったので自分のからだの成長に気がつかなかった。

そして一回の表、南阪小学校の攻撃。
大場翔真がギャラリーを唖然とさせる圧巻のピッチングを披露する。

『水仙、打てよ。』

水仙『あたりめえだろ。黙って見てろ。』

翔真『これが南阪のリードオフマン、水仙か。』

翔真が振りかぶる。

ビュッ!!

バンッ!

水仙『ん…。』
水仙のバットはピクリとも動かなかった。

『ストライーク!』

『おい。ドラゴン。水仙が初球見送ったぜ？あいつの大好物はゲーム開始直後のストライクのボールだよな。』

青龍寺『知るかよ。まずは球筋を見極めようとしてんじゃねえか？いちいちそんなことを俺様に聞くな。ぶっ殺すぞ。』

2球目…

ズバン！

『ストライク！ツー！』

水仙はまた見逃した。

水仙『こ、こいつ！！』

ズバーン！

『ストライク！バッターアウト！！』

水仙『クソッ！俺が空振り三振だと！？舐めやがって！！』

上村（キャッチャー：キャプテン）

『は、はえぇ…。あいつ…こんなに早いボール投げれたのか…捕るのすら難しいぜ…。』

町田（ショート）『いきなり三振か！！ナイス翔真！』

『へ！！ザーコザーコ！！』
『それでも一番バッターか！！』

水仙『うるせぇ！この悪餓鬼二人組が！！』

そして、二番バッターも三振に倒れ、三番の鬼頭の打席。

ちなみに…打順は

南阪小学校

1：3B：水仙
2：CF：???
3：P：鬼頭
4：1B：青龍寺
5：LF：桜沢
6：RF：???
7：C：???
8：2B：???
9：SS：???

（???はまだ未登場の選手。）

鬼頭（やるな…。だがまだまだ始まったばかりだ。）

翔真（攻めるぜ！！！）

ビュッ！！

続く↓

Ｎｏ．６４：南阪の難敵、大場翔真

ブン！
『ストライク！』

鬼頭（速いな。道理であいつらが三振するわけだ。だが変化球もない。俺らに限っては三者連続三振はあり得ない。）
※小学校野球は変化球禁止

ビュッ！！
ゴウ！
鬼頭（…！？）

スパン！
『ボール！！』

鬼頭（…！？……！？…浮き上がった！？小学生だろ！？）

上村（くは…はええ。）

宮本（ライト）『あいつ…いつも楽しそうに投げるな。今日は特に。』

翔真（俺、こんなやつらに通用する！！勝てるぞ！！だけど油断大敵。）

ビュッ！！
鬼頭（どりゃっ！）
カスン！
『ファール！』
鬼頭（クソッ。いまのもど真ん中…。捉えられない…。）
どりゃあ！
ブン！
鬼頭（な…なにぃ…？まだ振り遅れ…？いや、もっと球速が上がった…？）
『ストライク！バッターアウト！！チェンジ！！！』
『お、おい！なんなんだあのピッチャーは！？』
ギャラリーも騒いでいる。
上村（今日のあいつ…完全に、マウンドで…）
『躍動してる！！！！』
翔真『しゃあああああ！』

青龍寺（雑魚どもが。次の回、俺が打ってやる。）

だが…

ズバーン！

『ストライク！バッターアウト！！』

青龍寺『…。』

『お前が三振なんて、珍しいな。』

青龍寺『殺されたくなけりゃ、黙れ。』

『あいよ。』

『ストライク！バッターアウト！！』

『ストライク！バッターアウト！！チェンジ！！！！』

そして三回の表、

『ストライク！バッターアウト！！』

桜沢『な…7連続…。』

『おい剣刃（けんと）、俺らでチャンス作るぞ。』

『わかってるって。破刃（やいと）。アホか。』

鬼頭『さて。この双子ちゃん。打ってくれるかな？』

剣刃『俺、いきがってるやつ嫌いなんだ。アイツみたいに楽しそう

に野球やってるやつなんて特にね。』
上村『で？来ますよ。』

バンッ！
ストライク！

剣刃（くー。はえー。）

ビュッ！！バンッ！

『ストライク！ツー！』

剣刃（タイミング合わねー。）

ビュッ！！

ドバン！

（くそ…手が出なかった…。）

『ストライク！バッターアウト！！』

『なあ剣刃？どんなだった？』
『確かにいいボールは持っている。だがお前なら確実に仕留められ

るはずだ。見せてやれ、天才の実力を。』

『おう。さすがわかってるね。剣刃は。』

『破斗のことなんかわかりきってるっての。』

ビュッ！！

キーン！！

『ファールボール！！』

上村（初球から当てた！？こいつ9番のクセに…。やっぱ南阪だな。油断はできない。）

『なんだ。普通に当たるやんけ。こんなピッチャーに何てこずってんだか。』

ビュッ！！

カキーン！

『ファールボール！！』

上村（今度は引っ張ってきたか。こいつ、バットが触れてやがる。タイミングもあってる…）

バンッ！

『ストライク！バッターアウト！！チェンジ！！』

上村（こともないか。）

鬼頭『一巡目は全打者三振か。さすがに悔しいね。二巡目以降が楽しみだな。』

（まさかこんなやつが現れてくれるなんてね。思っても見なかったよ。）

そして、４回の表、照丘小のエース、５年生の大場翔真は、二巡目となった一番の水仙と、二番バッターも三振に撃ち取り、これで１１人連続奪三振。

そして打席には…

『ヒロ、打てよ。』

鬼頭『わかってるって。』

３番、鬼頭博行。

そして二人の運命を変えた対決を迎える。

Ｎｏ．６５：ハイレベル対決

（なんか今日の試合時間経つのはえーな…。）

翔真（こんなスゲーやつらと、欲を言えばまだまだ対戦していたい気分だ。だけどそうもいかない。本気で勝ちにいくぞ。）

鬼頭（１回戦からおまえみたいなやつとやりあうことになるなんてな…。今度こそ全力で打ちにいく…。）

（ふー。）

両者が呼吸を整える。

０－０だが両者の置かれている状況は大きく違う。

翔真のいる照丘小は１回戦敗退も当然な弱小校。

しかし一方の南阪小は最強のメンツが揃った超強豪。しかもゲーム開始直後から今まで大場翔真に１１人連続奪三振を喫している。まだ３イニングほど残っているとはいえ、メンタルのあまりできていない小学生である、南阪小の選手は若干焦りを感じていた。

そして初球…

翔真が振りかぶる。

ビュッ！！
ゴウッ！！
鬼頭（どりゃっ！）
カーン！！
『ファールボール！！』
上村（さっき空振り三振したときとほぼ同じスピードだが今度は当ててきたか。さすが南阪の3番バッターだ。）
鬼頭『ちっ…。』
2球目…
ビュウッ！！
鬼頭（くっ…。）
カスン！
『ファール！』
鬼頭（くそ…。コースもど真ん中…。完璧なタイミングで打ってい

るはずなのにどうしても差し込まれる…。）

翔真（やっぱスゲーやつらだ…。こんなに速い球放ってもついてきやがる。このままストレートを投げ続けても三振は奪えそうにない。だったらさ、）

（三振なんか奪いにいかなきゃいいんだよ。どうせ奪えないんだったらさ。）

鬼頭はピッチャーである翔真を睨み続けている。天性の洞察力を持っている鬼頭は翔真の見えない心の変化を感じとった。

鬼頭（なにか変わったぞ…。確実に…。まさかとは思うが…ここから…更に…）

翔真（三振なんか狙わずに…楽に、力抜いて…）

『指先（ここ）！！！！！！！！！』

ビュウッッッッ！

鬼頭（なにぃ！？！？！？！？）

上村（うぎゃあ！）

ドバーーーーーーッッッーーッン！！！！！！！ガツーンッッッッ！！！！！！！！

鬼頭『…！？…は？？』

上村（ぐは…。な、何が起きた…）

上村が前を向くと、ボールが翔真の元へ転がっていた。
そして翔真がそれを拾うと一塁へ送球。
アウトが宣告された。
これでスリーアウトチェンジ。
しかしバッターランナーの鬼頭は走っていない。

鬼頭（な…な…なんなんだ！？今の1球…。目で追えなかっただと！？）

上村は何が起きたのかわからなかったが、自分の胸の辺りが猛烈に痛いのに気がついた。

ベンチに帰ると、翔真が寄ってきた。
『先輩、ちゃんと構えたところに投げたんだから捕ってくださいよ。』

上村はそのとき翔真の言っていることの意味がわからなかったが、自分のはめていたキャッチャーミットを見た瞬間、全てを理解した。

（キャッチャーミットを貫通した!?!?）

（いや、そうに違いない。じゃなきゃ紐が切れるはずがないじゃないか…。そして貫通したボールが俺の胸に直撃して跳ね返って翔真の元へ転がっていったのか…。そういうことか…。だけど…俺の新品のキャッチャーミットを壊す球威と球速なんて…。）

そのころベンチに帰った鬼頭は笑っていた。

（まさか、この試合中に更に進化するなんてね…。）

そのときの鬼頭の表情は、試合の先の事を考えている顔だった。

ゲームセット！！！！！！！

結局試合は南阪小が勝った。

スコアは

南阪一	0	0	0	1	一1
照丘一	0	0	0	0	一0

最終7回に疲れが出てきた翔真のボールをやっと南阪打線が捉え始め、最後の最後にエラーが出てしまった照丘が負けた。

しかし翔真は7イニングを投げ、最終回以外はすべてのアウトを三振で取り、２０奪三振、被安打2、無四球のピッチングだった。

南阪小はその後地区大会を圧倒的な強さで圧勝していき、全国制覇をする。

この照丘戦以外はすべての試合で5点以上の得点を記録した。

大会が終わり、とりあえず引退した鬼頭は、ある日翔真の家を訪ねた。

Ｎｏ．６６：師弟関係の始まり（前書き）

今回のはなし若干微妙かもです…

Ｎｏ．６６：師弟関係の始まり

ピンポーン！！

『はーい！』

鬼頭が翔真の家のインターホンを押すと、翔真の母が出てきた。

『どうしました？』

『大場くんいらっしゃいますか？』

とりあえず単刀直入に聞いた。

すると、

『ごめんね～今ちょっと留守してて。』

どうやら翔真はいないようだ。

『わかりました。ありがとうございます。』

（また明日来るか…。）

とりあえずエレベーターで地上に降りて、自転車に乗って帰る。

そして5分ほど自転車を漕いでいて、公園の横を通りすぎるとき…
バシーン！
『ナイスボール！』
『うわーはえー！』

野球をしている人間が3人。
若干遠くからだったのでよく見えなかったが、もう1球投げた瞬間、

（大場だ！）

そして歩きながら近寄る。
3人いて、一人がピッチャー、一人がバッター、そしてもう一人がキャッチャーをしていた。

鬼頭『ちょっといいですか？』
大場『はい？』

もう二人も翔真の元へ駆け寄る。
そして今駆け寄った二人の防具をつけてキャッチャーをやっていた方は、西口拓磨。バッターをやっていた方は、小宮哲都。

鬼頭『おまえ…大場だろ？』
大場『は、はい。』

鬼頭『何から話したらいいかわかんねえんだけど、単刀直入に言うよ。』
大場『…？』

鬼頭『俺は南阪小の3番エースの鬼頭だ。1回戦でお前らを倒した。それでだ、おまえ、南阪中を受験してくれないか?』
大場『え…南阪の3番エース!?』
鬼頭『ああ。俺たちは試合には勝ったが、おまえとの勝負には負けたと思ってる。それでだ…。今年の冬、南阪を受験してくれないか?』
大場『え…でも…』

鬼頭『もちろん私立だし色々とお金も掛かるところが出てくるだろう。でも…おまえ…俺たちと一緒に自分を磨いてみないか?おまえはプロも狙える素材を持っていると思っている。だから今年の冬…』
大場『あの~。』
鬼頭『ん?』

大場『話が進んじゃってますが、俺、今年の冬受験するなんて無理です。』

鬼頭『どうしてだ?なんなら色々と…』
大場『そうじゃなくて、俺、小学校5年生なんで。』

鬼頭『え…?』
大場『だから、今年の冬は受験できません。』

鬼頭(俺たちが20三振も食らったやつ…5年生だったのか…。こりゃマジで欲しい逸材だぞ…。ただ、学校の関係者を絡ませるのも面倒くさいし…、しかし来年小6だろ…。無名の照丘小で才能潰されるのも最悪だし…うーん、よし…まあ急がば回れってことで…。)

鬼頭『これから一年、俺がおまえの自主練、付き合ってやる。』

大場『え!?ホントですか!?南阪のエースの人が!?ヤッター!!』

鬼頭『おう。約束する。』

大場『じゃあこの二人も一緒に自主練やっていいですか!?』

鬼頭『ああ。多い方が楽しいしな。』

ちなみになぜこの二人がいるのかというと、小宮は住んでいた家が火事でなくなり、いとこである大場家に引っ越してきた。西口は父親の仕事の都合で引っ越してきている。

鬼頭『じゃあいくぞ!』

『おー!』

Ｎｏ．６７：エースの我が儘（前書き）

久々に現在に戻ってきました（笑

Ｎｏ．６７：エースの我が儘

『『フォアボール！』』

氷室『クソっ…。』

朴昌圭『ヨシ…。』

『これで2者連続のフォアボールで、ノーアウトフルベース！ここでバッターは…6番の非常にチャンスに強い今日タイムリーを放っている野村！』

『6番、レフト、野村くん。』

西口『タイムお願いします。』

邦南の内野陣がマウンドに集まる。

西口『バテてきたか？』

氷室『そ、そんなんじゃねえよ！』

西口『いや、球が明らかに浮いてきてるし。』

氷室『むむむ…。』
大場『あのさー…。』
西口『どうしたんですか？』

大場『さっきは、悪かったな。一人で切れちまって…。』
氷室『まあ…ね。』

大場『こんな俺がエースで情けないと思ってる。だけど…今…今だけ俺の我が儘…聞いてくれねえか…？』

西口『…。』

大場『ダメ…か…？』

氷室『大場先輩。』
大場『？』

ポイッ！
氷室が翔真に向かってボールをトスした。

氷室『あとは任せました。一点ビハインドのこの場面…。もう一点もやれませんから。打たせてとる僕のピッチングでも限界がありますし、最初より打ち取れる率は低くなってきましたし。』

大場『氷室…。』

島谷倫『頼んだぞ。エース。』
松坂『今度は絶対抑えろよ。』
西口『その代わり…』

氷室『絶対抑えてくださいね。』

西口『じゃあ踏ん張るぞ！一点もやらねえぞ！』

『『『おう！！！！！！！！』』』

『邦南高校、シートの変更をお知らせします。』

←守備位置の変更←―――――――――――

氷室：1↓3

大場：3↓1

―――――――――――――――――――――――――――――

ザーザー！！！！！

バシーン！

バシーン！

翔真が投球練習を始める。

『いやーまた雨が強くなってきました。ここ瑞穂（みずほ）市民球場。』

大場（雨の場面はもう既に経験済みだ。）

バシーン！

西口（やっぱり…さっきよりはコントロールは少し安定しているが、ボールは走ってないな…。やっぱいつもの大場先輩じゃない…。）

『プレイ！！！！！』

バシーン！

『ボール！！！！！』

大場（落ち着け…。落ち着け…。）

2球目…

ビュッ！！

野村（甘い！！ど真ん中！！）

カキーーーーッッッッーーッンッ！

『とらえたーっ！！！！！！大きな当たりだ！！！！！！！！！！レフト追う！！レフト追う！！！！！』

木村『クソォォォ！！！！！！！！！！！！！』

野村の放った大飛球、どうなるのか！？
次話に続く↓

Ｎｏ．６８：思考転換

『大きな打球だぁーっ！！！！！！！！』

木村『クソっ！』

ポテ！！

『レフトの頭上越えた！！！！！！！！！！三塁ランナーはタッチアップの体勢からホームイン！！！！二塁ランナー朴昌秀（パクチャンス）もハーフウェイの体勢から今ホームイン！！！！！！一塁ランナーは…止まった止まった！！！！！！！！』

大場『くそ…。』

『七回表上社西高校、ノーアウトフルベースから６番の野村のレフトオーバーの二点タイムリーツーベースで二点を追加し５－２！！！！！！！止まっていた試合が動き出しました！！！！！！！！』

氷室（くっそぉ…３点差かよ…。）

ザーザー！！！

『おや？どうやら主審が選手を引き上げさせますね。あー中断です。雨がこの回強くなってきたのでグラウンドに出ている選手を引き上げさせます。』

←途中経過←（現在七回の表）
上社西一　１２０　０００　２
邦南高一　１１０　０００

ザーザー！！ザーザー！！
邦南ナインももちろんベンチに戻る。

松坂『スゲー雨だな。』
副島『ああ。なんでまた俺らの試合のときに降るかなぁ。』
氷室『ですねーっ。』

ドコッ

翔真もベンチに座る。
（ふーっ。）

大場（3点差になっちまったぜ…。楽しみながら投げるって意識しながら登板したのに…。やっぱり今日は全然ボールが走らねえ…。）

ドコッ

一人でベンチに座っている翔真の横に西口が腰を掛けた。

西口『そろそろ思い出してくださいよ。あの頃の自分の姿くらい。』

大場『お前…俺が何考えているかよくわかったな。』

西口『そりゃあわかりますよ。一応何年も翔真先輩のこと見てますから。』

大場『あの頃の俺って？』

西口『意識しないと楽しくピッチングできない。そんな人じゃなかった。投げること自体に喜びを感じていたんじゃないんですか？少なくとも僕はそう見えてましたよ。』

大場『投げること自体が楽しい…か。確かにな…。』

（いつからだろう…。勝利にこだわるあまりに投げることの楽しさを忘れてしまったのは…。きっと中学の頃だろうな。常勝軍団、名古屋東ブラックシャークに入ってから、引退するまでみっちり『勝つ野球』を教わってきた。今思い出したよ。照丘小のころの阪神大会の南阪小戦のときみたいに投げることも大事なんだ。）

『勝ち負けにこだわらず、精一杯楽しく投球をする。』

西口『どうかしました？』

大場『なんでもねーよ。ほら、雨ちょっとずつやんできたぞ。さあ、キャッチボールでもしとこうぜ。』
西口『はい！』
西口（何か思い出したのかな？）

『雨が弱くなって審判も出てきました。再開するようです。』

『『『　いくぞぉ！！！！！！！！！』』』
『『『『　おう！！！！！！！！！！』』』』

『7番、ファースト、岸くん。』
『プレイ！！！！！！！！！』
『さあ7回の表、ノーアウトランナー二三塁から再開します！！』

初球…
野中『大場くん…今日は明らかに調子が悪い。抑えられるのか…？』

ビュッ！！！！！！！
ゴウ！！！！！！！
岸（ん！？）

ズバーン！
『ストライク！』
≪１４０ｋｍ／ｈ≫
『さあこの場面で今日最速のボールがいきました。』
２球目…
ビュッ！！
ゴウ！！！！！！！！
岸（くっ…。）
カキーン！
『ファール！』
カキーン！
『ファール！』
カキーン！
『ファール！』
カキーン！
『ファール！』
西口（しつこいな。次はこれで三振を取りに行くぞ。）
西口が下村フォークのサインを出す。

だが、
大場（ここはあれでいく。）
翔真は首を振り、ストレートのサインに頷いた。

大場（三振なんか奪いにいかなくていいんだよ。）

『どうせ、奪えないんだったらさ！』

『リラックス…リラックス…』
大場が足をあげる。

『ボールを感じろ。』
そしてリリースへ

『最後の最後…指先（ここ）だぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

ビュルッルッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
西口（のら！？）
バゴーン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

大場『ナイスキャッチ西口。ミットの紐は切れてないか？』

『『ストライク！バッターアウト！』』
≪　１４９ｋｍ／ｈ　≫

『『『自己ＭＡＸタイ記録っ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！空振りの三振で一死

二三塁！！！！！！！！！！』』

大場『どんなもんじゃい！！！！！！！！』

西口（手、いって～。構えたところじゃなかったら捕球できてたか怪しいぞ。）

エースが復活！！！

邦南、終盤に追い上げられるか！？

Ｎｏ．６９：ＭＡＸ１４９ｋｍ／ｈの豪速球（前書き）

ちょっと短いかも？

No．69：MAX149km／hの豪速球

榊原『最後のボール、さっきよりも速くなったよな？どんな感じだった？』

岸『悪い…俺、最後のボール、見えなかったわ…。』

榊原『え？』

『8番、ショート、榊原くん。』

岸『と、とにかく頑張れ…。』

榊原（どうしたんだ。岸のやつ。あんな顔して。）

初球…

ビュルッルッ！

ドバン！

『ストライク！ワン！』

榊原『え…』

ビュッ！！

ゴウッ！

ドガン！

『ストライク！ツー！』

『さあ2球で簡単に追い込んだ!!バッターの榊原、まだバットを振っていないがこの球速にあと1球で合わせられるのか?』

榊原『おい…こんなの有りかよ!?』

大場がボールをリリースする。

ビュルルっ!!

（ボールが…マジで見えねえ…。）

ズバーーーッッッーッッーンッ!!

『ストライク!!!!!!バッターアウト!!!!!!!!』

『3球連続渾身のストレートで榊原を見逃し三振に斬って取った!!!!!!これでツーアウト!!!!!邦南高校背番号1の大場、流れを断ち切ろうと言わんばかりの豪速球、ＭＡＸ１４９ｋｍ／ｈのボールで2連続奪三振!!!!!!!!』

『9番、セカンド、小山くんに代わりまして、代打、青山くん。』

西口（やっべー。めちゃくちゃはえーな…。）

…

『ストライク!!バッターアウト!!チェンジ!!!』

野中『おいおい…ホントかよ…。』

川越『ああ…。あとは邦南が3イニングで4点以上取れればってところだな。』

小宮『ノーアウトフルベースの大ピンチをしのいだ。流れは完全にこっち向きだ。』

『7回裏、邦南高校の攻撃は、4番、キャッチャー、西口くん。』

西口（この回確実に複数点は取りたい。だったら…先輩達（うしろ）に繋ぐしかねえよな!!!）

No．70：フルスイング

『『フォアボール！！！！！！朴昌圭、この回少し制球が乱れ、ツーアウトフルベース！！！！！！！！』』

『9番、ショート、島谷倫暁くん。』

島谷が独特のオープンスタンスで打席に構える。

ビュッ！！

スバン！

『ストライク！！』

島谷倫（くそ…アウトローギリギリか…）

野中『ここ最近島谷兄は守備でこそチームに貢献しているが…』

川越『バットではサッパリですもんね…。』

野中『ああ…。3点差の終盤7回裏…ツーアウトフルベース。ここで一本出さないと流れ的にも邦南はもっと不利になる…。もし一本出れば次のバッターは…』

野中＆川越『鬼頭！』

ビュッ！！
カクッ！
『ストライク！！ツー！！』

『さあ2球目も得意のカットボールでストライクをとり簡単に追い込んだ！！』

野中『ダメだ…狙い球が絞れていない…』

島谷倫（昔っから俺は打撃よりも守備の方が大好きだった…。だけど…だけど…それだけじゃ高校野球なんかやっていけねえ…。だから毎晩気の済むまでバット振り続けてきた…。なのになぜ打てないんだ…。）

『第三球！！』
ビュッ！！
ズバーンッ！！！！！！

島谷倫（くそっ！ストライクか！？）

『ボール！！！！！！！ボール！！！！！！！！』

島谷倫（た…助かった。）

島谷涼『兄貴！』

島谷倫『？』

島谷涼『しけたつらしてバッターボックス立ってんじゃねえよ！！そんないい場面なんだからもっと楽しめよ！！！！！！！試合出たくても出られねえやつがいるってことを忘れるんじゃねえぞ！！！！！！』

島谷倫（！！）

島谷倫（そうだ…俺はなに諦めていたんだ…。応援してくれる人のため…ベンチを暖めてくれてる奴のため…そんでチームのためにバットを振るんだ！！！！！）

（やれることはやった！勝つために何千本何万本とバットを振ってきた！！これで打てなきゃ…）

『しょうがねえよ！！って言い訳ができる！！！！！！！！』

カキーン！！！！！！！！！

『内角直球にひるまずフルスイング！！！だが少し詰まったか！？打球はショート正面のあたり！！』

島谷倫『まだだ！まだ内野安打がある！！』

『あーっ！ショートの榊原、２塁ランナーと交錯した打球を弾いてしまった！！！！！２塁は無理！！急いで拾って一塁へ送球！！！

！！！』

『セーフ！セーフ！』

『セーフだ！！９番島谷倫暁くんの相手のタイムリーエラーを誘う執念のフルスイングで一点を還して５－３！！！！！とられたあとすぐ一点を返した！！』

野中『よくあの厳しいコースに手が出たな…。なにか気持ちに変化があったのか？』

川越『結果オーライは必然だ。それ相応のことをしてやっと奇跡は起きる。あいつの場合は迷いのないフルスイングが奇跡を呼んだ。これで次のバッターは…』

『１番、ライト、鬼頭くん。』

鬼頭『ｍｅで決める。見てろよみんな！！』

Ｎｏ．７１：日本でこんな野球がしたかった。（前書き）

韓国人トリオの会話が読みづらいため、普通の表記にしました。

Ｎｏ．７１：日本でこんな野球がしたかった。

朴昌秀『タイムお願いします。』

『タイム！！』

朴昌圭『どうした？』

朴昌秀『覚えてるか？』

朴昌圭『ああ。３年前のあいつとの対決だろ。忘れるわけねえ。』

朴昌秀『そうだ。３年前の世界大会の初回一挙８失点も全てアイツのツーアウトフルベースからの満塁ホームランから始まった。』

朴昌圭『だから忘れてねえって。本気でいくぞって言いたいんだろ。』

朴昌秀『ああ。だからあのボールを解禁しよう。』

朴昌圭『わかってるって。俺は早くアイツにリベンジしたくてウズウズしてるんだ。それで終わりなら戻ってくれ。』

朴昌秀『頼んだぞ。エース。』

朴昌圭『ああ。』

『プレイ！！！！！』

『さあ７回の裏、一点を返し２点差となり尚ツーアウトフルベース！！打席には今日２打数無安打１四球の１番の鬼頭！朴昌圭、セッ

トポジションから第1球投げる！！！！！！』

シュルルルっ！！

鬼頭（そう何度も同じボールで撃ち取られて…）

『たまるかよっ！！！！！！』

カキーンッ！！！！！！

『低めのツーシームを華麗に流し打った！！！！！打球はライン際！！切れるか！？切れるか！？』

『ファール！！ファール！！』

『打球は惜しくもファール！！しかし初球から巧いバッティングを魅せました！！』

朴昌秀（コイツ…やっぱり流石だな。昌圭のツーシームにもうついてくるようになったのか。次はお前の得意球…）

（アウトローギリギリのストレート。）

ビュッ！！

バン！！

『ボール！！！』

朴昌秀（やはり終盤だけあって昌圭の武器であるボール1個分の出し入れを自由自在に実行するコントロールが無くなってきている。コイツを抑えれば勝利は見えてくる！！）

ビュッ！！

鬼頭（ストライクからボールになるカットボール！！！！もらった！！！！！！）

朴昌秀（注文通りのナイスボール！！！！！）

ガッ！

朴昌圭（なに！？）

朴昌秀（読んでいた！？こんなに踏み込んでくるなんて！！だがこのコース…ファールにしか…）

カキーン！

『打球はまたレフトへ！！しかしこれも切れてファール！！！！！！』

朴昌秀（まさかこんなに踏み込んでくるなんてな。ならこのボールには手も足も出ないだろ！！）

『インコース！！！！！！！！！勝負にきた！！！！！！！』

鬼頭『舐めんな！！！！』

カキーン！

『今度はインコースの１４０ｋｍ／ｈのストレートを強引に引っ張っていってファール！！』

朴昌圭『これならどうだ！！』

ビュッ！！

カクッ！

『ボール！！カウント２ボール２ストライク！！』

『第６球目はボール！！！！！！』

朴昌圭『この野郎！』

朴昌秀（落ち着け！！昌圭！！！！）

バンッ！！！！！

『ボール！！！！！！カウントツースリー！！』

『さあこれでフルカウント！！！！ランナーは投げた瞬間に自動スタート！！！！！！』

朴昌秀『タ、タイムお願いします！！』

タッタッタ…

朴昌秀『落ち着け！！周りをよくみろ！！』

朴昌圭『わり…。ちょっとテンション上がっちまって…。』

朴昌秀『次の1球で決めるぞ。』

朴昌圭『ああ。わかった。試合での使用は1年半以上ぶりだな。』

朴昌秀『この大会のために完全マスターしてきたボールだ。気持ち乗せろよ。』

朴昌圭『オッケー。』

野中『次の1球…』

川越『勝負に来る…。』

野中『絶対打てよ。鬼頭。』

『さあ注目の1球！！マウンド上、上社西のエース朴昌圭、フルカウントからの第7球…投げる！！！！！！！！』

朴昌圭『中学では負けた、だけど、』

『高校（いま）は絶対に負けられないんだ！！！！！！！！！！』

ビュッッッッ！！！！！！！！！

鬼頭『！？』

カクッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

鬼頭『ス、スライダー！？ここで来たかっ！！』

朴昌圭『くらえ！！！！！俺の渾身のスライダー！！！！！！！！』

鬼頭『あ、やべえかも…。』

カーン！！

野中『あ…』

川越『…。』

『打ち上げたーっ！！朴昌圭のスライダーのような球種に窮屈なバッティングになってしまった！！これはライトか！！フラフラッと上がった！！』

野中『こりゃもしかして…』

『ライト追う！！ライト追う！！風にのって飛距離はぐんぐん延びていくぞ！！！！！！！』

朴昌龍『え…』

ポーンっっ…。

鬼頭『や、や、や…』

『やったーっっ！！！！！！！！！！！！！』

『なんと風にのってそのままポール直撃！！！！！！！！！！！！なんということでしょう！！！！！！！！！！！！7回裏、鬼頭になんとなんと逆転のグランドスラムが飛び出したぁぁぁぁっ！！！！！！！！！！』

『ナイバッティン！！！！！！！』

『よっしゃあ！』

『打ったバッター鬼頭もダイヤモンドを一周してきて今ホームイン！！これで7－5！！！！！！！！！！鬼頭の一振りで試合をひっくり返した！！！！！！！バッテリーは呆然！！！！！！！！！！立ち尽くすしかありません！！！！！！！！！！！』

朴昌秀『討ち取ったのにな。』

朴昌圭『ばーか。ホームランじゃ。』

朴昌秀『切り換えろよ。』

朴昌圭『わかってるって。』

朴昌秀『なに笑ってるんだ？』

朴昌圭『何でもねえよ。次のバッター、抑えよう。』

朴昌秀『ああ。』

朴昌秀（あの球をホームランにするか…。しかも真のウィニングショットのスライダーを。）

朴昌圭『あんな詰まったのにあそこまで運ぶか…。やっぱり日本人のバットコントロールは半端ねえな。』

（てか俺はよ…）

（（（　俺は日本で、こんな野球がしたかった。　）））

ゲームセット！！！！！！！！

『『『ありがとうございました！！』』』

野中『結局コールドゲームか…。』
川越『ああ…。まさか鬼頭の一発のあと、あんなに上社西の韓国人エースが崩れるなんてな。』
野中『そのあと2番手として登板したセンターの子も打たれちゃったしな。』
川越『まあ大勝したんだ。素直に誉めてやろうぜ。』
小木曽（おぎそ）『やっぱ邦南が勝ったか。新星の登場なんて楽しみだ。』
芝田（しばた）『ああ。楽しみな準決勝になりそうだな。』

上社西	1	2	0	0	0	2			5
邦南高	1	1	0	0	0	1	0	×	2

副島『みんなナイスゲーム！！！！！』
鬼頭『ところで県営小牧球場でやってた湯本学園池下ＶＳ猪子石はどっちが勝ったんだ？』

副島『それ今言おうとしたけど、明日の準決勝の相手は…猪子石(いのこいし)高校に決定した。』

氷室『え、猪子石って！』

大場『たしか大会前から享神に対抗できる唯一の高校って言われてたな。』

鬼頭『ああ。エースの小木曽は今秋ドラフト1位候補の先発完投型右腕。打線も隙がなくて代打陣も充実。2番手投手のの芝田もかなりの好投手だ。』

西口『まあそんなやつらと対戦できるなんて最高じゃん！享神の前に力試しするには最適な相手だぜ！』

小宮『だね！！じゃあすぐ学校に帰って練習しよう！』

『『『　おう！　』』』

そして次の日…晴れ
先攻・邦南高校
1：RF：鬼頭　博行

2：CF：慶野　文哉
3：P：大場　翔真
4：C：西口　拓磨
5：1B：氷室　佑介
6：2B：副島　充
7：3B：松坂　健祐
8：LF：木村　太郎
9：SS：島谷　倫暁

後攻・猪子石高校
1：2B：根本　健太郎
2：P：小木曽　泰大
3：3B：芝田　大
4：C：渡辺　一紀
5：1B：坂本　成生
6：CF：坂本　良太
7：RF：大平　雄貴
8：LF：新谷　拓己
9：SS：日根野谷　一貴

『プレイボール！！！！！』

Ｎｏ．７２：ドラ１候補

『さあ始まりました！！時刻は現在午前９時！！ここ瑞穂市民球場で行われる全国高等学校野球選手権愛知県大会準決勝、優勝候補・猪子石高校ｖｓ愛知県に今、旋風を巻き起こしている県内屈指の進学校・邦南高校の注目の一戦！！！！！！』

川越『今日の試合はほぼ大場くんの出来に懸かっていると言っても過言じゃないな。』

野中『ああ。なんたって相手は猪子石（いのこいし）。しかもエースの小木曽は難攻不落。だが大場はいまいち安定感に欠ける。そしてスロースターターという一点勝負の試合では致命的なステータスを持っている。』

川越『上社西戦の雨で中断した後のリリーフの時のようなピッチングを続ければ邦南にも十分チャンスはある。』

そのころ…

下村健太『俺も猪子石にするか愛農大名林にするか迷ったんだよ。』

長岡『フン。知るか。てかなんで俺もお前の高校野球観戦についてこなくちゃならねえんだよ。』

下村健太『まあそう固いこと言うなよ。楽しもうぜ。』

…

飯尾『楽しみな対戦だな。』

谷『ああ。だけど総合力では完全に猪子石の方が上だ。まあ邦南がどう戦うのか見ものだな。』

カキーン！

飯尾『さすがの鬼頭だな。１打席目でいきなりクリーンヒットか。』

谷『あいつさえいなけりゃな。まあ終わったことに言い訳してもしゃーねえか。』

『２番、センター、慶野くん。』

コン！

『さあ手堅く送ってワンナウト！いいバントです！！これで一死二塁です！！』

『３番、ピッチャー、大場くん。』

小木曽（おいおい…。なんか圧されてるみたいだけどよ…。）

渡辺（キャッチャー）
（見せてやれ。お前の高精度のボール達を。）

『さあ初回、いきなりチャンスで3番の強打者大場を迎えた邦南高校！！！！！このチャンスをものにできるか！？』

ビュッ！！！！！
ズバーンッ！！！！！
《１４６ｋｍ／ｈ》

大場（速いな。しかも相当手元でピュッとくる。）

『さあ第2球投げた！』

フッ！
バン！！
『ストライク！！ツー！！』

大場（チェンジアップか？くそ、追い込まれた。次は外の変化球かストレート…？３球勝負か…？情報だと他にスライダーもある。いや、初回から３球勝負はない。外の変化球を狙うか。だけどボール球に手を出すのは厳禁っと。）

渡辺（初回から飛ばしていくぞ。）

小木曽（当たり前だろ。どんなバッターにも容赦はしねえ。）

『セットポジションから第三球、投げた！』

ビュッ！！

大場（くそ！内角直球！？クロスファイヤーか！！）

（３球勝負？ダメだ…。手がでねえ…。）

ズバーーーッッン！！

審判の手が上がる。

『ストライク！！バッターアウト！！！！』

≪　１５０ｋｍ／ｈ　≫

『１５０ｋｍ／ｈのストレートので空振り三振！！！！！！！３番の大場くん、手も足も出ず！！！！！』

下村健太『初回からいきなり１５０ｋｍ／ｈオーバーとか…やっぱすげえな…。ドラ１候補ってのは…。』

小木曽（これで二死二塁。冷静にいくぞ。）

渡辺（ドンドン攻めていくぞ。）

小木曽（おう。）

…

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！！』

『アウトロー直球ギリギリ一杯のところを攻めていきました！！！！１回の表、邦南高校、スコアリーグポジションにランナーを進めたんですが、無得点に終わりました。』

鬼頭『翔真、切り換えや。』
大場『わかってます。』

大場（え…。まさか…もう…。いや、聞き間違えか…。）

『さあ1回の裏、マウンドに上がります、邦南高校のエースナンバーをつけた大場くんのこれまでの投球成績です。』

【大場翔真】
投球回…３７
失点…１７
奪三振…５０
被安打…３７
四死球…１１

『そしてこれが一方の猪子石のエース、小木曽くんの投球成績です。』

【小木曽泰大】
投球回…３０
失点…２
奪三振…５４
被安打…１３
四死球…６

『1回の裏、猪子石高校の攻撃は、1番、セカンド、根本(ねもと)くん。』

『さあ今大会チーム打率．４５０を誇る猪子石高校の攻撃！！バッターは1番根本くん！！』

根本（初球…）

『攻撃！！！！！！』

カキーン！

『打ったーっ！！いきなり先頭の根本くんがヒットで出塁！！！！！これでノーアウト一塁！！！！！！』

『2番、ピッチャー、小木曽くん。』

コン！

『さあうまく送ってワンナウト一塁になりました。1回の裏、猪子石高校の攻撃。1回表の邦南高校と同じ状況で3番の芝田を迎えます。』

『3番、サード、芝田くん。』

野中『ズルズルいくなよ…。』

川越『先制点だけは絶対にやっちゃダメだ。』

大場（ツーアウト三塁でオッケー。打たせていくぞ。）

芝田（情報ではＭＡＸ１４９ｋｍ／ｈのストレート、決め球によく使うフォークと使用頻度はあまり高くない高精度のフォーク。あとはカーブ。カーブはかなり制球は良いみたいだ。高精度のフォークは基本的に勝負どころでしか使ってこない。）

芝田『準備完了。今から大場翔真の出鼻を挫く。』

Ｎｏ．７３：スロースターター（前書き）

テスト週間とか個人的な萎え期で更新が遅れてしまいました？
すみませんｍ（．＿．）ｍ

No．73：スロースターター

西口（この3番の芝田…チームトップの打率を誇る…要注意打者だ。だが次の4番の渡辺も今大会既に5本のホームランを放っている。4番の前にランナーを溜めるのは避けたい…。）

芝田（デカイのは要らない…。ヒット一本でねもちゃん（根本のアダ名）なら還ってこれる。）

小木曽『シングルでオッケーだぞ！大！！』

芝田（わかってるって。ヤス（小木曽泰大のアダ名）。）

西口（序盤は制球の安定しない翔真先輩。変化球も混ぜていかないとかなり危険だ。）

西口がカーブのサインを出す。

大場『おっけ。』

セットポジションから投球モーションにはいる。

ビュッ！！

カクッ！

西口（まずい！！完全に…）
大場（やべ…）

（（（　　浮いちまった…　　））））

ズバン！

西口（え？）
大場（助かったぜ…）

『ストライク！！』

芝田（ふう。）

坂本成『でたな。大の悪い配球予想。』
坂本良『ああ。アイツもあのピッチャーと同じで打者版のスロースターター、つまり4打席立って結果のこすタイプなんだよ。野球選手でいったら、大阪ナイトタイガースの鉄本かな。』
大平『この打席は正直あんま期待できんやら？あいつ第一打席苦手だし。』
日根野谷『ですね。』

西口（今の浮いた打者にとっては絶好球を見逃した…？強豪猪子石の3番だ…いま何を狙っている…）

芝田（やべー。次なに来るか全然わかんねー。※棒読み）

西口（次もカーブでいきましょう。）

大場がうなずく。

大場（次は低めに集める。）

ビュッ！！カク

西口（マジかよ！？やめてくれー！）

大場（また浮いちまった！！）

（（（今度こそ運ばれる！！））））

ブン！

『ストライク！！ツー！』

『さあ豪快に空振りしてツーストライク！！2球で追い込まれた！！』

西口（え、空振り？）
大場（てかバッター打てよ。まあこっちからすれば助かったけど。）

根本『おいおいおい。』
小木曽『さすがにいつものあいつでも一打席目だからといって、ん…ちょっと待てよ…』
坂本良『俺もたぶんいまヤスと同じこと思った…。なあ…みんな？』

３年生一同『うん…。』

小木曽『なあ…伊永（これなが）？』
伊永（記録員）『どうしたの？みんなしてそんな顔して。私なんかした？』

大平『あのー。大変申しずらいんですが…今日大くんは…伊永の大好物の…栃木直送かんぴょうを食べましたか…？』

伊永『うん。今日は準決勝だし。元気出ると思って。それがどうかした？』

３年生一同『それだぁーっーっ！！』

日根野谷『栃木直送かんぴょうがどうかしたんですか？』
小木曽『大はな…かんぴょうが大嫌いでな…食べるとその反動で食べた半日は頭が回らなくなるんだよ…』
藤川（控え）『じゃあ食べなきゃいいじゃないですか。』

坂本良『大はな…気が小さいからな…彼女の言葉には一切反抗でき

ないんだよ…』

日根野谷『彼女って…』

小木曽『伊永…』

ビュッ！！

西口（またまたまたまたまた）

大場（甘すぎるー。）

芝田（3球続けて甘いカーブ！！舐めんなよ！！）

ボン！

『詰まった！！おっ！しかしこれは面白いところに落ちるぞ！！』

ポテン！

『落ちたーっ！！ポテンヒット！！二塁ランナー根本は打球が落ちたのを確認してからスタート！！！！』

小木曽『さすがに3球あの球が来たらバットに当てるか…。まあ結果オーライか…』

坂本成『あんくらい捉えろよ…』

伊永『ふー。私の栃木直送かんぴょうのお陰かな。』

伊永がボソッと呟く。

グラウンド上の選手以外全員
『『『『勘違いしてるーっ!!』』』』

『さあ3番の芝田も繋いでこれで一死一三塁。』

『4番、キャッチャー、渡辺くん。』

大場（きたか…。）
渡辺『久しぶりだな。翔真。』
西口（え?）

大場『黙れ。』

続く…

Ｎｏ．７４：容赦ナシの直球勝負

『さあ初回いきなりワンナウトランナー一三塁で非常に勝負強い４番の渡辺！』

大場（ここでカズキ（渡辺一紀）か…。ちとやっかいだな。）

渡辺『まさかお前が準決勝まで来るとはな。正直なところ、驚いてるら。』

西口（知り合いか…？）

渡辺『やっぱ昔とかわんねえな。顔つきも。序盤の荒れ具合もな。』

大場（無視だ。コイツと会話をしたら厄介なことになる。）

渡辺『は…？シカト？まあ別にいいよ。昔と変わらねえってことは、昔と同じってことだ。つまり翔真は高校野球でも課題を克服できていない。弱いな。所詮こんなクズチームじゃ仕方ないわな。』

西口（く。好き勝手言いやがって。マナーを知れマナーを。）

大場『今なんつった？』

ズバン！

『ボール！！！！』

西口（なんだ…？今のボールは他の球よりも球威が明らかに違った…？）

渡辺『もう一回言ってやるよ。クズチームのエースさんよ。』

大場『…。……。』

渡辺『どうした？早く投げろ。』

大場『『『ぶっ殺す！！！！！！』』』

小木曽『お、おい！』

日根野谷『大くん走って！！』

『ふ、振りかぶったぁーっ！？』

渡辺『おいおい気が狂っちま…』

ドガーーーッッッッーーッン！！！！！！

渡辺『え…。』

『白球（ボール）…は…？』

『ス、ス、ストライーク！！』

≪　１４９ｋｍ／ｈ　≫

西口（くうーっ！はえー！手痛いわぁー。）

川越『今日はいつもと違うな。』

野中『ああ。今の１球を見る限り。』

川越『今日の大場、こりゃスカウトも黙ってないようなピッチングをするかもな。』

野中『ああ。』

渡辺『ちょっとまて…。ヤスの球を毎日受けてるこの俺が…』

ズバーーーーッッッッーーン！！！！

≪　１４８ｋｍ／ｈ　≫

『ストライク！！ツー！！』

渡辺『ボールが…見えねえ…。』

ドズバーーーーッッッッーーッン！！！！

≪　１４９ｋｍ／ｈ　≫

『邦南高校のエース、２年生左腕の大場翔真、なんとなんと自己最速タイの１４９ｋｍ／ｈで猪子石の主砲渡辺を見逃し三振に斬って捕った！！』

大場『邦南（オレら）を馬鹿にするやつは誰であろうと容赦はしない！！！！！！』

『それがたとえ、過去の最高の友達（ダチ）だとしても！！！！！！！！！』

No．75：切り抜け

ドバーーーンッ！！

≪　147km／h　≫

『147km／h直球で5番の坂本成生（さかもとなるき）も見逃しの三振！！！！！！初回猪子石高校、一死一三塁の好機生かせず無得点！！』

野中『やっぱりな。今日は序盤から球威が違う。』

川越『ああ。上社西戦で終盤に魅せたあの快速球と同じ感じだな。』

野中『試合前に言ったようにあのときの投球が続けば邦南が猪子石に勝つなんて事もあり得る話だな。だが問題はスタミナ。この投球がいつまで続くかだな。』

川越『その心配はねえだろ。忘れたか？大峰明館戦で味方にいくら足を引っ張られても自分のピッチングスタイルを貫き、チームを勝利に導いたあのメンタル（イッ）の強さ。たとえ体力的に厳しくなっても大場（ファ）には精神力（メンタル）っていう最強の武器がまだ残ってる。』

野中『納得だな。さすが大場ファンのおっちゃんってだけはある。』

川越『うっせえよ。昔からの大の邦南ファンのおっちゃんのくせしてよ。』

高田（たかだ：プロ野球スカウト）

『速いな。今の左腕。大会誌によると2年生だな？』

谷口（たにぐち：プロ野球スカウト）
『はい。ただ、あの少年は中学硬式野球日本代表に選ばれた過去があります。』
高田『ほう…。ならなぜ無名なのだ？』

谷口『彼が入学する前までこの邦南高校は夏の選手権大会には出場していなかった模様で。邦南高校は昨年、つまり大場少年が高校一年生のときに7年ぶりの公式戦出場したそうです。だから皆大場少年は野球から離れると思ったのでしょう。ましてや県内公立校断トツトップの進学校。私も彼が野球をしていると聞いて驚きました。』
高田『素晴らしい調査だ。さすが谷口くん。』

谷口『ありがとうございます。先輩。』

西口『４番の渡辺ってやつ、知り合いですか？』

大場『まあな…。ガキの頃の親友だよ。今はもう…見ての通りさ。すっかり仲も悪くなっちまった。』
西口『何かあったんですか？』

大場『あいつ、一度野球から手を離したんだよ。結構酷い怪我してよ。頭蓋骨骨折。』

西口『はあ…。』

大場『あの頃はアイツも大阪にいてよ、俺がやっちまったんだ。頭部への危険球。』

大場『アイツとは同じ照丘小ってとこにいてよ、俺は小学校の野球部に入っててアイツは有名なクラブチーム。学校ではメチャクチャ仲良くて野球では直接はあんま関わりなかったんだけど、南阪小を7回1失点に抑えたって言ったら勝負挑んできてよ。』

西口『その勝負で？ってことですか？』

大場『ああ。本気で投げたら足がスパイクじゃないせいか滑っちまってそのまま頭にな…。あの時の球威半端なかったし。軟式といえどな。それから絶交だよ。』

『2回の表、邦南高校の攻撃は、5番、ファースト、氷室くん。』

氷室『しゃあぁぁぁぁぁーっ！！来いやぁーっ！！』

Ｎｏ．７６：小木曽泰大　対　大場翔真

小木曽『２年生サウスポー、１４９ｋｍ／ｈか。』

マウンド上の小木曽がふーっと息を吐く。

小木曽『相手にとって不足なし。むしろそっちのが…』

『燃えるぜ！！！！！！！！！！』

ズゴン！！

≪　１４９ｋｍ／ｈ　≫

『ストライク！！』

高田『同じ１４９ｋｍ／ｈでもこうも違うのか。』

谷口『小木曽のまっすぐも申し分ない程キレている。なのにこの差はなんなんだ？』

高田『球が自分から打者に向かっていくようなあの大場の球。なあ谷口？こりゃ金の卵だ。事務所に調査を依頼しろ。』

谷口『わかりました。』

『空振り三振！！！！！！小木曽のウィニングショットの高速スライダーで５番氷室を空振り三振に斬ってとった！！！！！』

ズバン！
『ストライク！！バッターアウト！！』

ズバン！
『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！』

『7番の松坂も三振でこれで5連続！！！！！小木曽、圧巻のピッチングでこの回も無失点！！！！』

川越『邦南自慢の打線もこのレベルのピッチャーと当たるとさすがにキツいか。』
野中『やっぱドラフト1位候補ってのは違うんだな。速球も１５０ｋｍ／ｈオーバー。決め球の高速スライダーで打者を圧倒。』
川越『今日はまだ見せてないがチェンジアップやカーブのキレ、完成度も相当高いみたいだ。』

谷口『やはり小木曽は他の高校生と比べ物になりませんね。こりゃものが違います。』
高田『そうか？俺には大場くんの方がいい最終的に上になると思うけどな。』
谷口『と…言いますと？』

高田『小木曽も勿論高校生としては申し分ない。ドラフト1位候補というのも納得だ。享神さえ愛知にいなければおそらく小木曽のいる猪子石が今まで甲子園に出ていただろう。ただ…』

高田『小木曽（アイツ）と大場（コイツ）じゃ、這い上がってきた努力が違う。小木曽（アイツ）を低く評価してるわけでは全くない。ただな、大場（コイツ）の方が長年高校生担当のスカウトとしてやっている俺には純粋（ピュア）に輝いて見える。』

谷口『そんなこと、僕にはわかりませんよ。』

高田『ははっ。当然だわかぞうよ。』

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！』

『空振りの三振！！！！！！！猪子石のエース小木曽が2回の表、三者三振に斬れば、邦南のエース大場も三者三振に斬ってとった！！！！！！！』

川越『すげぇ闘いだな…。』

野中『ああ…。』

川越『この試合、長くなりそうだ。』

Ｎｏ．７７：蛹（さなぎ）から蝶へ

結局３回の攻防も得点には関係なく、試合は４回の表、邦南はまた小木曽に三者三振を食らう。

『４回の裏、猪子石高校の攻撃は、３番、サード、芝田くん。』

小木曽『そろそろ目覚めてくれよ…大…。』
芝田（あー、なんかクラクラする…）

渡辺『この打席もまだだメだな。ったく…打線の中心のはずの３番バッターがこれじゃあちょっと不利だぜ。』

ズバーーーッッッーン！
審判の手が上がる。
『ストライク！！バッターアウト！！』
《　１４８ｋｍ／ｈ　》

渡辺『相変わらずはえーな…。』

『4番、キャッチャー、渡辺くん。』

大場（カズキ…。）

渡辺（翔真…。）

渡辺（俺は翔真を許す気はねえかんな?）

大場（知ってる。カズキがそーゆーやつだって。）

渡辺（いかにも俺が悪いような言い方だな。）

大場（悪かったな。）

渡辺（てか翔真、ちょっとは敬語使ったらどうなんだ?オレ一応お前より年上だろ?）

大場……

渡辺（ふぅ。ささやき戦術には乗らねえか。もうスイッチ入れてきやがった。）

大場（ねじ伏せる!!!!!!!!!）

ズバーーーッッッーン！
≪　１４６ｋｍ／ｈ　≫
渡辺『どーやらあのときの事はもう気にもとめなくなったみてぇだな。』
……
大場
渡辺（ふ。いつまでその黙りが続くかな。だったらこっちがお前の口をポカンと開けてやるぜ。）
西口（次も直球（コレ）！！！！！）
ドガンっ！！！！！
≪　１４７ｋｍ／ｈ　≫
『ストライク！！ツー！！』
渡辺（速いっつっても所詮１４０ｋｍ／ｈ台…。このオレからそう何度も直球一本で空振りがとれるとでも…）
カキーン！
渡辺『思うなよ。』
『打球は大きく切れてファール！しかし４番の渡辺、振り遅れましたが少し捉えました。』

渡辺（次は翔真のことだ。直球だな。アイツは昔から直球勝負を好んでいる。もし変化球が来ても翔真レベルの変化球なら狙わなくても対応できる。）

西口（コイツ。打ち気がバンバン伝わってくる。素直なバッターだな。次は直球に絞ってるだろ。だったら…）

西口がサインを出す。

翔真は一瞬ひるんだが、頷いた。

大場（まだ下村程の精度じゃねえが…この場面、ワンナウトランナー無し。失投でも高めにいかなけりゃリスクは低い。自信持っていくぞ…。）

大場が振りかぶる。

『身体脱力（リラックス）…力は要らない…。低めのミット目掛けて、思いっきり…』

『『『指先（ここ）！！！！！！一点大集中！！！！！！！』』』

『いっけぇーっ！！！！！！！！！！！！！』

西口『大峰明館戦とは違う。絶対に止めてやる！！！！！』

ビュッ！

渡辺『やはり思った通り！！ストレー…！？』

カクウッッッッーッッ！！！！！！！！

渡辺『お、お、おい！』

ズバーーーーッッッッッーッン！！

『ストライク！！バッターアウト！！』

『空振り三振！！！！！！！！！４番渡辺は大場の伝家の宝刀フォークボールで空振三振だ！！！！！！！！！！！』

大場『しゃあああああああ！！！！！！！！！！』

渡辺『聞いてねえぜ。こんなフォークボール…。』

下村健太『さすが大場だな。オレのフォークをもうここまでマスターしてきたか。』

長岡『お前よりスゴいんじゃね？』

下村健太『それはない。』

ズバーーーーッッッッーッン！！

《　１４９ｋｍ／ｈ　》

『空振り三振！！５番坂本成生も三振でこの回も三者三振に斬った！！！！！！！！！！』

川越『おいおい…これじゃ…』

野中『間違いない…。今のアイツ…間違いなく…サナギから…』

『サナギから蝶に羽ばたこうとしている！！』

Ｎｏ．７８：展開急転

『５回の表、邦南高校の攻撃は、５番、ファースト、氷室くん。』

氷室『信じられねえよ…。俺がこんな舞台、愛知の準決勝の舞台に５番でスタメン出場…？』

島谷涼『佑介…』

氷室『去年の今ごろ…こんなこと想像できたか…？野球とも出会ってなくて…去年の夏休み、中３で受験生ってこともあったし…家で勉強して、菓子食って、寝て…勉強して…パソコンして…昔からスポーツ自体は好きだったんだけどどれも長続きしなくて…結局中学のときやってた陸上もあんま行かなくなっちまって。ホントに中途半端な人生だった。唯一の取り柄は勉強。そんな俺が…こんな俺が…ここまで来れた…。どんな場面でも…あの頃の中途半端だったオレの人生に比べたら、何十倍、何百倍と楽しいんだよ。だからこの時間は終わらせられねえ…。負けたくねえ。絶対にこの夢のような時間を終わらせてたまるもんか。勝てば続けられる。野球をやってられる。野球を続けられるためにも…』

『絶対に勝つ！！先制のホームは、俺が踏む！！』

カッキィィーーーッッッン！！！！！！！！！

小木曽『なにっ！？』

『捉えた当たりはレフトの頭上！！！！！！！！越えたーーっ！！！！！！』

氷室『しゃあ！！！！！！！！！』

『打ったバッター氷室は悠々セカンド到達。これでノーアウトランナー二塁、５回の表邦南高校の攻撃。初回の先頭鬼頭以来のランナーです。』

『６番、セカンド、副島（そえじま）くん。』

氷室『キャプテン！続いてくださいね！！』
副島『ったりめーだっ！！』

『イケイケ副島！！押せ押せ副島！！かっ飛ばせ～！！そ・え・じ・ま！！！！！！！！』

『さあ場内の雰囲気も高まってきました！！』

副島『初球はストライクをとりにきやすい…。狙いは勿論…』

ビュッ！

副島『このチェンジアップ！！！！！！！！！！』

カキーーーっン！

『また捉えたーっ！！！！！！！！思いきって引っ張った打球はファースト坂本成生の頭上越える！！！！！！！！フェアだ！！！！！！！！二塁ランナー氷室が今ホームイン！！！！！！！！今大会旋風を起こしている邦南高校、強豪猪子石からこの5回、先制点をもぎ取った！！！！！！！！！！6番副島のライト線際へのタイムリーツーベース！』

大場『ナイバッチ！！キャプテン！』

渡辺（ヤスが先制点取られるなんてな。少しばかり侮っていたよ。邦南の皆さん。ヤス、見せてやれ。）

小木曽（ギアを上げろってか。今日はちょっと早いけどしょうがねえか。出し惜しみしてる場合じゃねえし。）

小木曽（最小失点でこの回を終える！！）

『小木曽がセットポジションから投げる！！！！！！！！！！』

小木曽『くらえ！！』

カッキィィーーーッッッン！！！！！！！！！！！！！

小木曽『え…？』

ボサッ…

『入ったぁーっっっ！！！！！』

根本(ねもと)『まじかよ…。』
大平(おおだいら)『ツーラン…ホームランだと…』
新谷(あらたに)『三点ビハインド…？』

渡辺（つえーぞ…邦南高校…）

大場『頼もしい先輩たちだな。』

『7番、松坂は無表情でダイヤモンドを回って今ホームイン！！！！！5回の表邦南高校、5番氷室、6番副島の連続二塁打で一点を先制した直後、7番松坂の自身今大会2本目となるツーランホームランでさらに二点を追加し3－0！！！！！』

渡辺『タイム、お願いします。』

『タイム！！』

『さあここで猪子石の内野陣、1回目の守備のタイムをとります。』

桜沢『おいおい。猪子石負けてんじゃん。しかも三点ビハインド。』

勾城（こうじょう）『そのようですね。』

堂金『……。』

桜沢『やっぱ気になるのか…勾城…？』

勾城『ええ。名東黒シャーの同期ですから。嫌でも眼中に入ってきますよ。』

（拓磨…哲都…ここまで来い…。）

Ｎｏ．７９：発見

小木曽『困っちゃうね。まったく…。』
渡辺『大丈夫。三点ならワンチャンスでいける。』
坂本成『大事なのは次を抑えることだよ。』
根本『だね。切り替えていこ。』

芝田『やっと栃木県産かんぴょうの効果が切れてきた…』
日根野谷『頼みますよ。まったく大くん。』
芝田『わりぃ…。』

久保（伝令）『守りやすくなったし、こっからが勝負な。』

小木曽『オッケー。』

渡辺『じゃあアレやるか。』
根本『おう。』

渡辺『せーの…』

『『『ＰＵＳＨ　ＯＵＲ　ＬＩＭＩＴ！　俺達の限界に挑戦！！！！！』』』

小木曽『しゃあ！みんないくぞ！』

『『おう！！！！！！！！！！！』』

『ストライク！！バッターアウト！！！！！』

渡辺『しゃあ！ツーアウトな！』

『1番、ライト、鬼頭くん。』

カキーン！

大場『巧い！』

桜沢『ん…？』

『ツーアウトから1番の鬼頭が今日2本目のヒットで出塁！！！！！』

桜沢『鬼頭…？まさかな…アイツが野球やってるわけねえか。しか

も1番ライト。あり得ねえっての。』

『ランナー走った!!』

渡辺『舐めんなっ!!』

『渡辺の素晴らしい二塁へのスローイングでスリーアウト!!しかし邦南高校、この5回の表、三点を先制しました。』

桜沢『ん…。まさかもしかして…』

勾城『どうかしましたか?』

桜沢『いや、なんでもない。』

(まさかとは思うが…アイツ…、…ちょっと遠くて見えずらいな。もうちょっとこの試合観ていくか。)

余語『いくぞ桜沢。アップの時間だ。第二試合俺たちとやる瑞穂(みずほ)大瑞穂(いみずほ)戦の準備だ。』

桜沢『ああ。わかってる。だけどちょっと残っていいか?』

余語『なぜだ?』

桜沢『ちょっと確認しておきたいことがあってな。確認でき次第すぐいく。』

余語『わかった。』

桜沢『ヒロが野球をやってる？まさかな…。アイツのあの肘の故障じゃもう二度とボールを投げれないんじゃ…』

カキーン！

『打球はライトへ！！ライトの鬼頭が背走する！！！！！！！！』

桜沢『難しい打球だが…』

『捕ったーっ！！！！！！ライトの鬼頭、５回の裏先頭の６番坂本良太のライトへの大きな飛球を好捕しました！！！！！！』

副島『ナイキャッチ博行！！！！！』

桜沢『セカンドがあんなに深くまでボールを追いにいくのか。あのライト、肩が弱いのか。それか…』

『ボールを遠くまで投げられないか？』

桜沢『ライトがフェンス際でボールを好捕したのはよかったが…あのカットとの距離…１０メートル位しかないんじゃないか。しかも

その距離にも関わらずワンバウンド返球をするライト。そして名前が鬼頭。アイツが行った高校は…なんだっけな…』

藤野『旧S・7の一員、鬼頭博行の事を言っていますか?』

桜沢『うおっ。いいとこに来たな。マネージャーさん。そうそうそいつのこと。』

藤野『彼の行った高校名は、邦南高校ですよ。春毅(はるき)くん。』

桜沢『下の名前で呼ぶなって言ってんだろ。藤野。』

藤野『なんで~?名字とマッチしていい名前じゃん。季節感もバッチリで羨ましい。』

桜沢『はっ。なんじゃそりゃ。まあありがとう。知りたい情報はこれで揃った。』

藤野『はいはい。どういたしまして。』

桜沢(ヒロ…オマエいつの間に…。)

Ｎｏ．８０：無死満塁

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！』

『８番新谷（あらたに）は見逃しの三振！！！！これで毎回の１２個目の三振を奪ってきました！！大場翔真！！！！！』

試合は小木曽、大場の両軍エースの引き締まる投手戦で６回、７回も両チームランナーすら出せず無得点。

猪子石のエース小木曽は、７イニングを投げ被安打４、奪三振１３、四死球０、失点３。

一方邦南のエース大場は７イニングを投げ初回の先頭打者根本のヒット、芝田の詰まったヒットの２本しか許さず、毎回の１５奪三振、四死球０、失点０。

試合は３－０の邦南３点リードで８回の表、邦南の攻撃が始まる。

『８回の表、邦南高校の攻撃は、８番、レフト、木村くん。』

大場『タロ先輩！！！！打ってください！！』

松坂『キムタロ！！かっ飛ばせ！！フルスイングだ！！』

ドガンっ！！

『空振りの三振！！！！！小木曽もこれで１４個目！！！！！』

≪　１４３ｋｍ／ｈ　≫

谷口『序盤に比べると若干球威が落ちてきましたね。』

高田『いや、下位打線には本気を出していないんだろう。小木曽は実力は勿論のこと、マウンド捌きや打者心理を読むのにも長けている。これらを含めてドラフト１位候補と言われている。』

『９番、ショート、島谷倫暁くん。』

野中『下位打線じゃ手が出ないだろうな…』

カーン！

渡辺『ショート！！』

日根野谷『あいよ！』

『アウト！！』

『ショートの２年生、日根野谷（ひねのや）が捌いてツーアウト！』

『１番、ライト、鬼頭くん。』

川越『打線の巡りが悪いな。』

野中『ああ。チームトップの打力を持つ鬼頭を1番ってのはな…。』
川越『今日も邦南の４安打の内、２本が鬼頭だしな。』
野中『打席が回ってきても前にランナーがいなきゃ勿体無いよな。特に鬼頭の場合は。』
川越『３点リードも相手が猪子石じゃあセーフティーリードとは言えない。』
野中『猪子石は後攻だしな。』

鬼頭『俺が切り開く…。３点じゃ足りねえ。』

小木曽『くらえ!!』
ズバーーーッッッーン!
《１５１ｋｍ／ｈ》
『ストライク!!』

『なんと８回にきて今日最速の１５１ｋｍ／ｈ!!!!!!』
鬼頭『くっ。速いな…。』

小木曽『どりゃ!』
ズバーーーッッッーン!
《１５０ｋｍ／ｈ》

『１５０ｋｍ／ｈ直球に空振り!!!!!さあ小木曽、好打者鬼頭を２球で追い込んだ!!』

ズバーーーッッッーン!
『ボール!!!』

バン！
『ボール！！』

『低めのチェンジアップを見極めてこれでツーボールツーストライク！！』

鬼頭『勝負に来るな。』
小木曽『3点ならまだいける。見方の援護を信じて…コイツを撃ち取る！！』

ビュッ！
鬼頭『予想通りの直球勝負！！！！！！』

ズバーーーーッッッッーッン！！！！！！！！

≪　１５２ｋｍ／ｈ　≫

『ストライク！！バッターアウト！！チェンジ！！！！！！！！』

『自己最速タイの１５２ｋｍ／ｈで真っ向勝負！！空振りの三振に斬ってとった！！！！！！！！』

小木曽『しゃあああああ！！！！！！！！』

鬼頭『これがドラフト1位候補の実力か…。』

『8回の裏、猪子石高校の攻撃は、6番、センター、坂本良太くん。』

大平『サッチャン！（坂本良太のアダ名）絶対出ろよ！！！！』

坂本良『おうよ！』

西口（翔真先輩は今まで7イニングで91球。完封ペースだ。球数だけで言えばの話だが。でもな…初回から全打者全力投球だからな…。）

ビュッ！

西口（甘い！）

坂本良『隙有り！！！！！』

カキーン！

『打った！！ライト前に運んだ！！これでノーアウトランナー一塁

！！！！』

小木曽『久々のランナーだな。』
根本『うん。初回以来じゃない？』
芝田『そうだな。』

西口（ど真ん中だったが振り遅れて詰まった感じのライト前ヒットか。まだ球威があるって証拠か。）

『7番、ライト、大平（おおだいら）くんに代わりまして、代打、児玉（こだま）くん。』

大平『ヒロキ！（児玉のアダ名）打てよ！』
児玉『おう！』

西口（左の代打か。やはり猪子石。右打者の方が翔真先輩は得意にしていることを知っていたか。）

児玉（久々のセットポジション。リズムが少し変わるはず。だからもっともっと俺が…）
スッ…

『セーフティバントだ！！』

（呼吸乱してやらないとな！）

コン！

西口『サード！』

松坂『わかってる！！』

『サード松坂バント処理はどうだ！？素手でつかんで一塁へ送球！！！！！！！バッター児玉は一塁ヘッドスライディング！！！！！』

『セーフ！セーフ！』

『ここで内野安打が出た！！！！！代打児玉の意表をつくセーフティバント！！！！！これでノーアウト一二塁！！！！！』

川越『サード松坂の一歩目が少し悪かったな。』

野中『ああ。だが今まで大場の奪三振ショーで内野陣があまり足を動かしてなかったのは事実だがな。』

川越『奪三振の小さなリスクがここにきて大きく出たか。さあこの回が正念場だな。』

野中『ノーアウト一二塁…。』

『8番、レフト、新谷くんに代わりまして、代打、井上くん。』

児玉『ゆうた！（井上のアダ名）続けよ！！』

…

……

『フォアボール！！！！！！フルカウントから5球粘って大きな大きなフォアボール！！！！！！！8回の裏、3点を追う愛知の強豪猪子石高校、ここにきてノーアウトランナーフルベースの大チャンス！！！！！！！！！打席には9番の2年生、日根野谷（ひねのや）くんが入ります！！！！！！！』

『9番、ショート、日根野谷くん。』

小木曽『ヒネ！！！！！！（日根野谷のアダ名）おいしい場面だ！！！！！もってけコノヤロー！！！！！！！！！』

西口（3点リードだがノーアウト満塁の大ピンチ。）

大場（逃げ場無し。全力勝負だ。）

Ｎｏ．８１：猪子石の底力

大場（２点までならしょうがない…。絶対にリードして最終回を迎えたい。まずはアウトひとつを取ることを最優先する。）

西口（日根野谷は９番だが今大会の打率は４割を越えている。２番を打つことだってある。容赦なく攻めなきゃ痛い目みる…。）

日根野谷（フォアボールの後だぜ？狙うしかないっしょ。）

坂本良（狙っちゃえよ。ヒネ。）

児玉（続けよコノヤロー。）

井上（初球だ。初球。）

日根野谷（フォアボールの後の、初球ストライク！！）

ビュッ！！！！

児玉（甘いぞ！！）

日根野谷（ど真ん中！！粋に決める！！）

ガクッッッッッ！！

ズバーーーッッッーン！

『ス、ストライク！』

『初球は鋭いフォークボールで空振り！！！！！』

日根野谷『くそっ！』

（ここで使ってきたか。）

大場（下村から教えてもらった…この変幻自在の変化に自己調節できる最強のフォークボール…）

『セットポジションから投げる！！』

大場『下村健太直伝高速フォーク！！！！！！！』

ビュッ！カクッ！

日根野谷（さっきと同じ感じのフォーク！！ならボールだ！！！！！！）

西口（かかったな！！！！！！！）

ズバンっ！！！！！！！

日根野谷（な、なに！？変化が変わった！？）

大場（へっ。下村フォークの最大の武器は変化量じゃない。握力の感覚を覚えれば変幻自在に変化量を大きくしたり小さくしたりでき

る。もちろんまだマスターした訳じゃない。下村健太はそれに一瞬の腕のヒネリを加えて横変化もつけられる。そこまでのレベルまではまだ到達していないが、変化量の操作くらいならもうほぼ完璧にできる。）

『さあ2球で簡単に追い込んだ！！』

西口（最後は圧しきりますよ！！！！！！）

大場『どりゃ！』

ビュウンッ！！！！！

日根野谷『しまっ…』

ズバーーーーッッッッッーッン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

《　１４９ｋｍ／ｈ　》

審判の手が上がる。

『ストライク！！！！！！！バッターアウト！！！！！！！！！！！』

『9番日根野谷は１４９ｋｍ／ｈストレートで見逃しの三振！！！！！！！　2年生左腕大場、８回裏のこの大ピンチの場面で圧巻の

自己最速ストレート！！！！！！！！！！！』

『1番、セカンド、根本くん。』

日根野谷『すみません。』

根本『寝言は寝て言え。あとは先輩達（おれら）を信じろ。』

『いけ！おせ！根本！』

西口（この根本はチームナンバーワンの出塁率。なにがなんでも塁に出ようとしてくるはずだ。）

『さあ邦南守備陣、サードファーストは前進守備、セカンドショートは中間守備、外野陣は定位置より少し前！！』

野中『なにかたくらんでるな。』

川越『ああ。』

根本（ヒネが1球もバットに当たらず三振。間違いなくおれも打てる確率は高くない。ノーアウトのうちに何点か入れておきたかったがしょうがない、ツーアウトになるまでになんとしても一点とってやる。）

『さあ大場が足をあげて投げる！！』

スッ…

西口（ス…スクイズ！？）

大場（満塁でか！？）

根本（わりいノーサインでやっちまって！！）

コン！

『ヘッドを立てて一塁方向ライン際にやってきた！！！！！！！！バッターランナー根本足が早い！！！！！！！！』

西口『本塁フォースプレー！！！！氷室！バックホーム！！！！！！！！』

氷室『アウトになれ！！！！！！』

『一塁手氷室がホームへ転送！！！！！！！！！！判定はどうだ！？！？！？』

『セーフ！セーフ！』

西口『クソッ！！！！！』

『最悪のフィルダースチョイス！！！！！邦南高校アウトひとつも奪えず一点を失った！！！！！！対する猪子石にとっては大きな大きな一点！！！！！！！1番根本の満塁からの一塁へのセーフティバントで一点を還しこれで3－1！！！！！！』

西口『ちっ。焦っちまった。』

大場『切り換えな？まだまだ二点リードだぞ。』

西口『わかってますよ。頼みますね。翔真先輩。』

大場『任せろ。』

『2番、ピッチャー、小木曽くん。』

『さあここで今日力投しているエースでキャプテンの小木曽がバッターボックスに入ります！！』

芝田『ヤス、俺に回せよ。そうすりゃ点とってやるからさ。』

小木曽『ほざけよ。バーカ。今まで寝てたくせして。』

芝田『あれは伊永が…』

小木曽『まあな。（笑）』

『さあ1番根本の満塁からのセーフティバントが相手のフィルダースチョイスを誘いワンナウト満塁は変わらず！』

飯尾『打者は俊足の身体能力の高い小木曽。どうしても三振のほしい場面だな。』

谷『ああ。だが序盤からあそこまで飛ばしてどうかな。俺はバテた。』

正親（おうぎ）『それはオマエの話だろ。』

飯尾『なんだ。来てたのかよ。』

正親『ああ。気になってな。』

大場（もう一点たりともやる気はねえ！！全力で三振を奪いにいく！！！！！！！）

西口（翔真先輩の目がまた一段と鋭くなった。しかし小木曽から出る強打者オーラってのも相当やべえ。この戦い、どうなるかは全然分からねえ。だけど翔真先輩は、）

『『『一人じゃない！！！！！！みんなの力が詰まってる！！！！！！！！！！』』』

大場『しゃあああああああああ！！！！！！！！』

小木曽『さあ来いやあああああ！！！！！！！！』

『エースの二人が激突する！！！！！！！共に気合い十分！！！！！！さあすごい対決だ！！！！！！！！！！！！！！！』

Ｎｏ．８２：強豪の大黒柱としての意地（前書き）

前回の話の邦南の安打数４本のうち2本が鬼頭ってやつですが、邦南の安打数はその時は5本ですｍ（・｜・）ｍ

すいません＞（＿＿）＜

Ｎｏ．８２：強豪の大黒柱としての意地

小木曽『背負ってきたものがそもそも違うんだよ…。邦南（おまえら）とは…。』

（甲子園出場、そして全国制覇を期待される日々…。そしてエースでキャプテンという一人二役としての重圧。…親やＯＢからの資金投資。学校全体の野球部へのムード。期待。おまえらにこの重みがわかるか？わからないよ。そーゆー雰囲気じゃないだろ。所詮愛知の公立校なんて。だけど俺達には感じられる。それが力なんだ。）

『その力がこーゆー土壇場で、頼れる大きな存在になってくれるんだ！！！！！！だから負けねえ！！！！！！！！！！』

カキーン！！！！！！！！！！

大場『なに！？』

西口『アウトロー一杯のストレートを！？』

『痛烈な打球だ！！！！！！！！！！センターの前！！！！！！！！！！センター慶野は猛チャージ！！！！！！！！！！』

慶野『絶対に二人目は還させない！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

伊藤（いとう：三塁ランナーコーチャー）

『行け！！！！！！！！！！！行け！！！！！！！！！！！！！！！ブッチギレ！！！！！！！！！！！！』

『二塁ランナー井上は三塁も蹴った！！！！！！！！！！打ってからのスタートが早いぞ！！！！！！！！しかしセンターの慶野もバックホーム！！！！！！！！！ファーストの氷室が中継にはいる！！！！！！！！！』

氷室『さあここまで伸ばせ！！！！！！！！！』

慶野『おうよ！！！！！！！！！！！！！！！！！』

『素晴らしい返球が帰ってきたぞ！！！！！！！！！！！！！！！！！』

西口『ノー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

氷室『あいよ！！！！！』

『氷室はスルーした！！！！！！さあ本塁クロスプレーだ！！！！！！！』

井上『うりゃああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！』

西口『くりゃああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

ガガシーン！！！！！！！！！！！！！！！

『セーフ！！！！！！！！！！セーフ！！！！！！！！！！！！！！！』

『『『同点！！！！！！！！！！！！！！！同点！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！同点だ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！ここにきて猪子石高校３点ビハインドを追い付いてきた！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！エースでキャプテンの小木曽が初球のアウトローへの１４８ｋｍ／ｈ直球をセンターへ鋭く弾き返し、二塁ランナー井上の好スタートもあり一気に二人生還！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！これで３－３！！！！！！！！！！！！！！！』』』

西口『タイム、お願いします。』

『タイム！！！！！』

『３番、サード、芝田（しばた）くん。』

野中『慶野の動きも完璧と言っていいほどだったんだけどな。』
川越『あれは打った小木曽も褒めるべきだが、二塁ランナーの井上も褒めるべきだな。』
野中『氷室がうまくカットに入ったお陰でまだワンナウト一二塁だ。』
川越『だがここからクリーンナップ…。』

西口『ここで切りましょう！！！！何としても！！！！！！！』
大場『バカ。まだワンナウトだ。ゲッツーで終わらせたい気持ちもわかるがゆっくり一つずつだ。扇の要のお前が焦ってどうする。ここで必要なのは冷静さを欠かないことだ。』

島谷倫『よし。気合い入れていこうぜ！！』
松坂『うぇーい！！！！！！！』
氷室『うぇーい！！！！！！！』

小宮（伝令）『翔真先輩。僕の分まで頼みますよ。』

島谷倫『よし。じゃあみんないくぞ！！』

『『『ワン・ツー・スリー！！！！！！！！！』』』
『『『『ＥＭＯＴＩＯＮ！！！！！！！！！！！！！！！！！！』』』』

芝田『やっと普段の状況でバッターボックスに立てるぜ。』

『プレイ！！！！！！！』

芝田『いくぞ！！』
大場『おしゃあああ！！！！！！』

『『『いざ！勝負！！！！！！』』』

Ｎｏ．８３：独りじゃねえんだからさ。

芝田『今日俺はまだなんもしてねえ…。猪子石の３番だ。そんな俺がやるべきこと…それは…』

『勝ち越しのタイムリーで今日の借りを返すこと！！！！！』

カキーン！！！！！！！！！！

大場『え…』

『痛烈に引っ張った！！！！！！！！！飛距離は十分！！！！！！！ホームランか！？！？ファールか！？！？』

『ファールボール！！！！！！！』

西口『っぶねえ…。』

大場『クソ…。なぜ空振りが奪えない…。もう疲れたってのか…？』

小木曽『おっしいーっ！！！！！』

笠井（かさい：猪子石高校監督）
『よし！！次で息の根を止めろ！！！！』

鬼頭『翔真…』
（身体はかなり疲れてきているはずだ。だがそれを持ち前のど根性で正してきたが…。…。球威は変わっていないはず、だがなぜ打たれるのか？それはな…。）

（球威とか変化球のキレとかは根性でなんとかなっても…投球フォームが崩れてきてる…。右肩の開きがゲーム序盤と比べると格段に速くなって打者からすると自然と球が見やすくなってるはずだ。さらにそれだけじゃない…。右肩の開きが速くなれば当然ボールはシュート回転する。だからボールが飛びやすくなっているのも事実だ…。とにかくこのままじゃヤバい気がするぜ…。）

西口（なぜ突然こうなった…。球速表示を見る限りまだ疲れてはいないはず。だが若干シュート回転気味の直球になるときもある。だがシュート回転気味の直球になったとしても突然こんなバットに当てられるなんて…。）

カキーン！

『これも引っ張って打球は三遊間！！！！！強い打球で二塁ランナーは還ってこれず、これで一死満塁！！！！！！ここで打席には…』

『４番、キャッチャー、渡辺くん。』

大場（ここで巡ってきたか…。カズキ。）

渡辺（奇遇だな。ま、俺が決めて楽にしてやるよ。）

高田『同点の８回裏ワンナウト満塁…ここで４番の渡辺…。』

谷口『高校通算７０本。今大会も既に５本の本塁打。』

高田『そして５本のうちグランドスラムが２本…。』

谷口『得点圏…特に満塁が大得意の打者…』

高田『邦南にとって最悪の打者がここで巡ってきた。桜沢春毅、下村健太、そしてこの渡辺一紀。愛知の高校生三大スラッガー。』

『さあ大場、セットポジションから注目の第１球！！！！！！！』

ビュウウウッッッッ！！！！！！！

ズバーーーーッッッッッーーッン！

≪　１４６ｋｍ／ｈ　≫

渡辺（右肩の開きが早いな。疲労でフォームが崩れたか。さあ気づくか？まあ無理やら。目の前のことでいっぱいいっぱいだもんな。

オマエの目をみればわかる。…俺をどう撃ち取るかしか考えてないだろ。勿論それじゃあ自分を見つめることはできない。この勝負、既に決まってるやん。）

大場（俺の磨きあげた渾身のストレートが…）

『『『簡単に打たれてたまるかぁっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』』』

渡辺（悪いな。）

カッキィーーーーッッッーーィーーッッンンッ！！！

西口（ウ、ウソだろ…？）
氷室（終わった…）

大場（……。…。）

『入ったあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！打った瞬間！！！！！！！！文句なしの打球！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！バックスクリーンの上を越えていった！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！ピッチャー大場は呆然！！！！！！！！！呆然！！呆然！！！！！！！！！！！！！！同点の8回裏、邦南ナインにとって最悪の、4点ビハインドとなる、勝ち越しの、グランドスラム被弾！！！！！！！！！！！！！！！！！！まさかまさかの展開！！！！！！！！これまでヒットは初回の2本のみに抑えられていた邦南のエース大場から、この回一挙5安打を浴びせ、7点を奪ってきた！！！！！！！！！！！！これが優勝候補、春の大会準優勝校の4番の実力！！！！！！！！！！！！！試合を一気にひっくり返した！！！！！！！！！！！7－3！！！！！！！！！！！』

大場『…。……。…。』

『5番、ファースト、坂本成生くん。』

カキーン！！！

『6番、センター、坂本良太くん。』

カキーン！

『7番、先ほど代打致しました、児玉くんに替わりまして、代打、長澤（ながさわ）くん。』

カキーン！

『これもクリーンヒット！！！！！！！！止まらない猪子石打線！！！！！！！これでまたワンナウトフルベース！！！！！！！この回これで8本目のヒット！！！！！この試合の安打数も二桁に乗せてきた！！！！！』

西口（ダメだ。グランドスラム被弾のあと、完全に翔真先輩の集中力が切れている。疲労と重なってボールが全然走ってない。）

『タイム、お願いします。』

『タイム！！』

西口（今日も投手は翔真先輩しかいない…。上社西戦で好投した氷室でもさすがに猪子石打線を相手にするのは無理だ。）

（どうすりゃいい…？何を言えばいい…？）

大場『…。……。』
西口『固いですよ。もっと切り替えましょ。』
大場『…。』
西口『聞こえてますか？』
大場『…ってくれ…。』
西口『はい？』
大場『…って……。』

西口『何て言いました？』

大場『帰ってくれ！！！！！打たれちゃいねえときに打たれちまった！！もうどうすりゃいいか…』
ガッ！！

翔真の左肩にゴツゴツした手が掛かった。

大場『健祐（けんすけ）…せんぱい？』

松坂『落ち着け。独りになるな。全員野球しようぜ。』

大場『え…』

島谷倫『おれらがお前を責めるとでも思ったか？』

大場『…。』

すっ…
主将の副島が大場の左手首をつかむ。

副島『信じてんだよ。おれらは大場(エース)をさ。この左腕にこのチームの行方をどうされたって構わねえ。けどな、どうされたって構わねえけどさ、どうされたいか希望はある。』

大場『……？』

副島『俺たちを勝たせてくれ。それだけ。まあただの希望であってそうならないこともある。おれらみんな翔真みたいに野球のレベルは高くない個人の能力も高くない。翔真の足を引っ張ることだってしばしば。その度その度、翔真、笑ってくれたじゃん。ミスしても笑って気持ちを誤魔化してくれるお前に今まで何度と救われたか。だからお前がミスしたっておれらは何も悲しくはならない。どんな重要な場面で打たれたって、そのときマウンドに立ってる男が大場(エース)翔真ってだけで切り換えることができちまう。お前って存在だけでな。だからよ、まだ頑張ろうぜ。』

島谷倫『お前がしんどいときには、おれらに責任を押し付けりゃあいい。その責任を承って、処理するのが野手(おれたち)の役目ってもんだろ。』

松坂『試合はまだ終わっちゃいない。まだ最終回が残ってる。この回これで止めりゃあ、4点差で9回。十分可能性はある。』

大場『み、みんな…。』

松坂『何泣いてんだよ。バカ。』

島谷倫『負けりゃあ3年の俺たちはもうお前の後ろで守備すること

はないだろう。』

副島『負けちまったらそれはそれでしょうがねえ。もしそれが今日になるとしても。まあする気は更々無いけどな。ここからのお前のピッチング。全力で見守るからよ。思い切っていけよ。』

大場『はい！』

『8番、先ほど代打致しました、井上くんが、そのままバッターボックスに入ります。』

『プレイ！！』

大場『絶対に勝つ！！！！！！！！！！先輩達のラストゲームになんかしてたまるか！！！！！！！！！！！！！！』

Ｎｏ．８４：希望

大場『最大の敵は自分…。俺は今一度（そいつ）自分に負けた。だけど先輩達がそこから俺を救ってくれた。ドロップアウトしかけたときに助けてくれた。』

『もう失うものなんか１つもねえ！！！！！！俺は俺のピッチングを貫く！！！！』

ズバーーーーッッッッッーッン！

≪１４７ｋｍ／ｈ≫

『ストライク！』

井上（くっ…）

渡辺『開き直ったか…？』

ズバーーーーッッッッッーッン！

≪１４８ｋｍ／ｈ≫

『井上、振り遅れてツーストライク！！！！！！！そして大場はこの場面で１４８ｋｍ／ｈ！！！！！！』

西口（落としますよ！翔真先輩！！）

ビュウッ！！！！

井上（３球とも直球なのに撃ち取られてたまるか！！）

ガクウッッッ！！！！！

井上『なっ…』

（バットがとまんねえ…）

ブン！

『空振りの三振！！！！！！ワンナウトフルベースの大ピンチをウイニングショットのフォークボールで三振に撃ち取ってきた！！！！！』

西口（改めてすげー球だ…。異常なほどのキレでバッターの気づくのが遅れる。ましてストレートとそう大差のないスピード…。）

松坂『ナイピー！ナイピー！ツーアウトな！』

野中『勝ち越されて沈むかと思ってみてたが、持ち直したようだな。』

川越『ああ。どうやらさらに元気になったみたいだな。まだ邦南ナインは諦めてねえ。』

『９番、ショート、日根野谷（ひねのや）くん。』

日根野谷（今度こそは…絶対打つ！）

ビュッ！！

日根野谷（この感じ…）
『フォークだ！！！！！！！』

ガクウッッッッ！！

日根野谷『予想通り！！』

バン！
『ストライク！！！！！』
『空振りでワンストライク！！！！！』

日根野谷『おかしいだろ…。なんだよこの落差…』

（（（（（　序盤より、変化量増してねえか？　）））））

ストン！バン！

『ストライク！！ツー！！』
『今度は見逃してツーストライク！！！！！！！』

西口（あの高めのボールコースから一気に落ちてストライクゾーン低め一杯に入る。すげぇ使いやすい球だ…。）

西口がまた下村フォークのサインを出す。
しかし大場は首を振った。

大場『この1球は絶対にこのボールじゃなきゃダメなんだ！！』

『渾身のストレート！！！！！！！！』

ビュウウウッッッ！！！！

日根野谷『クソォォォッッ！！！』

ズバーーーーッッッッッーーッン！！！！！

『空振りの三振！！！！！！！！！大場翔真、８点目は防いだ！！！！！！！！！自己最速タイ、今日１０回目の１４９ｋｍ／ｈ！！！！！！！！！』

野中『さあしかしこの状況…』

川越『２番から始まるとはいえ…相手が小木曽では…スタミナ切れも９回の時点じゃ期待できないだろ…。』

野中『小木曽はこの時のために余力を残していたしな。』

川越『さあ邦南にとって絶対的に不利な状況…。』

野中『だが、愛農大名林戦で９点ビハインドから逆転したことがあるのも事実。小木曽から４点も無理な話ではない。』

川越『まあどちらにせよ、先頭の慶野が出塁するかしないかで大きく可能性に差がでる。』

ズバーーーーッッッッッーーッン！

『ストライク！』

慶野（なんだよこれ…いくらなんでも…）

ズバーーーーッッッッーーッン！

『ストライク！ツー！！』

慶野（速すぎ…ねえか…？）

≪　１５１ｋｍ／ｈ　≫

Ｎｏ．８５：ドラ１候補の本領

慶野（もうツーストライク…。この回、４点とらなきゃおれらの負けだ。そうするには俺がでなきゃ難しいことなんかわかってる。だけど…）

スバーーーッッッンッ！

『ボール！！』

『１球見せてボール！！これでカウント１ボール２ストライク！！！』

慶野（相手が…小木曽（コイツ）じゃなけりゃあな…。）

野中『慶野は今日小木曽に全くあっていない…。』

川越『３打席すべて三振に撃ち取られてる…。』

慶野（中２から野球を始めた。俺なんかが…こんなピッチャー打てるわけ…）

ゴウッ！

カスン！

慶野（え？）

『ファウルボール!!!!!』

大場『よし!』

慶野（あ、当たった…？いや、かすっただけ？でも…確かに…当たる！）

小木曽（む。目が変わった？まあどうせ俺の球はコイツには打てねえか。次で片付ける。）

ビュウウウッッッッ!!

カスン!

『ファウルボール!!』

カスン!

『ファウルボール!!』

慶野（まぐれじゃない!!打てる!!!）

ビュウッ!カクッ!

慶野（スライ…ダー？くそ…バットが止まんねえ…。）

カスン！

『小木曽の高速スライダーに泳いでしまった！！打球はボテボテの一塁手と投手の間！！！！！！！！！』

慶野『どんな形であれ…セーフになってやる！！！！！！！！』

『ファーストが今捕球！！！！バッターランナーの慶野！！！足が速いぞ！！！！！！！一塁ベースカバーの小木曽と競争だ！！！！！！！！』

渡辺『ヤスのベースカバーが少し遅い！！』

バン！

『タイミングは微妙！！！！！！！！さあ判定はどうだ！？！？』

『セーフ！セーフ！』

慶野『しゃあああ！』

大場『よし！』

『４点を追う邦南高校の９回表、先頭の２番慶野の内野安打でまずノーアウトランナー一塁！！！！！』

『３番、ピッチャー、大場くん。』

小木曽（4点差だ。ランナーなんか関係ねえ。バッターに集中する。）

大場『初球のスライダーは想定内！！！！！』

カキーン！！！！！！

『捉えた打球はライトの上！！！！！！！！深い守備位置のライトの頭の上を越えたのを確認してから一塁ランナーの慶野はハーフウェイの体勢からスタート！！！！！！打ったバッター大場は二塁へ！！！！！！ツーベースヒット！！！！！！！！これで無死二三塁！！！！！！』

『4番、キャッチャー、西口くん。』

西口『まずは後ろに繋ぐ。一点ずつ返していく。長打は要らないな。』

渡辺（邦南のバッター…5回の時のタイムリーといい、ヤスの変化球にはめっぽう食らいついてくるな…。ただ…この4番は…）

（最近調子を崩している。今日もノーヒット。まずコイツを料理して一個取るぞ。）

西口（チームの流れは確かに良くなってる。俺が続いてノーアウトの内に何点か取ることが重要になってくる。）

ビュウウウッッッ！
ズバーーーーッッッッッーッン！
『ストライク！』

西口（え…）

（球のノビが…突然増した？）

ビュウウウッッッッ！
ズバーーーーッッッッッーッン！
『振り遅れての空振り！！！！これでツーナッシング！！！！！』

西口『引き付けて…逆方向！！！！！！』
カクッ！

ブン！

『空振りの三振！！！！小木曽のウィニングショットの高速スライダーにバット当たらず！！！！！！！』

西口（ここに来てストライクからボールになるスライダー？ちくしょう…。４番の俺が…。）

氷室『ニッシー（西口のあだ名）。そんなへコむなって。まだワン

ナウトだよ。』

西口『ああ、頼む。』

（絶対打ってくれ…。）

『5番、ファースト、氷室くん。』

ビュウウウッッッ！

ズバーーーーッッッッーーッン！

『初球インコース一杯のストレート！！！！初球から厳しいコースをついてストライクをとってきた！！』

野中『この状況で初球からポンポンストライクが入る…。やっぱりいいピッチャーだ。』

川越『インコース一杯の１４０ｋｍ／ｈ台中盤の速球か…』

ズバーーーーッッッッーーッン！

『これもインコースの直球に氷室バットが出ずツーストライク！！！！！』

氷室（なんなんだよこのピッチャー！…。なんで9回なのにこんなボール投げれんだよ…。）

ビュウウウッッッッ！

氷室（遠い！！！ボールだ！！！！！！！）

渡辺（文句なしのナイスボールきた！！！！！！）

ズバーーーーッッッッーーッン！！！！！！！！！！

氷室『あ…』

『ストライク！！！！バッターアウト！！！！！！！』

『痛恨の見逃し三振！！！！！！！アウトローに見事に決まった直球に、氷室、全く手が出ず！！！！！！！！！これで猪子石高校、決勝進出まであとアウトひとつ！！！！！！！！！』

川越『準決勝の9回表にきて遂に本領発揮してきたか…。』

野中『勝利が見えて自然とギアが上がったようだな…。とにかくこのままの流れじゃまずい…。』

川越『打てよ…キャプテン…。』

『6番、セカンド、副島（そえじま）くん。』

小木曽『4点リードの9回ツーアウトランナー二三塁。楽勝。』

渡辺（さすがヤス。まだ笑える余力が残っている。）

副島『勝負だ！！！！』

小木曽（たしかコイツもキャプテンだろ。）

根本（笑った…？）
日根野谷（まだ諦めてないみたいだね。）

松坂（ミツル（副島のアダ名）…打ってくれるよな。）

副島『高校生活の全てを今、この瞬間、このバットに捧げる！！！！』

No．86：本気

『ボール！カウントツースリー！！！！！！』

『さあ低めの変化球を見分けてフルカウント！！！！猪子石はあと1球で決勝進出！！！！！！！！！！』

副島『クソッタレ…負けてたまっか！』

小木曽
（これで…）
『御開きだ！！！！！！！！！！』

ビュウウウッッッッ！

副島『こりゃあ！』
カーン！

『ファウルボール！』

渡辺（さすがについてくるか…。直球一本攻めは若干リスクが高いな。）

ビュッ！！

ガクッ！

副島『チェンジアップ！』

カーン！

『これも食らいついてファウル！！！！！！カウント変わらず！！！！』

カーン！

『ファウルボール！』

≪１４５ｋｍ／ｈ≫

カーン！

『ファウルボール！』

≪１１９ｋｍ／ｈ≫

渡辺（困ったときの…）

小木曽（高速スライダー！）

ビュッ！！

ガクウッッッッ！

副島『コイツは俺がさっき打った…』

『高速スライダー！』

渡辺（しまっ…コイツは５回に確かこのヤスのスライダーを打っているんだった！！）

カキーン！
大場『よし！』
西口『ナイバッティン！！！！！』

『捉えた打球は右中間！！！！！！！ヒットだ！！！！！！！！ランナー二人還って７－５！！！！！！！！打ったバッター副島は一塁ストップ！！！！！』

渡辺（わりぃヤス。俺のリードミスだ。）
小木曽（いいって。まだ2点差だろ。しかもあとひとつ。早く終わらせようとしなくてもいい。こっからは下位打線だ。が、この7番…さっき俺の直球をスタンドまで運んだやつだ。長打だけは注意しないとな。）

『7番、サード、松坂くん。』

鬼頭『ケンちゃん（松坂のアダ名）が打ってくれれば可能性は十分！！』

小木曽（コイツに借りを返す！！！）

渡辺（コイツはさっきヤスの直球をいとも簡単にスタンドへ運んだことから予想できるのは…ストレートに滅法強いはず。）

小木曽（スライダー？嫌だ。）
渡辺（今日散々捉えられているスライダーは使いたくないか。ならチェンジアップしかないぞ。）

松坂（さっきのホームランで俺を警戒しているはずだ。故にさっき打った球…つまりストレートを初球に放ってくる確率は極めて低い。ならば残るのはスライダーかチェンジアップ。カーブってのも試合前まではあるって聞いていたが今日は使っていない。だからスライダーかチェンジアップの2択。だが…小木曽のスライダーは今日邦南打線はタイミングが合っている。しかもミツルにスライダーを狙い撃ちされたあとの俺の打席。こりゃ…チェンジアップしかないだろ…。ヤマ張るか。まだカウントもまっさらだし。）

『さあ小木曽、セットポジションから投げる！！！！！』

ビュッ！！

渡辺（まじかよ…。これじゃあ…また…）
小木曽（コースが甘い！！さらに…）

（（（　完全に読まれてる！？！？　）））

松坂『ど真ん中！！！そして予想通りのチェンジアップ！！！！！！いただき！！！！！！！！！』

カッキイィィーーッッツィーーッッンッ！！！！！！！！！！！！

『これも完全に捉えた！！！！！！打球は伸びるぞ！！伸びるぞ！！！！入れば同点！！！！！！どうだ！？！？！？』

ガシャンっ！！

『『『フェンスダイレクト！！！！！！一塁ランナー副島は三塁ストップ！！！！！打った松坂も悠々セカンドへ！！！！！！！！』』』

大場『おっしぃーっ！！！』
鬼頭『さすがケンちゃん！！！！！！！』

『最終回、４点を追っていた邦南高校！！！！二死二三塁からキャプテン副島の２点タイムリーヒットで２点差とした後、７番の今日今大会２本目のホームランを放っている松坂のフェンスダイレクトでまたツーアウト二三塁！！！！！一打同

点の大チャンス到来！！！！！！！』

野中『さあここで片野くん（邦南の監督）は動くかな。』
川越『ああ。俺が監督ならそうするな。木村じゃ同点にする可能性は低い。』

片野（邦南野球部監督）
『木村！！交代だ。よく頑張ってくれた。』

木村『はい。小宮、頼んだぜ。』
島谷倫『かっ飛ばしてこい！！！！』
西口『足は、大丈夫なんだな？』

小宮『うん！激しい運動、守備とか走塁とかは難しいかもしれないけど、バッティングならなんとか大丈夫だよ！もう松葉杖も取れたし！！』

西口『そうか！決めてこいよ！！』

小宮『うん！』

『邦南高校、選手の変更をお知らせします。８番、レフト、木村くんに代わりまして、代打、小宮くん。』

野中『やっぱりな。』
川越『ようやく、小宮か。』
野中『お前あんまり小宮のこと知らないだろ。』
川越『まあな。はっはっは。でも…いい打者だろうな。そういうオーラが伝わってくる。もう松葉杖も取れたんだな。』
野中『ああ。ただの軽いヒビだったらしいからな。甲子園に行けばスタメンで上位打線に組んでくるくらいの打者だ。』

渡辺（この場面での代打。左打ちか。体つきも非常に文句のつけがたいバランスのとれた感じだ。確かに良いものはもってそうだが。邦南の代打陣にそう期待できるやつなどいないはずだ。コイツで試合を閉じるぞ。）
小木曽（その言葉、もう何回も聞いた。）

渡辺（まあそう怒るな。行こうぜ、甲子園に！！）

小木曽（当たり前だろ。）

小宮『今週ドラフト１位候補。本格派右腕か。明日のための練習にはもってこいだな。小木曽くん。キミが打てなきゃ、堂金（どうがね）も打てっこないよね。』

小木曽『なんだお前、言ってくれるじゃん。俺が堂金とかいう享神の1年Pに劣っているとでも？』

小宮『そりゃあ…ね。』

小木曽『なめんじゃねえ！！！！』

ビュウウウッッッッ！！！！

ズバーーーーッッッッッーッン！！！！！！！！！！！！！！

『豪快に空振り！！！！！！！！ストレートに完全に振り遅れた！！！！！！！』

小宮（ずいぶんと速いね…。しかもボールに魂がこもってる…。さすがってとこかな…。）

渡辺『お前、バカだろ。』
小宮『何がです？』

渡辺『マウンド、見てみろよ。』

小宮『ん…。……。…………。』

【【【【　え…。どーゆー状況だよ…。　】】】】

渡辺『アンタが挑発したせいで、ヤス、相当頭にきたみたいだね。』

小宮『で、でも…なんだよこの“殺気”みたいなオーラは！？！？』

小木曽『おい。テメエ。』

小宮『…？』

小木曽『茶化してる暇あったら、本能でかかってこいよ。じゃなきゃお前、ぜってえ負けるぞ。この俺に。』

小宮『なんだ。そーゆーことか。なら話は早い。』

『冗談が通じる相手じゃなかったみたいだね。もちろん、全力でいかせてもらうよ。』

小木曽『挑むところだ。控えのヤローが。』

Ｎｏ．８７：ぶっつけ本番直球絞り

小宮（初球はストレート…。場内球速表示だと１５１ｋｍ／ｈ。愛農大名林の長岡も速球派のピッチャーでＭＡＸ１４８ｋｍ／ｈとか言ってたっけ…。たった３ｋｍ／ｈ差でもこんなに違うのか…。小木曽の直球の方がかなり厄介だな。次の球…何かな…。）

渡辺（これは今の相手は完全に頭にないだろ。これで追い込むぞ。）

小木曽（おっけー。今日初だな。）

『小木曽がセットポジションから投げる！！！』

小宮（ん……。）

西口『カーブか！！』

ズバン！

『ストライク！ツー！！！』

小宮『ふうーっ…。…。』

小宮がゆっくりと息を吐く。

『さあ代打小宮を２球で簡単に追い込んだ！！！！！！！あと１球で決勝進出！！！！！！！！！』

小宮（ストレートがもう1球見たかったな…。最悪ウイニングショットの高速スライダーが確認したかったけど…。実戦から若干離れてる僕が彼の快速球についていける可能性は低い…。ましてや今日初打席…。次のボールは間違いなくストレート。初球の僕の怯み具合を見る限りストレートに全く対応しきれてなかったしね。3球で来るとも限らないけど。変化球だったらボールにしてくるはず。）

ビュッ！！
カクッ！
『ボール！』

『さあストライクからボールになるスライダーを見逃してボール！』

西口『小宮のやつ…。』
慶野『よく見えてるな。』
大場『いや、かなり動揺している。初球の怪物級の豪速球のイメージがぬぐえていないんだろう。勝負球は誰の目から見ても明らかなようにストレートだろう。それを小宮が打てるかどうか。それで決まる。』

ビュッ！！

『チェンジアップがショートバウンドになってボール！これでカウントはツーツー！！！！！！！！勝負に来るか！？猪子石のバッテリー！！』

小宮（次だ！ストレートが来る！！）

渡辺（緩急もつけた。あとはコイツをヤスのストレートで三振に撃ち取るのみ。もし読んでるとしても今のヤスの直球に緩急とかの工夫を凝らしたんだ。絶対に抑えられる。）

渡辺がストレートのサインを出す。

小木曽『任せろ。カズキ。』

小木曽がニッコリと微笑む。

小木曽（俺には今度こそ勝たなくちゃいけねえやつがいる。こんなところでくすぶってちゃいけねえんだ。今度は絶対に…）

（桜沢をぶったおす！！！！！）

西口（哲都…ごめんな…お前に1球しかチャンス与えられなくて…。ほんとに悪いと思ってる。この1球で仕留めてくれ…。）

小宮（もう…。拓磨の心の声なんか僕には聞こえてるんだよ?そんなのいいって。だって嬉しいもん。拓磨が昔の拓磨に戻ってくれてさ。それだけで十分。でも、ここは絶対に負けちゃいけない場面なんだ。僕が1球で仕留めればみんなが喜んでくれる。こんなしびれる場面。これからの人生でも経験できるかわかんない。）

西口（て…哲都…。）

小宮（でもね。これだけは言わせて。）

西口（…？）

（あんな陰気だった僕を、野球に誘ってくれて、ありがとう。）

根本『決めろ！！！！！！』

芝田『これで終わりだ！！！！！！！！』

大場『打ち返せ！！！！！！』

鬼頭『絶対打てよ！！！！！！！！』

西口『決めてこい！！！！！！！！！！哲都！！！！！！！！！！！！！！！！』

小木曽『俺のストレートが、そう簡単に打たれてたまるか！！！！！！！！！！！！！！！！』

ビュウウウッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！

小宮『みんながこんな僕に期待してくれる。なのに凡退なんてしてたら…』

『『『僕の存在意義が無くなっちゃうじゃんかよ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』』』

ガン！

ボールがバットに当たる。

『『『『いっけえぇぇぇぇっっっっっ！！』』』』

カァッッッッアッッッァッッッキーーーーーーーッイィーーンッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！

『『捉えた！！！！！！！！打球はセンターの後ろ！！！！！！！
！センター坂本良太！！！！！バックする！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！バックする！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！』』

小木曽『捕ってくれ！！！！！！！！サッチャン！！！！！！！！！
！！！！！！』

坂本良『くそぉ！！ギリギリか！？』

Ｎｏ．８８：小宮哲都

小木曽『サッチャン！捕ってくれ！！！』

坂本良『ギリギリか！？！？』

『打球はセンター坂本良太の頭上！！！！！！！伸びるぞ！！伸びるぞ！！』

坂本良『どりゃぁぁぁぁ！！！！！！！！』

『センターの坂本良太は大ジャンプ！！！！！！！！』

パシッ！！！！！！！！！

小木曽『サッチャン！！』

坂本良『よっしゃあああああ！！』

『『捕った！！！！！！！！！！！』』

鬼頭『夏が…最初で最後の夏が…』

慶野『終わる…』

バシン！！！！！！！！

坂本良『いてっ！！』

『お、お、落とした！！！！！！！！！！！！！センター坂本良太、勢いあまってそのままフェンスにぶつかった衝撃で落球した！！！！！！！！！！！』

大場『よっしゃあ！！！同点だ！！！！！！！！』

『ランナーは既に二人還ってきて同点！！！！！！！！打った小宮はぎこちない走りながら一塁ベースを蹴る！！！！！！！！』

渡辺『まずい！！サッチャン！！！！』

小木曽『立ち上がれ！！！！！！！』

坂本良『…。……。』

『センター坂本良太、フェンス激突の衝撃で伏せたまま動けない！！！！ボールはセンターフェンス辺りで転々としている！！！！！』

小宮『ランホーいけるかな！？』

『レフトのこの回から守備についている伊藤が遂にボールに到達！！！！！！！小宮は三塁ストップ！！！！！！！！』

『ツーアウトランナー三塁！！！！！！！！勝ち越しのランナーも三塁へ到達！！！！！！！！』

鬼頭『ナイバッチ小宮！！！！！！！！！』
西口『お前ってやつはよぉーっ！！！！』
大場『このまま勝ち越すぞ！！！！！！！』

『サードランナー、小宮くんに代わりまして、代走、藤武くん。』

慶野『フジは俊足だからな。ワイルドピッチでも還ってこれる。』

『9番、ショート、島谷倫暁くん。』

鬼頭『トモアキ！俺まで回せ！！』

野中『まさか追いつくとはな。』
川越『ああ…。邦南のやつら…こんなに成長したんだな。』
野中『毎年邦南の試合を見てる俺が一番ビックリしているよ。去年までだったら4点ビハインドの状態で諦めムードになってランナー一人すら出せずに終わってただろうしな。』

小木曽（この俺が地方大会で7失点だと…。こんなところでくすぶってちゃダメなのに…。）
渡辺（切り替えろヤス！打順は9番だ！！コイツさえ抑えれば後攻の俺らが絶対に有利だ。だがコイツをもし塁に出すとしたら…次のバッターは鬼頭…。それだけは絶対に避けたい。だからこそのコイツを抑えるんだ！！！）

ズバン！
『ボール！！』

渡辺（次でストライクとるぞ！）

ズバン！！
『ボール！！！！！』

『さあこれも完全な逆球！！！！！カウントツーボール！！！！！！』

渡辺（ヤス！まさかお前…）

ズバーンッ！
『ボール！』

『これも高めに浮いてボール！！！！！！！！！9番の島谷倫暁に対しなんとノースリー！！！！！』

小木曽『はぁ…はぁ…』

渡辺『限界…なのか…。』

ズバーンッ！
『ボール！フォア！』

島谷倫『よっしゃあ！！』
鬼頭『よし！』

『ストレートのフォアボール！！！！！！！小木曽、ストライクが入らず9番の島谷倫暁にフォアボールを出してしまった！！これでツーアウト一三塁！！！！！』

笠井（この場面…2番手の芝田を投入してもいいが…エースに託す…。）

渡辺（やっぱり笠井先生は動かねえか…。ヤスと心中する気だな…。）

小木曽（ボールが思ったところにいってくれねえ…。まだ9回だぞ…。中盤以降必要な場面以外では力をセーブしてきたが…序盤に少し飛ばしすぎたか…。笠井先生は微動だにせず俺を信じてくれてる。チームのためにも打たれちゃいけないんだ…。）

『1番、ライト、鬼頭くん。』

渡辺（歩かせるか？）

小木曽（いや、コイツを絶対に抑えていい流れにもっていきたい。俺を信じてくれ。）

渡辺（そーゆー言葉を待ってたんだよ！）

小木曽（みんな…）

（絶対、行こうな。甲子園。）

小木曽『オラァァ！！！！！！』

ビュウウウッッッッ！！！！！！！！！！！！！

渡辺（よっしゃあ！！！！ここに来てまた球威が戻った！！！！！！さすがヤス！！！！！！！！！）

カッキイィィーーッッッィーーッッンッ！！！！！！！！！！

渡辺（え…。）

『打球は大きいぞ！！！！！！！！ライトポール際！！！！！！！！！！入れば勝ち越しのスリーラン！！！！！！！！ホームランか！？ファールか！？』

『ファールボール！』

『打球は惜しくも切れてファール！！！！！！！しかし鬼頭、小木曽の直球を完全にとらえました！！！！！！！猪子石は命拾いしたか！？！？』

小木曽『なんなんだよ！？コイツは！？』

渡辺『なぜヤスの直球をここまで完璧にとらえられる！？』

小木曽『ダメだ！！！！どこに投げても打たれる…。』

『ストレートがワンバウンドし、ワンスリー！！！！！！！』

大場『小木曽…鬼頭さんの強打者のオーラに圧倒されてる…。』

渡辺（こんなヤス…今まで見たことねえ。）

小木曽『ウオォォォォ！！！！！！』

ビュッ！！！

ガツン！

鬼頭『ってぇ…』

『デッドボール！！！！！！！！！』

『痛恨のデッドボール！！！！！！！これでツーアウトフルベース！！！！逃げ場なし！！！！！！！！！』

小木曽『…。』

渡辺『ヤス…限界なんだな…。』

Ｎｏ．８９：心配無用

『2番、センター、慶野くん。』

渡辺『タイムお願いします。』

『タイム！！！！』

笠井（センターも交代だな。痛みが隠しきれてないみたいだしな。）

『猪子石高校、シートの変更をお知らせします。』

守備位置の変更←←

８：坂本良→斎藤

『さあ猪子石高校内野陣、マウンドに集まります。』

芝田『やっぱサッチャンどっか痛めたっぽいね…。』

坂本成『さっきのフェンス激突のプレーか…。』

根本『サッチャンも全力プレーでやったんだ。アイツのためにもここで負けらんねえよ。』

渡辺『ヤス？いけそうか？』

小木曽『いける…やってみせる…。俺は猪子石のエースだ…。』

渡辺『相当球は来てないぞ。無理してるなら大（芝田のこと）と代われ。』

根本『ちょっとカズキ!!』

坂本成『まて。ねもちゃん。』

小木曽『任せろよ…。俺はやるぞ…。』

日根野谷『ヤスくん…。』

渡辺（おまえ…もう限界のくせに…。無理しやがって…。言わなきゃ…ヤスはもう限界なんだ。次の慶野はミートの巧い俊足のバッターなんだ…。ヤスの球じゃもう抑えられねえかも知れねえ…。）

小木曽『絶対に抑える!だからみんな帰ってくれ!』

根本『おう!頼んだぜ!ヤス!』

芝田『やっぱ俺の出番じゃねえよな!!』

坂本成『俺らがサヨナラ勝ちしてやるからよ!!』

日根野谷『頼みましたよ!ヤスくん!』

小木曽『おう!』

渡辺（言わなきゃ…。言わなきゃ…。）

『ヤス。』

『なんだよ?』

『…。ヤス…。』

『だからどうした？』

『なんでもない。』

小木曽『どうしたんだ？カズキのやつ…。』

『プレイ！！！！！！』

渡辺（言えなかった…。エースの恋女房の俺が言えなかった…。本当に抑えられるとは到底思えねえよ…。）

『小木曽がセットポジションから足をあげて投げる！！！！！』

ビュウウウッッッッ！！！！！！

慶野『は！？！？』

ズバーーーーッッッッッーッン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

≪　１５１ｋｍ／ｈ　≫

渡辺（え…。）

『ストライク！！！！！！！！！』

小木曽『どんなもんじゃい…。カズキ…。』

ビュウウウッッッ！！！！

ズバーーーーッッッッッーーッン！！！！！！！！

≪　１５１ｋｍ／ｈ　≫

『ボール！！！！！！！！』

『これは惜しくも外に外れてボール！！！！！！！！ただここにきて１５０ｋｍ／ｈオーバー連発！！！！！！！！』

渡辺（心配…無用だったみたいだな！）

ズバーーーーッッッッッーーッン！！！！！！

『ストライク！』

『慶野は振り遅れてカウント１ボール２ストライク！！！！！！』

小木曽『おりゃあ！！！！！！！』

ビュッッ！！！

慶野『ふんがっ！！！！！！』

カクッッ！！！！！！

渡辺（よし！！！）
ブンっ！！

慶野『くそっ…。』

『高速スライダーで空振りの三振！！！！！今日17個目！！！！！なんとか同点までで踏ん張った！！！！！！！これが猪子石のエース小木曽の底力！！！！！！！』

Ｎｏ．９０：初めての延長戦（前書き）

ポッキーの日

Ｎｏ．９０：初めての延長戦

『９回の裏、猪子石高校の攻撃は、１番、セカンド、根本くん。』

大場（１番からか。）

西口（打順の巡りは良いみたいだけど、猪子石は下位打線をかなり交代して同点ってのは完全に想定外のはずだ。俺らにも十分チャンスはある。）

スットーン！！！！！

根本『ここでフォーク！？』

ブン！

『空振りの三振！！！！！！９回の裏猪子石高校の先頭打者の根本、空振りの三振！！！！！！！』

西口（翔真先輩、同点になってだいぶ精神的にも解放されたみたい

だな。気は抜いちゃいけないけど余裕をもって戦わないとな。）

カキーン！

西口『セカンド！』

副島『任せろ！！！！！』

『一二塁間の難しい打球にうまく足を使って追いついてセカンドゴロ！！！守備が巧いですね！！副島くん！！』

『３番、サード、芝田くん。』

カキーン！

氷室『オーライ！！オーライ！！』

パシッ！

『アウト！！』

『３番の芝田はファーストファールフライでスリーアウト！！夏の全国高等学校愛知県大会準決勝、猪子石高校ｖｓ邦南高校の試合は９回で決着つかず、７－７のまま延長戦に突入します！！』

大場『おし！早いうちに勝ち越すぞ！』

『おう！！！！！！！！！！』

『延長１０回の表、邦南高校の攻撃は、３番、ピッチャー、大場くん。』

野中『いい打順からだな。』

川越『ああ。だが邦南の子は延長戦初めてだろ？』

野中『そうだな。ここら辺で真のチーム力が出る。冬を自分達に厳しく過ごしてきた強豪校と、どちらかといえば学業優先の高校。どっちが延長戦で有利かなんてはっきりしてるだろう。まだまだ邦南も絶対に気を抜いちゃあいけない。少しでも抜いたら…一気に持ってかれる可能性もある。』

小木曽（厳しい打順だな。力をセーブしてる余裕もねえか…。）

…

……

……

『６番の副島はサードゴロでスリーアウト！！延長１０回の表、邦南高校、大場のヒットでランナー一人出しましたが後が続かず無得点！！！！！！』

一方の猪子石もランナーは出すもののあと一本が出ず、両チームともほぼ毎回ランナーを出すものの無得点のイニングが続く。そして試合は延長１４回の表。

『延長１４回の表、邦南高校の攻撃は、４番、キャッチャー、西口くん。』

西口（今日は今のところ一度も塁に出れず今日俺は６タコだ…。４番の俺がもっと打てていれば延長にならずに勝てたかも知れねえ…。）

小木曽（この回を凌げばあとは下位からだ。この回が勝負だ。）

渡辺（さっきの回まででヤスの球数は２１５球。もう限界値は越えているはずだ。ここまで力を使い続けられる理由は…）

ズバーーーーッッッッーーッン！！！！

≪　１４５ｋｍ／ｈ　≫

『ストライク！！！！！！！』

渡辺（高校生トッププレベルピッチャーとしての誇りか。）

鬼頭『おい翔真。すごい汗だな。もう相当キテるな。』

大場『もしかしたら明日再試合かもしれないですし、こんなんで弱音吐いてられないですよ。』

鬼頭『フォームの崩れに自分で気がついて修正に成功したのは流石、中学の頃日本代表のエースだったピッチャーってだけはあるが、もうお前も２００球を越えているぞ。』

大場『何が言いたいんですか？』

鬼頭『小木曽と翔真。ここまで来たらどっちが先に力尽きるかだ。この試合はエースに懸かっている。』

大場『そんなの百も承知ですよ。』

ビュッ！！！！

カクッ！

渡辺（カーブの曲がりが早い！！！！）

西口『捉えたぜ！！！』

カッキィィーーッン！！！

『捉えた！！！！！！！打球は左中間の真ん中！！！！！！！！破る破る！！！！！！！！！猪子石外野陣、少し左中間が開きすぎていた！！！！！！！』

西口『やっとでたぜ！！！！！！』

『打った西口は二塁ストップ！！！ツーベースヒット！！！！！！！延長１４回の表、邦南高校、先頭打者の西口が７打席目で今日初めてのヒットとなるツーベースヒットを放ちノーアウトランナー二塁！！！！！！』

『５番、ファースト、氷室くん。』

『さあ５番の氷室はバントの構え。ここは手堅く送ってくるか！？』

コン！

『ファール！！！』

氷室『やっべ。一発で出来なかった。』

慶野『さすがに氷室でもここは緊張するよな…。』

渡辺（もう1球今の球！！）

コン！

『さあこれも決まらずファール！！！！2球連続で失敗してしまった！！これでカウントツーナッシング！！！！さあスリーバントしてくるか！？それとも送るのはやめて強行か！？』

渡辺（ヤスのフィールディングがあればサードでさせる可能性は高い。とりあえずコイツは今焦っている。間を与えたくない。3球で片付けるぞ。最悪ワンナウト三塁でもいい。）

西口（サインはバスター。だが苦し紛れで氷室がうまくバットに当てる可能性は低い。）

『さあ小木曽がセットポジションにつく！！』

西口『ん！？！？』

（（（あの握り！！ストレートじゃない！！！おそらくスライダーの握り！！！！！そしてキャッチャーのジェスチャー！！！間違い

ない！！次のボールはストライクからボールになる低めのスライダー！！！！このボールだったら絶対に氷室は打てない！！！！空振り三振だろうな。でも俺ならできる！！！！！！！！）））

『セットポジションから足をあげて投げる！！！！！！！！！！』

西口（行くしかねえよな！！！！！！！！）

日根野谷『走った！！！！！』

『ランナースタートを切った！！！！！！！！』

渡辺（なに！？そうきたか！！！！！！）

『バッター氷室はバスター！！！！！！！』

氷室『スライダー！？バットが止まらない！！！！！！！』

ブン！！！！！

『ストライク！バッターアウト！！！』

副島『氷室は最悪の空振り三振！！！！だが…！！』

『キャッチャー渡辺は三塁へ送球！！！！！！！！！！！！！』

ズザァァーッッッ！！！！！

『セーフ！！！セーフ！！！！！』

『二塁ランナー西口、三盗成功！！！！！！！バッター氷室は空振り三振だがワンナウト三塁にした！！！！！！！』

鬼頭『今の西口、ノーサインだろ？』

大場『たぶん氷室が打てないとふんだんだろう。いいプレーだ。今のはデカイ。』

『6番、セカンド、副島くん。』

副島『ナイスだ西口…。待ってろよ。俺が絶対に還してやるからよ！！！！』

Ｎｏ．９１：痛恨のスクイズ失敗

副島（５回表のタイムリー、９回表のタイムリー、両方とも小木曽のウイニングショットの高速スライダーを捉えての結果。もう俺に高速スライダーは使ってこないだろうな。）

渡辺（コイツは変化球を拾うのが巧い。長打力こそあまりないが邦南の中じゃミート力に長けた存在だ。ここはストレートで…）

渡辺がストレートのサインを出す。

小木曽（いや、違う。こいつが今スライダーに絞ってる確率は間違いなく「０％」。だからここはあえて連続で打たれている…）

（高速スライダー！）

渡辺（おいおい。強気だな。）

小木曽（あ？普通だろ。てか三振がほしい場面だし、こーゆー場面で三振をとるためには初球を確実に取ることが重要だ。）

渡辺（わかったよ。）

渡辺が高速スライダーのサインを出す。

小木曽は頷く。

副島（一回首を振った？とりあえず初球だ。ストレートに絞る。）

ビュウッ！！
カクッ！！

ズバーンッ！

『ストライーク！！！！！』

『さあ初球はスライダーでワンストライク！！！』

小宮『やっぱこの場面で確実に初球ストライクが取れるってのは流石だね。』

副島（ちっ。完全に予想が外れた。まさか初球からスライダーを使ってくるとはな。）

小宮『ここらで仕掛けますか？』
片野『ああ。次の１球が勝負だ。』

渡辺（次は直球で一気に追い込むぞ。カウント有利にもっていきたい。）
小木曽（おっけ。）

副島（ったく。ここでかよ。まあバント嫌いじゃないし。いいっか。ただ…）

（この場面がこの試合の行方を大きく左右する…。）

西口（副島せんぱい…。託しますよ…。）

副島（緊張なんかしてねえぞ…。俺はこの試合に絶対勝ってやる…！）

ドクンッ…ドクンッ…ドクンッ…

副島（決める…決める…絶対に決める…）

『小木曽がセットポジションから…』

『ーーーー投げるーーーーーーーーーーーーーーーー』

西口『ゴォーッ！！！！！』

芝田『走った！！！！！！！！！！！！！！スクイズだ！！！！！！！！！！』

小木曽『バントができるもんなら…』

『『やってみやがれぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！』』

ビュウウウッッッッ！！！！！！！！！！

『スクイズだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

副島『決める！！！！！！！！』

コン…。……！！

渡辺（ピッチャー！！！！！！！本塁（よっつ）！！！！！！！！！！！！！）

『ここで邦南高校勝負に来た！！！！！！！スクイズ！！！！！！！！！しかしこれはピッチャー小木曽の正面の打球になってしまった！！！！！！！！！』

渡辺『グラブトス！！！！！！！！！』

小木曽『あいよぉ！！！！！！！！！！』

パスッピュッ！！

パシッ！！

ガザッーッ！！！！！！！！！！！！

『本塁クロスプレーは…！？！？』

『アウトォ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

渡辺『っしゃあ！！！！！！！ナイスフィールディング！！！！！！！』

小木曽『ツーアウトな！！！！！！！』

『邦南高校決死のスクイズもホームクロスプレーはアウト！！！！！猪子石高校小木曽の素晴らしいフィールディングで勝ち越せず！！！！！！！！ここにきて非常に痛いスクイズ失敗！！！！！！！これは流れが猪子石に傾いたか！？！？』

副島（クソ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！絶対にミスしちゃいけない場面だったのに！！！！！！！！！！！！！！！！！！！）

『さあ場面は変わってこれでツーアウト一塁！！！！！一死三塁から一気に二死一塁になってしまった！！！！！！』

『7番、サード、松坂くん。』

松坂（ミツルの馬鹿野郎。やっぱアイツはヒーローには向いてないな。この俺が少なくとも繋がないと…。俺が凡退したら次の延長15回は8番からの打順になっちまう…。それじゃあ最終回にもあまり期待できない。）

副島（くそ…絶対に俺がホームを踏んでやる…絶対に…。）

渡辺（一塁ランナーのリードが少しデカイ。一応一個牽制いれとけ。）

小木曽（りょうかーい。）

ジー…

ビュウッ！！

副島（ぬ！）

パシッ！

『セーフ！！』

鬼頭『あぶねえ…。アイツ…スクイズ失敗を走塁で挽回しようとしてんのか…。別に悪いことじゃねえが…さらにここでランナーアウトになるようなことがあれば…このチームは負けるぞ…。』

ビュウッ！

副島（なに！？また牽制！？）

『セーフ！！』

小宮『また逆つかれてますね。ノーサインなのにこの場面で盗塁でもするつもりでしょうか？』

大場『ああ。たぶんな。今キャプテンは完全に自分の世界に入ってる…。それがまずい…。』

渡辺（どうやらアイツ一人で自滅してくれるようだな。）

小木曽『ランナーを刺すか。どうやら刺されたいようだし。』

副島『はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…』

小宮『狙われてる！間違いない！！』

西口『副島さん！無茶しないで！』

鬼頭『聞こえてねえよ。今のアイツには。残念だが。』

スクイズ失敗を引きずる副島。バレバレな盗塁準備に猪子石バッテリーがほくそ笑む！！

Ｎｏ．９２：敵を騙すにはまず味方から

副島（ピッチャーのモーションの癖はもう十分インプットしてある。あとは行くだけだが…。）

松坂（ミツルのやつ…。走る気だろ…。バレバレだって…。まあ…俺はなにもすることはできない。唯一できることは、打ってミツルの進塁を助けること…。）

渡辺（とりあえず初球はずすぞ。）

小木曽（了解。）

ビュッ！！

ズバーンッ！！！！

『さあ猪子石バッテリー、１球はずしてボール！！！！ランナーを警戒してウエストしてきました！！！！』

渡辺（走らなかったか。まあアイツが走るのは決定的。あとはどこで走るかだ。）

小木曽（そんなところでこそこそしてんなよ！！）

ビュッ！！

松坂『牽制だ！！』

『セーフ！！間一髪！！』

小木曽（もう一丁！！）

ビュッ！！

『セーフ！！』

松坂（いい加減にわかれよ！！ミツル…。）

ビュッ！！

ズバーンッ！！

『ボール！！ツー！！』

鬼頭（もしかしてミツルのやつ…。いや、ミツルがそんな器用なことできるわけ…。）

『さあもう1球牽制を入れた！！これもギリギリセーフ！！一塁ランナーの副島が危なっかしいリードをとります！！』

小木曽（走ってみろよ。そしてカズキの餌食になれ！！！！）

ビュウウウッッッ！！！！！！

ズバァーーッッッーーッン！！

『ボール！！』

『さあカウントを悪くしてしまった！！これでノースリー！！！！！』

鬼頭『やっぱり、そういうことか！！！』

渡辺（まさか…あの一塁ランナー、ハナからこれを狙っての…え、ん…ぎ？…なのか…？）

小木曽（いつの間にノースリー…。ランナーに気をとられてストライクの意識が薄れちまってた…。）

大場『確かに…副島キャプテンはこれを狙って…。』

副島（やっとみんな気づき始めたか。ノースリーだもんな。そりゃ気づくか…。俺のこのヘタクソランナーが演技だってこと。まあスクイズ失敗した俺がドヤ顔出来ることでもないけど。まあ敵を騙すにはまず味方からって言うだろ。）

小木曽（くそっ…。騙された…。アイツ…わざとヘタクソなランナー装って…？俺をバッターに集中させないために。

）

小木曽（ノースリーだからって、この俺がそう簡単にフォアボールなんて出すと…）

『『『走った！！！！！！！！！！！！！』』』

『一塁ランナー副島がスタートを切った！！！！！！！！！！！！！』

小木曽（ここでかよ！！！！！！！！でも空振りをとれば！！！！！）

ビュウウウッッッッ！！！！！！！

ズバーーーーッッッッッッーーッン！！！！！！！

『ボール！！！！フォアボール！！！！！！！』

『最後は高めに大きく浮いてしまってフォアボール！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

7番の松坂に対しストレートのフォアボールを出してしまった！！

小木曽『はぁはぁはぁ…はぁ…』

渡辺（ここにきて浮き始めたか…。まあしょうがねえか…。延長14回だもんな…。だがツーアウト一二塁。二塁ランナーの副島はあんな器用なことができることから…走塁は下手じゃないはず。ヒッ

ト一本で還られる可能性も十分だ。）

『８番、レフト、藤武（ふじたけ）くん。』

松坂（まさかミツルがこの状況でこんなに融通の利いたプレーをするなんてな。ビックリだぜ。てっきりスクイズ失敗のミスを引きずって切れちまったのかと思ったぜ。やっぱお前はスゲーよ。）

藤武（ツーアウト一二塁。俺が繋げばもっとチームに勢いがつく。）

渡辺（８番打者にはカウント有利の状態で常に主導権を握っていたい。ここは無難に外角直球でカウントを取りに行くぞ。）

藤武『愛知屈指の進学校。愛知の公立高校ナンバーワンの偏差値を誇る邦南で学年順位３位の俺。相手の心理くらい読むのは容易いことだ。』

氷室『正直フジにはバットでは期待できないな…。』

慶野『まあアイツ運動神経抜群だし。転がせば全然わかんねえよ。俊足だし。』

副島（ここで一本出せよ。フジ…。）

小木曽『はぁ…はぁ…はぁ…』

ビュッ！！！！！！

藤武『バテバテなところ悪いね！！！！』

コン！

『ここで意表をつくセーフティバントを仕掛けてきた！！！！！！！』

渡辺『ピッチャー！！！！！！』

小木曽『わかってる！！！！』

渡辺（疲労からかヤスのダッシュが遅い！！）

パシッ！

渡辺『ファーストを刺せ！！！！！』

ダダダダダダダダダ…

『バッター藤武足が速い！！！！！！！！！！！』

小木曽『嘘だろ！？』

渡辺『こんな俊足のやつが控えてたんか！！』

『ピッチャー小木曽は一塁へ送球！！！！しかし判定は余裕のセーフ！！！！！！！！』

藤武『っしゃあ！！！！！！』

島谷涼『ナイス！！！！！！！！』

『これでツーアウトフルベース！！！！！！！！８番の今日途中出場している藤武のセーフティバントが内野安打となり二死満塁！！！！！！！！！！！！』

渡辺『そんなに際どいバントでもなかったが…。』

小木曽『足速いな…。』

氷室『フジは元バスケ部だからな…。脚力はチーム１って言われても不満無しだよな。』

『９番、ショート、島谷倫暁（しまたにともあき）くん』

小木曽『大丈夫だ…。９番バッターだ…。』

Ｎｏ．９３：島谷倫暁、涼太、兄弟の絆

『さあ夏の甲子園予選、夏の高校野球愛知県大会準決勝第一試合、猪子石高校　対　邦南高校の試合は現在延長１４回の表、邦南高校二死満塁で９番の島谷倫暁がバッターボックスに入ります！！！！！』

『『『耀く光に未来が聳える！！！！！！！！！！見上げる大空、希望を胸に！！！！！！！！あーあー！！！！！！！！羽ばたこう！！！！！！！！！大海へ！！！！！！！！！！！！！！誉れ高き、若人よ！！！！！！！！！！自らの行方をいざゆかん！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！我が邦南高校！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』』』

『さあ邦南高校側一塁側のスタンドでは校歌の大合唱！！！！！！！！！！ここで打てるか！？！？９番の島谷倫暁！！！！！！！！！！！！！！もしここで打てば勝ち越し！！！！！！そして今大会打席数こそ少ないものの打率７割超の１番鬼頭に巡ります！！！！！！！！！！！！！！！』

島谷涼『兄貴、打てないけど、守備より打撃の方が好きらしいですよ。』

木村『あいつ。入学当初は守備も打撃も俺より悪かったんだぜ。特に守備は超絶下手だった。ホントどこも守れるポジションなかった…。３年夏の地方大会でアイツが不動のショートやってるなんて到

底考えられなかったくらいに。』

島谷涼『兄貴、あんま打てないじゃないですか?』

木村『ああ。俺みたいにな。』

島谷涼『でも兄貴。高校入ってから一度も夜に素振りすることを怠らなかったんですよ。僕、毎日見てました。家のベランダから…。その時の兄貴がスゲェカッコよく見えて、野球って楽しいんだろうなって思って僕、高校から野球始めました。』

ズバァーーッッッーーッン!!!!!!!!!

《１４２ｋｍ／ｈ》

『ボール!!!!!!!!!!』

『やはり球威と制球が乱れてきたか!?猪子石のエース小木曽にとってはここがこの試合の正念場だ!!!!!!!!!!』

島谷涼『1回、聞いてみたことあるんです。』

木村『…?』

島谷涼『なんでそんなにバット振るの?それってそんな楽しい?って…。』

ズバァーーッッッーーッン!!!!!!!!!

《１４７ｋｍ／ｈ》

『2球目はアウトコースの直球にバット振り遅れて空振り！！！！！！！ただここにきてまだ１４７ｋｍ／ｈを叩き出します！！！！！！！！！最後の力を振り絞ってきた！！！！！！！！！！！！これでカウントは１ストライク１ボール！！！！！！！！』

島谷涼『その時、兄貴が言ったんです。』

ズバァーーッッッーーッン！！！！！！！
『外のスライダーにバットが回ってしまった！！！！これで２ストライク１ボール！！！！！！！！！ピッチャー有利のカウントになった！！！！！！！！！！！！！！』

島谷涼『だって俺、打てないもん。バット振ることしか考えられねえ。って。』

木村『…。…！！』

島谷涼『やっぱそーゆー気持ちをずっともって今まで野球やって来たんだと思います。お世辞にも兄貴は打撃がいいとは言えない…。でも兄貴なりに毎日家の中庭で雨の日も雷の日も。雪の日も風の日も…。ずっとバットを振ってきた…。こーゆー場面で打てるのなんて、そーゆー事を続けてきた人の特権みたいな感じじゃないですか？だから兄貴、打ってくれますよ。僕、兄貴を信じてます。』

木村『ああ。トモアキなら打ってくれる。』

渡辺（ヤス、しんどいかもしれない。だけどここでこの球行くぞ！！気合いいれろよ！！）

小木曽（インハイ直球！！力と力のぶつかり合いって訳だろ！！！）

島谷倫（学校のみんなが…みんなが応援してくれてる。なのになんでこんな緊張もせず打てそうな気持ちなんだろう…。こんな場面で打てるなんてほんの一握りの人間だけ。俺は打てなくて毎日欠かさずバット振ってきた…。でもその背景には、こーゆーほんの一握りの人間になりたい…。なってやる。って気持ちがあった。）

『『『今が、その、ほんの一握りになれる最後のチャンス！！！！！！！！！！！！！』』』

渡辺（来い！！！！！！！！！！ヤス！！！！！！！！！！）

小木曽（おうよ！！！！！！！！カズキ！！！！！！！！！！）

ビュウウウッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

島谷涼『兄貴！！！！！！！！！打てぇーっ！！！！！！！！！！

！！』

カアァッッッッッッキィィィーーーーーーッッッッン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

『大きーーーい！！！！！！！！！！！！！！！打球は前進守備のセンターの頭の上！！！！！！！！！！！！これは悠々のセンターオーバー！！！！！！！！！まず三塁ランナーの西口がホームイン！！！！！！！！！！！！！！続いて二塁ランナー松坂がホームイン！！！！！！！！！三人目も一気に還ってきた！！！！！！！！！！！！！！！！！』

『『邦南勝ち越し！！！！！！！！！！！！！！　延長１４回、ツーアウトフルベースから９番の伏兵、島谷倫暁のセンターオーバーの走者一還３点タイムリースリーベース！！！！！！！！！！！！！！！！！！　これで一気に１０－７としてきた！！！！！！！！！！！！！　猪子石のエース小木曽はなんとまさかまさかの１０失点！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』』

島谷涼『か…かっけーっ！！！！！！！！！！！！！　兄貴！！！！！！！！！　カッコよすぎるよ！！！！！！！！！！！！！』

島谷倫『今まで俺のやってきたこと…間違ってなかった…。』

Ｎｏ．９４：力尽きたエース

『１番、ライト、鬼頭くん。』

『さあ３点勝ち越して尚ツーアウトランナー三塁で１番の鬼頭を迎えます！！』

渡辺（敬遠って選択肢もあるぞ。）

小木曽（俺が敬遠嫌いなの知ってるくせにいちいち話題に出すな。）

渡辺（悪い悪い。）

小木曽（ついいっても…）

（コイツだけは今の俺じゃ抑えられる自信が全くねえ…。）

鬼頭（今日俺は６の４。相手バッテリーも警戒している。敬遠気味になるかもしれん。だから基本外か低めのボールで勝負してくるはず。）

鬼頭が小木曽をチラッと見る。

小木曽（もう延長１４回、ツーアウト。抑えても打たれてもコイツと今日対戦することはこれが最後だろう。コイツに４本も今日打た

れてて、最後に敬遠で逃げるなんて絶対にやりたくねえ…。コイツを抑えなきゃ勝っても負けても腹の虫がおさまんねえ…！！）

鬼頭（はいはい。勝負ね。）

鬼頭は天性の洞察力で小木曽の心理を完璧に読み取った。

鬼頭（俺も５本目打って試合を決めたいところだね。）

『さあ小木曽がセットポジションから投げる！！』

ズバーーーーッッッッッーッン！！

≪　１４１ｋｍ／ｈ　≫

『初球は高めに浮いてしまってボール！！！！明らかにボールとわかる球！！やはり小木曽は疲れてきたか！！』

鬼頭（１４１ｋｍ／ｈ？そんなんじゃない…。球速も明らかに１０ｋｍ／ｈ程落ちてきたが球の勢い…球威が１０ｋｍ／ｈ差以上に落ちている…。下手すりゃこりゃ上社西の朴昌圭よりも遅いんじゃねえか…？）

ビュウッ！！

ククッ！！

バーン！

『ストライク！！！！！』

鬼頭（置きにきたカーブで苦し紛れにストライクを取りにきたか…。この程度の直球なんか簡単に打ち返せるし、もうスライダーでストライクを取ってくるコントロールもない。スライダーだったら見逃せばボール。または甘くなったら強打する。チェンジアップだったら直球との緩急が小さくなってきているから対応するのも簡単だ。カーブをもう1球って可能性は無いだろう。なぜなら2球続けてこの俺からカーブでストライクを取れる精度があったらとっくに序盤から多投するはずだからな。もう敬遠するしか猪子石が失点を防ぐ方法はないぞ。）

小木曽（負けたくねえ…。世代Ｎｏ．１ピッチャーを目指す俺が地方大会のバッターになんか絶対打たれたくねえ…。もう１０失点してても…ここで食い止められなきゃ、みんなに申し訳がたたねえ！！）

渡辺（スライダー以外じゃ絶対に対応される！！頼む決まってくれ！！！！！！）

ビュウッ！！！！！！

カクッ！！！！！！

小木曽（嘘だろ…。）

渡辺（曲がりが早い！！だが運良くボール球だ！！）

鬼頭（バッテリーも驚きの曲がりの早さ。ただボール球だ。見逃してくれると思ってるんでしょ？）

『ごめん渡辺くん。おれ、そんなお人好しじゃないからさ。』

渡辺（コ…イツ…。）

（ボール球を強引に…！！）

カッキイィィーーーッッッーーーッン！！！！！！！！！！

『インコース低めの完全なボール球を強引に引っ張った！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！飛距離は十分だがこれはファール！！！！！！！！！！！！！』

渡辺（あの打ち方で…どんな飛距離してんだ…コイツ…。）

『大ファールだ！！しかしカウントは1ボール2ストライク！！！

追い込んだ！！！！』

渡辺（追い込んだとはいえ…もうヤスの球じゃ無理だ…。限界なんてとうに超えている…もう…）

小木曽（立ってるだけでこんなにしんどいんだな…。ここまで来ると…。相変わらず暑いし…１０時プレイボールだったよな…。もう１時５０分か…。もう４時間も試合やってたんだな…。すっげぇ短い…。そんでどんどん暑くなってる…。）

バン！

『ボール！！！これはチェンジアップか！？しかし完全に浮いてしまって全く効果なし！！！！』

渡辺（もう変化球は使い物にならねえ…。もう…打たれるしか…。）

渡辺がマウンド上の小木曽を見る。

ぼーっ…

小木曽（ダメだ…）

渡辺（つたく…）

『タイム、お願いします。』

『タイム!!』

『さあキャッチャーの渡辺がマウンドに行きます。』

渡辺『なにぼーっとしてんだ?ここはマウンドだぜ?』

小木曽『わりぃ…。』

渡辺『…。』

小木曽『なあ…カズ『『敬遠、したいのか?』』

小木曽『え…。』

渡辺『もう1回言う。敬遠したいか?』

小木曽『…。ああ…。俺は鬼頭(コイツ)に…負けるイメージしかない…。打たれることしか想像できねえ…だから…』

渡辺『それが…お前の答えか…?』

小木曽『…。あ…。ああ…。俺の勝手なわがままですまねえ…。ただ…勝負に負けても…試合には絶対勝ちてえ…。絶対に甲子園いきてえ!だからさ…慶野(つぎ)で勝負させてくれ…。』

渡辺『…。……。あぁ。わかった。』

芝田『なーに言ってんの?ヤス。』

根本『敬遠なんか今まで1度もやったことないくせに。』
小木曽『お前ら…いつの間に…。』

笠井『ここで3回目の守備のタイムか…。正直延長15回に取っておきたかったが…ここが使い時って判断したんだな。あいつら。』

坂本成『別にヤスがそうしたいなら俺らは従うよ。だけどさ。敬遠なんてヤスらしくないよ。』

日根野谷『やられっぱなしで野手達も悔しいんですよ。』

芝田『もし打たれても俺がすぐリリーフしてやるからよ。』

根本『なんなら俺だって準備しとくぜ?』
日根野谷『僕も準備万端です。』
坂本成『お前はチビだから無理だろ!』

日根野谷『チビもチビなりに一生懸命生きてるんですからね!!可能性は否定しないでくださいよ!!』

渡辺『はいはい!黙れお前ら!!』

小木曽『わかったよ。やるだけやってみる。』

根本『そうこなくっちゃ!!』
芝田『決定〜!!』

小木曽『バックに迷惑かけると思う。』

日根野谷『オッケーですよ。』

根本『こーみえて俺ら無失策試合続いてるからな！！』

芝田『信じていいぜ！！』

小木曽『ありがとう。』

渡辺『しゃあ！じゃああれいくぞ！』

『『『　ＰＵＳＨ　ＯＵＲ　ＬＩＭＩＴ！！俺たちの限界に、挑戦！！！！！！！！！』』』

渡辺『さあいくぞみんな！！！！！！！』

根本『猪子石魂見せつけてやろうぜ！！！！！！！！！！！！！』

『『『　しゃあああああああ！！！！！！！！！！！』』』

鬼頭（さあ来い！！小木曽泰大！！！！！！！）

渡辺（俺のミットにぶちこんでこい！！！！！）

『小木曽がセットポジションから！！！！！！！勝負の１球！！！！！！投げる！！！！！！！！！！！』

鬼頭『ど真ん中直球！！！！！！！！！捉えた！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

カッキイィィーーーッッッーーッン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

小木曽『そーゆーことか…。』

渡辺『やっぱ、限界だったか…。』

『打球は場外に消えた！！！！！！！！！！！！！！1番鬼頭の、2点をさらに追加する、右中間、場外への大ホームラン！！！！！！！！！！！！！』

『『『鬼頭！！！！！！！！』』』
『『『かっこよすぎるぞ！！！！！！！』』』

『『最高だ！！！！！！！！』』

『ダイヤモンドを一周して今鬼頭がホームイン！！！！！！！！１２－７！！！！！！！！９番島谷倫暁の３点タイムリースリーベースのあとの１番鬼頭、特大の場外ホームランで２点をさらに追加し延長１４回表、邦南高校一挙５点！！！！！！！！！！！！！！』

小木曽『実力の、差だな。』

≪　１３９ｋｍ／ｈ　≫

渡辺『よく頑張ったよ。ヤス。』

芝田『あとは任せろ。』

小木曽『ごめん…。みんな…。』

渡辺『泣くのは勝ってからだ。邦南がヤスから５点取れたんだ。俺らだって大場から５点くらい取れるさ。』

芝田『ヤスの投げたボール、絶対忘れねえから。』

渡辺『ああ。ヤス球を受けた、１４イニング、２４１球は絶対無駄にしねえから！！！！！』

小木曽『ホント、頼りねえエースですまねえ…。大…あとは、頼んだ…。』

『猪子石高校、シートの変更をお知らせします。』

守備位置の変更←←
小木曽→長澤：1→4
芝田：5→1
根本：4→5

大場『小木曽、下げるんですね。』
鬼頭『ああ。もう野手としてプレーする体力すら残ってねえんだろう。』

『ストライク！！！バッターアウト！！！！チェンジ！！！！！』
≪　147km／h　≫
『2番慶野は空振りの三振で14回表は終了。ただし邦南高校一挙5点を上げました。』

大場『2番手（セカンドピッチャー）で147km／hか。選手層厚いね。』
鬼頭『とにかく5点差だ。焦らず一つずつアウトとっていくぞ。』
大場『わかってますよ。任せてください。』

『延長１４回の裏、猪子石高校の攻撃は、４番、キャッチャー、渡辺くん。』

『プレイ！』

Ｎｏ．９５：弾切れ

野中『５点リードだろ？もうこりゃ決まったも同然か。』
川越『いや、案外大場もキテるっぽい。マウンドまで上がる速さがちょっとずつ遅くなってきている。そーゆーところに残りのスタミナが表れるものさ。』
野中『さすが。全国制覇経験者は違う。』

大場『ふうっ…。あともうひと踏ん張りだ…。』

ビュウッ！！！！！！
西口（まずい！！少し中に入ってきた！！）

渡辺『見てろよ。ヤス。俺らは勝ってまたお前をマウンドに上げてやるからよ！！』

カッキイィィーーーッッッーーッン！！！！！！！

大場『くそ！！！』

ゴーン！

『入ったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！　５点を追う猪子石高校の延長１４回の裏、先頭の４番渡辺一紀の今日２本目！！！！！　自身今大会これで７本目！！！！！！　享神の桜沢の６本を抜いて今大会現時点での最多本塁打！！！！！！　そしてこの７本目が夏の愛知県大会記録タイ！！！　去年の桜沢の記録した７本に並んだ！！！！！！　これで１２－８！！！！　４点差！！！！！！！！　まだまだ猪子石も諦めない！！！！！！！』

……

……

……

『フォアボール！！！！！！！！！！！代打の藤川（ふじかわ）が１１球粘ってフォアボールを選んだ！！！！！！！！！満塁！！！！！５番坂本成生、６番の伊藤の連打、そして代打の２年生藤川のフォアボールでノーアウトフルベース！！！！！！！！！これでまったく試合の行方は分からなくなった！！！！！！！！！！！』

大場『くそったれ…。１４イニングって…こんなキツいのか…。』
片野『大場の球数は？』
木村『２４４です。』

西口（投手の駒がないうちにとってこの試合は勝たなきゃいけない。再試合じゃダメだ。投手層が違いすぎる。ノーアウトフルベース。打順は途中出場の８番。絶対にアウトをとらなくては…。同点にされなけりゃいい。とりあえずアウトが欲しいが…）

大場『てかマウンドの上…暑い…。風ひとつ吹かねえし…焼けるぜ。体が…。』

『８番、レフト、井上くんに代わりまして、代打、舘（たち）くん。』

『さあ猪子石高校、ここでさらに代打、２年生の舘を出してきました。今大会の成績は５打数４安打！！』

西口（代打かよ…。情報がない分厄介だ…。）

大場『はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…。』

副島『翔真！！ど真ん中でいい！！打たせろ！！！！！』
松坂『腕振ってけよ！！！！！！！！！』
氷室『余裕もって！！！！！！！ローボールで！！！！！！！』
島谷倫『自信持て！！！！打たれても守ってやるよ！！！！！！』

西口『翔真先輩の体力ももう相当やばい。唯一の救いは…まだみんな元気なこと。こればっかは野手の助けが必要だ。翔真先輩一人じゃ絶対に無理。』

『代打、舘に対し注目の初球…』

『『投げる！！！！！！』』

西口（ゴロを打たせたい。下村フォークの曲がりの少ないタイプでいく！！）

ビュウッ！！！！！！！！！！！

大場（リリースは完璧！！…え！？）

西口（落ちねえ！？）

舘『失投か！？初球を叩く！！！！！』

カキーンッ！！！！！！

西口（まずい！！三塁線がら空きだ！！）

バシッ…！！！！！！！！

大場『ケンスケ先輩！！！！！！！』

松坂『おしゃあ！！！まずひとつな！！！！！』

『アウト！！！！！』

『代打舘の打球が三塁線を痛烈に襲いましたがサードの松坂健祐、見事なダイビングキャッチ！！！そしてそのままサードベースを踏

んでワンナウト！！！！！！猪子石高校一点を追加！！！！！！尚ワンナウト一二塁で９番の今日無安打の日根野谷（ひねのや）くんを迎えます！！』

『９番、ショート、日根野谷くん。』

西口（助かった…ホントに。今のが抜けてたら…考えるだけでゾッとするぜ…。だが今のフォーク…全くといっていいほど変化量がなかった…。もう下村フォークは使えないか…。いや…もう１球試すか。）

西口が下村フォークのサインを出したが大場は首を横にふった。

大場（ここは普通に自己流のノーマルフォークでいかせてくれ。下村フォークはもう安定しない。それほど難易度の高い球種なんだ。）

下村健『もうさすがに俺のフォークは使えないな。あれは握力の他にリストの強さと残りの体力。指先の感覚とか、いろんな機能が強靭な状態じゃなきゃ制御できない。ましてや延長１４回。俺でもこんな展開では使用するのは難しい。ましてや覚えたての大場。体もフォークの多投は無理だろう。』

長岡『お前、そんなすごい球投げてたんだな。』

下村健『え。今さら？お前ショートのポジションから見てなかったのか？』

長岡『ああ。てかピッチャーの投げる球とか興味ないし。打つ瞬間

だけテキトーに見て守備してたし。』
下村健『まじか。（笑）』

『さあ大場が９番日根野谷に対し第１球、投げる！！！！！』

ビュウッ！！

日根野谷『えぇ！？』

ガツッ！

西口（翔真先輩…もしかして…）

日根野谷『いてて…』

『デッドボール！！！！！！！』

西口（指先の感覚がなくなるほどの疲れを！？）

『９番日根野谷にデッドボール！！！フォークのすっぽ抜けでしょうか。これでワンナウトフルベースで打順はトップへ！！！！！！！』

『1番、サード、根本くん。』

根本『勝てる…。後ろに繋いで同点どころか一気にサヨナラに持っていってやる。』

西口（この場面で根本（コイツ）か…。厄介だ。猪子石で最も何でもできる男じゃねえか…。しかも選球眼も抜群。ただ…逃げるわけにはいかねえ。）

大場（ここにきてウイニングショットの下村フォーク、ノーマルフォークの両方弾切れかよ…。あとはカーブとストレート…。）

根本（ヤスがベンチに下がっちまって代わりに守備についた長沢が次のバッター…。多分代打が出ると思うが控えにはあと…平野（ひらの）と磯松（いそまつ）。それに1年の小竹（こたけ）くらいか…。低学年にこの場面はキツい…。俺がなんとしても打たなくちゃ…。

クリーンナップまで回れば可能性は5割以上！！！！！！！！）

大場（とりあえず低めに変化球を集めてゴロを打たせたい…。あとはみんなに任せる…。高めは絶対にダメだ。）

根本（もうフォークは使いづらいだろ。ならあとは直球とカーブの２択。俺がピッチャーだったら…）

（体力消費の少ないカーブで、ゴロを打たせたいな！！！）

西口（タイミング…あってるぞ！！いや、でもストライクからボールになるカーブ！！打ったとしても大丈夫！！撃ち取れる！！！！）

スカーン！！

『ピッチャー返し！！！！！！』

大場『ぬあっ！！！！』

『抜ける！！！！！！！！！打球はセンターの前！！！！二塁ランナーはどうするか！？いや、止まった止まった！！！』

根本『しゃあ！！』

『低めのボール球をうまくセンターに弾き返してもう一点返した！！！！これで１２－１０！！！！！！点差は僅かに２点！！！！！！！尚ワンナウトフルベース！！！！！！！』

Ｎｏ．９６：あとひとり。そして違和感（前書き）

今日2話目です。

Ｎｏ．９６：あとひとり。そして違和感

『１番根本のセンターへのタイムリーで１２－１０！！！！！！点差は僅かに２点！！！！！シングルヒット一本で同点！！！！！』

『２番、セカンド、長沢くんに代わりまして、代打、平野（ひらの）くん。』

西口（コイツに関しては今大会初打席だな。いつも通りのピッチングで十分通用する相手。ワンナウトフルベース。コイツで絶対にツーアウトにしないとこっちが今度は追い込まれる。それだけは絶対に避けたい。）

ビュウッ！！

『ストライク！！！！！』

《　１４１ｋｍ／ｈ　》

西口（まだなんとか１４０ｋｍ／ｈ台前半を出す体力は残っているか…。あとアウト二つです。翔真先輩。）

バン！

『ボール！！』

《１４１ｋｍ／ｈ》

バン！

『ボール！』

《１４０ｋｍ／ｈ》

バン！

『ボール！』

《１３９ｋｍ／ｈ》

『さあカウントを悪くしてしまった！！邦南バッテリー、かなり苦しいか！？！？これで１ストライク３ボール！！！！！！』

大場『うぐぐ…。』

西口（翔真先輩！！）

大場『おい…。ここはどこだよ…。こんなバテたの…生まれてはじめて…。だ…。』

西口（まずいぞ！！根本にタイムリー打たれたあと急速に球威が落ちてきてる！！）

『さあセットポジションから代打の平野に対しての第５球！！投げる！！』

ビュウッ！！

大場『ぬあぁっ！！』

西口（どまん…なか…？え…。まずくね…。せめてここまで、このミットまで届いてくれ！！）

平野『ど真中！！！！！！』

ブン！

『ファールボール！！』

平野『くそぉ。』

大場『た…たすか…っ…た…。』

西口（コイツじゃなきゃ…やられていたな。間違いなく今の球がスタメン級の打者だったら外野の頭の上を越されていた。）

大場『はぁはぁはぁ…。はぁ…はぁ…。ん…。はぁ…。はぁ…はぁ…はぁはぁ…。』

桜沢『見てて痛いな。あの邦南のエースのやつ。』

余語『見るからにスタミナ切れだ。今の球もあのバッターじゃなかったらやられていた可能性が高い。まあ要するに結果オーライだ。』
勾城『翔真先輩…。』

キーン！
『ファール！！』

…

……

……

キーン！
『ファールボール！！』
≪１３４ｋｍ／ｈ≫

『これもファールで先程からカウント変わらずフルカウントのまま！！フルカウントになってからもう既に５球！！さあ次が１１球目！！！！！！！』

大場『し、しつけえ…。』

西口（直球しかもうストライクに入れる手段はない！！）

ビュウッ！！
キーン！！
『これもファール！！平野も必死についていきます！！』

西口（そろそろ前に飛ばせよ…。コイツは決して打力のあるバッターではない…。なぜなら5球目の球威のないど真ん中のあの直球を捉えられないんだからな…。ストレートで押します。）

大場（いや。違う。）
大場は首を振った。

西口（じゃあ…これですか？）
西口はカーブのサインを出したが、これも首を振った。
西口（まさか…下村フォーク！？！？）

大場は頷いてセットポジションに入る。

西口（嘘でしょ…？もう下村フォークなんか投げれる体力じゃ…。）

大場（コイツは直球で押してもこすってファールにするだけだ…。なら早いうちに三振にきってとる。最悪チェンジアップ的な効果で打たれてもいい。コイツは俺からヒットは打てない。）

西口（ミットまでそのボール、届けてくださいね。）

大場（腹くくるぞ。体に力が入らないが…ここで残り少ない体力を削ってでもアウトを取らなくちゃならねえんだ…。）

『さあ足をあげた！！！』

『自然体に…自然体に…球持ちよく…最後の最後…指先(ここ)だ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

ビュウッッッッ！！！！！！！！！！

平野『ど真ん中！！今度こそ！！！！』

スッッットォーーッッッン！！！！

平野『え…。』

西口（翔真先輩…本当にあなたは色々と、偉大な先輩です…。）

『空振りの三振！！！！！！！！！！！！代打の2年生平野、粘りましたが軍配は邦南のエース、同じ2年生の大場翔真に上がりました！！！！！』

西口（ここにきて今日最高の下村フォークが来るなんて…。）

『ワンナウトフルベースから代打の平野は空振り三振！！！これでツーアウトフルベース！！！！！！点差は2点！！！！！！邦南高校、決勝進出まであとアウトひとつ！！！！！！！！』

西口（ナイスピッチ！！こりゃあもう少し下村フォークが使えると思う！！）

『3番、ピッチャー、芝田くん。』

西口が下村フォークのサインを出す。

大場（ダメだ琢磨…。）

大場は首を振った。

西口（え…。なんで…。じゃあ何でいけばいいんだ…？）

大場（今のフォークで…）

西口が苦し紛れにカーブのサインを出す。しかしこれも大場は首をふり、ストレートのサインに頷いた。

（今のフォークで…肘が…。）

Ｎｏ．９７：ボロボロの左腕（前書き）

ちょっと短いかも？

Ｎｏ．９７：ボロボロの左腕

大場（肘が…。）

西口（翔真先輩の直球で芝田と勝負になるのか…？）

大場（なんでだ…。息をするのも苦しい…。体力なんかもう立つのも精一杯なくらい残ってない…。ここで…肘に変な感覚が…。）

ビュウ！！

ズバン！

《１３２ｋｍ／ｈ》

『ボール！！』

芝田（なんだよ…。もう見るからに限界じゃねえか…。あいつ…。）

大場（身体もボロボロ…。……。意識が…遠のく…。）

ビュウッ！！！！！！

芝田（キミとはもっといい勝負ができると思っていただけに、残念だ。）

（勝つのは猪子石（おれら）だぜ！！！！！！！！！）

スカーーッッッン！！！！！！

『痛烈な打球！！！！！！レフト藤武の前！！！！！！！三塁ランナーが還って１２－１１！！！！！！！！！！！二塁ランナーは三塁ベースを回ったところでストップ！！！！！』

芝田『ちっ。打球が強すぎたか。』

西口（１点差で…ツーアウト満塁…。ここで打席に…コイツかよ…。）

『４番、キャッチャー、渡辺くん。』

渡辺『おしゃあ！！！！！！みんな任せろ！！！！！！！！！』

大場（無理だ…。俺じゃコイツを抑えられない…。）

西口（もう守備のタイムは取れない。俺が行くしかないか。）

『タイム、お願いします。』

Ｎｏ．９８：本能を絶ちきり最後の力を。

『さあここでキャッチャーの西口がマウンドのエース大場の元へ駆け寄ります。邦南高校は既に守備のタイムを3回使用しているためキャッチャーしかいくことはできません。』

川越『ここで何を言うかだな。今の状況、大場は相当しんどいはずだ。』

野中『もう直球は１４０ｋｍ／ｈには決して届かない。こんな状況で、どうするか…。変化球も頼れる状態じゃないみたいだしな。』

大場『はあっ…はあっ…はあ…はあはあ…。』

西口（こんな消耗した翔真先輩…初めて見る…。）

『少しですが今、休んでください。時間とりましたから。』

大場『おう…。さんきゅ…。』

西口『…。空。綺麗ですね。』

大場『だな。絶好の野球日和ってやつだな。』

西口『…。やっぱ、不安ですか?』

大場『拓磨…。オマエ…嫌なとこズバッとついてくるな。』

西口『もともとそういう性格なんで。』

大場『不安か…。まあ…。8回に一気に7点取られてから常にだな…。正直なところ。』

西口『でも。それからこの回に取られるまで取られませんでしたよね。』

大場『まあな。オマエのリードに助けられたよ。』

西口『ありがとうございます。』

大場『小宮の事もあったりして、結構荒れてるやつっていうか、チャラいやつだけどよ、俺、結構信頼してんだぜ?お前の事。』

西口『僕も、翔真先輩の事、偉大だと思いますよ。ただ、先の事考えるの、やめにしませんか?』

大場『どーゆー事だ?』

西口『翔真先輩…肘痛めてますよね?多分代打平野の時の最後の下村フォークの影響だと思いますが。』

大場『よくわかったな…。まあ…大丈夫さ。』

西口『痛いからかばっちゃって力を制御したいのもわかります。人間の本能ですよね。痛いところの負担は抑えたいのって。』

大場『…。』

西口『でも…今は違うんじゃないですか?』

大場『ふっ…。確かに…な。』

西口『その人間の本能って、先の事考えてるから起きちゃうんだと思います。例えば練習中に足を痛めて練習をやめるのだって、“これ以上負担かけたらもっとひどくなるかもしれない”みたいな気持ちがあるからじゃないですか?つまり、今もそうなんじゃないかなって…。』

大場『俺が明日の決勝戦の事を考えてるって訳か…。確かに…そうかもな。』

西口『今日勝たなきゃ明日なんて無いんですよ。負けたら夏が終わるんです。こんなの、2年生の翔真先輩の方がよく知ってるはずです。』

大場『任せろ。お前の言いたいことはよくわかった。』

西口『え…。』

大場『たとえ今日肘がぶっ壊れて…どうなろうたって俺は知ったこっちゃねえ。肘が痛くて明日投げれないかもしれなくたって関係ねえ。未来の事はその都度その都度考えればいい。だからよ。』

西口『?』

大場『今日だけは…絶対に負けねえぞ。』

西口『はい。その言葉、待ってましたよ。』

『『『プレイ！！！！！！！！！』』』

渡辺（翔真。苦しいだろう。俺が即行で仕留めてやるからよ。）

大場『仕留められるもんなら…』

『仕留めてみやがれ！！！！！！！！！』

ビュウッッッッ！！！！！！！！！

渡辺『生意気な！！！！！！！！！』

スバーーーーァッッッッンッッ！！！！！！！！！

『か、空振り！！！！！！！！！！！！』
《１４６ｋｍ／ｈ》
『初球からいきなり１４６ｋｍ／ｈ！！！！！！！！！これはどーゆー事だ！？球威が戻ったのか！？！？』
西口『ナイスボール！！！！！！！』
スバーーーーアッッッッンッッ！！！！！
《１４４ｋｍ／ｈ》
『ボール！！！！！！！！！』
西口（ボールになったが外角の惜しいところに決まった！）
ビュウッ！！！！
ズバン！！！！
『ボール！！！！！！！』
『これも外に外れてボール！！カーブを使ってきました！！しかしストライク取れず！！！！！』
大場『はぁはぁはぁはぁはぁはぁ…。』

西口（あと少しです！！翔真先輩！！！！！）

渡辺『俺が決める。一気にサヨナラに持っていってやる…。』

西口（カウント2ボール1ストライクか…。これ以上カウントを悪くしたくない…。押し出しなんか最悪だからな…。決まれば絶対にカウントの取れるボール…）

大場『…！！』

（（（下村フォーク…。）））

西口（この1球が踏ん張りどころです！！！頑張ってください！！！！！チームのために！！！！！！！）

ズクン…ズクン…

大場『俺の左腕が…泣いている…。』

『それがどーした！！勝手に泣いてろ！！！！！！！！』

ビュウッッッッ！！！！！！！！！

渡辺『甘い！！！決めてやるぜ！！！！！！！！！！』

スッッットォーーッッッン！！！！！！！！！！！！！

ブン！！

『４番渡辺は豪快に空振り！！！！！！！！！これでカウント２－２！！！！！！！！！さあ平行カウント！！！！！！！！！次で一気に勝負に来るか！？！？』

渡辺（投げ方からしてもう肘でも痛めたのかと思っていたが。やっぱお前に手加減するのも違ったな。）

大場『次で決める…。スリーボールにしてる余裕はない。』

西口（下村フォークでこの試合、一気に閉める！！！あと１球です！！！！！！！）

大場『勝つぞ…。みんな…。』

鬼頭『ったく…。翔真め。無茶しやがって…。まあそーゆーところが好きなんだけどよ。決めろよ。』

渡辺『本能で食らいつく！！！！！』

ビュウッッッッッ！！！！！！！

渡辺『勝つのは俺達だ！！！！！！！』

スッッットォーーッッッン！！！！！！！！！
渡辺『またフォーク！？』
スカン！！
『ファール！！』
西口（当てたか…。）
渡辺（もうこの試合、何度も投げられてるからな…。やっとついていけるくらいまでになった…。）
西口（とにかくスリーボールにはしたくない。今の翔真先輩じゃ、いつすっぽ抜けが来るかわかんない。このカウントで決めにいかないと。）
大場（直球ね。）
ビュウッッッッ！！！！！！！！！
西口（アウトロー一杯！！！ナイスボール！！！！！！！！！）
カキーン！！

西口（くそ。そう甘くもないか…。）

『ファールボール！！！！！』

《１４１ｋｍ／ｈ》

西口（やっぱ球速も落ちてきた。初球の１４６ｋｍ／ｈが最速だ。ストレートの球威がもう苦しいから今のアウトロー一杯の直球をファールにされた…。つまり…残された選択肢は…）

大場（下村フォーク…。いくしかないっしょ。）

ビュウッッッッ！！！！！

スッッットォーーッッッン！！！！！！！！！

西口（またまたナイスボール！！！！！！さすが翔真先輩！！！！！！！！）

渡辺『見える！！』

ズバン！

『ボール！！！！！！！！！！』

西口（見送った…だと？）

大場（追い込まれていながら…ストライクからボールになる下村フォークを…。）

渡辺『もう俺に下村フォークは通用しねえって。もう見慣れちまった。』

西口（なん－－－－－－－－だと？－－－－－－）

ビュウッッッッ！！！！！！！！！！

渡辺（インロー直球！！！！！！クロスファイヤーだが。）

スッカーーーーッッッン！！！！！！！

『大きな当たり！！！！！飛距離は十分スタンドに届くが！？いや、ファールです。少し引っ張りすぎました。』

西口（下村フォーク！！！）

ビュウッッッッッ！！！！！！！！

スッッッットォーーーッッッン！！！！！！！

渡辺（まだ使ってくるか…。）

カッキィィーーーーーーーッッッッンッ！！！！！！

渡辺『くそ。タイミングが合わねえ。』

西口（タイミングさえ合っていたらスタンドにこれも行っていた…。）

大場『はぁはぁはぁはぁはぁ…はぁはぁはぁはぁ…はぁ…はぁ。』

（ヤバい…痛みで…肘が痺れてきやがった…。……。遠い…遠い…。ベースまでの１８．４４メートルが…遠い…。）

ふらっ…

西口（翔真先輩！！！！！）

マウンド上でふらつく大場。それを心配する女房役の西口。

大場『みんな…勝ちたいよ…おれ…勝ちたい…でももう…力がないんだ…。』

がしっ。

その時、翔真の肩に得体の知れない感覚が襲った。

Ｎｏ．９９：記憶の底にある残像と

がしっ

大場（…！？）

『け…け…け…。慶大（けいた）？』

（甲子園。行ってね。）

すっ…

大場（今のは…確かに…慶大だよな…。）

（甲子園行ってね。か。アイツの夢だったっけ。甲子園で優勝してプロになるっつってたな。）

ふっ…

大場（おい…。今、西口が慶大に見えた気が…。）

西口（翔真…先輩…？またボーッとしてるのか？）

ニコッ

西口がマスク越しに笑う。

大場（拓磨…。お前って…まさか…。…。…そんなわけねえか。慶大は死んだんだ。）

西口（セットが長いな…。）

渡辺『タ、タイム！』

『さあ長い間を取るピッチャーの大場にしびれを切らしたのか、バッターの渡辺がタイムをとります。そして主審が大場に注意をします。試合の間延びを嫌う高校野球ですからおそらく早く投げなさいということでしょう。』

大場（バカだな。俺って…。何が苦しいだ。何が力がない。出ないだ…。野球やりたくてもできずに死んじまうやつもいるのによ…。贅沢言ってたんだな。野球やれるだけで幸せ。マウンドに立てるだけで幸せだろ！なのに…なのに…俺は…。こんな不様な姿見て慶大、何思ったかな…。悪いな。慶大。代わりといっちゃなんだけどよ…行こうな。甲子園。）

『さあようやくセットポジションから足をあげる！！』

渡辺『この感じ！！ストレートだ！！！！』

大場『俺には味方がいるんだ！！！！一人でマウンドに居るんじゃない！！！！！俺は常に、』

『『『安田慶大って男の魂と一緒にマウンドに上がっているんだ！！！！！！！！！！！！！！』』』

ビュウッッッッッッッッッッッ！！！！！！！！！

カッキィィーーーーーーッッッンッ！！！！！！！！！！！

『打球は痛烈なライナー性だが！？いや、伸びるぞ！！！！！！！！！！！ライト鬼頭バックする！！！！！！！！！！フェンス際だ

！！！！！！！！！捕れば勝利！！！！！！！！抜ければ逆転サヨナラ負け！！！！！！！！！！！！！！！！』

鬼頭『享神とやるのは、俺たちなんだぁーっっっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

バシッ！！！！！！！！！ガツッッッッッ！！！！！！！！！

『ライト鬼頭、フェンス直撃しながらのスーパーキャッチ！！！！！！！！！ゲームセット！！！！！！！！！！！！！愛知県立邦南高校！！！！！！！！！優勝候補の私学の強豪、猪子石高校を１２－１１で破り、夢の決勝戦進出！！！！！！！！！！』

大場『勝った…。』

西口『やった…やったぞ！』

渡辺『最後の1球…球速も135km／h…なのに…クソ！！！！！！』

小木曽『終わった…。のか…？』

大平『うん。整列だ。行こ…。』

小木曽『はええ…はええよ俺の夏の終わり…。』

根本『う…うっ…。』

『『『『ありがとうございました！！！！！！！！！！』』』』

『享神に春の大会のリベンジを誓った猪子石ナインにとっては早すぎる夏の終わり！！！！！！しかし敗れた猪子石の選手たちもよく頑張りました。』

桜沢『ヒロ。勝ったか。こりゃ。愛知県大会も楽しめそうだぜ。』

小木曽『大場！！』

大場『？』

小木曽『勝てよ！明日！！享神は俺達よりも強いぞ！！』

大場『はい。あなたの代わりに享神を倒してきます。』

小木曽『頼んだ…。……。…。ぞ…。』

邦南高	0	0	0	0	3	0	0	0	5	12
猪子石	0	0	0	0	0	0	7	0	0	11

邦南高校！全国高等学校野球選手権愛知県大会、決勝進出！！！！！

Ｎｏ．１００：祝！１００回記念！～コンビニ篇～

副島『いやぁ～決勝進出か～。』
島谷倫『去年の俺たちのことを考えると信じられないよな～。』
副島『な～。』

島谷倫『やっぱり試合後のミニマムストップ（コンビニ名）は最高だよな～。』
副島『だよな～。でも俺推しのコンビニはサークルＪだけどな～。』

島谷倫『なんか涼太にも同じこと言われたわ～。』
副島『そーいえば涼太、今日のトモのこと尊敬してたぞ～。』
島谷倫『まじか～。ムフフフ～。』

副島『お前なに食うの？』
島谷倫『杏仁豆腐。』

副島『また食うのかよ～。ミニマムストップの杏仁豆腐。』

島谷倫『当たり前だろ～。試合後のルーティーンなんだから。』

副島『お、おい…。』
島谷倫『どったの？』

副島『あれ！あれ見ろ！！』

島谷倫『・・・・・・・・！！』

『『『アノヤロー！！！！！！！！！』』』

そのころ…

大場『ははははは！！なんだよそれ！！！！！超うけるんだけど！！』

東（あずま）　佑奈（ゆうな）

『翔真ってホント笑いのツボ広いよね！！』

大場『次どこ行こっか？』

東『大丈夫？試合後だし、疲れてるよね？どこか座れる場所にしよっか。』

大場『おっけ。じゃあそこのミニマムストップの向こうにあるモクドナルドにしよ！』

東『佑奈、モック久々にいくわ～。』

じー…

島谷倫『今の…彼女だよな？』

副島『翔真め…いつの間に…』

島谷倫『追尾するか…。』

副島『意義なし。』

ピロロン♪

大場『いいにおいだな。』

東『明日決勝でしょ～。あんま油っぽいの食べない方がいいよね？』

大場『まあね。普通にビックモック５つでいくか…。』

東『え！？そんな食べるの！？』

大場『うん。試合後で腹減ってるから。』

東『じゃあ私はアルティメットチーズバーガー５つ。』

大場『佑奈も相変わらずの爆食だな。』

東『まあね。親がもともと大食いだからね。』

大場『なあ佑奈。明日なんの日か知ってる？』

東『７月３０日でしょ。忘れるわけないじゃん。うちらの３年の記念日でしょぉ！』

大場『懐かしいな～。中２の時の７月３０日。』

東『うん！まさかうちあのときは片想いだと思ってて超ビックリした！』

大場『俺もその時はコクる気なんて全くなかったんだぜ！？』

東『じゃあなんで突然告白してきたのよ！』

大場『つ、つい衝動的に…。』

東『あのときの翔真の言ったセリフ。まだ鮮明に覚えてるよ。』

大場『俺も告白するつもり全然無かったからあんま緊張しなかった

し、覚えてるな～。』

東『なんて言ったんだっけ？』

大場『言わせんのかよぉ！恥ずかしいだろ！』

東『え～言えないの～？』

大場『普通にシンプルな言葉だったろ！』

東『そのシンプルな言葉、もう一回聞きたいなぁ…。』

大場『ったくよぉ…。』

『俺たぶん、佑奈の事好きだわ。』

東『うきゃーっ！！』

大場『照れるわ…。』

東『超嬉しい！！だいすき！！翔真！！』

大場『俺も佑奈のこと大好きだぞ。』

島谷倫『おい…。』

副島『あんな翔真…初めて見た…。』

島谷倫『あーゆーの…ちょっと羨ましかったりする…。』

副島『だな…。いいなリア充。』

大場『そろそろいく？』

東『うん！次はプリでも撮ろ！！』

大場『星ヶ丘（ほしがおか）でいいよな？すぐそこだし。』

東『うん！レッツゴー！』

島谷倫『う…なんか惨めになってきた。』

副島『俺らは久々に栄(さかえ)でもいく？』

島谷倫『いや、名古屋駅がいい。』

副島『さあ行こう。』

そして…

慶野『ったく…暑いな。』

国友(くにとも)　光希(みつき)

『ね～。明日も暑いかな～。』

慶野『だろ～ね。てか広すぎるんだけど。名古屋駅付近。』

国友『あ、邦南野球部じゃない！？』

慶野『あれは！！倫暁先輩とミツル先輩！！』

島谷倫『あっつ～。』

副島『また居るよ。リア充が。』

島谷倫『慶野まで…この野郎…2年共が…。』

副島『おい…どこいくんだ？』

島谷倫『やっぱ栄いこうぜ。』

副島『なんで？』

島谷倫『まあ行こうぜ。リア充みて気分が悪い。』

副島『さっきの電車代しくったな。』

そして…

氷室『ふうっ…久し振りに座る。』

火堂（ひどう）　佳美（よしみ）

『氷室くん。やっぱ疲れてた？ごめんね。今日は付き合ってもらって。』

氷室『佳美ちゃんと一緒にいるの楽しいからいいよ。』

火堂『日…暮れてきたね。』

氷室『うん。暗くなってきた。』

副島『あれって氷室じゃね？』

島谷倫『てか俺らチームメートに会いすぎじゃね？』

副島『え…まさかあれが噂の…』

島谷倫『佳美ちゃん！？』

副島『氷室が上社西戦でピッチャーやったときに呟いてた…。…よな？』

島谷倫『声聞こえるぞ。』

副島『盗み聞くか。』

氷室『なあ…佳美ちゃん？』

火堂『なぁに？』

氷室『なんつーか…慣れてないから単刀直入に言うけど…聞いてく

れる?』
火堂『だからなぁに?』
氷室『俺さ~。ずっと昔から佳美ちゃんのこと…好きだったんだ。だからさ!』
火堂『だから…さ?』
氷室『俺と…付き合ってほしいんだ。』
火堂『返事、今じゃないとダメ?』
氷室『別に。いつでもいいよ。』
火堂『ありがとう。じゃあ、また返事する。いつになるかわかんないけど。』
氷室『うん。佳美ちゃんから返事来るの、待ってる。』
副島『ん!?』
島谷倫『こりゃ、ダメなパターンじゃね!?』
副島『保留するって時点でかなりピンチだぞ氷室!!!!!』
島谷倫『氷室…明日の決勝…元気出せよ。』
そして…次の日…

夏の全国高等学校野球選手権愛知県大会決勝。
享神(きょうじん)高校がここまで駒を進めてくるのは大方の予想通りだが、邦南(ほうなん)高校がここまで来るのは完全に想定外の出来事だった。

天気…快晴。

大場『氷室！ちょっといいか！』
氷室『どうしたんですか？』

大場『今日の先発、お前でいく。』
氷室『え！？』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1249t/

ホームスチール～SUMMER Baseball Miracle～

2011年11月22日02時52分発行